

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第484集

まつやま文庫

松山前遺跡発掘調査報告書

大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

2006

岩手県大船渡地方振興局土木部

(財) 岩手県文化振興事業団
埋 藏 文 化 財 センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第484集
松山前遺跡発掘調査報告書 正誤表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|-----|--------|-----------------|-----------------|
| 例言 | 30 | 宇部保則 | 宇部則保 |
| 107 | 7 | 第71図 | 第72図 |
| 107 | 9 | 第71図 | 第72図 |
| 107 | キャプション | 第71図 遺構外出土遺物(3) | 第72図 遺構外出土遺物(3) |

松山前遺跡発掘調査報告書

大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査



航空写真 南から



航空写真 西から



調査区全景



S 104



S 104 カマド



出土遺物



板状土製品(S 104出土)

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県上づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備事業に関連して平成16年度に発掘調査された陸前高田市松山前遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、奈良時代の堅穴住居跡群が見つかったことから、当時の集落の一部であったことが明らかになりました。本県沿岸南部ではこれまでこの時期の調査例は少なく、地域の歴史に新たな一ページを書き加えることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県大船渡地方振興局土木部、陸前高田市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成18年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 合 田 武

例　　言

- 1 本報告書は岩手県陸前高田市小友町若荷128-2～西ノ坊12-1ほかに所在する松山前遺跡発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は、大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備工事関連事業に伴い、岩手県教育委員会生涯学習文化課・岩手県大船渡地方振興局土木部の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(以下埋文センターと略称)が記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
- 3 今回の発掘調査による成果は平成16年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第469集「平成16年度発掘調査報告書」・現地説明会(平成16年8月28日)にて公表している。上記の刊行物との違いがある場合は、本書が優先する。
- 4 岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は、以下のとおりである。
- 遺跡登録台帳番号……N F 68-2270 遺跡略号……………M YM-04
- 5 野外の調査期間・調査面積と調査担当者は、以下のとおりである。
- 調査期間 平成16年4月13日～9月3日 調査面積 6,610m²
- 担当者 島原弘征・菅野 梢
- 6 調査の室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。
- 整理期間 平成16年11月1日～平成17年3月31日 担当者 島原弘征
- 平成17年1月4日～3月31日 担当者 菅野 梢
- 7 本報告書の原稿執筆はIを岩手県大船渡地方振興局土木部、VIを分析担当者、他を島原が行った。編集は島原が行った。
- 8 座標原点の測量および空中写真撮影は、次の機関に委託した。
- 座標原点の測量……………中井測量設計
- 空中写真……………東邦航空㈱
- 9 自然科学関連の分析鑑定は、次の機関に委託した。
- 石質鑑定……………花崗岩研究会
- 炭化材同定……………岩手県木炭協会
- 種子同定・樹種同定……………パリノ・サーヴェイ
- 炭化材同定……………古環境研究所
- 10 本報告書の作成にあたり、次の方々ならびに機関からご指導とご協力をいただいた。(敬称略・順不同)
- 浅山智晴、宇部保則、太田代一彦、葛城和徳、工藤雅樹、熊谷賢、小針大志、佐藤敏幸、佐藤正彌、佐藤良和、新海和広、鈴木琢也、高橋誠明、丹治篤嘉、遠野いづみ、陸前高田市教育委員会
- 11 野外調査では、陸前高田市の作業員27名にご協力をいただいた。
- 室内整理作業は、当埋文センター期限付職員2名で行った。
- 12 十層観察の土色は、『新版標準土色帳』(小山正忠・竹原秀雄:1992)によった。
- 13 本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行のものであり、図中に図幅名と縮尺を記している。
- 14 本遺跡から出土の遺物および調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管・管理している。

目 次

| | | |
|-----|------------------|-----|
| I | 調査に至る経緯 | 1 |
| II | 遺跡の位置と環境 | 1 |
| 1 | 遺跡の位置と立地 | 1 |
| 2 | 周辺の遺跡 | 6 |
| III | 調査の概要と整理方法 | 8 |
| 1 | 調査経過 | 8 |
| 2 | 野外調査の方法 | 9 |
| 3 | 整理経過 | 10 |
| 4 | 室内整理の方法 | 11 |
| IV | 基本層序 | 12 |
| V | 検出遺構と出土遺物 | 14 |
| 1 | 概要 | 14 |
| 2 | 古代の遺構 | 14 |
| 3 | 近世の遺構 | 36 |
| 4 | その他の遺構 | 56 |
| 5 | 遺構外出土遺物 | 94 |
| VI | 自然科学分析 | 115 |
| 1 | 松山前遺跡における樹種同定 | 115 |
| 2 | 松山前遺跡における種実同定 | 116 |
| 3 | 松山前遺跡における種実・樹種同定 | 118 |
| VII | まとめ | 125 |
| 1 | 奈良時代の遺構 | 125 |
| 2 | 近世の遺構 | 126 |
| 3 | その他の遺構 | 126 |
| 4 | 縄文時代の遺物 | 127 |
| 5 | 奈良時代の遺物 | 127 |
| 6 | 近世の遺物 | 130 |
| 7 | まとめ | 131 |
| | 報告書抄録 | |

図版目次

| | | | |
|--------------------------|----|--|-----|
| 第1図 岩手県全図 | 2 | 第40図 S K48B 墓壙、山上遺物 | 51 |
| 第2図 遺跡の位置図 | 3 | 第41図 S K48C 墓壙、出土遺物 | 52 |
| 第3図 周辺の地形と調査範囲 | 4 | 第42図 S K48D 墓壙 | 53 |
| 第4図 地形分類図 | 5 | 第43図 S K48E 墓壙、出土遺物 | 54 |
| 第5図 周辺の遺跡分布図 | 6 | 第44図 S K50墓壙、出土遺物 | 56 |
| 第6図 遺構配置図 | 12 | 第45図 S K101堅穴状遺構、出土遺物 | 56 |
| 第7図 基本土層柱状図 | 13 | 第46図 S K103A・B堅穴状遺構・SK85、 出土47物 | 58 |
| 第8図 S I01堅穴住居跡(1) | 14 | 第47図 S K104堅穴状遺構、出土遺物 | 60 |
| 第9図 S I01堅穴住居跡(2) | 15 | 第48図 S K111堅穴状遺構、出土遺物 | 61 |
| 第10図 S I01堅穴住居跡出土上遺物 | 16 | 第49図 S A01～03柱穴列 | 63 |
| 第11図 S I02堅穴住居跡(1) | 17 | 第50図 SW01・02炭窯、出土遺物 | 64 |
| 第12図 S I02堅穴住居跡(2) | 18 | 第51図 SK01・02・05～07・09・10・12上坑 | 66 |
| 第13図 S I02堅穴住居跡山上遺物 | 19 | 第52図 SK14・15・17・20・24・26～28・31上坑 | |
| 第14図 S I03堅穴住居跡、出土遺物 | 20 | | 70 |
| 第15図 S I04堅穴住居跡(1) | 22 | 第53図 SK32・33・35・36A・36B・46・53・54・ 56上坑 | 76 |
| 第16図 S I04堅穴住居跡(2) | 23 | 第54図 SK61・63・69・70・72・76・80・81下坑 | 78 |
| 第17図 S I04堅穴住居跡出土遺物(1) | 24 | 第55図 SK82～84・86土坑、出土遺物 | 81 |
| 第18図 S I04堅穴住居跡山上遺物(2) | 25 | 第56図 溝跡・柱穴状土坑割付図(第57・59～68図) | |
| 第19図 S I06A・B(1)堅穴住居跡 | 27 | | 87 |
| 第20図 S I06A堅穴住居跡出土遺物 | 28 | 第57図 SD48～50溝跡(1) | 88 |
| 第21図 S I06B堅穴住居跡(2)、出土遺物 | 30 | 第58図 SD48～50溝跡(2) | 89 |
| 第22図 S I07堅穴住居跡、出土遺物 | 31 | 第59図 柱穴状土坑(1) | 92 |
| 第23図 S I10堅穴住居跡 | 32 | 第60図 柱穴状土坑(2) | 93 |
| 第24図 SN01切跡、出土遺物 | 33 | 第61図 柱穴状土坑(3) | 94 |
| 第25図 近世墓遺構配置図(1) | 34 | 第62図 SD36溝跡・柱穴状土坑(4) | 95 |
| 第26図 近世墓遺構配置図(2) | 35 | 第63図 柱穴状土坑(5) | 96 |
| 第27図 SK29・49墓壙、出土遺物 | 37 | 第64図 SD43～45溝跡・柱穴状土坑(6) | 97 |
| 第28図 SK37墓壙、出土遺物 | 38 | 第65図 SD07・08・13・15・18・19・23溝跡・柱穴 状土坑(7) | 98 |
| 第29図 SK38墓壙 | 39 | 第66図 柱穴状土坑(8) | 99 |
| 第30図 SK39墓壙、出土遺物 | 40 | 第67図 SD42溝跡・柱穴状土坑(9) | 100 |
| 第31図 SK40墓壙、出土遺物 | 41 | 第68図 柱穴状土坑(10) | 101 |
| 第32図 SK41・42・50墓壙(1) | 43 | 第69図 SD07・08・13・15・18・19・23・36・43～ 45溝跡 | 102 |
| 第33図 SK41墓壙出土遺物(1) | 44 | 第70図 SD43溝跡・遺構外出土遺物(1) | 105 |
| 第34図 SK41墓壙出土遺物(2) | 45 | 第71図 遺構外出土遺物(2) | 106 |
| 第35図 SK42墓壙(2)、山上遺物 | 46 | 第72図 遺構外山上遺物(3) | 107 |
| 第36図 SK43墓壙 | 47 | | |
| 第37図 SK45墓壙、出土遺物 | 49 | | |
| 第38図 SK47墓壙、出土遺物 | 50 | | |
| 第39図 SK48A・B墓壙(1)、出土遺物 | 50 | | |

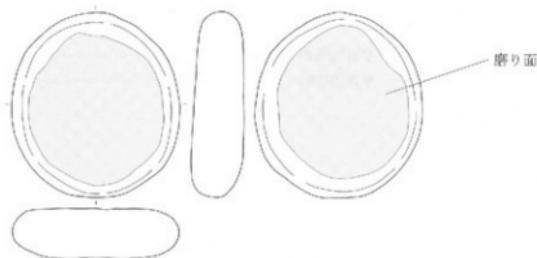
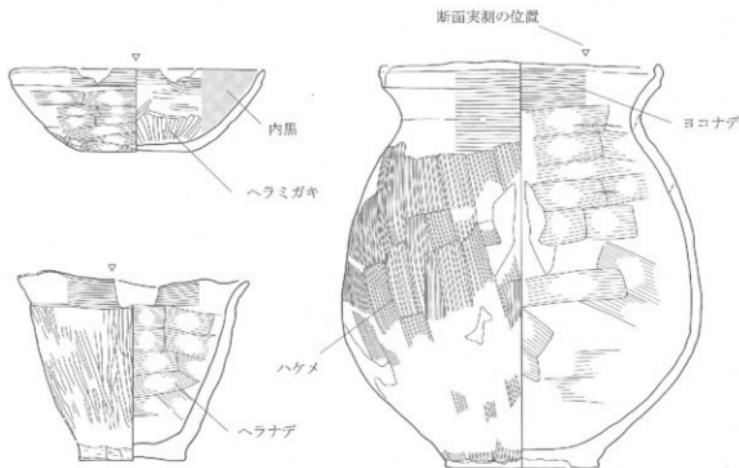
写真図版目次

| | | | |
|--------------------------|-----|--|-----|
| 写真図版 1 航空写真 | 134 | 写真図版28 土坑(3) | 161 |
| 写真図版 2 調査区全景・遠景、調査前風景 | 135 | 写真図版29 土坑(4) | 162 |
| 写真図版 3 S I 01堅穴住居跡(1) | 136 | 写真図版30 土坑(5) | 163 |
| 写真図版 4 S I 01堅穴住居跡(2) | 137 | 写真図版31 土坑(6) | 164 |
| 写真図版 5 S I 02堅穴住居跡(1) | 138 | 写真図版32 土坑(7) | 165 |
| 写真図版 6 S I 02(2)・03堅穴住居跡 | 139 | 写真図版33 土坑(8)・溝跡(1) | 166 |
| 写真図版 7 S I 04堅穴住居跡(1) | 140 | 写真図版34 溝跡(2) | 167 |
| 写真図版 8 S I 04堅穴住居跡(2) | 141 | 写真図版35 溝跡(3) | 168 |
| 写真図版 9 S I 06 A堅穴住居跡(1) | 142 | 写真図版36 溝跡(4) | 169 |
| 写真図版10 S I 06 A堅穴住居跡(2) | 143 | 写真図版37 溝跡(5)・柱穴列 | 170 |
| 写真図版11 S I 06 A堅穴住居跡(3) | 144 | 写真図版38 溝跡(6) | 171 |
| 写真図版12 S I 06 B堅穴住居跡 | 145 | 写真図版39 溝跡(7) | 172 |
| 写真図版13 S I 07・10堅穴住居跡 | 146 | 写真図版40 現地説明会・作業風景 | 173 |
| 写真図版14 S N 01炉跡・墓壙(1) | 147 | 写真図版41 S I 01~03堅穴住居跡出土遺物 | 174 |
| 写真図版15 墓壙(2) | 148 | 写真図版42 S I 04堅穴住居跡出土遺物 | 175 |
| 写真図版16 墓壙(3) | 149 | 写真図版43 S I 06 A・B・07堅穴住居跡・ S N 01炉跡出土遺物 | 176 |
| 写真図版17 墓壙(4) | 150 | 写真図版44 S K 29・37~40墓壙出土遺物 | 177 |
| 写真図版18 墓壙(5) | 151 | 写真図版45 S K 41墓壙(1)出土遺物 | 178 |
| 写真図版19 墓壙(6) | 152 | 写真図版46 S K 41(2)・42・45(1)墓壙出土遺物 | 179 |
| 写真図版20 墓壙(7) | 153 | 写真図版47 S K 43・45(1)・47・48A・48B 墓壙出土遺物 | 180 |
| 写真図版21 S K I 01堅穴状遺構 | 154 | 写真図版48 S K 48C・48D・48E・50墓壙・ 堅穴状遺構・土坑山上遺物 | 181 |
| 写真図版22 S K I 03A堅穴状遺構 | 155 | 写真図版49 遺構外出土遺物(1) | 182 |
| 写真図版23 S K I 03B堅穴状遺構 | 156 | 写真図版50 遺構外出土遺物(2) | 183 |
| 写真図版24 S K I 04・11堅穴状遺構 | 157 | | |
| 写真図版25 炭窯 | 158 | | |
| 写真図版26 土坑(1) | 159 | | |
| 写真図版27 土坑(2) | 160 | | |

表 目 次

| | | | |
|--------------|-----|------------|-----|
| 第1表 柱穴状土坑觀察表 | 103 | 第5表 陶器觀察表 | 114 |
| 第2表 上器觀察表 | 108 | 第6表 石器觀察表 | 114 |
| 第3表 金属製品觀察表 | 110 | 第7表 土製品觀察表 | 114 |
| 第4表 錢貨觀察表 | 110 | 第8表 木製品觀察表 | 114 |

凡 例



I 調査に至る経緯

小友地区道路改良事業は、陸前高田市米崎町の国道45号から同市小友町宇雲南地内の主要地方道大船広田陸前高田線へ接続する道路改良工事であり、既存の県道は、幅員狭小のため車両のすれ違いが困難なこと、歩道も未設置のため歩行者等の通行に危険なこと、及び高潮等に対する防災機能、広山半島など観光やレクリエーション施設へのアクセス向上のため、平成9年度から着手している事業(H9～地方特定道路整備事業、H11緊急地方道路整備事業)である。

これにかかる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、岩手県大船渡地方振興局と岩手県教育委員会との間で協議がなされた。協議の経緯は、平成10年8月6日付「大地土第881号」により岩手県大船渡地方振興局長から岩手県教育委員会文化課長あて当該道路計画にかかる遺跡の分布調査について依頼があり、岩手県教育委員会は平成10年9月18日に分布調査を実施し、当該計画地内には5箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在することが判明した。

岩手県教育委員会では、岩手県大船渡地方振興局からの試掘調査依頼を受け、平成13年2月16日、同11月16～17日、同12月13日に4箇所について試掘調査を実施したが、3箇所については発掘調査が必要である旨回答し協議を重ねた。この遺跡については、陸前高田市教育委員会において平成14年度及び平成15年度発掘調査実施中である。

その後、平成15年6月26日付「大地土第475号」により岩手県大船渡地方振興局長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あて当該遺跡の試掘調査について依頼があり、岩手県教育委員会は平成15年7月30日に試掘調査を実施し、平成15年8月12日付「教生第809号」により岩手県大船渡地方振興局に対して松山前遺跡の発掘調査が必要である旨回答し協議を重ねた。

その結果、松山前遺跡の調査は岩手県文化振興事業団の受託事業とした。

(岩手県大船渡地方振興局土木部)

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と立地

(1) 遺跡の位置

松山前遺跡は、岩手県陸前高田市小友町茗荷128-2～西ノ坊12-1ほかに所在する。JR大船渡線小友駅の北西約2km、北緯39度00分02～03秒、東経141度41分22～25秒付近に位置する。

本遺跡の所在する陸前高田市は岩手県の東南部、太平洋岸の最南端に位置する。北は気仙郡住田町、東は大船渡市、南は東磐井郡平泉町(現・一関市)、宮城県気仙沼市、宮城県本吉郡唐桑町、西は東磐井郡大東町(現・一関市)と接している。面積は232.23平方km、人口は25,726人である(平成17年6月末現在)。市域の大半が山地で、北上山地の縁辺部が海岸まで広がっている。市の北には氷上山(874.7m)、東には箱根山(446.8m)、南東には仁田山(254m)、西は小坪山(679.4m)、天爾山(456.9m)が広がり市域を囲んでいる。

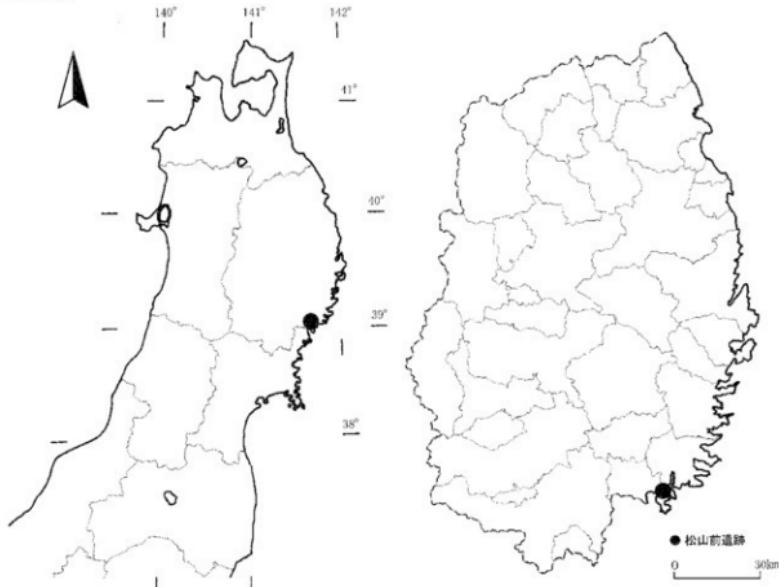
遺跡が所在する陸前高田市小友町は市の東側に位置する。北は箱根山、東は門之浜湾、南は広田半島、西は小友浦が広がり、箱根山と広田半島に挟まれた氾濫平野上にある。その箱根山から南東側には傾斜の緩やかな丘陵が広がっており、遺跡はその丘陵縁辺部に位置する。標高は61～71m前後を

測る。調査前現況は畑で、約20年前までは果樹園として土地利用されていた。

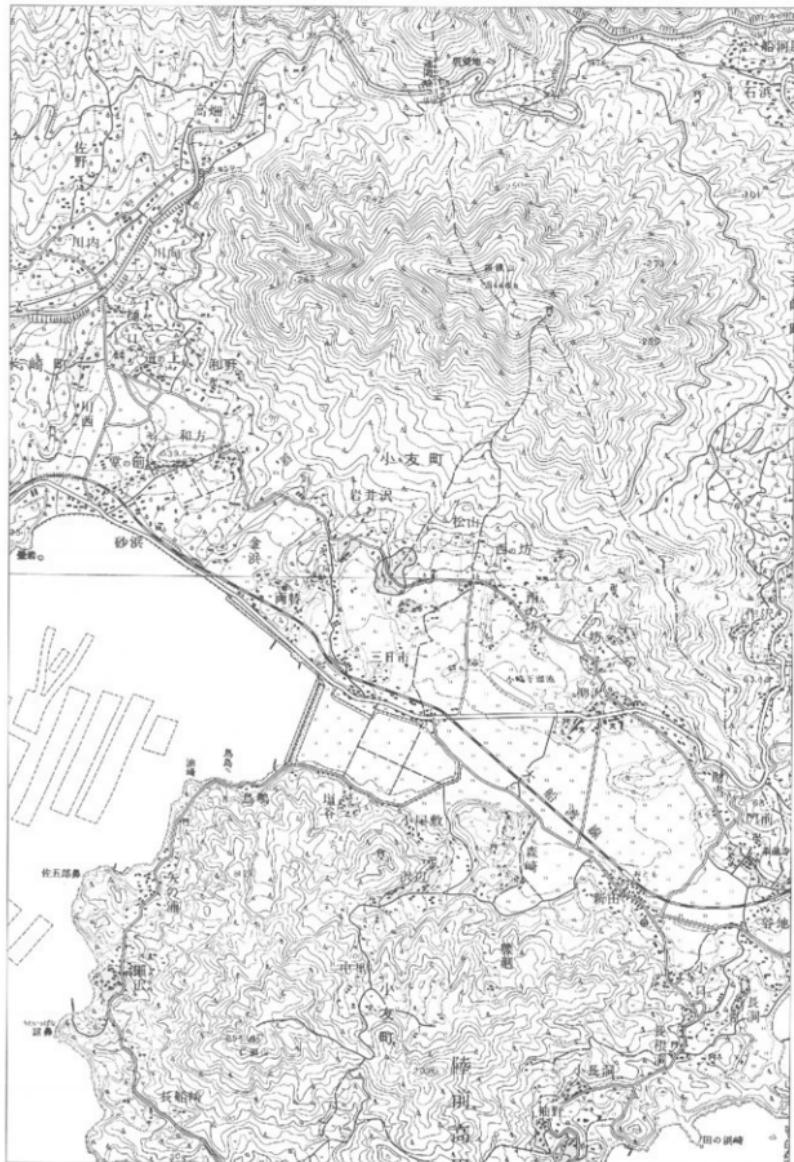
(2) 地形・地質

四国四県に匹敵する広大な面積を有する岩手県は、東に北上山地、西に奥羽脊梁山脈が南北に延びている。高清水山(1,013.9m)に端を発する気仙川は南西流しながら桧山川、火の上川、大股川をあわせて住田町の中心部を南流し、陸前高田市域に入る。陸前高田市内では水上山(874.7m)の西側山麓縁部を南流し、広田湾にて太平洋に注ぐ。気仙川は延長44km、流域面積520平方kmの二級河川である。

北上山地東側は河川の流路が短い上に、その河川が中・古生代の堅い硬岩を浸食している影響で、排出される土砂量が少なく、一般的に平野の発達は不良である。それでも比較的流域面積の大きい川が流れる久慈、宮古、大船渡、広田、気仙沼湾には小規模な沖積平野が発達する。比較的湾の幅が広い広田湾(幅約3.5km)の奥には陸前高田平野が発達し、現在市街地となっている。その陸前高田平野の北側には水上山がある。山頂から南側に広がる斜面は標高200m以上では急峻であるが、200m以下では傾斜が緩くなっている。水上山の南東尾根沿いには箱根山(446.8m)がある。その南側斜面には傾斜の緩やかな丘陵が広がる。南西側丘陵の一部(米崎町付近)は海岸線まで到達し、米ヶ崎を形成している。南東側丘陵は小友町付近の氾濫平野と接している。市の(南)東部、箱根山の南側に位置する広田半島は太平洋に対して南東に突出している。半島の付け根には河から小友浦が入り込み、標高10m以下の氾濫平野が広がる。繩文海進期にはこの部分は海となり広田半島は島となっていたものと思われる。

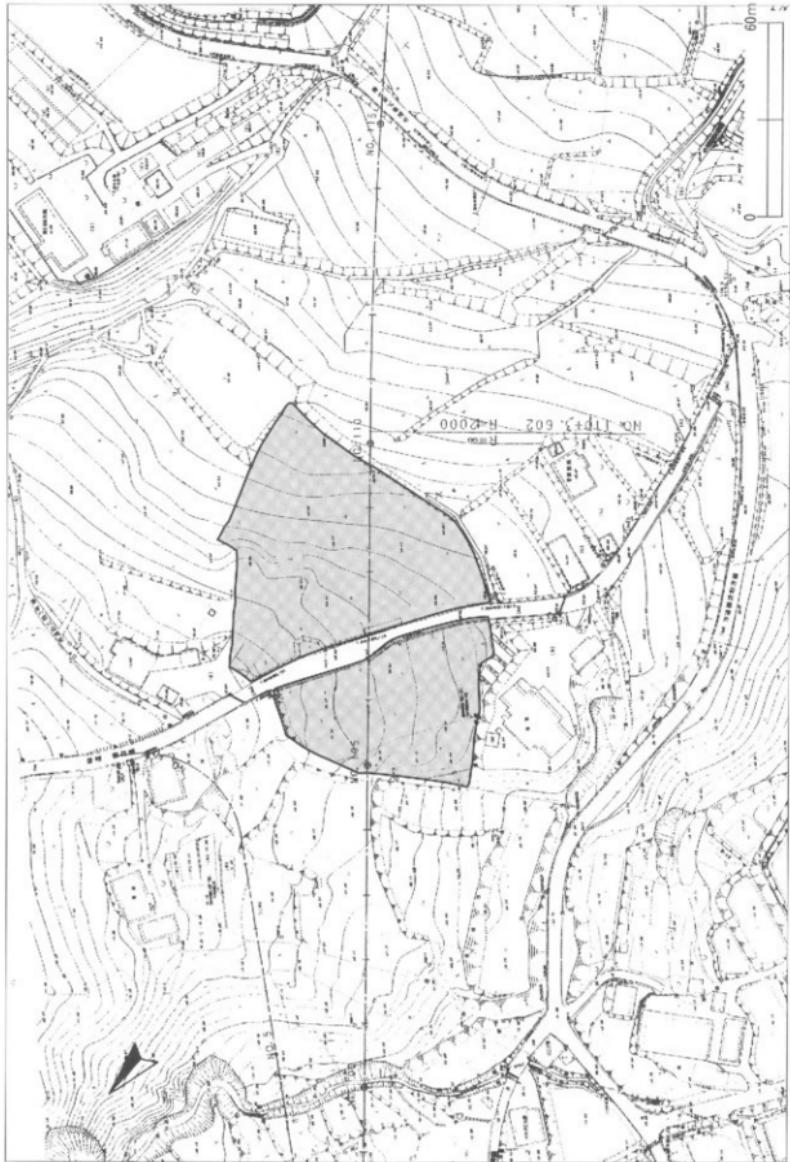


第1図 岩手県全図

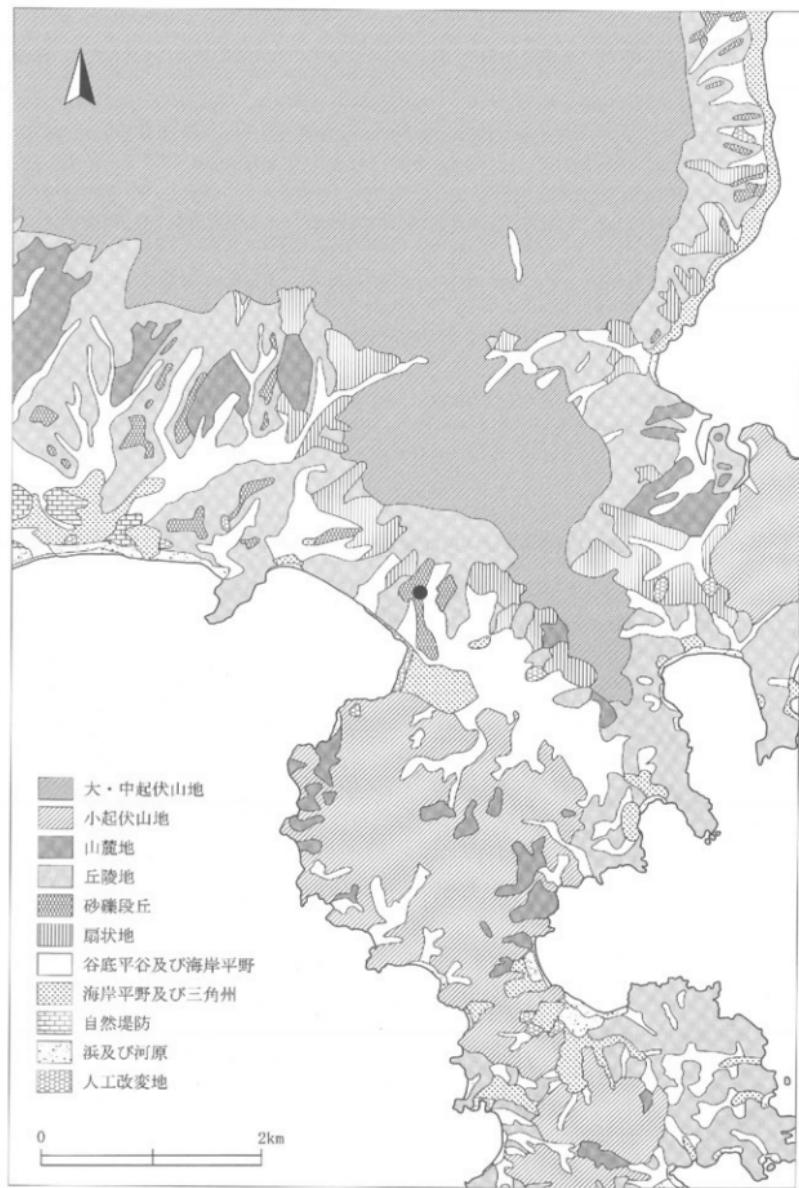


第2図 遺跡の位置図

1 道路の位置と立地



第3図 周辺の地形と調査範囲



第4図 地形分類図

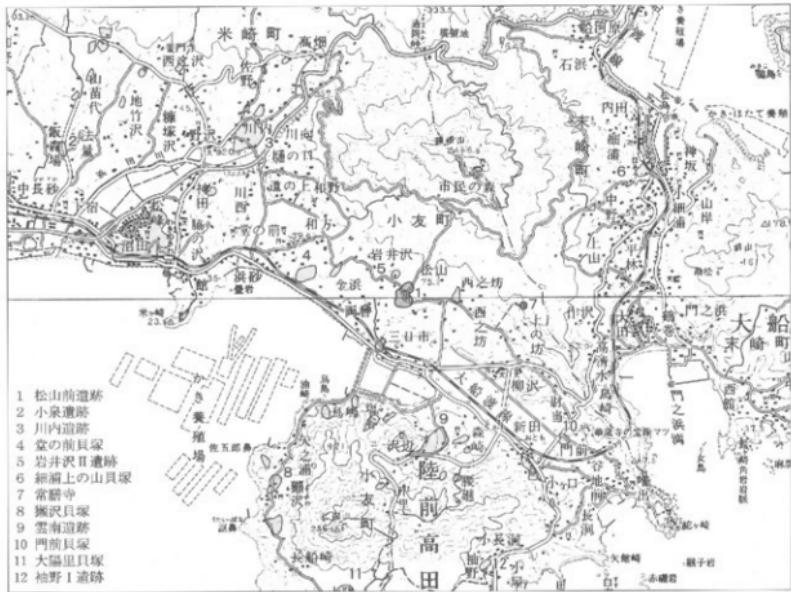
2 周辺の遺跡

『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』によると、陸前高田市内で255ヶ所、大船渡市内で180ヶ所の遺跡が確認されている。このうち第5図には過去に調査例のある遺跡と古代～近世の遺跡を中心に陸前高田市46ヶ所、大船渡市2ヶ所図示した。陸前高田市内では古くから貝塚が分布していることが知られていた。貝塚からは良好な状態で人骨が出土したことから、研究者に注目され、人種・民俗学的観点からの調査が数多く行われた。戦後は分布調査や個人住宅建設にかかる緊急調査や学術調査等が行われているが、立地・地形による影響から縄文期の遺跡の調査が多く行われている。そのため、陸前高田市内における古代(奈良・平安時代)の遺跡の本調査は相川I、友沼III、貝畠貝塚、牧田貝塚、小泉遺跡等を数えるのみで、多いとはいえない。しかも、報告を見てみると平安時代の調査事例が多く、奈良時代は少ない。わずかに相川I遺跡で堅穴住居跡1棟(陸前高田市教育委員会2002)、貝畠貝塚(佐藤正彦氏のご教示による)で堅穴住居跡2棟を検出、小泉遺跡で土師器の出土を数えるのみである。

ここでは松山前遺跡と関連のある古代の遺跡を中心に概観する。本地域の縄文時代については村上拓が『牧田貝塚発掘調査報告書』(岩埋文1996)内で貝塚を中心に概説しているので、それを参照していただきたい(註1)。

(1) 過去の調査について

松山前遺跡における過去の調査は平成14年に試掘調査が行われたのみである。その際に堅穴住居跡



第5図 周辺の遺跡分布図

が検出され、土師器が出土している。今回の調査は遺跡範囲の中央より北側に位置している。調査前現況は畑で、地元の古者の話によると約20年前までは果樹園として土地利用されていたという。なお、元地権者である山田定雄氏が昭和40年代後半ごろ撮影された調査区付近の航空写真を所蔵していた。ご厚意により見せていただいたが、確かに調査区付近はリンゴないしモモの木が整然と並ぶ果樹園が広がっていた。

なお、『陰前高田市史』において松山前遺跡は、同一遺跡コードは松山Ⅱ遺跡、今回の調査区付近は松山Ⅰ遺跡と記載とされている。ちなみに松山Ⅰ遺跡の詳細は調査が行われていないため不明。松山Ⅱ遺跡は土師器が出土していることから、古代の集落跡として認識されていた。

(2) 周辺の遺跡

本地区の古代の上な遺跡としては小泉(1)、岩井沢Ⅱ(5)遺跡、図中に含まれていないが相川Ⅰ遺跡、貝塚、友沼Ⅲ遺跡等がある。

＜小泉遺跡＞陰前高田市(以下省略)高田町字法量地内に位置する。平成11年に調査が行われた。調査面積は42m²と小規模であったため、遺構は確認されなかつたが、土器がコンテナ19箱分出土している。「厨」字を含む墨書き器が112点が出土した。「厨」字を含む墨書き器は官衙・寺院遺跡に多く出土することから、気仙郡衙が小泉遺跡周辺に存在する可能性が指摘されている(註2)。

＜貝塚＞高田町字中和野地内に位置する。昭和58・59、平成9年に発掘調査が行われた。調査の結果、縄文時代の堅穴住居跡24棟、古代の堅穴住居跡10棟、住居状遺構1棟、配石2基、ピット約130基、炉跡2基、工房跡2基が検出された。古代の堅穴住居跡の時期は大部分が平安期(9世紀後半～10世紀前半)であるが、2棟ほど奈良時代の住居がある(法政大学国際日本学研究センター2003)。

＜友沼Ⅲ遺跡＞横田町字友沼地内、氾濫原に面した傾斜地に位置する。平成元年に発掘調査が行われ、古代(9世紀後半～10世紀前半)の堅穴住居跡6棟が検出された(陰前高田市教育委員会1990)。

＜相川Ⅰ遺跡＞竹駒町字相川地内、水上山から南西に延びる尾根の先端部に位置する。古代(奈良時代)の堅穴住居1棟、縄文期の堅穴住居跡1棟、同堅穴状を2棟、時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑9基が検出された(陰前高田市教育委員会2002)。

＜牧田貝塚＞氣仙町字牧田地内に位置する。縄文時代前期の堅穴住居跡3棟、上坑20基が検出された。岩手県内では資料の少ない大木3～5式の上器がまとまって出土していることで知られているが、平安期の十師器が遺構外から出土している(岩手埋文1996)。

＜館貝塚＞米崎町字館、米ヶ崎の先端部に位置する。古代の貝塚？。製塩土器片が出土している(陰前高田市1994)。

＜大陽里遺跡＞広田町大陽里地内、仁田山から南西に延びる丘陵上に位置する。古代の製塩遺跡か？(陰前高田市1994)。

＜岩井沢Ⅱ遺跡＞小友町字岩井沢地内、箱根山から南に広がる丘陵上に位置する。松山前遺跡から西に約600mの離れた場所に位置する。昭和36年、台地の開墾中に蕨手刀が出土した。なお、市内ではこのほかに三本松遺跡、愛宕下遺跡から蕨手刀が各1振ずつ出土している。工事中の出土のものが多く出土状況の詳細は不明である(陰前高田市1994)。

＜釘の子遺跡＞横田町字釘の子地内に位置する。昭和57年に発掘調査が行われた。報告書が未刊行のため、詳細は不明であるが、『陰前高田市史』第二巻(陰前高田市1994)によると縄文・平安期の堅穴住居跡が各1棟検出された。

註

1. 岩手県文1996を参照。なお、綱文・中世・近世期の調査された遺跡では、山崎遺跡(陸前高田市教委1984)、門前貝塚(陸前高田市教委1992)、鶴沢貝塚(陸前高田市教委1977)、中沢浜貝塚(陸前高田市教委2000ほか)、人賀台貝塚(陸前高田市教委1979)、袖野I遺跡(陸前高田市1994)、川内遺跡(岩手文1984)、打越遺跡・東角地遺跡・古館跡(岩手文1988)、寺前I・II遺跡、片地家館(岩手文1989)がある。前述した各遺跡の概要是『陸前高田市史』第二巻に佐藤正彦が概説している(陸前高田市1994)。

2. 詳細は法政大学国際日本学サテライトシンポジウム『海の蝦夷一小字遺跡が語りかけるもの』資料集を参照していただきたい。資料集は『法政大学国際日本学研究会研究報告』第4集(法政大学国際日本学研究センター2003)に収録されている。

参考文献(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターを岩手文と表記する)

陸前高田市1994『陸前高田市史』第二巻

陸前高田市教育委員会1977『鶴沢貝塚』

- 同 1979『大賀台貝塚』
同 1981『山崎遺跡発掘調査報告書』
同 1990『友沼III遺跡』陸前高田市文化財調査報告第14集
同 1992『門前貝塚』陸前高田市文化財調査報告第16集
同 1999『堂の前貝塚発掘調査報告書』陸前高田市文化財調査報告第21集
同 2000『陸前高田市内遺跡発掘調査報告書』中沢浜貝塚一 陸前高田市文化財調査報告第22集
同 2002『相川I遺跡発掘調査報告書』陸前高田市文化財調査報告第24集
同 2003『陸前高田市小友町霞南遺跡』第30回岩手考古学会研究大会資料

岩手文1984『川内遺跡発掘調査報告書』岩手県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財調査報告書第82集

1988『打越・東角地遺跡・古館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第131集

1989『寺前I・II遺跡・片地家館発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第140集

1996『牧口貝塚遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第211集

春日真実2003『越後牛山の円筒形土製品・板状土製品について』『張気模』富山大学考古学研究室論集

八戸市教育委員会2001『酒美平遺跡II』八戸市埋蔵文化財調査報告書第98集

福島県教育委員会2002『阿武隈川右岸飯坂遺跡発掘調査報告書2』福島県文化財調査報告書第401集

久本町教育委員会2001『赤井遺跡I』矢木町文化財調査報告書第14集

III 調査の概要と整理方法

1 調査経過

野外調査は4月13日から9月3日まで行った。4月13日午後に機材を搬入し担当者2名、作業員25名で作業を開始。4月19日重機を投入し表土除去と造構検出を開始する(土捨の関係でB区から)。5月6日B区の表土除去が終了する。引き続きA区の表土除去を行う。5月12日ようやくB区の検出が終了する。5月13日A区の検出を開始したが、同日には重機の表土除去は終了した。5月17日基準点設置。5月下旬に検出が終了し造構数が確定したので、B区より精査を開始する。6月3日当理文センター合田理事長の現地視察が行われる。6月23日北上市埋文職員30名現場見学。7月中旬になるとB区は堅穴住居と近世墓を除き精査が終了したのでA区の精査を開始する。8月28日現地説明会開催(参加者182名)。9月1日に終了確認が行われる。9月3日に機材を搬出して撤収した。

2 野外調査の方法

(1) グリッドの設定

調査区のグリッドは調査区域ならびに造跡範囲全体をカバーできるように世界座標に合わせて、座

標設定及びグリッド設定を行うこととした。

遺跡の北西隅に位置するX=-110100.000、Y=73800.000を起点とし、50×50mの大グリッドを設定し、さらに大グリッドの一辺を10等分して5×5mの小グリッドを設定した。大グリッドは西から東に向かってA、B、Cとアルファベットの大文字と、北から南に向かってI、II、IIIとローマ数字を組み合わせてIAのように表記した。小グリッドは西から東にa～jとアルファベット小文字と、北から南に1～10とアラビア数字を組み合わせて1aのように表記した。作業を行う際にはグリッドの北西隅の杭にグリッド名を記入し、IA1aグリッドというような表記をした。

調査区が複数にかつて広範にわたっていたので、基準点は業者に委託して打設した。調査時にはその基準点を使用して調査区の区割り・グリッド設定を行った。各地区で使用した基準点の座標値は下の通りである。

| X(世界測地系) | Y(世界測地系) | X(日本測地系) | Y(日本測地系) | 標高(m) | グリッド名 |
|----------------|-----------|--------------|------------|--------|-------|
| 基1 -110250.000 | 73854.000 | -110558.1314 | 74154.8346 | 67.466 | - |
| 基2 -110250.000 | 73890.000 | -110558.1313 | 74190.8349 | 67.805 | IVB1i |
| 補1 -110250.000 | 73870.000 | -110558.1316 | 74170.8348 | 66.550 | IVB1e |
| 補2 -110280.000 | 73890.000 | -110558.1319 | 74190.8357 | 64.988 | IVB7i |
| 補3 -110250.000 | 73930.000 | -110558.1315 | 74230.8364 | 65.876 | IVC1g |

(2) 調査区割について

今回の調査区は、林道松山線が調査区中央を縱断しているため、調査区が大きく東西2箇所に分かれていたことから、林道松山線より西側をA区(西侧調査区)、東側をB区(東側調査区)と命名し調査を行うこととした。

(3) 粗掘と精査

＜粗堀＞平成15年度に行われた試掘結果をもとに、試掘トレンチの再掘ならびに新規に試掘トレンチを設定し、その土層断面を観察し層序の把握に努めた。その結果、遺物がほとんど見られないI・II層に関しては重機を使用して除去した。

＜精査＞基本的には竪穴住居・竪穴状造構は4分法、土坑等は2分法による埋土の観察を行った。堀・溝に関しては適時ベルトを設定し埋土の観察を行った。竪穴住居跡はカマド以外の部分の完掘を優先し、カマド検出状況写真を撮影後にカマド・床面施設(柱穴等)の精査を行っている。カマドは基本的に燃焼部は4分法、煙道部は2分法による埋土の観察を行った。なお、焼失住居であるS106Aに関しては、炭化材検出状況の記録を行ってから床面を検出した。また、作業の都合上柱穴状土坑に関しては埋土の堆積状況をパターン化し、各類の代表のみ断面記録を取った。

＜遺物の取り上げ＞遺構内に関しては遺構名と埋土層位を、遺構外に関してはグリッド名を袋に記入してから取り上げた。ただし、グリッド設定以前の遺構外出土遺物は調査区内のおおよその位置を袋に記入してから取り上げた。出土地点を実測した遺物に関しては取り上げ番号を記入した。

＜種実・樹種同定について＞竪穴住居跡内カマド燃焼部直上の5cmの土を全て採取している。採取した土は乾燥後、水を入れたバケツに入れてかき混ぜ、浮いてきた炭化物・種実を茶こしフリルと1・3・5mmメッシュを使用して採取した。この採取した炭化物・種実の樹種を特定し、食性・生産復元のための基礎資料蓄積を目的として分析を依頼した。その結果はVIを参照していただきたい。

- 2 野外調査の方法
- 3 整理経過
- 4 室内整理の方法

(4) 遺構名について

遺構種類の略号は S A : 柱穴列、 S D : 溝跡、 S I : 壊穴住居跡、 S K : 土坑・墓壙、 S K I : 壊穴状遺構、 S N : 灰跡である。この遺構略号に 2 衔の数字を組み合わせて遺構名とした。

<重複遺構の遺構名について>精査の過程で住居等の拡幅・建て替え等で重複が確認された場合には新しい方から A、B、C と登録することにした。

<遺構名の変更>精査の過程ならびに室内整理段階で遺構の性格が当初想定していたものと異なった場合には、掲載時に遺構名を変更している。そのため、遺構名を変更した遺構の旧番号や、登録抹消した遺構の番号を詰めなかったので、連番になってない。

(5) 遺構の記録

遺構の記録は実測図と写真撮影により、図面で表現できない所はデジタルカメラとフィールドカードに記録している。

<図面>遺構の平面形や焼上範囲、遺物出土状況を記録した平面図、ならびに遺構の断面図・埋土の堆積状況を記録した断面図を作成した。エレベーション図は必要に応じて作成している。作図は簡易遺り方測量を準用し、精査途中で随時作図記録している。縮尺は基本的には 1/20 を原則としたが、カマド・焼土などの微細図が必要な図面に関しては 1/10 で、遺構が長大なために遺り方測量をするには困難な場・溝に関しては周辺地形が平坦な所は平板測量で、斜面部は光波トランシットを利用した平板測量で 1/50 で作図した。

<写真>遺構検出状況、埋土堆積状況、遺物出土状況、完掘状況といった具合に精査の各段階毎に必要に応じて撮影を行っている。フィルムは 35mm 判のモノクロとリバーサル、モノクロに関しては 6 × 7 cm 版も使用している。また、状況に応じてデジタルカメラを使用してメモ的写真を撮影している。遺跡遠景と調査終了全景はセスナ機による空中撮影にて行った。

3 整理経過

11月 1 日担当者 1 名(島原)、期限付職員 1 名で室内整理開始。当面は土器の洗い・注記・接合・復元を行う。同時に調査員が土器以外の遺物仕分けを行う。11月下旬には土器接合が終了。おおよその登録点数が確定したので、実測を開始する。1月 4 日、別の遺跡の整理をしていた担当者 1 名(菅野)、期限付職員 1 名が合流し、担当者 2 名・期限付職員 2 名体制となる。1月下旬、実測が終了。遺構トレースを開始する。2月下旬、遺構トレースが終了。遺物トレースを開始する。3月中旬、トレースが終了。図版組を開始した。3月 31 日に整理作業の一切が終了した。

4 室内整理の方法

図面点検・遺物の洗浄・写真整理は原則として現場で行うこととしたが、期間の後半は調査に追われ、一部は野外調査終了後に行っている。

(1) 遺構図面

遺構図面は点検後、第二原図を作成しトレースを行った。挿図中の縮尺は壊穴住居・壊穴状遺構・

掘立柱建物跡は1/60、カマドは1/20、土坑は1/40、堀・溝・柱穴状土坑の平面図は1/100、堅穴住居の床面施設・堀・溝・柱穴状土坑の断面図は1/40を原則とした。任意縮尺に関しては脇にスケールをつけている。

(2) 遺 物

遺物は洗浄後、出土遺物の全てを点検し、遺構内外と遺物の種別毎に仕分けを行った。仕分け後、注記・接合・復元と作業をすすめ、実測・採拓が必要なものを選んで登録した。登録後は実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。実際の作業は調査員が仕事の計画と指示・点検を、作業員が実際の仕事を行うといった具合に分担している。

掲載基準

<土器>完形品と接合復元したものの中で器形がおおよそ分かるものは全て掲載した。遺構内から出土した遺物が少ない遺構の土器に関しては口縁部・底部破片を選択した。類似した器形を持つものに関しては床面・底面出土のものを優先して選択した。

<石器>点数が少ないこともあり、出土したもの全点を登録・掲載した。

<石製品>形状が分かるものを中心に登録・掲載した。カマドの芯材に用いた礫は遺物からの転用もしくは使用痕があるものを除き、石質鑑定用サンプルを抽出した後、現場で遺棄している。墓壙から出土した礫も同様である。

<金属製品>煙管・毛抜・鉄・銭貨・釘などがある。すべて近世遺物である。煙管・毛抜・鉄に関しては形状が分かるものを中心できのう限り登録・掲載するように努めた。銭貨は全点登録したが、材質により掲載方法が若干異なる。銅銭と銭名が分かる鉄銭に関しては全点掲載し、銭名の分からない鉄銭に関してはサシは重量計測の後写真掲載、それ以外は重量計測のみ行った。釘は全点登録したが、形状が類似しているものが多く認められ、全点掲載する意味が無いと考え、本文中で出土地点毎の重量を示し、一部を写真掲載し対応することにした。

<陶器・陶磁器>所属時期が近世のものがほとんどである。接合・復元したものうち器形がおおよそ分かるものと、器形・染付がある程度わかる破片資料は掲載した。

<木製品>大半が近世墓の棺材である。全点登録し、形状な良好なものを写真掲載した。一部は樹種同定を行った。

挿図中の縮尺

上器・陶器・陶磁器は1/3、鉄製品・金属製品・石器・石製品は1/2、銭貨は原寸を原則とした。これらの原則と異なる縮尺の図面には脇にスケールをつけた。

(3) 写 真

野外調査中に撮影した写真是、モノクロはネガアルバム、リバーサルはスライドファイルに撮影順に整理して台帳に記入した。

遺物は当埋文センターの写真技師が登録した遺物を35mm判フィルムで撮影した。現像終了後、種別毎に整理を行った。

(4) 凡 例

本書で使用したスクリーントーンの種類は凡例に示したとおりである。また、土器実測図の上に記した△は断面実測の位置を示したものである。

観察表中で使用している法量の推定値は()、残存値は〔 〕、計測値はcmで表示している。住居の床面積はブランニーメーターで住居下場のラインを3回計測した値の平均値を示した。

調整技法の表現について

土器の調整を以下的基本で分類し、実測した。なお、分類の際には「細谷地遺跡第8次発掘調査報告書」(岩垣文2004)を参考にした。

ハケメ：不定方向で断続的な細かい条線をもつもの。

ヘラナデ：不定方向で断続的な明瞭な条線を持たないもの。弱い・細かいハケメ。

ヘラケズリ：不定方向で断続的な砂粒の動きが認められるもの。

ヘラミガキ：断続的に光沢のある細い単位の筋。

ヨコナデ：横方向の連続的な粘土の動き。

実際にはこの分類に当てはまらないものもあるが、それに関しては観察表中に詳細な観察結果を記載することで補うこととした。調整の実測範囲は外外面とともに中央から半分にとどめたものが多い。

IV 基本層序

| | | |
|---|----------|---|
| I 层 表土層(黒褐色土) | 72.000 → |  |
| A区北半の一部では上位面で穢の人為堆積を施し、平坦部を形成している。 | 71.000 ← |  |
| I' 層 盛土層(黒色土) | 70.000 ← | |
| II層起源の人が堆積土。A区の各地に見られる。 | 69.000 ← | |
| II 層 旧表土層(黒色) | 68.000 ← | |
| 開拓以前のⅢ表土層。A区南やB区南・東で部分的に確認。基本的には烟造成時の削平で消失。斜面上位から流れ込んだ遺物を包含。 | 67.000 ← |  |
| Ⅲ層 自然堆積層(暗褐色土) | 66.000 ← | |
| A区南やB区南・東で部分的に確認。古代の遺構検出面。大半が烟造成時の削平で消失。 | 65.000 ← | |
| IV 層 基盤層(褐色土) | 64.000 ← | |
| 部分的ににぶい黄褐色土粒を含み中にはφ1~5cmの大のものもある。本層より上位層が烟造成時の削平で消失している。A区北やB区北・中央・西などの遺構検出面。 | 63.000 ← |  |
| | 62.000 ← | |
| | 61.000 ← | |
| | 60.000 ← | |

第6図 基本土層柱状図



第7図 遺構配置図

V 検出遺構と出土遺物

1 概要

今回の調査では古代(奈良時代)の堅穴住居跡8棟、近世の墓礎18基、時期不明の堅穴状遺構5棟・柱穴列3列・炭窯2基・土坑39基・時期不明の溝跡15条・柱穴状土坑206個等を検出した。

検出された遺構の時期は奈良時代・近世・時期不明の3時期に分けられる。奈良時代はA・B区の標高64~71m付近、近世はB区中央付近、時期不明は調査区のほぼ全域に分布する様相を呈する。

本報告では、時期・遺構種別毎に記述を進める。遺物の記述に関しては出土量や出土地点等の記述にとどめ、詳細はVIIでまとめて述べる。

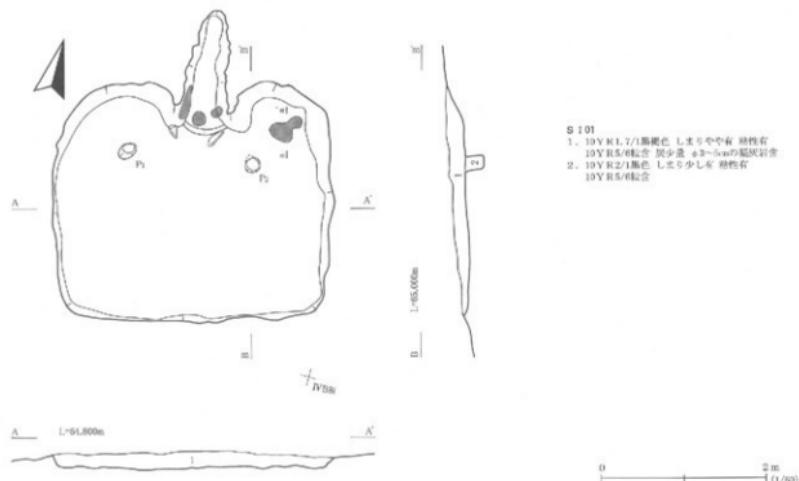
2 古代の遺構

(1) 堅穴住居跡

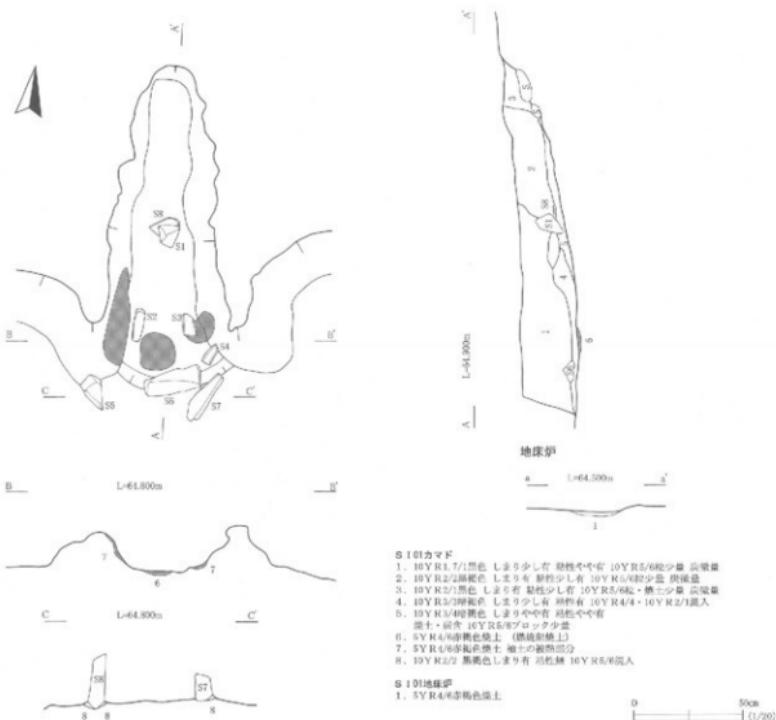
S I 01堅穴住居跡

遺構(第8・9図、写真図版3・4)

<位置・検出状況> B区西、IVB 7 h グリッドに位置する。検出面は標高64.4~64.7mのⅢ層上面で、床面付近でⅢ~Ⅳ層の漸移層に移行する。本遺構の周辺は北から南へ下る緩斜面であるが、ここより南東側斜面下は傾斜が急になっている。重複する遺構はない。東北東約7.5mにSK12、北西約0.6mにSK09、北西約5.2mにSK05が位置する。



第8図 S I 01堅穴住居跡(1)



第9図 S 101堅穴住居跡(2)

<平面形・規模>北壁が中央に設置されているカマドの影響で歪んでいるが、概ね隅丸方形状を呈する。規模は北壁長3.39m、東壁長2.92m、南壁長3.25m、西壁長2.85mを測る。検出面からの深さは最大26cmを測る。

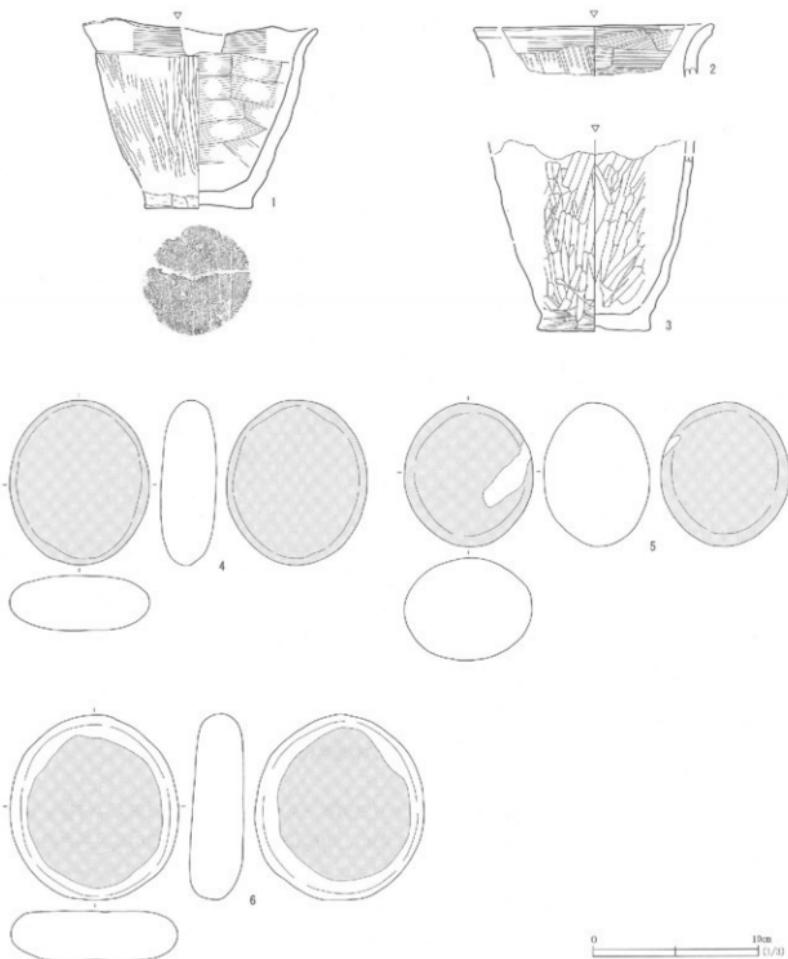
<主軸方向・床面積>東壁を基準とした主軸方向はN-14°-W、床面積は11.17m²を測る。

<埋土>黒褐色土單層の自然堆積を呈する。

<壁>概ねⅢ層を壁としているが、掘り込み面がⅢ～Ⅳ層へ移行する漸移層であるために一様でなく、Ⅳ層を壁としているところもある。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北壁20～26cm、南壁2～7cmを測り、北・南壁は西に、東・西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

<床面>概ね平坦で、Ⅲ・Ⅳ層を掘り込み床面としている。床面標高は64.3～64.5m。

<床面施設>北東コーナー付近から地床炉1基、北西・北東コーナーより中央に60～70cm程内側から柱穴を各1基(P1・2)検出した。地床炉は長軸41cm、短軸26cmの不整形形状を呈し、厚さ2cmの赤褐色焼土が形成されている。P1・2は位置的に主柱穴になるものと思われる。



第10図 S101堅穴住居出土遺物

<カマド>北壁中央で検出された。煙道方向はN-3°-W。本体部の残存状況は比較的良好である。袖は大部分をIV層土を削り出し、南側(手前側)を亜角礫とIV層起源の暗褐色土で構築している。本体部内からは繩・土器が少量出土している。出土状況からS6は天井石、S7は右袖の芯材に用いられたのが崩落した可能性が考えられる。燃焼部は長軸40cm、短軸30cmの梢円形状を呈する、深さ2cmの掘り込みの底部を中心に、径16×17cmの円形状を呈する、厚さ2cmの赤褐色焼土が形成されている。

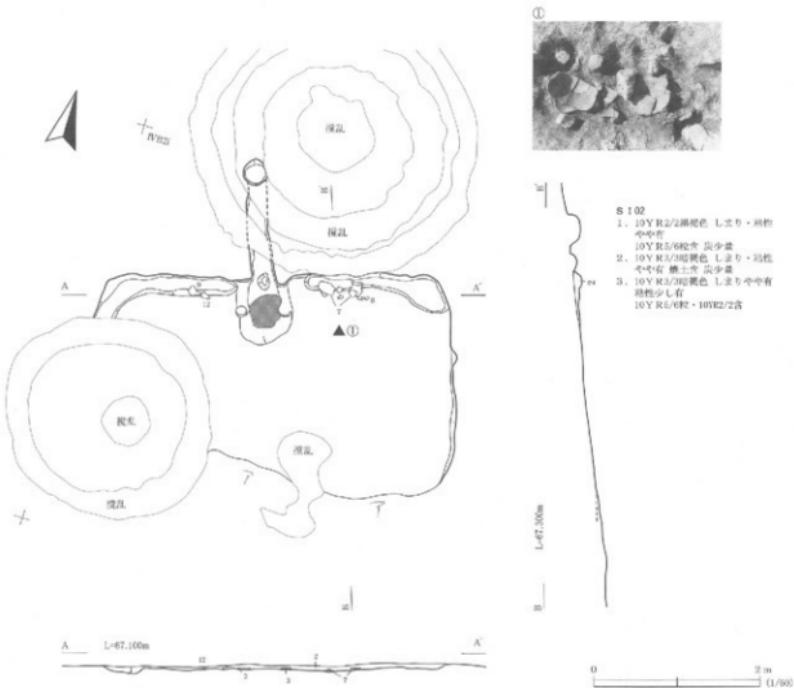
その奥に亜角礫が2個据えられており、位置関係から見て支脚として使用された可能性が高い。煙道部は上半部が削平されているため、掘り込み式か剥り抜き式かははつきりしない。長さ1.20m、幅20～28cmを測り、上り勾配で煙出し部へ続いている。中央付近で亜角礫が1個(S 1)直立状態で出土している。断面図は石の主軸からはずれているためはつきりしないが、床面から若干浮いた状態で出土した。出土状況から煙道の天井を支える支柱的な性格があると思われる。煙道部と煙出し部との境界が明瞭でないために、煙出し部の規模ははつきりしないが、断面観察からみて径24cm前後、深さ13cmを測る。

遺物(第10図、写真図版4)

カマド・床面・埋土から繩文土器22g、土師器1,123g、磨石3点(1,057g)、鉄滓? 8gが出土した。土師器の器種は全て壺で、壺類は含まれていない。埋土上位から出土した鉄滓?は、新しい時期のものであると思われる。このうち1～3の土師器壺、4～6磨石3点を掲載した。

<土師器壺> 3点ともG類である。調整技法は1は外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。2は内外面ハケメ。3は内外面ヘラミガキとバラエティに富んでいる。

<磨石> 3点ともにほぼ全面を磨られている。石質は4はひん岩、5は凝灰岩、6はハンレイ岩と様々である。



第11図 S I 02竪穴住居跡(1)

S I 02 竪穴住居跡

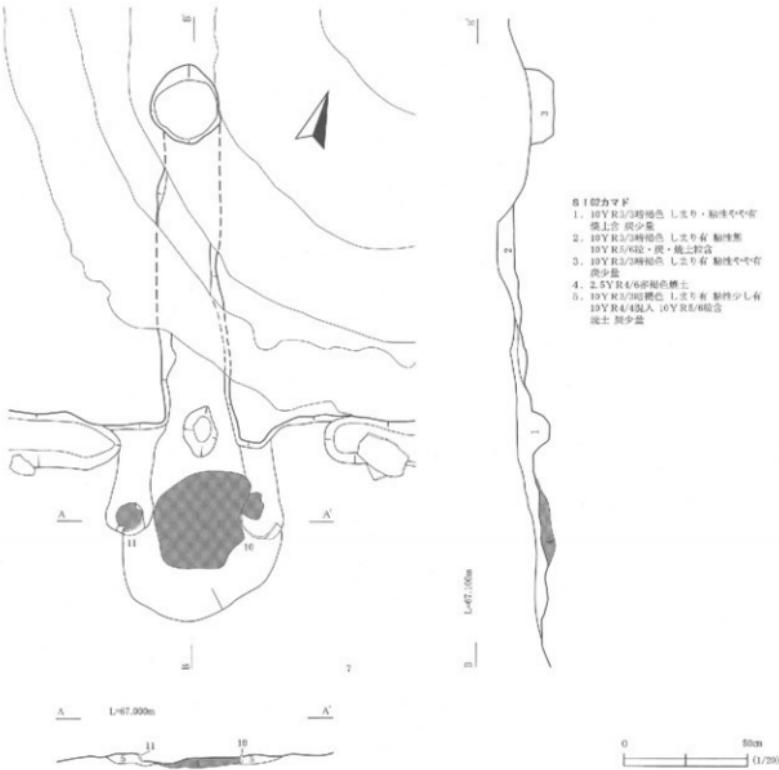
遺構(第11・12図、写真図版5・6)

<位置・検出状況> B区中央、IVB 2 i グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66.7~67.0mのIV層上面である。重複する遺構はない。北約3.1mにSK68、北東約5mにSN01、北東約15mにSI04、南約2.3mにSD23、西南西約8.6mにSK15、北西約2.5mにSK17が位置する。烟造成時の削平と住居西側・カマド煙道部にある攪乱(植栽痕)に加え、斜面の崩落によって住居の南半分が消失し、全体的に残存状況は不良である。カマドと北・東壁、北・西・東壁際の周溝の残存状況から竪穴住居であると判断した。

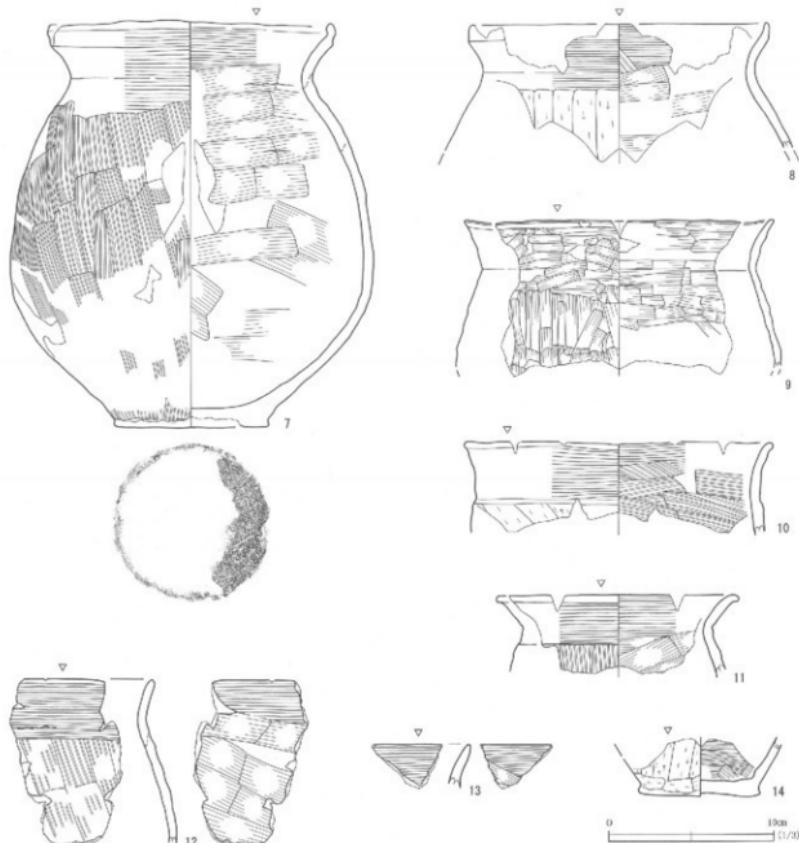
<平面形・規模>攪乱によって西壁が、斜面の崩落によって南壁が消失しているためはつきりしない。北壁は4.40m残存、東壁は2.54m、西壁は0.53m残存していることから一辺4~5m前後の隅丸方形状を呈すると思われる。検出面からの深さは最大8cmを測る。

<主軸方向・床面積>東壁を基準とした主軸方向はN-16°-W、床面積は残存部分で6.58m²を測る。

<埋土>上位は黒褐色土(1層)、下位は暗褐色土(2・3層)に大別される自然堆積を呈し、3層に細



第12図 S I 02 竪穴住居跡(2)



第13図 S 102堅穴住居跡出土遺物

分した。

<壁>概ねIV層を壁としている。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北壁3~8cm、東壁4cm、西壁4cmを測る。

<床>概ね平坦で、IV層を掘り込み床面としている。標高は66.7~66.9mを測る。

<床面施設>カマドが設置されている中央付近を除く北壁際から周溝を検出した。便宜的にカマドより西を周溝1、東を周溝2とする。周溝1は北西コーナーから南が搅乱によって消失し、全容は不明だが、全長1.76m、幅22~26cm、深さ2~7cmを測る。周溝2は全長1.78m、幅22~42cm、深さ3~4cmを測る。

<カマド>北壁中央で検出した。煙道方向はN-21°-W。前述のような検出状況のため、本体部の残存状況は不良である。袖は土器を芯材として暗褐色粘土で構築されている。燃焼部は径65×63cmの

楕円形状を呈する、深さ3cmの掘り込みの底部を中心に、径39×35cmの楕円形状を呈する、厚さ5cmの焼上が形成されている。その奥から径24×16cmの楕円形状を呈する、深さ6cmのピット1基を検出した。支脚の抜き取り穴の可能性も考えたが、位置関係から見てその可能性は低いと思われる。煙道部は上半部が削平され、擾乱によって寸断されているために、掘り込み式か割り抜き式かは判然としない。残存部分から長さ1.08m、幅36cmを測り、上り勾配で煙出し部へ続いていると思われる。煙出し部は32×27cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。

遺物（第13図、写真図版41）

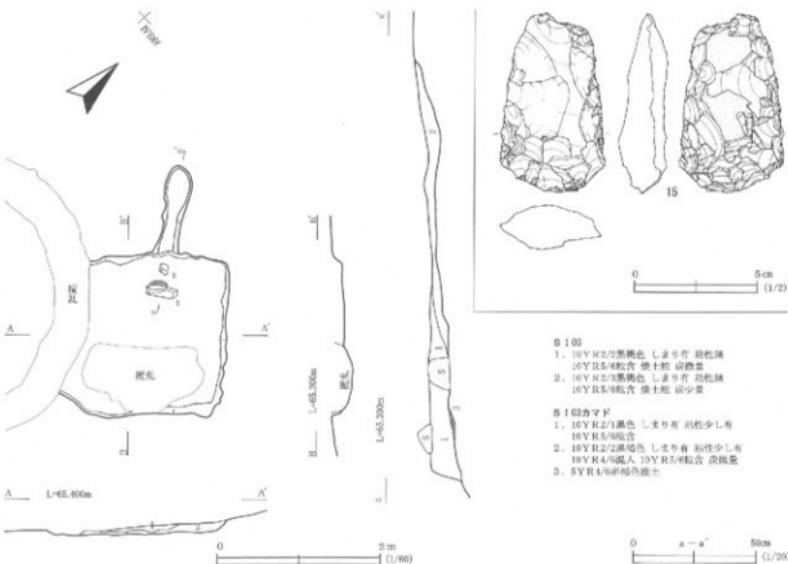
カマド・床面・埋土から土師器1,672gが出土した。カマド・床面からの出土が大半を占める。また、本遺構は埋上が非常に薄く、埋土出土としたものも限りなく床面に近い部分からの出土となる。このうち7~14の土師器窯を掲載した。

＜土師器＞坏は無く、甕のみの出土である。器種構成はC類3点、D類1点、F類1点、I類2点である。D類の10がカマド右袖、F類の11がカマド左袖の芯材に転用されていたことをあわせると、C・D・I類が主体といえる。調整技法は外面ハケメもしくはヘラケズリ、内面ヘラナデもしくはハケメ調整のものが主体を占めている。また、I類の胎土は他の種類の胎土に比べ緻密で雲母が含まれている傾向がある。

S I 03 竪穴住居跡

遺構（第14図、写真図版6）

＜位置・検出状況＞B区西、IVB 6 f グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜



第14図 S I 03 竪穴住居跡、出土遺物

面を呈する。検出面は標高65.0～65.2mのIV層上面である。重複する遺構はない。東約4.8mにSK05、西約2.8mにSK01、北西約2.8mにSD07が位置する。住居南西壁、南東部を擾乱に切られ、煙造成時の削平で全体的に残存状況は不良である。

<平面形・規模>擾乱によって南西壁が消失し、はっきりしない。規模は北東壁は1.91m遺存、南東壁は2.04m、北西壁は1.67m残存していることから一辺2m前後。平面形は各辺が直線的というよりは中央部分が多少ふくらむ弧状ではあるが、概ね隅丸方形形状を呈するものと思われる。検出面からの深さは最大14cmを測る。

<主軸方向・床面積>北東壁を基準とした主軸方向はN-45°-W、床面積は残存部分で3.07m²を測る。

<埋土>黒褐色土主体の自然堆積を呈し、2層に細分した。

<壁>概ねIII層を壁としているが、掘り込み面がIII～IV層へ移行する漸移層であるため一様でなく、IV層を壁としているところもある。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北東壁9～14cm、南東壁8～14cm、北西壁6～10cmを測り、北東壁は東に、南東・北西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

<床>概ね平坦地で、III・IV層を掘り込み床面としている。標高は64.9～65.1mを測る。

<カマド>北西壁中央で検出された。煙道方向はN-45°-W。本体部の残存状況は不良で、わずかに燃焼部焼上、支脚の可能性のある亜角礫が残るのみである。燃焼部は径26×15cmの楕円形状を呈する赤褐色焼土が形成されている。厚さ2cmを測り、下位のIV層に漸移的に移行する。その奥に径13cmの亜角礫を検出した。位置的に支脚の可能性がある。また燃焼部焼土上から長軸35cm、短軸13cmの角礫を検出した。位置的に天井石の可能性も考えたが、焼土面から浮いていたことや本体部の残存状況が不良であることを勘案し、斜面上位から流れ込んだカマド構築材と判断した。煙道部は大半が削平されているため、底部付近のみを検出した。そのため掘り込み式か割り抜き式かは判然としない。長さ1.05m、幅24～28cmを測り、上り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部の状況は残存状況が不良のため不明である。

遺物(第14図、写真図版11)

カマド・埋土から土師器3.71g、不定形石器1点(50.07g)が出土した。このうち15の不定形石器を掲載した。

S I 04堅穴住居跡

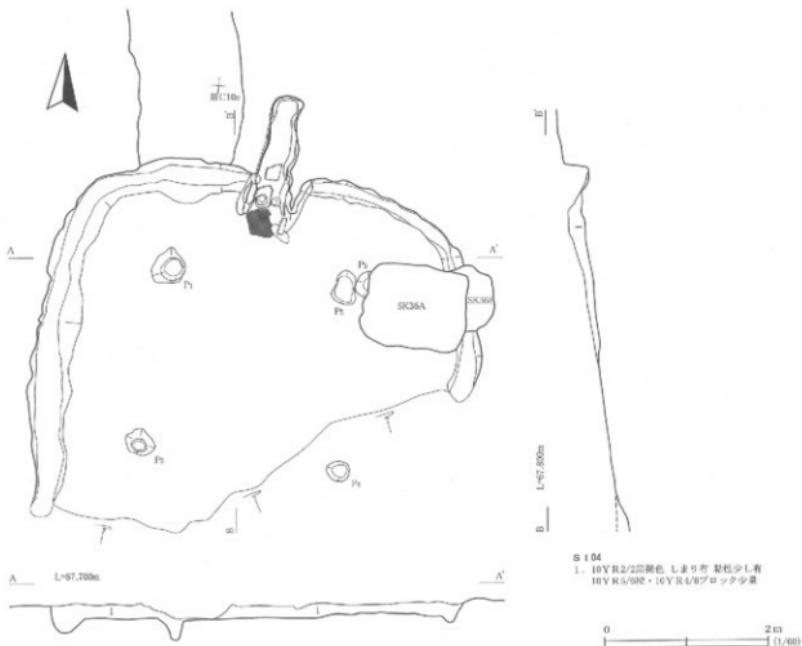
遺構(第15・16図、写真図版7・8)

<位置・検出状況>B区中央、III C10b・10cグリッドに位置する。本遺構の周辺は北北西から南南東に下る緩斜面を呈する。木造構造より斜面下は煙造成時に大幅に削平されており崖状を呈する。検出面は標高67.1～67.6mのIII層上面である。床面に向かうにつれてIV層に移行する。北約1.2mにSD43、北東約1.8mにSK26、南西約15mにS102、北西約3.9mにSK35、西約10.1mにSN01、東側に墓壙群が位置する。斜面の崩落で住居の南半分が消失している。

<重複>住居東側をSK36A・Bに切られている。

<平面形・規模>斜面の崩落で南壁が消失し、平面形・規模ははっきりしない。規模は北壁が5.21m遺存、東壁は2.37m、西壁は4.57m残存していることから、一辺が5m前後。平面形は各辺が中央付近が外側に膨らむ弧状を呈し、住居コーナーが角張らず、なで肩状を呈するためはっきりしないが、概ね隅丸方形形状を呈するものと思われる。検出面からの深さは最大39cmを測る。

<主軸方向・床面積>東壁を基準とした主軸方向はN-6°-E、床面積は14.63m²を測る。



第15図 S 104竪穴住居跡(1)

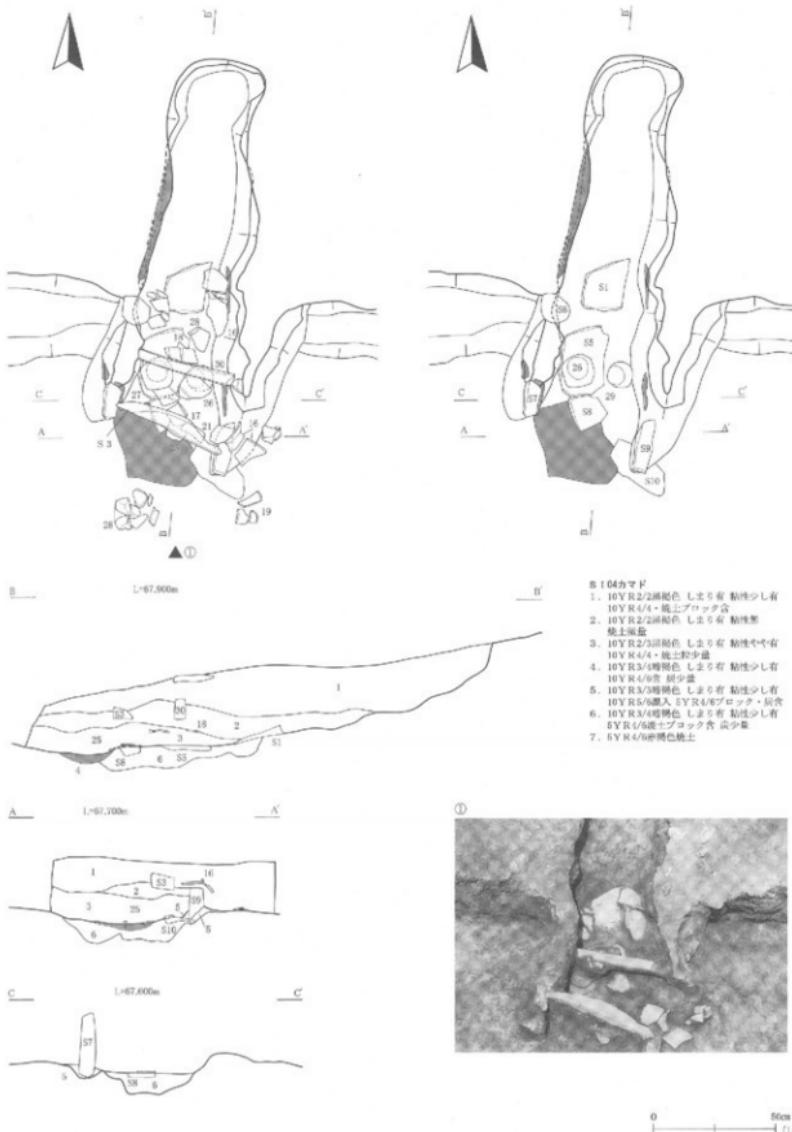
<埋土>黒褐色土単層の自然堆積を呈する。

<壁>概ねIV層を壁としているが、掘り込み面がIII～IV層へ移行する漸移層であるために一様でなく、III層を壁としているところもある。床面から鋭角的に立ち上がる。壁高は北壁28～39cm、東壁は最大28cm、西壁は最大39cmを測る。北壁は東に、東・西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

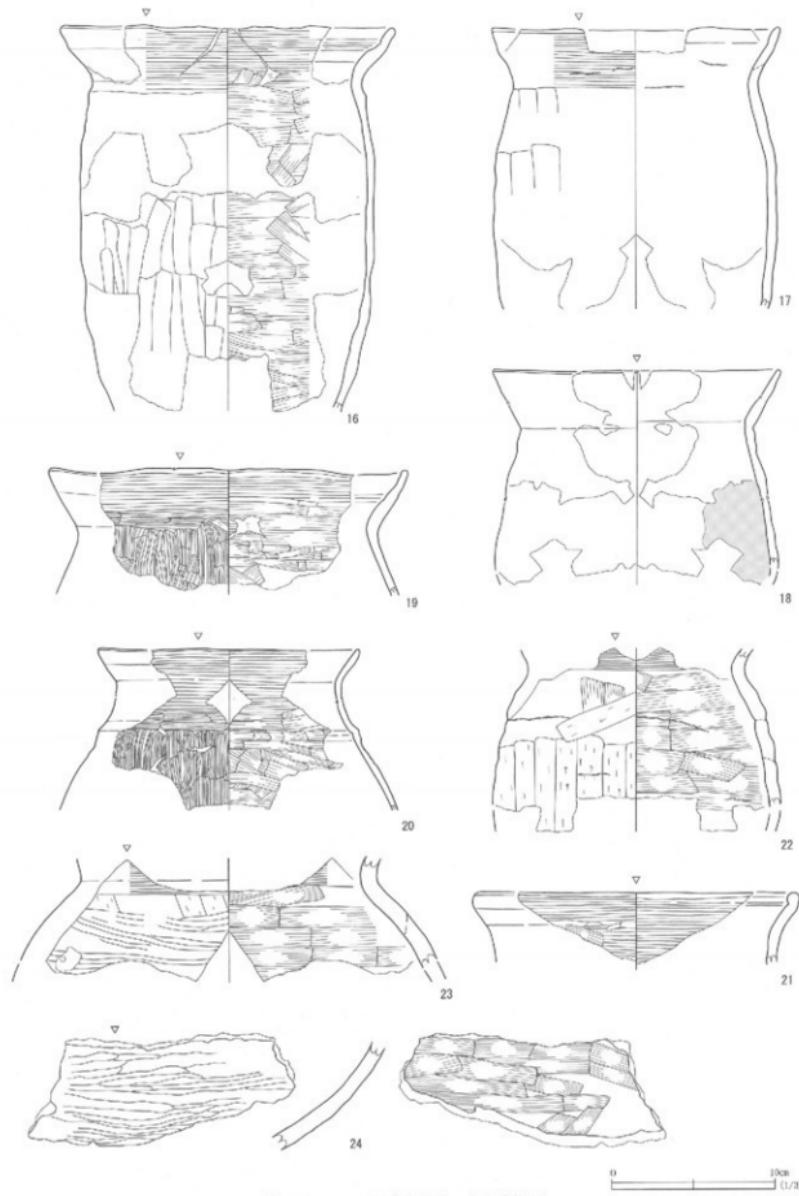
<床>概ね平坦で、III・IV層を掘り込み、IV層起源の褐色土が混入したIII層起源の暗褐色土を貼床（掘り方理上）にして床面としている。標高は67.1～67.3mを測る。

<床面施設>住居各コーナーより中央に約1.1～1.2m内側の場所から柱穴を計5基（P 1～5）、各壁の壁際から周溝を検出した。柱穴P 1～P 4は位置的に主柱穴になるものと思われる。周溝は幅16～56cm、深さ4～20cmを測り、カマドを含む各辺を巡っている。カマド付近に関しては後述するが、削り出しの袖部分はトンネルを掘り（写真図版8）、燃焼部付近は板状の花崗閃緑岩で蓋をして暗渠を構築し、両脇の周溝に直結している。周溝の底面レベルはおおよそ標高67.1～67.3mで、北壁中央のカマド付近が最も標高が高く、斜面下方に向かうにつれて低くなっていく。比高差は25cmを測る。以上の状況から見て周溝は排水溝的な性格を持つものと思われる。

<カマド>北壁中央で検出された。煙道方位はN-4°-E。本体部の残存状況は比較的良好である。袖は大部分をIV層土を削り出して構築し、南側（手前側）は亜角礫とIV層起源の暗褐色土で構築している。天井の架構には板状土製品と花崗閃緑岩が各1個づつ用いられている。壁側には土製品、手前側

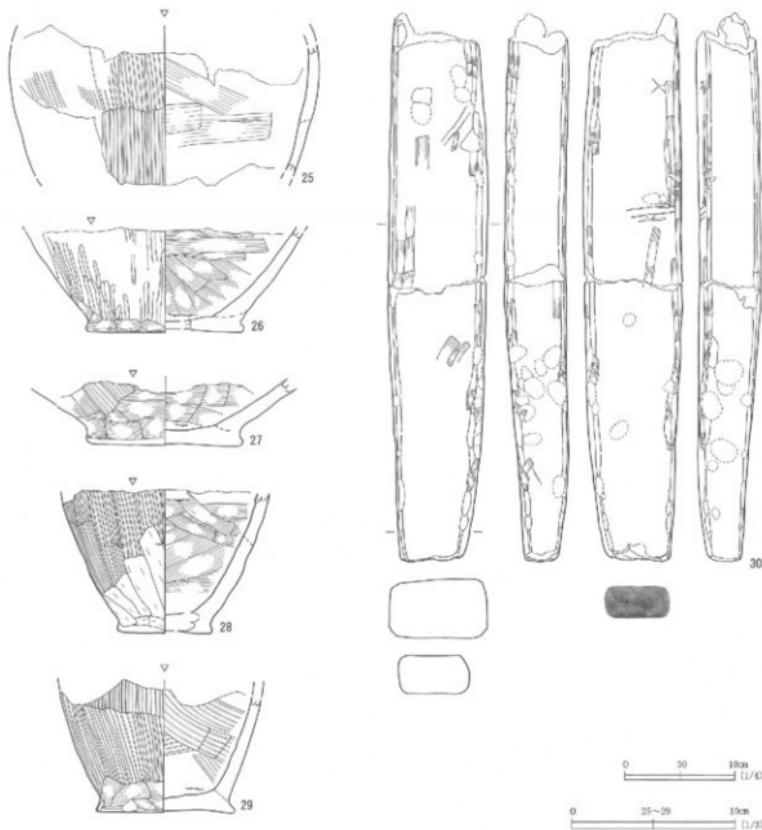


第16図 S 104堅穴住居跡(2)



第17図 S 104堅穴住居跡、出土遺物(1)

には花崗閃緑岩が架けられている。ただし、支脚との位置関係から両者とも埋没・堆積中に流入した土砂の影響で、斜面下方にずれて現位置は保っていないものと思われる。本体部内からは礫・土器片が多数出土している。状況から見て大半のものがカマド構築部材に使用されたものと思われる。また、天井石S 3は人為的に平らに加工された痕跡が認められる。燃焼部は調査時の不手際で掘り込みの範囲を取り損ねているが、断面から長軸35cm、短軸31cm、深さ2cmの梢円もしくは不整形形状を呈するものと思われる。掘り込みの中心には長軸35cm、短軸33cmの不整形形状を呈する赤褐色焼土が形成されている。厚さ4cmを測り、下位のIV層に漸移的に移行する。焼土の北に隣接する扁平な花崗閃緑岩(S 8)も被熱しており若干赤化している。その奥には土師器壺の底部が2個逆さまに据えられている(26・29)。状況から見て支脚に転用されたと思われる。支脚から煙道部入り口までは概ね平坦で、長さ12~



第18図 S 104堅穴住居跡、出土遺物(2)

27cmの薄い板状の花崗閃綠岩を底面に敷いている(S 5)。この花崗閃綠岩は前述したが、幅23cm前後、深さ4cmほどの溝を覆うように置かれていた。覆われていない部分は暗褐色系粘土を用いて貼床していた。この溝は両袖下にトンネルを掘り込み周溝と直結している(写真図版8)。煙道部が上り勾配で雨水の流入を止める施設がないこと、周溝の標高はカマド付近が一番高いことからみて、この燃焼部付近の溝は排水溝的性格をもつものではないかと思われる。

煙道部は上半部が削平されているために、掘り込み式か割り抜き式かは判然としない。長さ1.05m、幅25~30cmを測り、上り勾配で煙出し部へ続いている。煙道と煙出し部との境界が明瞭でないために、煙出し部の規模ははっきりしない。断面からみて径35cm前後、深さ15cmを測る。

遺 物 (第17・18図、写真図版42)

カマド・床面・埋土から土師器4,461g、石器11g、板状土製品1点(2,338g)が出土した。大半がカマドから出土している。このうち16~29の十師器甕、30の板状土製品を掲載した。

<土師器>甕はなく、甕のみの出土である。器種構成はA類4点、C・I類各3点である。調整技法はI類が外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ調整が施されているのを除くと、外面ハケメもしくはヘラケズリ、内面ヘラナデ調整が施されている。また、I類の胎土は他の種類の胎土に比べ緻密で雲母が含まれている傾向がある。

<板状土製品>カマド燃焼部に架構されていたものである。全体的に被熱による摩耗が著しく、調整技法は不明だがヘラナデ・指オサエの痕跡が確認できた。断面形状は角の取れた方形状を呈し、粘土が巻かれている状態が看取される。おそらく、板状の粘土を巻いて棒状に加工したものと推察される。角はナデで面取りされている。この板状土製品に類似した土製品は八戸市酒美平遺跡で出土している。同遺跡出土例はカマド袖の芯材として使用したようである。また、福島県本宮町高木遺跡では3本の粘土紐を束にして、ナデ調整で板状に成形した板状土製品が出土している。この上製品もカマド構築材として使用した可能性が指摘されている。類例は少ないが、本遺跡出土土製品は当初からカマド芯材(構築部材)にするために製作した可能性が想定される。

S I 06 A・B 穫穴住居跡

A区北、III B 2 e ~ 4 e グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈しており、ここから斜面下はより傾斜が急となる。検出面はおよそ標高70.4~70.7m付近のIV層上面である。南東約7.1mにS K70、南約0.5mにS K61、南西約4.3mにS K69、西約1.2mにS D48、北西約0.5mにS K72が位置する。烟造成時の削平で残存状況は不良である。斜面の崩落で南半部は消失している。検出当初は1棟の竪穴住居跡として精査を開始したが、同床面精査中に壁から0.2~1.0m程内側で周溝プランを検出し、断面観察・炭化材との切り合い関係からみて、2棟の竪穴住居跡が重複しているものと判断し、新しい方をA、古い方をBとした。S I 06 A・B双方の主軸線が同じであることや遺物から見て、AとBは時間差があり無く、Bを廃絶しA建て替えた可能性も考えられる。

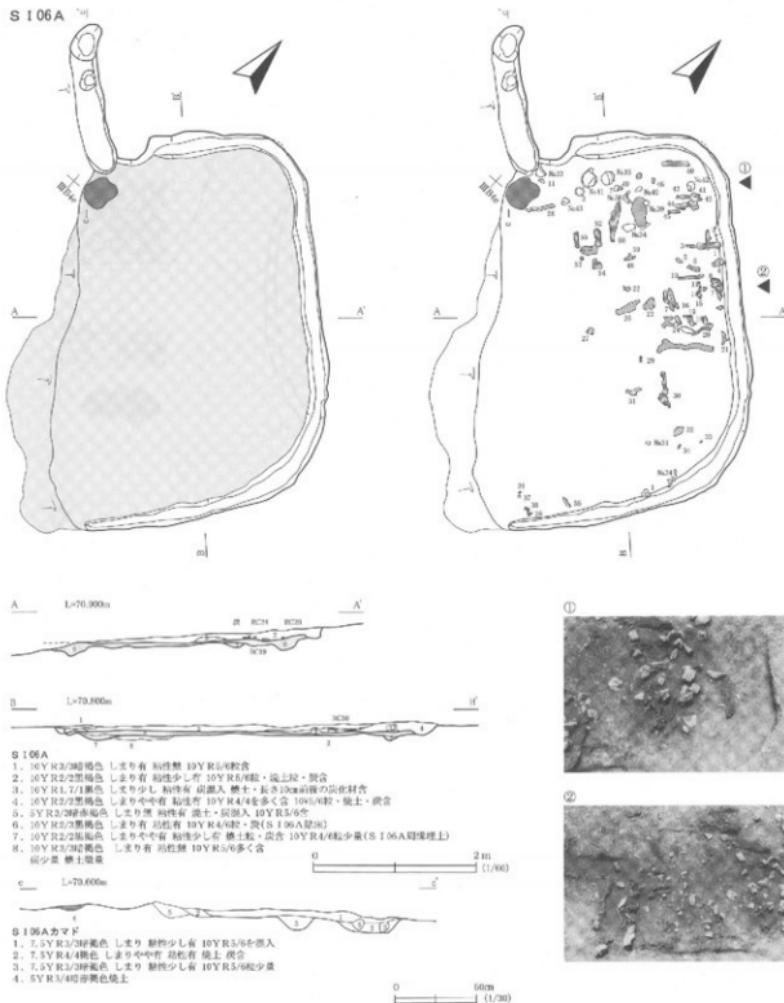
S I 06 A

遺 構 (第19・20図、写真図版9~11)

<位置・検出状況>上記の通り。

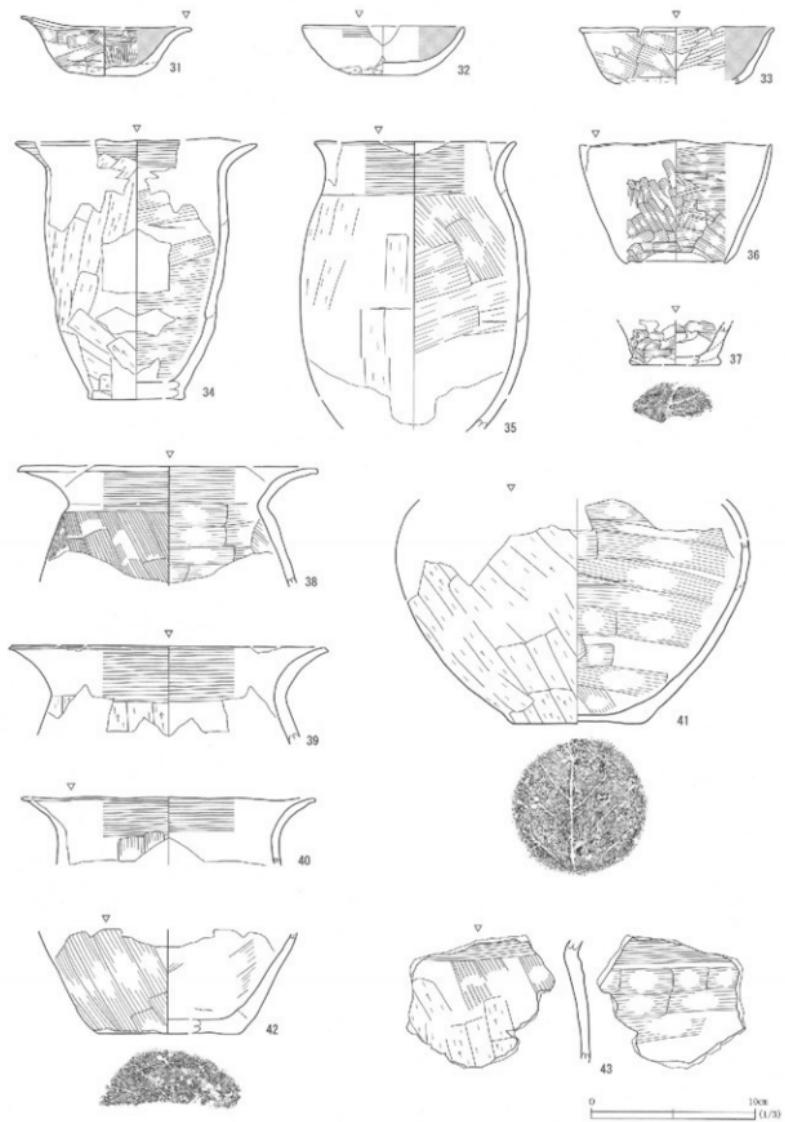
<重複> S I 06 Bより新しい。他の遺構との重複はない。

<平面形・規模>斜面の崩落で南半部が消失しているため平面形・規模ははっきりしない。北東壁は4.66m遺存、南東壁は3.09m、北西壁は2.31m残存していることと貼床の残存状況から、一辺が4.5



第19図 S I 06A・B(1)竪穴住居跡

～5m前後。平面形は各辺が中央付近が若干外側に膨らむ緩い弧状を呈し、住居コーナーが角張らず、なで肩状を呈するためはっきりしないが、概ね隅丸方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最大13cmを測る。



第20図 S I 06 A 積穴住居跡出土遺物

<主軸方向・床面積>東壁を基準とした主軸方向はN-45°-E、床面積は残存部分で13.16m²を測る。<埋土>埋土は5層に細分され、上位は1層の暗褐色土、下位は2~5層の黒褐色土を主体とした自然堆積を呈する。住居北半を中心に多くの炭化材・炭・焼上が出土しており、状況から見て焼失住居であると思われる。炭化材は2~4層下位で多く検出され、3層は炭の層である。5層は住居中央から北東にかけて部分的に認められる。5層は焼上・炭が混入し、住居中央付近のみに層の広がりが限定されている。よって、5層は住居消失時に真っ先に落ちた住居上層中央付近の部材で、2~4層は5層より縁辺部の部材で中央より後の時間帯に焼け落ちた可能性が考えられる。4層からは土器・礫が比較的多く出土している。検出した炭化材の樹種は大半がクリ材で、一部ケヤキ(1)、ナラ(17・49)、コナラ属クヌギ節(20)、ハンノキ属(39)が含まれる。クリ材以外の種類の炭化材は概ね小さな炭化材のため、上屋の部位と樹種の対応関係は確認できなかった。また、住居の残存状況が不良のため、炭化材の配置から上屋構造まで復元できる情報は得られなかった。

<壁>概ねIV層を壁としている。床面から鋭角的、もしくは外傾して立ち上がる。壁高は北東壁8~13cm、南東壁は最大9cm、北西壁は最大12cmを測る。北東壁は東に、南東・北西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

<床>概ね平坦で、IV層を掘り込み、IV層起源の褐色土が混入したIII層起源の黒褐色土を貼床(掘り方埋土)にして床面としている。貼床は全面に広がる。標高は70.4~70.6mを測る。

<床面施設>各壁際から周溝を検出した。周溝は幅18~35cm、深さ3~7cmを測り、カマドを除く壁際を全周している。

<カマド>北西壁中央で検出された。煙道方位はN-45°-W。本体部の残存状況は不良で、僅かに燃焼部焼土が残存している。燃焼部は径42×38cmの楕円形形状を呈する赤褐色焼上が形成されている。厚さ3cmを測り、下位のIV層に漸移的に移行する。煙道部は上半部が削平された上に、斜面の崩落で煙道南西部が消失し、掘り込み式か割り抜き式かは判然としない。長さ1.36mを測り、幅は32cm残存し、燃焼部から下り勾配で煙出し部へ続く。煙出し部は46×33cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。

遺 物 (第20図、写真図版43)

床面・埋土から土師器1,760g、石製品425gが出土した。大半が床面からの出土である。このうち31~33の上部器壺、34~43の土師器壺を掲載した。

<土師器>器種構成は壺はB・E・F類が各1点、甕はB類2点、E・F・H・I・J類各1点とバラエティに富んでいる。調整技法は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが土体を占める。

S I 06B

遺 構 (第19・21図、写真図版12)

<位置・検出状況>上記の通り。

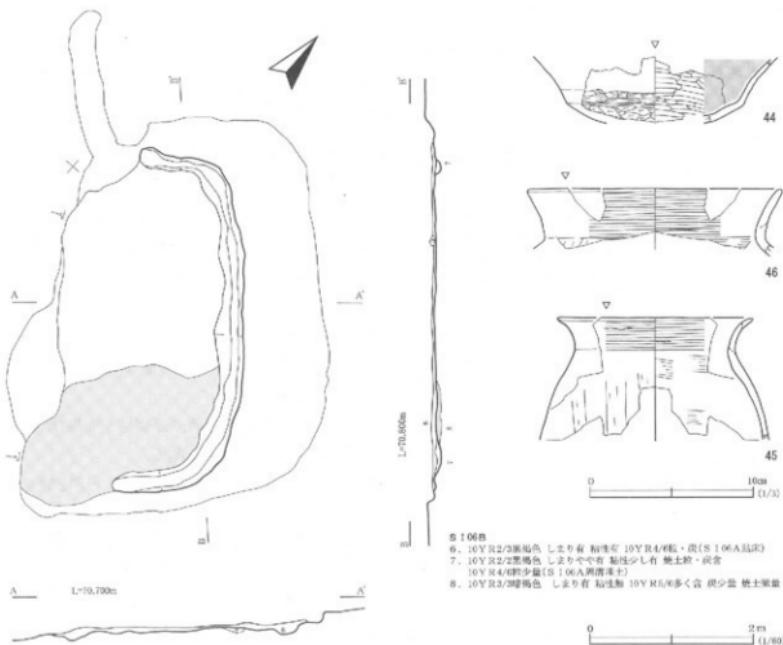
<重複>S I 06Aに切られている。

<平面形・規模>斜面の崩落で南半部が消失し、平面形・規模ははっきりしない。規模は北東壁は4.14m残存、南東壁は1.60m、北西壁は1.32m残存していることと貼床の残存状況から、一辺が4m前後。平面形は各辺が中央付近が若干外側に膨らむ緩い弧状を呈し、住居コーナーが角張らず、なで肩状を呈することから、概ね隅丸方形状。検出面からの深さは最大7cmを測る。

<主軸方向・床面積>東壁を基準とした主軸方向はN-41°-E、床面積は残存部分で8.40m²を測る。

<埋土>2層に細分され、黒褐色土を主体とした人為堆積を呈する。

<壁>概ねIV層を壁としている。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北東壁5~7cm、南東壁は最



第21図 S 106B竪穴住居跡(2)、出土遺物

大4cm、北西壁は最大6cmを測る。北東壁は東に、南東・北西壁は南に向かうにつれて低くなる。
 <床>概ね平坦で、IV層を掘り込み、IV層起源の褐色土が混入したIII層起源の暗褐色土を貼床(掘り方埋土)にして床面としている。貼床は住居東部に広がる。標高は70.3~70.5mを測る。
 <床面施設>各壁際から周溝を検出した。周溝は幅18~35cm、深さ3~7cmを測る。
 <カマド>検出されなかつた。

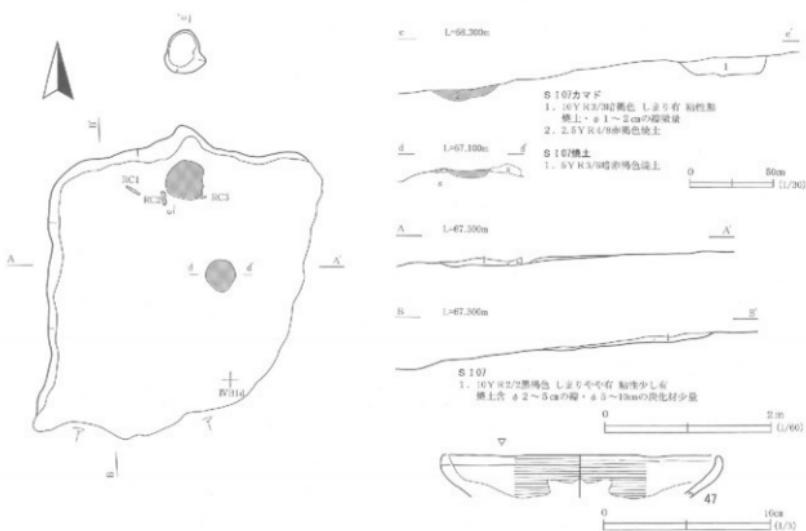
遺 物 (第21図、写真図版43)

床面・埋土から土師器236gが出土した。このうち44の土師器壺、45・46の土師器甕を掲載した。
 <土師器>器種構成は壺A類1点、甕C・F類各1点である。壺の底部はヘラケズリ調整が施されている。甕の外側はヘラケズリ、内側はヘラナデ調整が施されている。

S 107竪穴住居跡

遺 構 (第22図、写真図版13)

<位置・検出状況> A区南、III B 10c・d、IV B 1c・1dグリッドに位置する。本遺構の周辺は造成時の削平で概ね平坦であるが、本来は北東から南西に下る緩斜面を呈していたと思われる。検出面は標高66.8~67.2mのⅢ層上面である。床面向かうにつれてIV層に移行する。重複する遺構はない。



第224図 S 107堅穴住居跡、出土遺物

い。南南西約1.8mにSK81、北西約1.8mにSK111が位置する。烟造成時の削平で全体的に残存状況は不良で住居の南半分が消失している。僅かにカマドと北・東壁の一部が残存していることから堅穴住居であると判断した。

<平面形・規模>削平で南半部が消失しているため、平面形・規模ははっきりしない。規模は北壁は3.14m、西壁は3.13m残存していることと床の残存状況から、一辺が4m前後。平面形は北壁がカマド付近が若干外側に膨らむ緩い弧状を呈し、住居コーナーが角張っていないためはっきりしないが、概ね隅丸方形を呈する。検出面からの深さは最大9cmを測る。

<主軸方向・床面積>西壁を基準とした主軸方向はN-1°-W、床面積は残存部分で9.11m²を測る。

<埋土>黒褐色土單層の自然堆積を呈する。カマド燃焼土の周辺を中心に長さ10~20cmの炭化材の広がりが若干認められることから、焼失住居の可能性も考えられる。なお、炭化材の樹種は全てクリであった(RC1~3)。

<壁>概ねIV層を壁としているが、掘り込み面がIII~IV層へ移行する漸移層であるために一様でなく、III層を壁としているところもある。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北壁で最大9cm、西壁では最大8cmを測る。北壁は東に、西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

<床>概ね平坦で、III・IV層を掘り込み床面としている。標高は66.8~67.2mを測る。

<床面施設>住居中央付近から、地床炉を1基検出した。地床炉は40×38cmの楕円形状を呈する、厚さ4cmの暗赤褐色焼土が形成されている。

<カマド>カマドは北壁中央で検出した。煙道方位はN-1°-W。本体部の残存状況は不良で、僅かに燃焼部焼土が残存するのみである。燃焼部には49×46cmの楕円形状を呈する赤褐色焼土が形成されている。厚さ7cmを測り、下位のIV層に漸移的に移行する。煙道部は烟造成時の削平の影響が著し

く、僅かに煙出し部が残存するのみである。そのため、煙道部は掘り込み式か削り抜き式かは判然としない。煙出し部は燃焼部焼土から北に約1.02mに位置する。52×40cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。

遺 物 (第22図、写真図版43)

床面・埋土から縄文土器119g、土師器189g出土した。縄文土器は全て埋土上位からの出土である。土師器は床面・埋土から半数ずつ出土している。このうち47の土師器甕を掲載した。

S I 10堅穴住居跡

遺 構 (第23図、写真図版13)

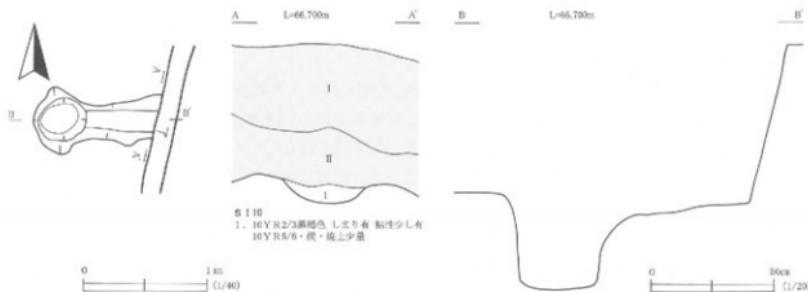
<位置・検出状況> A区南、IVB 3 d グリッドに位置する。本遺構の周辺は焼成時の削平で概ね平坦であるが、本来は北東から南西に下る緩斜面を呈していたと思われる。検出面は標高66.0m前後のⅢ層上面である。重複する遺構はない。西南西約1.4mにSK82、北北西約1.3mにSK80が位置する。検出当初は溝跡の可能性も考え精査を開始したが、形状・埋土の状況がカマド煙道部の状況に類似していることから、堅穴住居跡のカマド煙道部であると判断した。東側の林道松山前線(調査区外)に住居本体があったものと思われる。

<平面形・規模> 調査区外にあるため不明(以下不明と略)。<主軸方向・床面積>不明。<埋土>不明。<壁>不明。<床>不明。<床面施設>不明。

<カマド> 煙道方位はW=0° - N。本体部の残存状況は不明である。煙道部は上半部が削平されてることと本体部が調査区外にあるために、掘り込み式か削り抜き式かは判然としない。残存部分で長さ56cm、幅26cmを測り、下り勾配で煙出し部へ続いている。煙出し部は42×54cmの楕円形を呈し、深さ39cmを測る。

遺 物

埋土から土師器21gが出土した。



第23図 S I 10堅穴住居跡

(2) 炉跡

S N01炉跡

遺構 (第24図、写真図版14)

<位置・検出状況> B区中央、IVB 1 j グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。平成15年に県教委生涯学習文化課が行った試掘調査のT 1 トレンチで検出した土坑である可能性が高い。検出面は標高69.0~69.1mのIV層上面である。重複する遺構はない。北約5.5mにSK27、東約10.1mにSI04、南西約5mにSI02、西約4.2mにSK86、北西約5.5mにSK28が位置する。

<平面形・規模>開口部は東西約1.24m、南北方向1.00mの楕円形状を呈する。深さ12cmを測る。壁は外傾している。底部は東西方向1.14m、南北方向0.84mを測る。

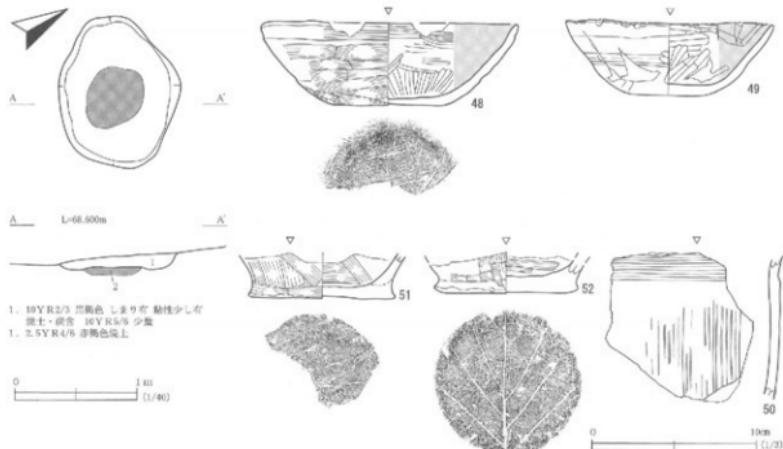
<埋土>黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>IV層面を掘り込み底面としている。中央付近に径56×45cmの楕円形状を呈する赤褐色焼土が形成されている。厚さは6cmを測り、下位のIV層に漸移的に移行する。標高は69.0m前後を測る。

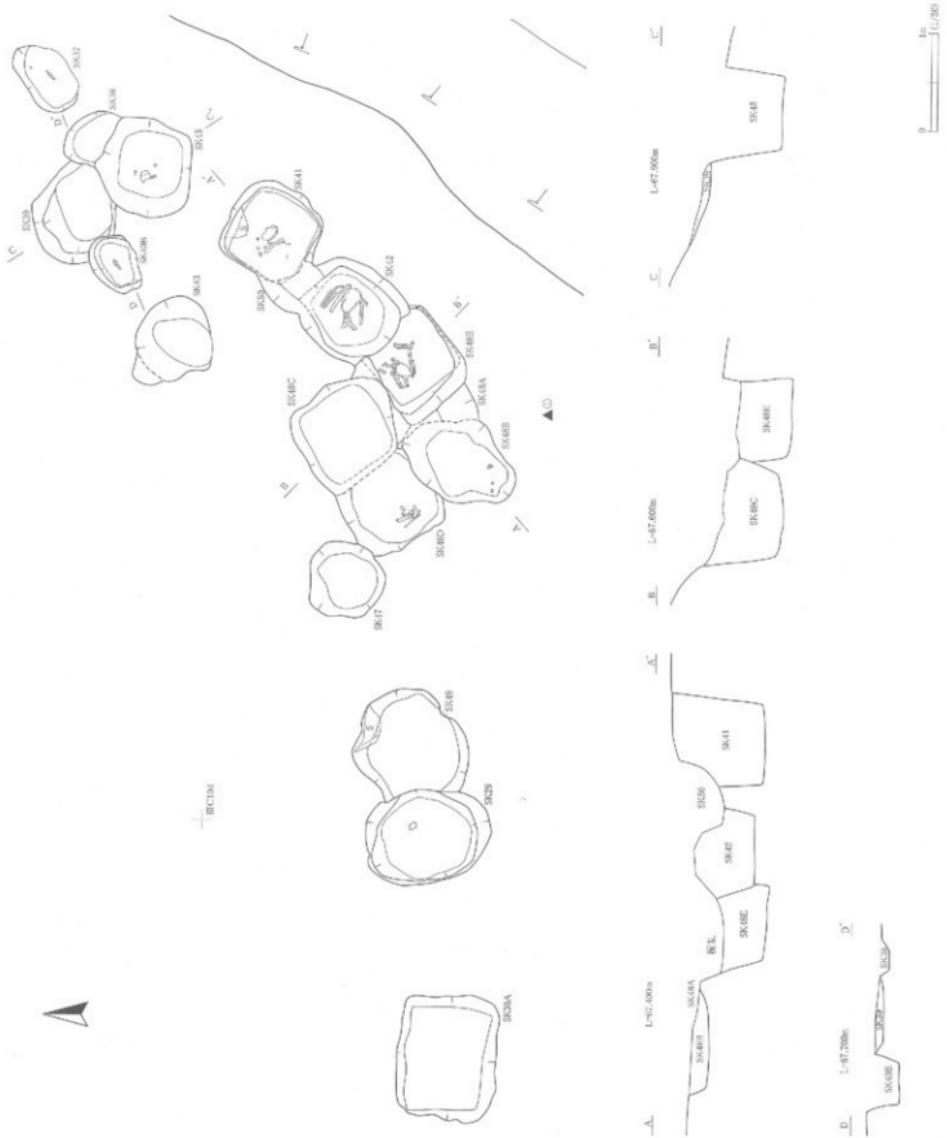
遺物 (第24図、写真図版43)

検出面・埋土から土師器144gが出土した。このうち48・49の土師器壺と50~52の土師器甕を掲載した。

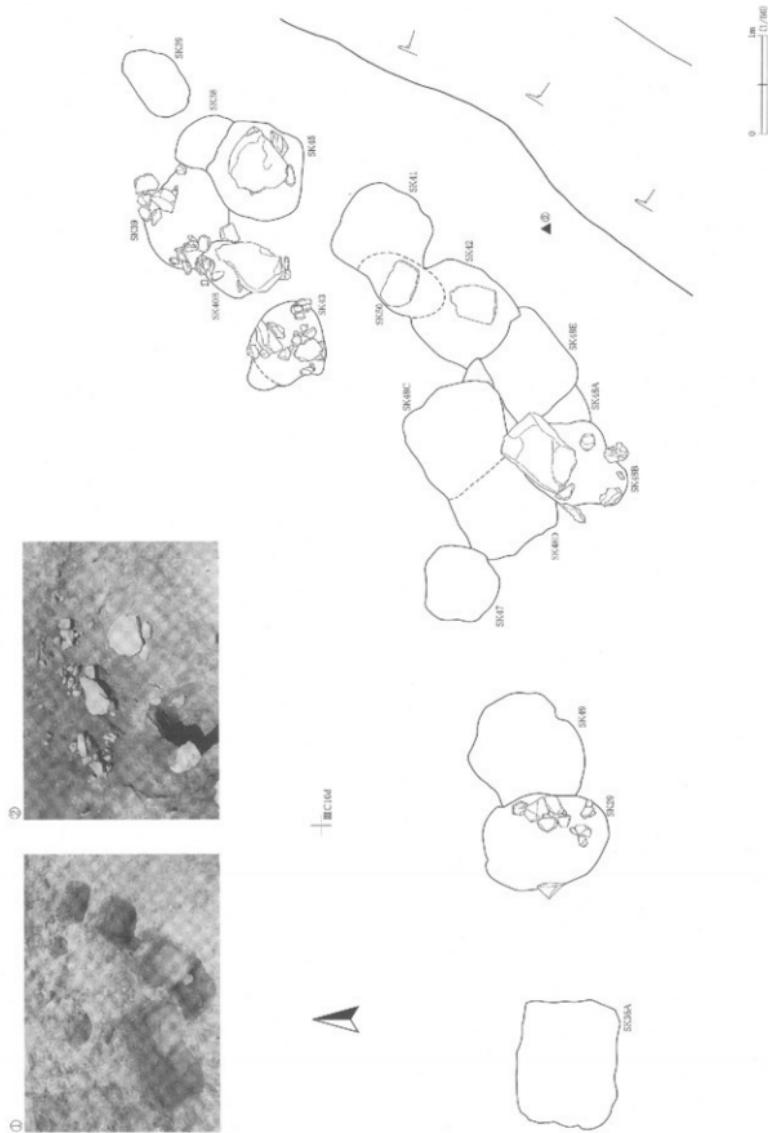
<土師器>器種構成は壺はC・F類各1点、甕は3点出土しているが胴・底部破片のみで分類不能である。壺は外面がヘラナデ調整が施されている。甕は50の胸部破片は外面ハケメ調整、51・52は内外面ヘラナデ調整が施されている。



第24図 S N01炉跡、出土遺物



第25図 近世墓遺構配置図(1)



第26図 近世墓遺構配置図(2)

3 近世の遺構

(1) 墓 墓 墓

B区中央、III C 9 d・10 c・10 d グリッドを中心に18基検出した。この区域は地目が墓地となっていた。元地権者の山田氏に何たところ、江戸時代から明治初期頃の山田家の墓地があったとのことだった。今回の調査に先立ち、墓標等で地表面から認識できる墓に関しては移転を行ったが、場所が分からず移転できなかつた墓もあるとのことだった。

墓壙の周辺は北から南に下る緩斜面を呈するが、畑造成時の削平で斜面下方は崖状を呈している。

S K29・49墓壙

検出当初は単独の墓壙であると判断し精査を開始したが、S K29の東壁部分を精査中に遺構のプランを確認した。周辺を再検出したところ、地山に類似した埋土をもつ墓壙(S K49)を検出した。問題題は新旧関係であるが、S K29の東壁付近を精査中にS K49の埋土を確認していないことから、S K29はS K49より新しいと思われる。

S K29墓壙

遺 構 (第27図、写真図版15)

<位置・検出状況> B区中央、III C 10 c グリッドに位置する。検出面は標高67.2~67.5mのIV層上面である。北東約2mにS K47、東北東約2.6mにS K48D、東南東約3mにS K48A、西約0.8mにS I 04・S K36が位置する。

<重複関係> S K49を切っている。

<平面形・規模>開口部径1.30×0.96mの楕円形状を呈する。深さ1.04mを測る。底部径0.90×0.80mを測る。

<壁>上位が崩落の影響で外反しているが、概ね鉛直気味に立ち上がる。IV層を壁としている。

<埋土>黒褐色土を主体とした単層の人が堆積を呈す。上位に7~26cmの疊を含む。

<底面>概ね平坦であるが、中央付近が周辺より4cm程低くなり、北側では若干段差をもつ。棺桶の据え方が反映されたのだろうか?。IV層を掘り込み底面としている。標高は66.5m付近である。

遺 物 (第27図、写真図版44)

<出土状況>底面から寛永通寶6枚と頭蓋骨の一部が出土した。寛永通寶は頭蓋骨の下から重なって出土した。このうち53~58の寛永通寶を掲載した。

<寛永通寶>右表の通り。

<人骨>頭蓋骨の一部(頭頂部?)であると思われる。

| 古寛永 | 文鏡 | 新寛永 |
|-----|----|-----|
| 3 | 2 | 1 |

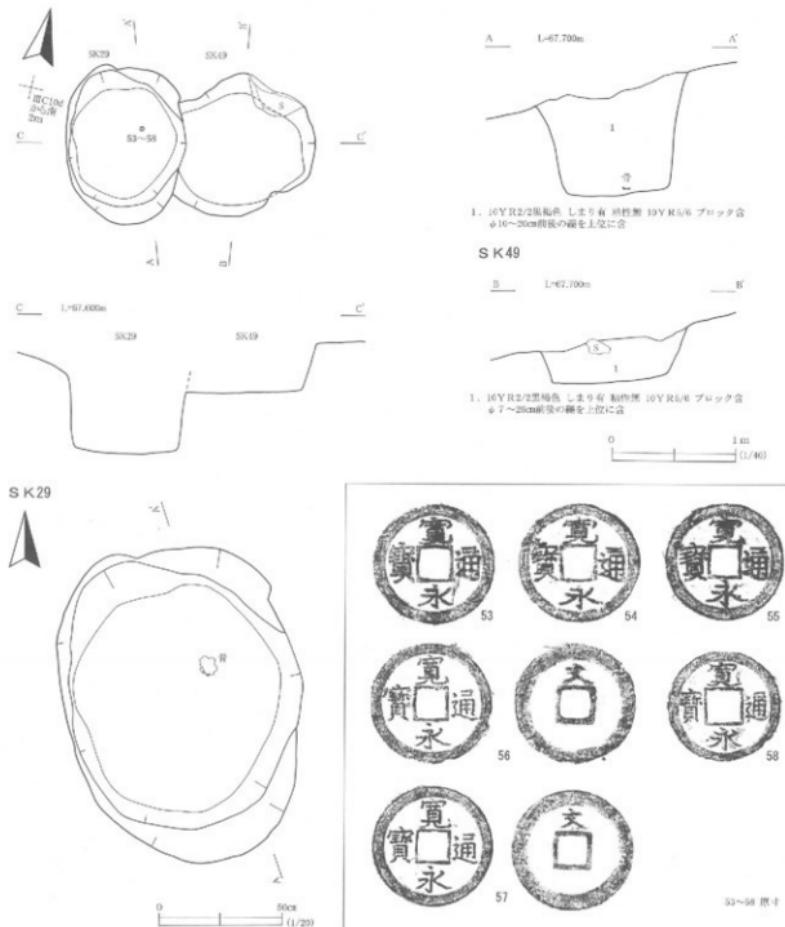
S K49墓壙

遺 構 (第27図、写真図版15)

<位置・検出状況> B区中央、III C 10 d グリッドに位置する。検出面は標高67.2~67.4mのIV層上面である。北東約0.8mにS K47、東約1.4mにS K48D、東南東約2mにS K48Aが位置する。

<重複関係> S K29に切られている。

<平面形・規模>西側をS K29に切られているためはっきりしない。開口部は長軸1.18m残存、短軸1.04m遺存していることから、径1.4×1.2mの楕円形状を呈すると思われる。深さ46cmを測る。



第27図 SK29・49墓塚、出土遺物

<壁>底面から外傾して立ち上がる。底部は長軸0.94m残存、短軸0.92m遺存。IV層を壁としている。
<埋土>黒褐色土を主体とした単層の人为堆積を呈し、上位に10~20cm前後の礫を少量含む。
<底面>南壁に向かうにつれて緩やかに下り、比高差8cmを測る。IV層を掘り込み底面としている。
標高は67.0m付近である。

遺物

出土しなかつた。

S K37墓壙

遺構（第28図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞B区中央、III C 9 e グリッドに位置する。検出面は標高67.3～67.4mのIII～IV層にかけての漸移層で、底面に向かうにつれてIV層に移行する。西南西約0.2mにS K38、西約0.7mにS K39が位置する。重複する遺構はない。

＜平面形・規模＞南東側が斜面の崩落で消失しきりしない。開口部は長軸77cm遺存、短軸48cm残存していることから、長軸80cm前後、短軸60cm前後の橢円形状を呈していたと思われる。深さ14cmを測る。底部は長軸67cm遺存、短軸41cm残存している。

＜壁＞底面から外傾して立ち上がる。上位はIII層からIV層の漸移層、下位はIV層を壁としている。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の人が堆積を呈し、礫を少量含む。また、人骨細片と灰が多く含まれている。

＜底面＞南壁に向かうにつれて若干上る。比高差は最大6cmを測る。IV層を掘り込み底面としている。標高は67.3m前後である。

遺物（第28図、写真図版44）

＜出土状況＞埋土から陶磁器片4g、寛永通寶8枚、金属製品（鉄）66g、人骨片が出土した。このうち59の鉄と差し状に出土した60～64の寛永通寶を掲載した。

＜寛永通寶＞右表の通り。

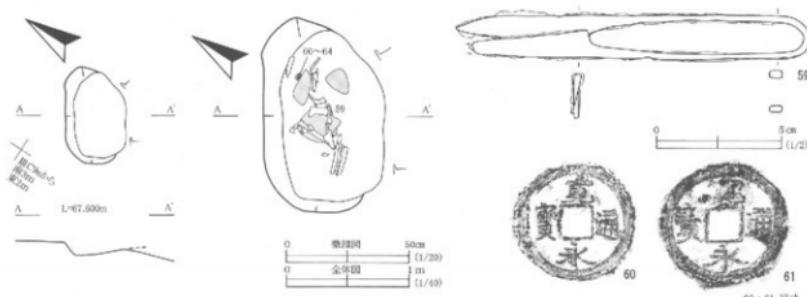
| 百寛永 | 新寛永 | 不明 |
|-----|-----|----|
| 2 | 1 | 4 |

＜鉄＞59は長さ14.4cm、幅2.1cm、厚さ最大3mm、重さ65.78gを測る。

＜人骨＞形状から四肢骨の一部と思われる骨2本、部位不明の骨と細片を検出した。前者は長さ12cm、幅1.5～3.3cmを測る。後者は図化可能な骨は示したが、細片は範囲のみを示した。

まとめ

本遺構は埋土に灰と被熱した骨片・寛永通寶が含まれることから、火葬もしくは再葬の可能性もあると思われる。



第28図 S K37墓壙、出土遺物

S K38墓壙

遺構（第29図、写真図版16）

＜位置・検出状況＞B区中央、III C 9 e グリッドに位置する。検出面は標高67.3～67.4mのIII層からIV層にかけての漸移層で、底面に向かうにつれてIV層に移行する。東北東約0.2mにS K37、西南西約0.8mにS K40Bが位置する。

<重複関係> SK39を切り、SK45に切られる。

<平面形・規模>南側をSK45に切られ、はっきりしない。開口部は長軸70cm遺存、短軸38cm残存していることから、長軸70cm前後の橢円形状を呈していたと思われる。深さ10cmを測る。底部は長軸60cm遺存、短軸33cm残存している。

<壁>底面から外傾して立ち上がる。上位はIII層からIV層の漸移層、下位はIV層を壁としている。

<埋土>暗褐色土を主体とした単層の人為堆積を呈し、礫を少量含む。また、人骨細片と灰が比較的多く含まれる。

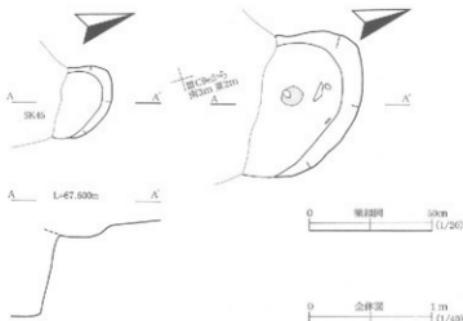
<底面>中央が若干窪むが、概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高67.3m付近を測る。

遺物（写真図版44）

<出土状況>埋土から土師器片9g、鉄釘31g、ガラス20g、人骨が出土した。このうち65・66の釘2点を掲載した。

<釘>65は長さ9cm、釘頭1.2×0.5cmの長方形、断面形は0.5×0.4cmの方形を呈している。66は長さ9.2cm、釘頭1.0×0.5cmの長方形、断面形は0.5×0.4cmの方形を呈している。

<人骨>部位不明の骨と細片を検出した。図化可能な骨は示したが、細片は範囲のみを示した。



第29図 SK38墓壙

SK39墓壙

遺構（第30図、写真図版16）

<位置・検出状況>B区中央、III C 9eグリッドに位置する。検出面は標高67.4~67.6mのIII~IV層にかけての漸移層で、底面に向かうにつれてIV層に移行する。東北東約0.2mにSK37、南西約0.9mにSK43、南南西約1.1mにSK41が位置する。

<重複関係>SK38・40A・40B・45に切られている。

<平面形・規模>上記の遺構に切られているためはっきりしない。開口部は長軸84cm、短軸83cm残存していることから、長軸85cm以上の橢円形状を呈していたと思われる。

深さ21cmを測る。底部は長軸72cm、短軸51cm残存している。

<壁>底面から外傾して立ち上がる。上位はIII~IV層の漸移層、下位はIV層を壁としている。

<埋土>暗褐色土を主体とした単層の人為堆積を呈し、礫を少量含む。また、人骨細片と灰が多く含まれる。

<底面>概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は67.4m付近である。

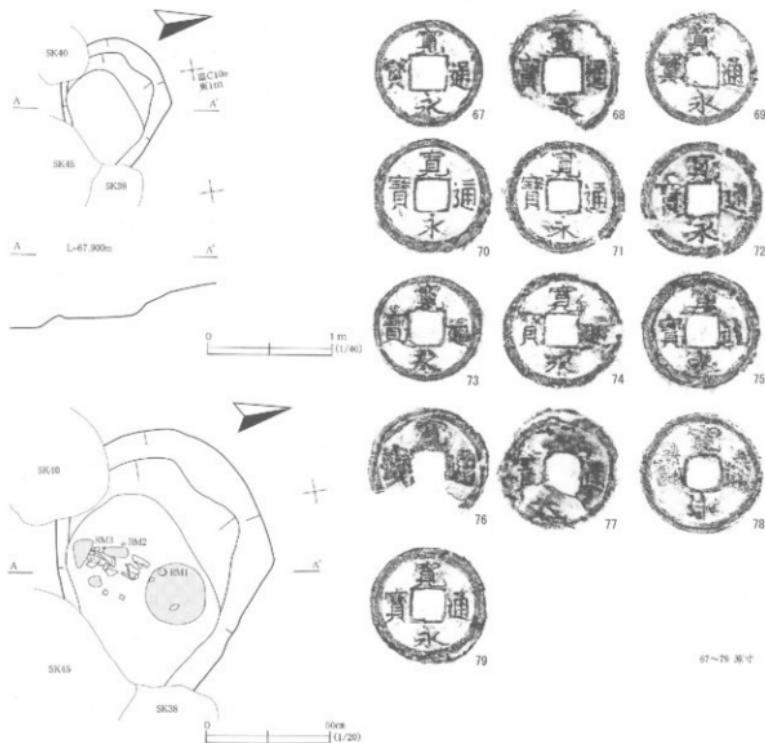
遺物（写真図版44）

<出土状況>埋土から寛永通寶15枚、鉄釘2g、人骨が出土した。このうち67~81の寛永通寶と82の鉄釘を掲載した。

<寛永通寶>右表の通り。

<釘>82は長さ4cm、釘頭0.75×0.4cmの長方形、断面形は0.3×0.3cmの方形を呈している。

| 古寛永 | 新寛永 | 不明 |
|-----|-----|----|
| 1 | 10 | 4 |



第30図 SK39墓壙、出土遺物

<人骨>部位不明の骨と細片を検出した。図化可能な骨は示したが、細片は範囲のみを示した。

まとめ

本遺構は埋土に灰と被熱した骨片・寛永通寶が含まれていることから、現時点では火葬もしくは再葬の可能性もあると思われる。

S K40 A

遺構（第31図、写真図版16）

<位置・検出状況> B区中央、III C 9 e グリッドに位置する。検出面は標高67.5~67.6mのIII~IV層にかけての漸移層で、底面に向かうにつれてIV層に移行する。検出時から長さ約70cm、幅約50cm、厚さ10cm前後の礫が露出していた。南東約0.3mにSK45、南約0.8mにSK41、南西約0.2mにSK43が位置する。野外調査時には単独の遺構として精査を開始したが、室内整理段階で2つの遺構が重複していることを確認したので、新しい方をA、古い方をBとした。

<重複関係> S K40 Bを切っている。

<平面形・規模>断面観察等の状況から見て開口部径1.4mの橢円形状を呈すると思われる。深さ28cmを測る。底部径1.13mを測る。

<壁>底面から外傾して立ち上がる。Ⅲ～IV層の漸移層を壁としている。

<埋土>2層に細分した。2はⅢ層起源の暗褐色土である。骨片を多く含み、3～20cmの礫も含む。

1はⅢ層起源の黒褐色土である。上位を中心に10～50cmの礫を含む。

<底面>南壁に向かうにつれて若干下る。比高差は最大14cmを測る。Ⅲ～IV層の漸移層を掘り込み底面としている。標高は67.3～67.4m付近である。

遺 物 (第31図、写真図版44)

S K40 Bに一括記載。

S K40 B

遺 構 (第31図、写真図版16)

<位置・検出状況> S K40 Aと同じ。

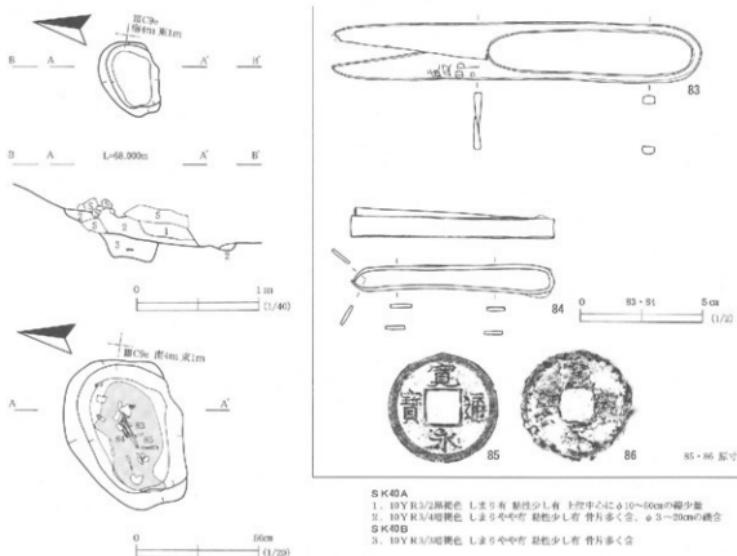
<重複関係> S K40 Aに切られている。

<平面形・規模>開口部径64×48cm橢円形状を呈する。深さ20cmを測る。底部径48×28cmを測る。

<壁>底面から外傾して立ち上がる。上位はⅢ～IV層の漸移層、下位はIV層を壁としている。

<埋土>3はⅢ層起源の暗褐色土である。骨片を多く含む。

<底面>凹凸である。また、南壁に向かうにつれて若干下る。比高差は最大5cmを測る。IV層を掘り



第31図 S K40墓壙、出土遺物

込み底面としている。標高は67.2~67.3m付近である。

遺物 (第31図、写真図版44)

<出土状況>埋土から寛永通寶3枚、金属製品(毛抜・鉄・釘)77.71gが出土した。このうち83の鉄、84の毛抜、85~87の寛永通寶と88~91の鉄釘を掲載した。

<鉄>83は長さ15.0cm、幅2.4cm、厚さ2mm、重さ30.57gを測る。「盛町?」と刻まれている。

<毛抜>84は長さ8.2cm、幅7.5cm、厚さ1.25mm、重さ11.99gを測る。

| 新寛永 | 不明 |
|-----|----|
| 2 | 1 |

<寛永通寶>右表の通り。

<釘>88は長さ5cm、釘頭0.9×0.5cmの長方形、断面形は0.4×0.4cmの方形を呈している。89は長さ4.9cm、釘頭0.9×0.45cmの長方形、断面形は0.4×0.3cmの方形を呈している。90は長さ4.8cm、釘頭0.8×0.4cmの長方形、断面形は0.4×0.4cmの方形を呈している。91は長さ4.9cm、釘頭0.8×0.5cmの長方形、断面形は0.6×0.4cmの方形を呈している。

<人骨>部位不明の骨と細片を検出した。図化可能な骨は示したが、細片は範囲のみを示した。

まとめ

本遺構は埋土中に灰と被熱した骨片・寛永通寶が含まれていることから、現時点では火葬もしくは再葬の可能性もあると思われる。

S K41墓壙

遺構 (第32図、写真図版16)

<位置・検出状況>B区中央、III C10e グリッドに位置する。検出面は標高67.2~67.3mのIV層上面である。北約0.6mにSK40A・B、北北東約0.5mにSK45、北西約0.5mにSK43が位置する。

<重複関係>SK50に切られている。重複はないが南西約0.2mにSK42が接する。

<平面形・規模>開口部0.98×0.93mの隅丸方形を呈する。深さ90cmを測る(底面標高66.3m付近)。底部0.79×0.76mを測る。

<壁>底面から鉛直に立ち上がる。IV層を壁としている。北壁中位では約40cm程の礫が露出している。

<埋土>8層に細分した。15・16層はIV層起源の褐色土を主体とした掘り方埋土である。16層は1~10cmの礫を含んでいる。14層は棺桶の天井が崩落し、上方から流入したIV層起源のにぶい黄褐色土である。9~13層は棺桶が崩落した際に流入した掘り方埋土起源のにぶい黄褐色系土である。なお、遺物の大半と人骨が14層下位から出土している。15・16層が崩落を免れた埴片埋土である点を勘案すると、14層の範囲は棺桶の形状・規模を反映されたものと思われる。状況から、棺桶は長さ50cm前後であると思われる。

<底面>概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。

遺物 (第33・34図、写真図版45・46)

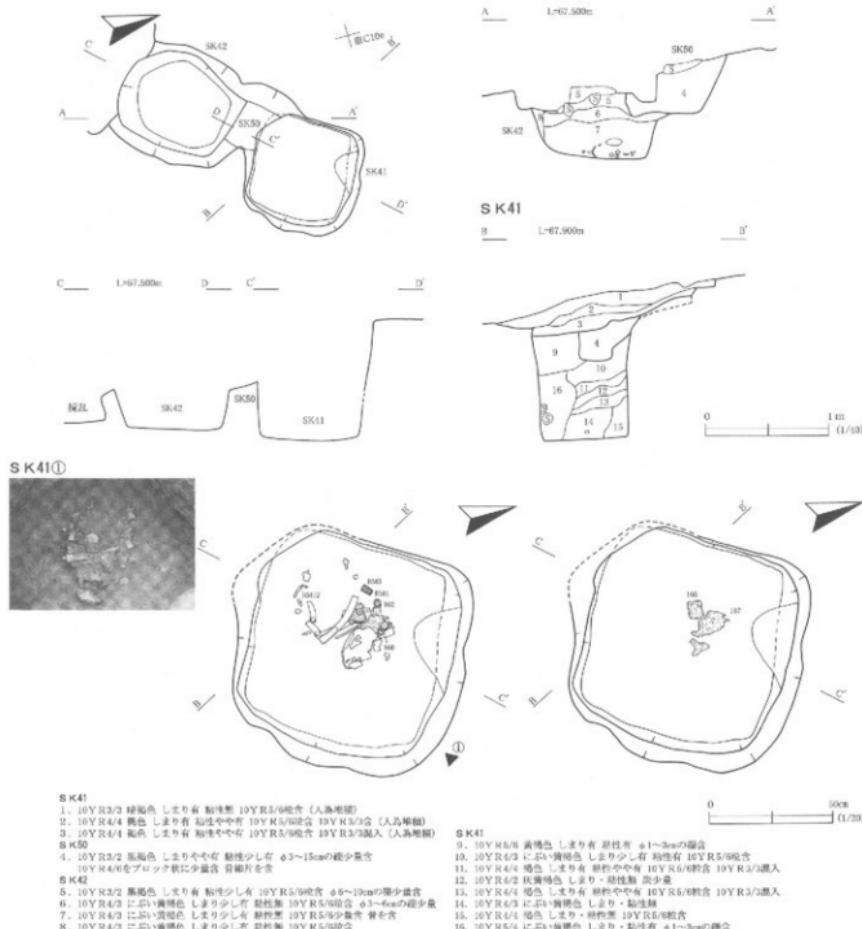
<出土状況>埋土から寛永通寶94枚、金属製品(煙管・鉄)159g、木製品(棺材)33gと人骨が出土した。大半が14層下位から出土している。このうち92の煙管雁首、93~162の寛永通寶、163~165の鉄釘、166・167の棺材を掲載した。

<煙管雁首>92は長さ4.15cm、火皿径2.15cm、身径0.9~1.1cmを測る。火皿の大きさの割には油返しの湾曲は緩やかである。

| 古寛永 | 文錢 | 新寛永 | 21波 | 11波 | 鉄釘 |
|-----|----|-----|-----|-----|----|
| 9 | 2 | 38 | 3 | 18 | 27 |

<寛永通寶>右表の通り。

<鉄>163は長さ3.7cm、釘頭0.6×0.4cmの長方形、断面形は0.5×0.3cmの長方形を呈している。164は鉛や棺材の一部と思われる木質が付着しているために詳細は不明である。長さは4.4cmを測る。165

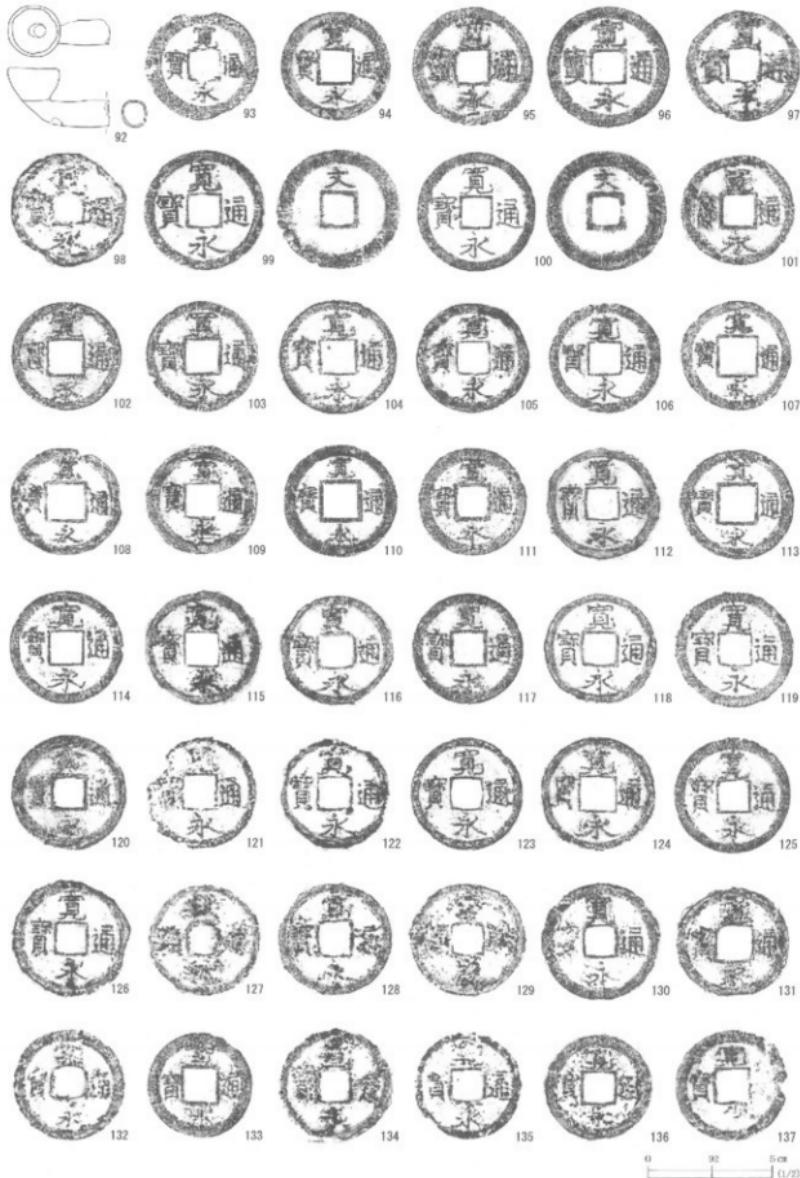


第32図 S K41・42・50墓壙(1)

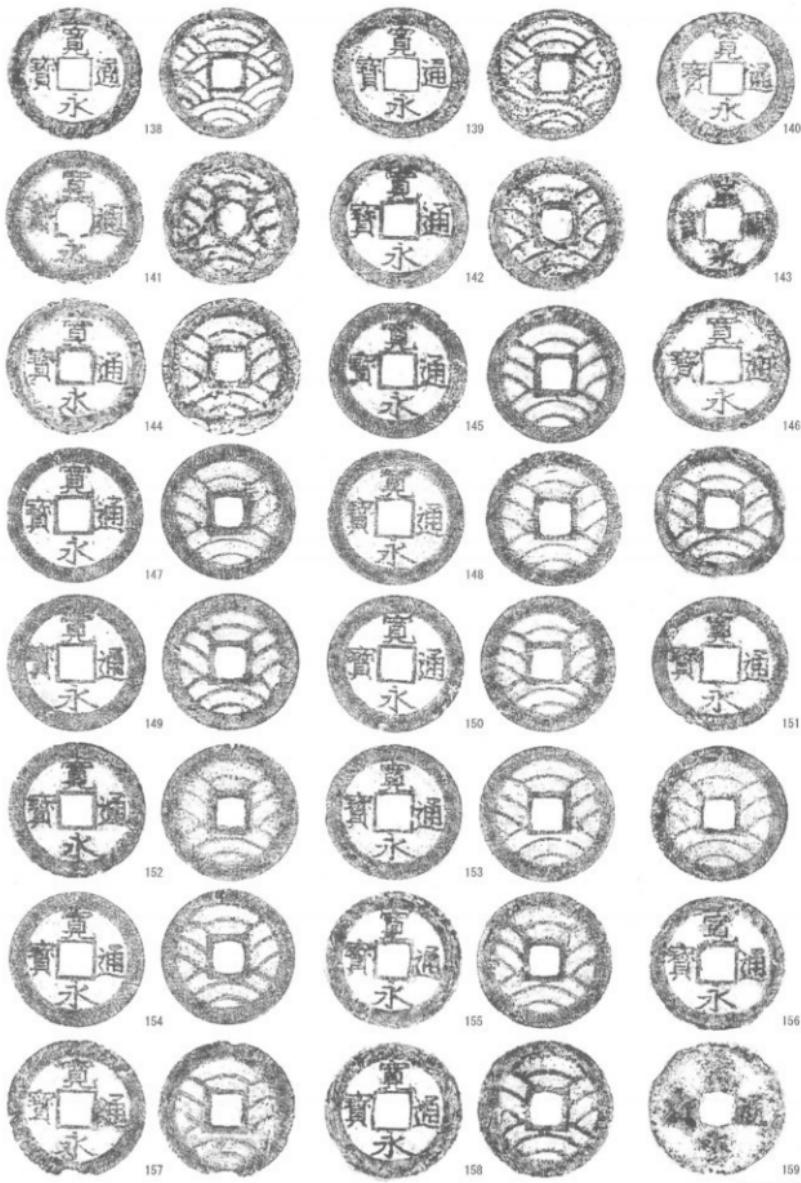
は長さ3.2cm、釘頭0.8×0.6cmの長方形、断面形は0.6×0.3cmの長方形を呈している。

<棺材>166は長さ7.54cm、幅6cm、厚さ0.65cm、167は長さ7.56cm、幅4.81cm、厚さ2.1cmの板状を呈している。ともに墓壙中央の底面直上から出土した。出土位置から棺桶の底板であると思われる。また、両者とも202と類似しているので、樹種はスギである可能性が高い。

<人骨>頭蓋骨の一部と四肢骨、部位不明の骨が出土した。頭蓋骨は後頭部から頸部が残存し、頸部



第33図 S K41墓出土遺物(1)



第34図 S K41墓壙出土遺物(2)

— 45 —

には骨がついていた。四肢骨としたものは長さ23cm、幅3cm、厚さ2.1cmを測る。

まとめ

本遺構は骨の出土状況から被葬者は座葬、棺桶は埋土の堆積状況から長さ50cm程の座棺であったと思われる。

S K42墓壙

遺構（第32・35図、写真図版17）

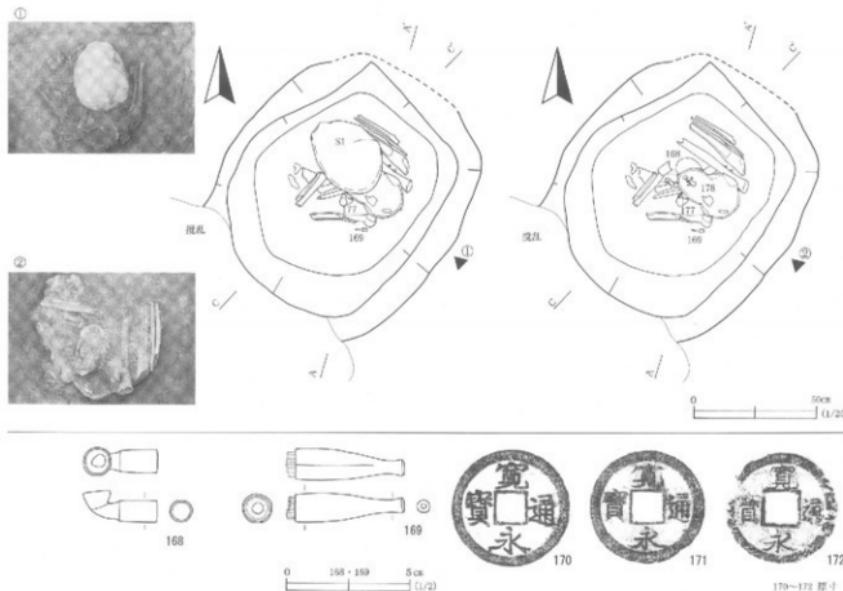
＜位置・検出状況＞B区中央、III C10 d グリッドに位置する。検出面は標高66.8～67.0mのIV層上面である。検出時に長さ46cm、幅34cm、厚さ10cmを測る扁平な石が墓壙のプラン中央付近で出土した。北約1mにSK43、西約0.5mにSK48Cが位置する。

＜重複関係＞SK48Eを切り、SK50に切られている。重複はしていないが北東約0.2mにSK41が近接する。

＜平面形・規模＞開口部0.94×0.92mの隅丸方形形状を呈する。深さ50cmを測る。底部0.77×0.61mを測る。

＜壁＞底面からやや外傾して立ち上がる。IV層を壁としている。

＜埋土＞4層に細分した。8層はIV層起源のにぶい黄褐色土を主体とした掘り方埋土である。7層は棺桶の天井が崩落し、上方から流入したIV層起源のにぶい黄褐色土である。5・6層は棺桶が崩落した際に流入した掘り方埋土起源のにぶい黄褐色土系上である。遺物の大半と人骨が7層下位から出土し



第35図 SK42墓壙(2)、出土遺物

ている。また、遺物・骨の上位には径33×24cmの円礎が出土した。これは出土状況から見て棺桶の崩落時に人骨・埋土上に崩れ落ちた蓋石と思われる。他の墓壙の状況を勘案すると、7層の範囲は棺桶の形状・規模が反映されたものと思われる。棺桶は長さ50cm前後の方形を呈していたと推測される。

<底面>概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は66.4m前後を測る。

遺物（第35図、写真図版46）

<出土状況>埋土から土師器10g、陶磁器7g、寛永通寶38枚、金属製品(煙管)106g、木製品(棺材)2gと人骨が出土した。遺物の大半は7層下位から出土した。このうち168の煙管雁首、169の煙管吸口、170～178の寛永通寶、179の棺材を掲載した。

<煙管雁首>168は長さ3cm、火皿径1.1cm、身径0.8～0.9cmを測る。火皿が小さく油返しの湾曲は緩やかである。また、羅字との接続部が太くなっている。

<煙管吸口>169は長さ4.4cm、身径0.5～1.25cmを測る。羅字が一部残存している。口付が玉状に膨らむ。

<寛永通寶>右表の通り。

<棺材>179は長さ2.56cm、幅2.67cm、厚さ0.20cmの板状を呈している。

| 古窓水 | 新窓水 | 既設 |
|-----|-----|----|
| 1 | 2 | 36 |

墓壙中央の底面直上から出土した。出土位置から棺桶の底板であると思われる。202と類似しているので、樹種はスギである可能性が高い。

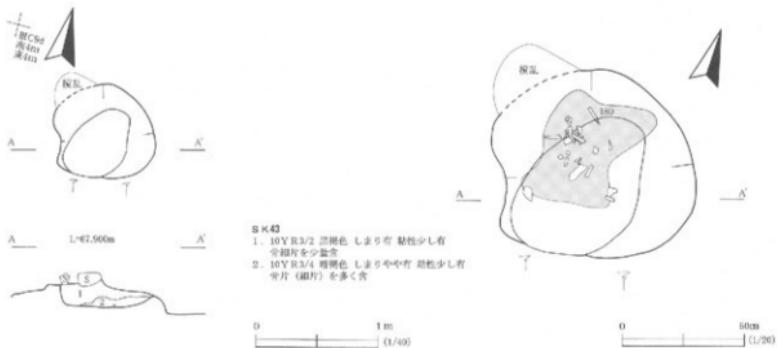
<人骨>前述の円礎に押しつぶされた状態で検出されたが、頭蓋骨・四肢骨の残存状況は良好である。それぞれの位置関係は左大腿骨と左上腕骨は頭蓋骨北側でバラバラに検出された。しかし、右大腿骨と右上腕骨は上から頭蓋骨、上腕骨、大腿骨の順に重なり、右大腿骨は頭蓋骨の長軸に対して直角に、右上腕骨は斜め45度に検出され、埋葬姿勢をある程度復元できると思われる。可能性として座葬が一番高いと思われる。

まとめ

本遺構は骨の出土状況から被葬者は座葬の可能性が高い。棺桶は埋土の堆積状況から長さ50cm前後の座棺であると推測される。

SK43墓壙

遺構（第36図、写真図版17・18）



第36図 SK43墓壙

<位置・検出状況> B区中央、III C 9 c グリッドに位置する。検出面は標高67.5~67.6mのIV層上面である。北東約0.2mにSK40A・B、東北東約0.8mにSK45、南東約0.6mにSK41、南南東約0.7mにSK50、南約1mにSK42、南南西約1.1mにSK48Cが位置する。重複する遺構はない。

<平面形・規模> 北側を擾乱、南側を斜面の崩落で消失し、はっきりしない。開口部は長軸77cm残存、短軸77cm遺存していることから、長軸80cm前後の楕円形状を呈していたと思われる。深さ19cmを測る。底部は長軸60cm残存、短軸50cm遺存している。

<壁>概ね底面から外傾しているが、西壁は鉛直気味に立ち上がる。IV層を境としている。

<埋土> 2層に細分した。2層は骨を多く含む暗褐色土である。1層は骨を少量含む黒褐色土である。

<底面>概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は67.4m付近である。

遺物（写真図版47）

<出土状況> 墓上から鉄釘27gと人骨が出土した。このうち180・181の鉄釘を掲載した。

<釘> 180は長さ7.3cm、釘頭1.2×0.7cmの長方形、断面形は0.5×0.5cmの方形を呈している。181は長さ7.2cm、釘頭1.3×0.65cmの長方形、断面形は0.5×0.45cmの長方形を呈している。いずれも「くの字」状に折れ曲がっている。

<人骨> 部位不明の骨と細片を検出した。図化可能な骨は示したが、細片は範囲のみを示した。

SK45墓壙

遺構（第37図、写真図版18）

<位置・検出状況> B区中央、III C 9 e グリッドに位置する。検出面は標高67.2~67.5mのIV層上面である。検出時から長さ64cm、幅62cm、厚さ14cmを測る扁平な石が露頭していた。南南西約0.5mにSK41、西南西約0.8mにSK43、西北西約0.3mにSK40Bが位置する。

<重複関係> 北側でSK38・39と重複関係にあり、両者を切っている。

<平面形・規模> 開口部1.00×0.98mの隅丸方形を呈する。深さ80cmを測る。底部0.66×0.63mを測る。

<壁> 概ね底面から外傾しているが、西壁は鉛直気味に立ち上がる。IV層を境としている。

<埋土> 3層に細分した。2・3層はIV層起源の褐色土にIII層起源の暗褐色土が混入した掘り方埋土である。また、2層は1層との層界を中心にして3~10cmの疊を含んでいる。1層は棺桶の天井が崩落し、上方から流入したIII層起源の暗褐色土である。なお、遺物の大半と人骨が1層下位から出土している。2・3層の崩落が微弱な点を勘案すると、1層の範囲は棺桶の形状・規模が反映されたものと思われる。よって、棺桶は長さ60cm前後の方形を呈していた可能性が想定される。

<底面> 概ね平坦である。IV層を掘りこみ底面としている。標高は66.7~66.8m前後を測る。

遺物（第37図、写真図版46）

<出土状況> 墓上から土師器47g、石器15g、寛永通寶20枚、木製品29gと人骨が出土した。遺物の大半は1層下位から出土している。このうち182~201の寛永通寶、202の棺材1点を掲載した。

<寛永通寶> 右表の通り。

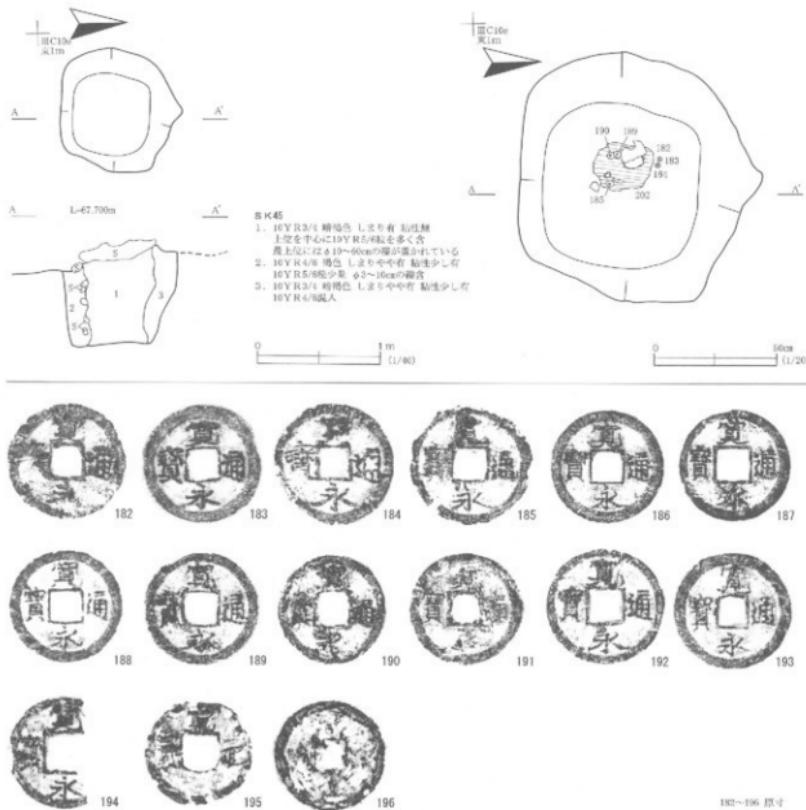
| 占寛永 | 新寛永 | 鉄一文 | 鉄銭 | 不明 |
|-----|-----|-----|----|----|
| 3 | 9 | 2 | 1 | 5 |

<棺材> 202は長さ9.9cm、幅4.5cm、厚さ0.9cmの板状を呈している。底面直上から出土している。出土位置から棺桶の底板であると思われる。樹種同定の結果、スギであることが判明した（VI.3参照）。

<人骨> 頭蓋骨の一部と部位不明の骨片が出土した。

まとめ

本遺構は墓域北側から密集して検出された墓壙の中で一番新しい。そのため、他の墓壙と比べて墓



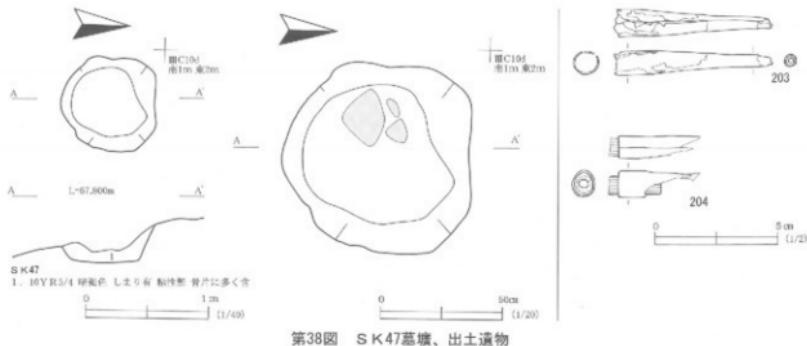
第37図 S K45墓壙、出土遺物

墳本体の残存状況は良好で、墓壙の形状・規模をおおよそ把握することができた。棺桶は遺物出土状況と断面観察から、長さ60cm前後の座棺の可能性が想定される。被葬者の埋葬姿勢は人骨の残存状況が不良のため不明である。

S K47墓壙

遺構（第38図、写真図版19）

<位置・検出状況> B区中央、III C10 d グリッドに位置する。検出面は標高67.4~67.6mのIV層上面である。東約0.5mにSK48C、南東約0.9mにSK48B、南西約0.8mにSK49が位置する。
<重複関係> SK48Dを切っている。



第38図 SK47墓壙、出土遺物

<平面形・規模>開口部径83×75cmの円形状を呈する。深さ30cmを測る。底部径62×56cmを測る。

<壁>底面から外傾して立ち上がる。IV層を壁としている。

<埋土>III層起源の暗褐色土を主体とした人為堆積を呈する。骨片を多く含んでいる。

<底面>概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は67.3m付近である。

遺 物 (第38図、写真図版47)

<出土状況>埋土から金属製品(煙管2点)7gが出土した。このうち203・204の煙管吸口を掲載した。

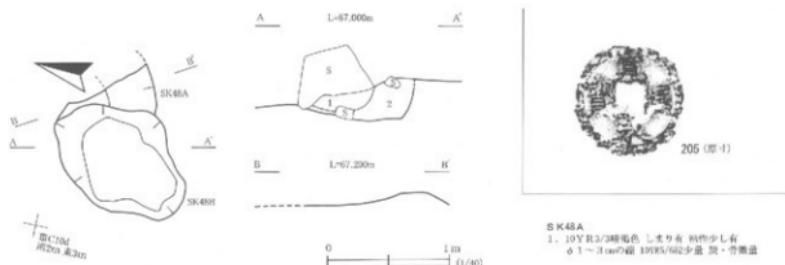
<煙管吸口>203は長さ6.3cm、身径0.5~1.1cmを測る。表面の剥落が著しい。204は長さ3.3cm、身径1.1cmを測る。羅字の一部が残存している。

<人骨>部位不明の骨と細片を検出した。図化できなかった細片の範囲を示した。

S K48A墓壙

遺 構 (第39図、写真図版19)

<位置・検出状況>B区中央、III C10 dグリッドに位置する。検出面は標高66.9~67.2mのIV層上面である。長さ80cm、幅50cm、厚さ48cmを測る石が、検出時に墓壙のプラン中央付近で検出した。この石は当初S K48Bに伴うものと考えていたが、断面観察時にS K48Bを切る木遺構を認識した。しかし、周辺の搅乱で大半が消失しており、僅かに北東壁の一部が残存していたのを確認した。西北西約

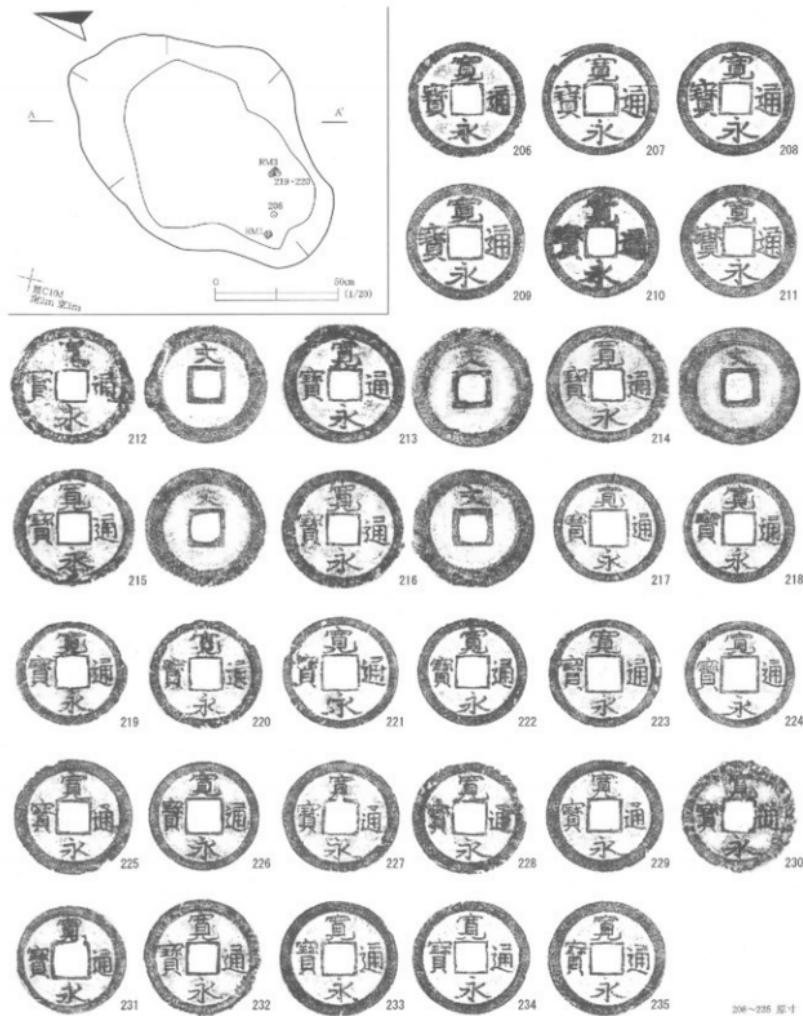


第39図 SK48A・B墓壙(1)、出土遺物

2mにSK49、北西約1mにSK47が位置する。

<重複関係> SK48B・Eを切っている。

<平面形・規模>攪乱の影響で遺構の大半を消失しているためはつきりしない。開口部は長軸90cm、短軸10cm残存していることから、長軸90cm以上であったと思われる。深さ20cmを測る。



第40図 SK48B墓壙、出土遺物

206~236 幕末

底部は長軸48cm、短軸10cm残存している。

<壁>底面からやや外傾して立ち上がる。IV層と他遺構の埋土を掘り込み壁としている。

<埋土>III層起源の暗褐色土を主体とした人為堆積を呈する。骨片を含む。

<底面>概ね平坦である。IV層とSK48Bの埋土を掘り込み底面としている。標高は66.9mを測る。

遺物（第39図、写真図版47）

<出土状況>埋土から寛永通寶1枚(205)が出土し、掲載した。

<寛永通寶>205は新寛永通寶である。

SK48B墓壙

遺構（第39・40図、写真図版19）

<位置・検出状況>B区中央、III C 10 d グリッドに位置する。検出面は標高66.9~67.2mのIV層上面である。西北西約2mにSK49、北西約1mにSK47が位置する。

<重複関係>SK48Dを切り、SK48Aに切られている。

<平面形・規模>開口部径1.23×0.85mの不整な楕円形状を呈する。深さ32cmを測る。底部径0.88×0.59mを測る。

<壁>東壁は鉛直気味に、それ以外は底面から外傾して立ち上がる。

<埋土>III層起源の暗褐色土を主体とした人為堆積を呈する。

<底面>北側から南側にかけて緩やかに傾斜している。比高差10cmを測る。IV層を掘り込み底面としている。標高は66.8m付近である。

遺物（第40図、写真図版47）

<出土状況>埋土から寛永通寶30枚が出土した。このうち206~235の寛永通寶を掲載した。

<寛永通寶>右表の通り。

| 吉寛永 | 文政 | 新寛永 |
|-----|----|-----|
| 6 | 5 | 19 |

SK48C墓壙

遺構（第41図、写真図版19）

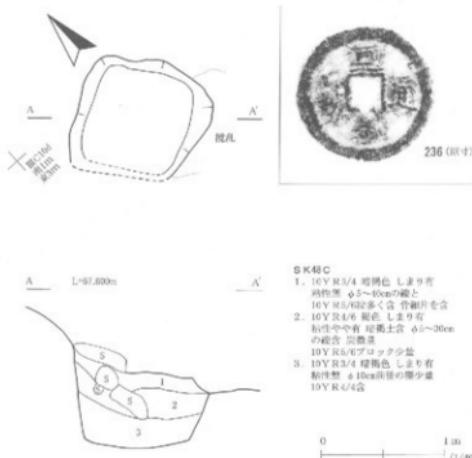
<位置・検出状況>B区中央、III C 10 d

グリッドに位置する。検出面は標高66.8~67.1mのIV層上面である。検出時から長さ約40cm、厚さ13cm前後の石が露出していた。西北西約2mにSK49、北西約1mにSK47が位置する。

<重複関係>SK47D・Eを切っている。

<平面形・規模>攪乱の影響で西壁の大半を消失し、はっきりしない。開口部は長軸1.04m遺存、短軸0.96m残存していることから、一辺1m前後の隅丸方形であったと思われる。深さ83cmを測る。底部は長軸0.82m遺存、短軸0.81m残存している。

<壁>底面から外傾して立ち上がる。



第41図 SK48C墓壙、出土遺物

<埋土> 3層に細分した。3層は棺桶が崩落する過程で流入したⅢ層起源の暗褐色土である。掘り方崩落土起源の褐色土も含まれる。2層は掘り方の崩壊土を起源とする褐色土である。長さ5~30cm前後の礫を含む。1層はⅢ層起源の暗褐色土を主体とした人為堆積である。長さ5~40cmの礫を含む。

<底面> 中央が若干窪む。IV層を掘り込み底面としている。標高は66.3m付近を測る。

遺物 (写真図版48)

<出土状況> 埋土から寛永通寶1枚、鉄釘25.04g、陶磁器3gが出土した。このうち236の新寛永通寶を掲載した。

S K48D墓壙

遺構 (第42図、写真図版19・20)

<位置・検出状況> B区中央、Ⅲ C10dグリッドに位置する。検出面は標高67.5~67.7mのIV層上面である。埋土の大半は搅乱によって消失。西北西約2mにSK49、北西約1mにSK47が位置する。

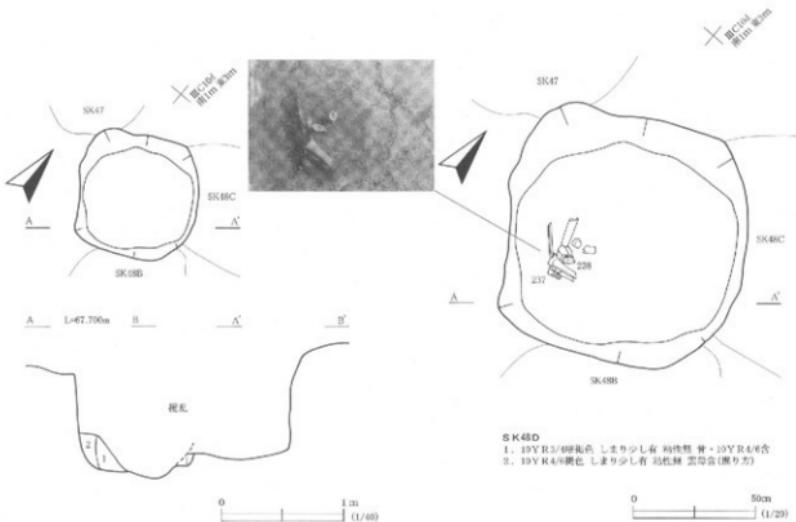
<重複関係> SK47・48B・48Cに切られている。

<平面形・規模> 開口部径1.00×0.96mの円形状を呈する。深さ76cmを測る。底部径0.90×0.83mを測る。

<壁> 底面から鉛直に立ち上がる。IV層を壁としている。

<埋土> 2層に細分した。大半が搅乱によって消失している。2層はIV層起源の褐色土を主体とした塊片である。1層は棺桶の天井が崩落し、上方から流入したⅢ層起源の暗褐色土である。

<底面> 概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。一部搅乱によって消失した部分もある。標高は66.5m付近を測る。



第42図 SK48D墓壙

遺物（第42図、写真図版48）

＜出土状況＞埋土から寛永通寶72g、鉄釘17g、木製品1gと人骨が出土した。このうち237の寛永通寶、238の棺材を掲載した。

＜寛永通寶＞銅銭主体で一部鉄錢が含まれており、24枚程を数える。

＜棺材＞238は長さ4.95cm、幅4.55cm、厚さ0.39cmの板状を呈している。墓壙の底面直上から出土している。棺桶の底板と思われる。202に類似しているので、樹種はスギの可能性が高い。

＜人骨＞四肢骨の一部と思われる骨5点と部位不明の骨を検出した。なかでも長さ15cm、幅3cm、厚さ2.1cmと、長さ25cm、幅3cm、厚さ5cmを測る大腿骨は直立した状態で確認した。

まとめ

本遺構は骨の出土状況から被葬者は贈券の可能性を考えたが、情報量は少なく確証はない。棺桶は埋土の堆積状況等から長さ50~60cm前後の円形を呈していた可能性がある。

SK48E墓壙

遺構（第43図、写真図版20）

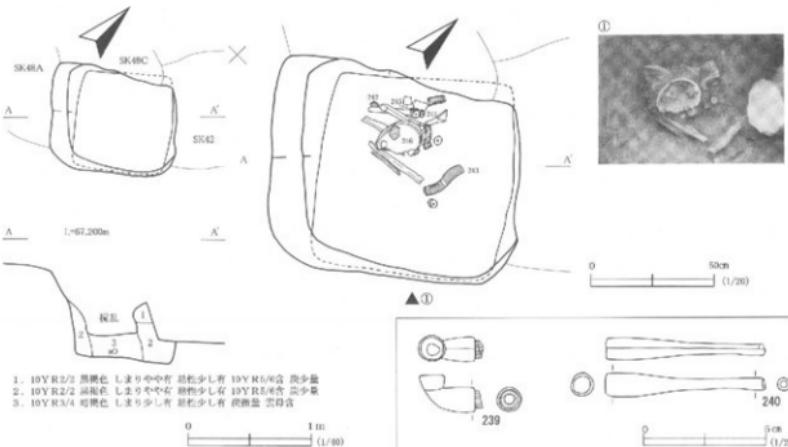
＜位置・検出状況＞B区中央、III C 10 d グリッドに位置する。検出面は標高66.7~66.9mのIV層上面である。中央付近に搅乱があり、埋土中位にまで及んでいる。西北西約2mにSK49、北西約1mにSK47が位置する。

＜重複関係＞SK42・48A・48Cに切られている。

＜平面形・規模＞開口部1.02×0.80mの長方形を呈する。深さ65cmを測る。底部0.80×0.78mを測る。

＜壁＞下半は鉛直気味に、上半は外傾気味に立ち上がる。IV層を掘り込み壁としている。

＜埋土＞3層に細分した。3層は棺桶が崩落する過程で流入したIII層起源の暗褐色土である。2層はIII層起源の黒褐色土がIV層起源の黄褐色土が含まれた掘り方埋土である。1層はIII層起源の黒褐色土



第43図 SK48E墓壙、出土遺物

にIV層起源の黄褐色土が含まれた掘り片埋土である。

<底面>概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は66.2m付近を測る。

遺 物 (第43図、写真図版48)

<出土状況>壠土から寛永通寶516g、煙管7g、鉄釘118g、木製品20g、陶磁器10gと人骨が出土した。このうち239の煙管雁首、240の煙管吸口、241～245の寛永通寶、246・247の棺材を掲載した。

<煙管雁首>239は長さ4.5cm、火皿径1.1cm、身径0.8～1.0cmを測る。火皿が小さく油返しの湾曲は緩やかである。羅字が残存している。

<煙管吸口>240は長さ6.5cm、身径0.4～0.95cmを測る。口付が玉状に膨らみ、羅字が残存している。

<寛永通寶>サシ状に出土した。すべて鉄錢で、約200枚を数える。個別に分離せずサシの写真掲載・重量計測のみとした。

<棺材>246は長さ7.15cm、幅1.58cm、厚さ1.04cm、247は長さ7.21cm、幅4.98cm、厚さ0.68cmの板状を呈している。底面直上から出土している。出土位置から棺桶の部材(底?)であると思われる。

<人骨>棺桶の崩落時に押しつぶされた状態で検出されたが、頭蓋骨・四肢骨の残存状況は良好である。それぞれの位置関係は頭蓋骨に四肢骨があり、四肢骨は上から概ね上腕骨・大腿骨の順に重なり、埋葬姿勢を復元できると思われる。座葬の可能性が高いと思われる。

S K50墓壙

遺 構 (第44図)

<位置・検出状況>B区中央、III C10cグリッドに位置する。検出面は標高66.9～67.2mのIV層上面である。検出時に長さ47cm、幅30cm、厚さ8cmを測る扁平な石を墓壙のプラン中央付近で確認している。北東約1.5mにSK40B、西南西約1mにSK48C、北北西約0.7mにSK43が位置する。

<重複関係>SK41・42を切っている。

<平面形・規模>本遺構の認識が遅れたため北西・南東壁を消失し、はつきりしない。開口部は長軸82cm残存、短軸58cm遺存することから、長軸80cm前後の橢円形状を呈すると思われる。深さ44cmを測る。底部は長軸62cm残存、短軸38cm遺存している。

<壁>概ね底面から外傾しているが、南壁は鉛直気味に立ち上がる。IV層を壁としている。

<埋土>III層起源の暗褐色土の単層である。IV層起源の褐色ブロックと3～15cmの礫と骨片が含まれている。

<底面>概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は66.7m付近を測る。

遺 物 (第44図、写真図版48)

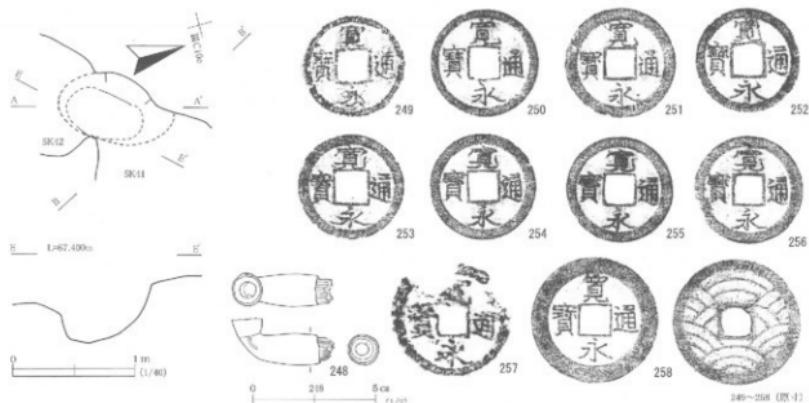
<出土状況>壙土・攪乱から寛永通寶11枚、金属製品(煙管・釘)6gと人骨が出土した。このうち248の煙管雁首、249～259の寛永通寶、260の鉄釘を掲載した。

<煙管雁首>248は長さ4cm、火皿径1.2cm、身径0.85～1.25cmを測る。火皿が小さく油返しの湾曲は緩やかである。

<寛永通寶>右表の通り。

<釘>260は長さ4cm、釘頭0.8×0.4cmの長方形、断面形状は0.3×0.3cmの方形を呈している。

| 古見水 | 新見水 | 21度 |
|-----|-----|-----|
| 1 | 9 | 1 |



第44図 SK50墓壙、出土遺物

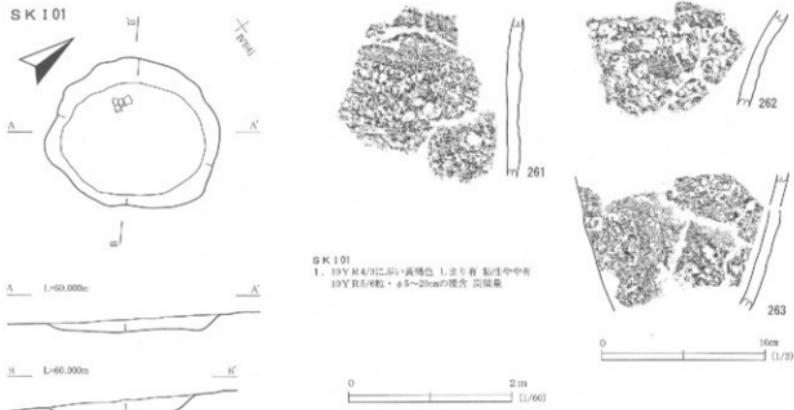
4 その他の遺構

(1) 竪穴状遺構

SK I 01 竪穴状遺構

遺構 (第45図、写真図版21)

<位置・検出状況> B区中央、IV B 4 i + 4 j グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に



第45図 SK I 01 竪穴状遺構、出土遺物

どる緩斜面を呈する。検出面は標高65.6～65.8mのIV層上面でにぶい黄褐色土のプランを確認した。重複する遺構はない。北北西約4.7mにS D23、東約1.6mにSK I 03A、南約4mにSK14、西約3.5mにSD18が位置する。

＜平面形・規模＞開口部は長軸2.14m、短軸1.78mの橢円形状を呈し、深さは18cmを測る。底部は長軸1.78m、短軸1.36mを測る。

＜主軸方向・床面積＞長軸を基準とした主軸方向はN-37°-E、床面積は1.89m²を測る。

＜埋土＞にぶい黄褐色土單層の自然堆積を呈する。

＜壁＞おおむねIV層を壁としている。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北東壁は13～19cm、南東壁は8～13cm、南西壁は8～10cm、北西壁は10～20cmを測る。北東・南西壁は東に、南東・北西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

＜床＞おおむね平坦で、IV層を掘り込み床面としている。標高は65.5～65.6m前後を測る。

遺物（第45図、写真図版48）

＜出土状況＞埋土下位・床面から繩文土器389gが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないとと思われる。このうち261～263は縄文土器深鉢3点を掲載した。

＜縄文土器＞261～263は深鉢の体部破片である。直線的に立ち上がり、斜縄文RLが施文されている。

SK I 03A・B堅穴状遺構・SK85土坑

B区中央、IVB 4 j グリッドに位置する。これらの遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.5～65.8mのIV層上面で、暗褐色土のプランを確認した。北約0.2mにS A03、西約1.6mにSK I 01が位置する。検出当初からいびつなプランであったことから、プランの長軸にベルトを設定し、サブトレントによる断面観察を行った。その結果、堅穴状遺構（SK I 03A）が土坑（SK85）を切っている状況が確認された。その後、堅穴状遺構の貼床を剥がした際に下に古い堅穴状遺構があることを確認したので、新しい方をA、古い方をBとした。

SK I 03A

遺構（第46図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞前述の通り。

＜重複＞SK I 03Bを埋め立てていることから、SK I 03Bより新しい。

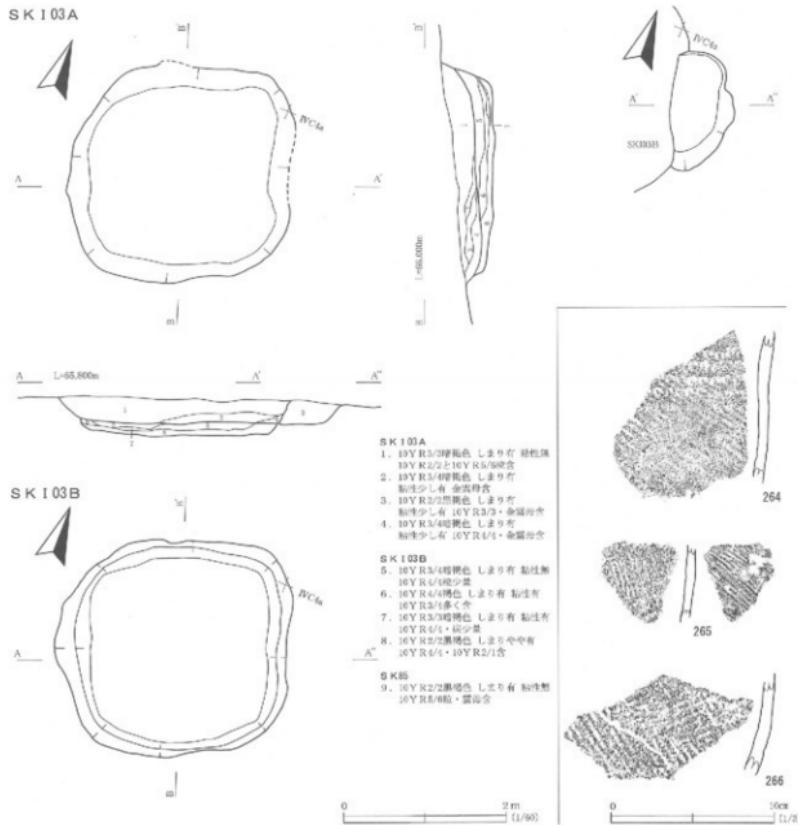
＜平面形・規模＞東壁中央付近が若干内側に、西壁中央付近が若干外側に膨らむ緩い弧状を呈し、各コーナーが角張っていないためはっきりしない。概ね隅丸方形状を呈する。規模は北壁長2.69m、東壁長2.51m、南壁長2.67m、西壁長2.57mを測る。検出面からの深さは最大38cmを測る。

＜主軸方向・床面積＞東壁を基準とした主軸方向はN-21°-W、床面積は4.41m²を測る。

＜埋土＞4層に細分され、上位は暗褐色（1・2層）、中位は黒褐色（3層）、下位は暗褐色（4層）に大別される自然堆積を呈する。

＜壁＞概ねIV層を壁とする。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北壁28～38cm、東壁19～28cm、南壁19～25cm、西壁24～32cmを測る。北・南壁は東に、東・西壁は南に向かうにつれて低くなっていく。

＜床＞概ね平坦で、IV層を掘り込み、III層起源の暗褐色土とIV層起源の褐色土を貼床（掘り方埋土）にして床面としている。貼床は全面に広がる。標高は65.3～65.4mを測る。



第46図 SK 103A・B整穴状遺構、SK 85、出土遺物

遺 物（第46図、写真図版48）

<出土状況> 埋土から繩文土器700gが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。このうち264～266は埋土から出土した深鉢3点を掲載した。

<繩文土器> 264～266は埋土から出土した深鉢の体部破片である。264・266は体部が直線的に立ち上がり、斜繩文R Lが施文されている。265は貝殻条痕文が施文されている。

SK 103B

遺 構（第46図、写真図版23）

<位置・検出状況> 前述の通り。

<重複> SK I 03Aに埋め立てられていることから、SK I 03Aより古い。

<平面形・規模>東壁以外の各壁中央付近が若干外側に膨らむ緩い弧状を呈し、各コーナーがさほど角張らずはっきりしない。概ね隅丸方形形状を呈する。規模は北壁長2.67m、東壁長2.50m、南壁長2.63m、西壁長2.56mを測る。検出面からの深さは最大50cmを測る。

<主軸方向・床面積>東壁を基準とした主軸方向はN-22°-W、床面積は4.41m²を測る。

<埋上>4層に細分され、上位は暗褐色土(5層)・褐色土(6層)、中位は暗褐色土(7層)、下位は黒褐色土(8層)に大別される人為堆積を呈する。

<壁>概ねIV層を壁としている。床面から外傾して立ち上がる。壁高は北壁44~50cm、東壁28~48cm、南壁19~24cm、西壁19~50cmを測る。北・南壁は東に、東・西壁は南に向かうにつれて低くなっている。

<床>概ね平坦で、IV層を掘り込み床面としている。標高はおよそ65.2m前後を測る。

遺 物

埋上から縄文土器18gが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

SK85土坑

遺 構 (第46図、写真図版33)

<位置・検出状況>前述通り。

<重複関係> SK I 03A・Bに切られている。

<平面形・規模>西半部をSK I 03A・Bに切られ、平面形・規模ははっきりしない。開口部は長軸1.46m遺存、短軸0.77m残存していることから、径1.5m前後の円形ないし梢円形状を呈すると思われる。深さ30cmを測る。壁は底面から外傾している。底部は長軸1.10m遺存、短軸0.58m残存している。

<埋土>黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>概ね平坦である。標高は65.3m前後を測る。

遺 物

出土しなかった。

SK I 04堅穴状遺構

遺 構 (第47図、写真図版24)

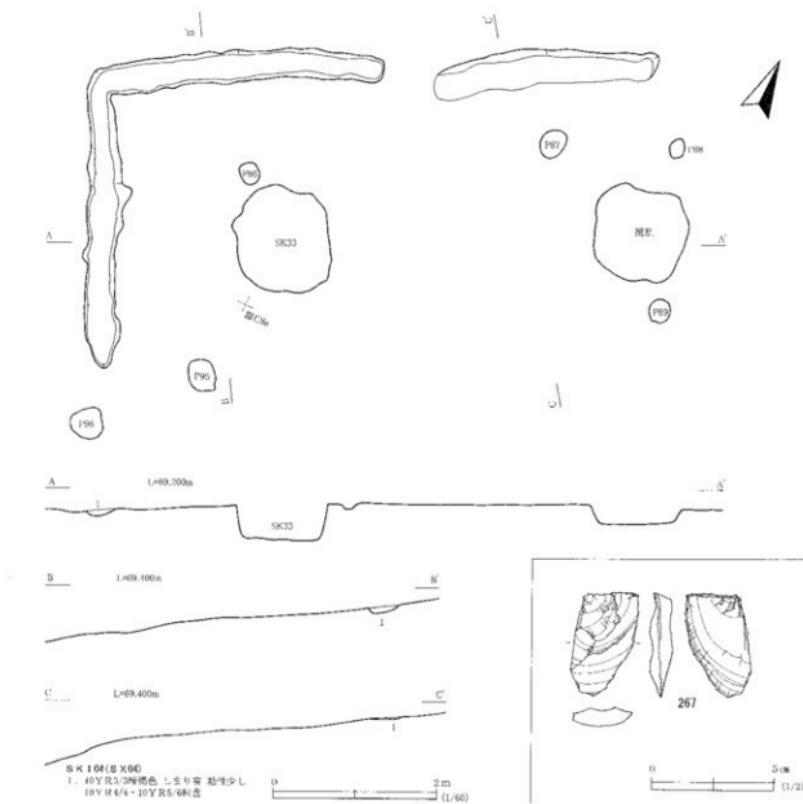
<位置・検出状況>B区北、III C 7c・7f・8fグリッドに位置する。南約3.5mにSK32、南約5mにSD44、南西約4.3mにSK31が位置する。検出面は標高68.8~69.3mのIV層上面である。幅2.5~50cmの溝がコの字状に東西方向約7m、南北方向約4mの範囲を巡り、その埋土から若干の土師器が出土した。よって焼造成時の削平で掘り方まで消失した堅穴状遺構であると判断した。

<重複>位置関係からSK33や柱穴群と重複関係にあると思われるが、前述の削平で埋土を消失し、新旧関係の把握はできなかった。しかし、埋土の状況からこれらの遺構より古い可能性はある。

<平面形・規模>周溝が東西方向6.97m、南北方向3.72m残存していることから、少なくとも長軸7m、短軸4m以上の隅丸長方形を呈すると思われる。

<主軸方向・床面積>西壁を基準とした主軸方向はN-26°-W。床面積は範囲がはっきりしないため未計測。

<埋土>IV層起源の褐色土を含んだ暗褐色土単層の自然堆積を呈する。



第47図 SK 104 壓穴状遺構、出土遺物

<壁>残存していないので不明。

<床>検出した面が床面とは限らないので不明。IV層面を掘り込んだのは確かである。

<床面施設>北・西壁の壁際?から周溝を検出した。周溝は幅28~50cm、深さ3~9cmを測り、北壁際のものは断続的に巡る。

遺 物 (第47図、写真図版48)

埋上から土師器66gと不定形石器1点(7g)が出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。このうち267の不定形石器を掲載した。

SK I 11 竪穴状遺構

遺構 (第48図、写真図版24)

<位置・検出状況> A区南、III B 9 b + 9 c + 10 b + 10 c グリッドに位置する。検出面は標高67.0~67.2mのIII層上面である。重複する遺構はない。北北東約1.7mにSK 63、南東約1.8mにS I 07が位置する。幅36~67cmの溝がL字形に東西方向約3.79m、南北方向約1.08mの範囲を巡り、埋土に焼土・炭が含まれ若干の土器が出土したことから、畑造成時の削平で掘り方まで消失した竪穴状遺構であると判断した。

<平面形・規模>周溝が東西方向3.79m、南北方向1.08m残存している。少なくとも長軸4m、短軸1.1m以上の隅丸長方形状を呈すると思われる。

<主軸方向・床面積>西側周溝を基準とした主軸方向はN-36°-E。床面積は範囲がはっきりしないため未計測。

<埋土>炭・焼土を含む黒褐色土單層の自然堆積を呈する。

<壁>残存していないので不明。

<床>検出した面が床面とは限らないので不明。IV層面を掘り込んだのは確かである。

<床面施設>北・西壁の壁際? から周溝を検出した。周溝は幅36~67cm、深さ5~14cmを測る。

遺物 (第48図、写真図版48)

<出土状況>埋土から縄文土器15gと土師器291gが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。このうち(268)の縄文土器を掲載した。

<縄文土器>268は深鉢の体部破片で、附加条縄文が施されている。



第48図 SK I 11 竪穴状遺構、出土遺物

(2) 柱穴列

S A01柱穴列

遺構(第49図)

<位置・検出状況> B区西、IVB 4 g・4 h グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.8~66.0mのIV層上面である。重複する遺構はない。北約3.2mにSD18、南東約2.9mにSD13、南約4.7mにSD08、南西約6.5mにSD07が位置する。

<平面形・規模>西北西-東南東方向に4間(7.6m)を測る。

<軸方向>平行の方向はE-11°-Sである。

<柱間寸法>1.5~2.3m(5~7尺7寸)を測る。

<掘り方>平面形は円形ないし橢円形状を呈し、規模は35~49cm、深さ11~16cmを測る(底面標高65.7~65.9m)。

遺物

埋土から土師器6.40gが出土した。

S A02柱穴列

遺構(第49図・写真図版37)

<位置・検出状況> B区西、III B 9 i・10 h グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.8~68mのIV層上面である。重複する遺構はない。北北東約2.6mにSD36、南約5.8mにSK86、北西1.3mにSK20が位置する。

<平面形・規模>北東-南西方向に2間(4.2m)を測る。

<軸方向>平行の方向はN-44°-Eである。

<柱間寸法>2.0~2.2m(6尺6寸~7尺3寸)を測る。

<掘り方>平面形は橢円形状を呈し、規模は40~75cm、深さ10~15cmを測る(底面標高67.7~67.9m)。

遺物

出土しなかった。

S A03柱穴列

遺構(第49図)

<位置・検出状況> B区西、IVB 3 j・IVC 3 a グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.7~65.8mのIV層上面である。重複する遺構はない。南約0.2mにSK I 03A・Bが位置する。

<平面形・規模>東北東-西南西方向に2間(3.1m)を測る。

<軸方向>平行の方向はE-23°-Nである。

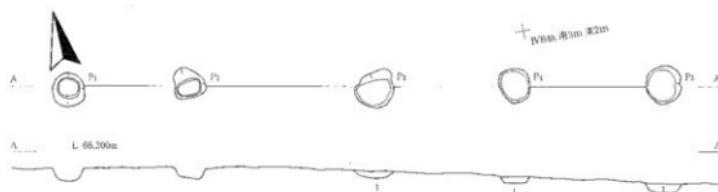
<柱間寸法>1.5~1.6m(5~5尺2寸)を測る。

<掘り方>平面形は橢円形ないし方形を呈し、規模は19~24cm、深さ14~15cmを測る(底面標高65.5~65.6m)。

遺物

出土しなかった。

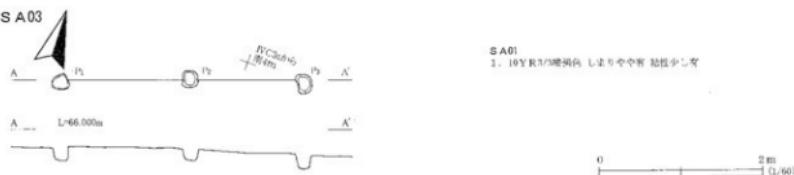
S A01



S A02



S A03



第49図 S A01~03柱穴列

(3) 炭窯

SW01炭窯

遺構 (第50図、写真図版25)

<位置・検出状況> B区西、IVB 6 e グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高64.7~64.8mのⅢ層上面で、Ⅲ層起源と思われる黒褐色土の楕円形プランを確認した。底面に行くにつれてⅢ層からⅣ層の漸移層に移行する。重複する遺構はない。北東約0.1mにSK02、北東約2.6mにSK01が位置する。

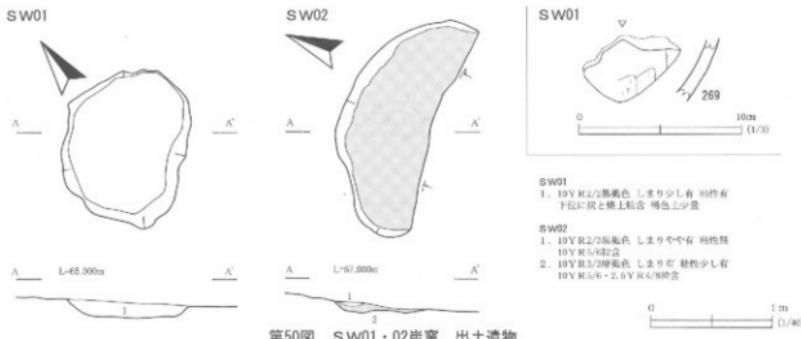
<平面形・規模>開口部は長軸方向1.18m、短軸方向1.02mの楕円形形状を呈する。深さ12cmを測る。壁は外傾している。底部は長軸方向1.26m、短軸方向0.82mを測る。

<埋土>下位に炭と焼土を含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み床面としている。標高は64.6m前後を測る。

遺物 (第50図、写真図版48)

埋土から土師器片83gが出土した。このうち269の土師器壺片を掲載した。



第50図 SW01・02炭窯、出土遺物

SW02炭窯**遺構**（第50図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞B区中央、IVB 1 h グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.2~67.3m前後のIV層上面で、黒褐色土と炭が混入した暗褐色土の広がりを確認した。重複する遺構はない。北東約2.7mにSK68、南東約2.5mにS102、南南西約4.2mにSK17が位置する。

＜平面形・規模＞斜面の崩落と烟造成時の削平で南半部が消失したため、平面形・規模ははつきりしない。開口部は長軸方向1.86m遺存、短軸方向0.79m残存していることから、開口部径1.9×1.6m前後の隅丸橢円形状を呈する。深さ8cmを測る。壁は外傾している。底部は長軸方向1.73m遺存、南北方向0.68mを測る。

＜埋土＞2層に細分した。上位は黒褐色土主体、下位は炭が混入した暗褐色土を主体とした自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。IV層を掘りこんでいる床面としている。標高67.2m前後を測る。

遺物

出土しなかった。

(4) 土 坑**SK01土坑****遺構**（第51図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞B区西、IVB 6 e グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.1m前後のIII層上面である。底面に向かうにつれてIII層からIV層の漸移層に移行する。重複する遺構はない。北東約3.5mにSD07、東約2.8mにS103、南西約1.1mにSK02、南西約2.6mにSW01が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.26×1.04mの橢円形状を呈する。深さ6cmを測る。壁は底面から外傾している。底部径は1.07×0.74mを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>概ね平坦である。III～IV層の漸移層を掘り込み底面としている。標高は65.0m付近である。

遺 物

出土しなかった。

S K02土坑

遺 構 (第51図、写真図版26)

<位置・検出状況> B区西、IVB 6 e グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高64.8～65.0mのIII層上面である。底面に向かうにつれてIII層からIV層の漸移層に移行する。重複する遺構はない。北東約1.1mにS K01、南西約0.1mにS W01が位置する。

<平面形・規模>開口部径1.60×1.32mの楕円形状を呈する。深さ26cmを測る。壁は底面から外傾している。底部径は1.44×1.04mを測る。

<埋土>黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>播鉢状を呈する。中央よりやや西側が最も深い。III～IV層の漸移層を掘り込み底面としている。標高は64.7～64.8mを測る。

遺 物

埋土から十輪器9gが出土した。流れ込みの遺物と思われる。

S K05土坑

遺 構 (第51図、写真図版26)

<位置・検出状況> B区西、IVB 6 g グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.2m前後のIII層からIV層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてIV層に移行する。重複する遺構はない。北約0.2mにS K06、北東約2.2mにS K07、南東約5.2mにS I01、南東約4mにS K09、西約4.8mにS I03が位置する。

<平面形・規模>開口部径96×86cmの楕円形状を呈する。深さ11cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径89×62cmを測る。

<埋土>IV層起源の褐色ブロックを含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は65.1m前後を測る。

遺 物

出土しなかった。

S K06土坑

遺 構 (第51図、写真図版26)

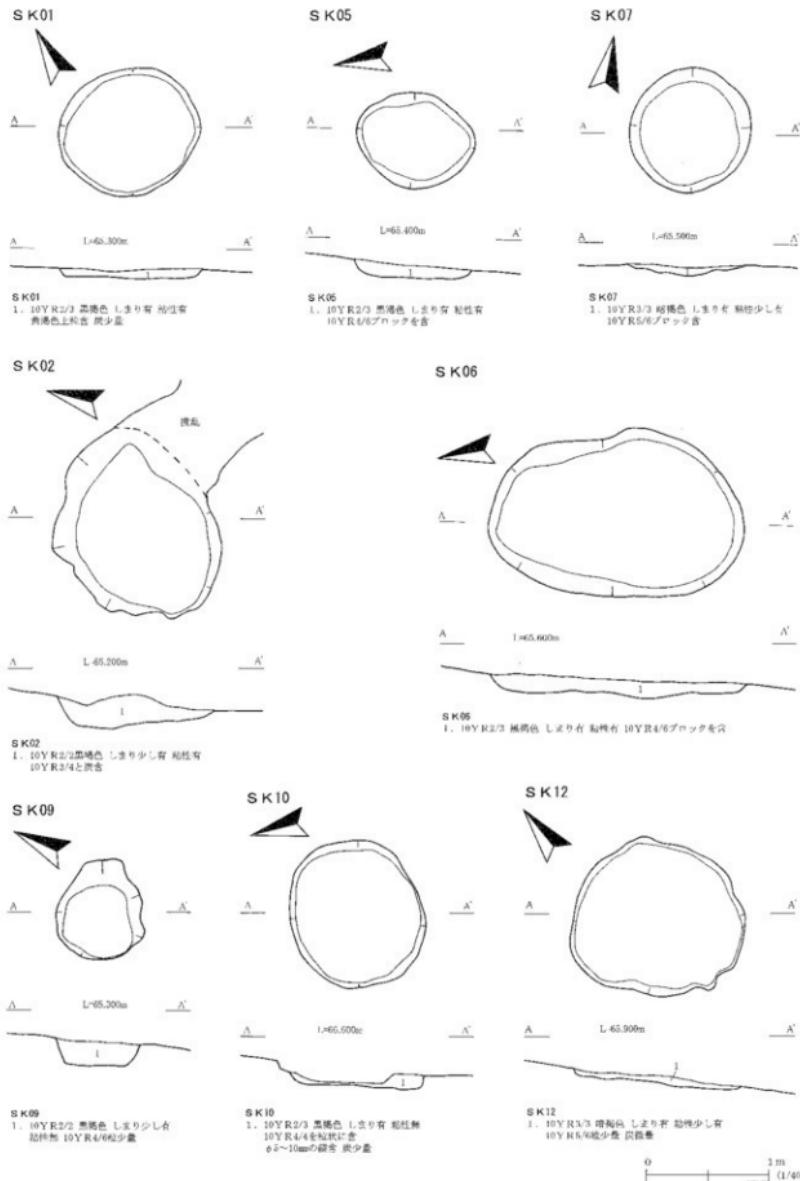
<位置・検出状況> B区西、IVB 5 g～6 h グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.3～65.4mのIII層からIV層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてIV層に移行する。重複する遺構はない。北北東約0.4mにS K10、東約0.9mにS K07、南約0.2mにS K05が位置する。

<平面形・規模>開口部径2.06×1.38mの楕円形状を呈する。深さ15cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径1.90×1.22mを測る。

<埋土>IV層起源の褐色ブロックを含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は65.2m前後を測る。

4 その他の遺構



第51図 SK01・02・05~07・09・10・12土坑

遺 物

出土しなかった。

S K07土坑**遺 構** (第51図、写真図版27)

<位置・検出状況> B区西、IVB 5 h・6 h グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.3~65.4mのⅢ~Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。南西約2.2mにSK05、西約0.9mにSK06、北西約1mにSK10が位置する。

<平面形・規模>開口部径1.02×0.96mの円形状を呈する。深さ6cmを測る。断面形は半円状を呈する。底部径0.85×0.78mを測る。

<埋土>暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>起伏に富んでいる。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高はおよそ65.2mである。

遺 物

出土しなかった。

S K09土坑**遺 構** (第51図、写真図版27)

<位置・検出状況> B区西、IVB 7 h グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高64.7~64.8mのⅢ~Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。南東約0.6mにSI01、北北西約4mにSK05が位置する。

<平面形・規模>開口部径82×72cmの円形状を呈する。深さ20cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径60×57cmを測る。

<埋土>黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高はおよそ64.5mである。

遺 物

出土しなかった。

S K10土坑**遺 構** (第51図、写真図版27)

<位置・検出状況> B区西、IVB 5 h グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.4m前後のⅢ~Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。北東4.3mにSD13、南東1mにSK07、南南西約0.4mにSK06が位置する。

<重複関係> SD08を切っている。

<平面形・規模>開口部径1.20×1.10mの円形状を呈する。深さ13cmを測る。壁は底面から鉛直に立ち上がる。底部径は1.07×1.01mを測る。

<埋土>黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高65.3m前後を測る。

遺 物

出土しなかった。

SK12土坑**遺構** (第51図、写真図版27)

<位置・検出状況> B区西、IVB 6 j グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高64.5～64.7mのIII～IV層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてIV層に移行する。重複する遺構はない。東約3.3mにSK53、西南西約7.5mにSI01、北北西約5.7mにSK14が位置する。

<平面形・規模> 開口部径1.40×1.24mの橢円形状を呈する。深さ7cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径1.32×1.18mを測る。

<埋土> 單褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面> 少少凸凹がある。III～IV層にかけての漸移層を掘り込み底面としている。標高は64.5～64.6mを測る。

遺物

出土しなかった。

SK14土坑**遺構** (第52図、写真図版27)

<位置・検出状況> B区西、IVB 5 i グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.2～65.4mのIII層からIV層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてIV層に移行する。北約4mにSK101、南南東約5.7mにSK12が位置する。

<重複関係> SD13を切っている。

<平面形・規模> 開口部径95×93cmの円形状を呈する。深さ25cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径78×77cmを測る。

<埋土> IV層起源の褐色ブロックを含む暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面> 概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は65.1～65.2mを測る。

遺物 (第55図)

埋土から鉄釘? 3.79gと陶磁器1点(4g)が出土した。このうち270の陶磁器碗を掲載した。産地は不明だが、在地の可能性がある。所属時期は19世紀代の可能性が想定される。

SK15土坑**遺構** (第52図、写真図版28)

<位置・検出状況> B区中央、IVB 2 i グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66.8～66.9mのIII～IV層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてIV層に移行する。重複する遺構はない。東南東約1.6mにSD23、南南西5.7mにSD15が位置する。

<平面形・規模> 開口部径1.11×1.02mの円形状を呈する。深さ22cmを測る。断面形は深鍋状を呈する。底部径1.02×0.98mを測る。

<埋土> IV層起源の褐色ブロックが混入した暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面> 概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は66.7m前後を測る。

遺物

埋土から鉄釘? 4gが出土した。

S K17土坑**遺構** (第52図、写真図版28)

＜位置・検出状況＞B区中央、IV B 4 g・4 h グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66m前後のⅢ層からⅣ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。北北東約4.2mにSW02、西南西約4.3mにS I 02が位置する。

＜重複関係＞SD23を切っている。

＜平面形・規模＞開口部径1.16×0.98mの楕円形状を呈する。深さ21cmを測る。壁は底面から鉛直に立ち上がる。底部径1.03×0.93mを測る。

＜埋土＞Ⅳ層起源の褐色ブロックを含んだ暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は約65.9mを測る。

遺物

出土しなかった。

S K20土坑**遺構** (第52図、写真図版28)

＜位置・検出状況＞B区北、III B 9 h グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高68.0～68.1mのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。北東約4.6mにSD36、南東約1.3mにSA02が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径71×65cmの円形状を呈する。深さは12cmを測る。断面形は半円状を呈する。底部径54×51cmを測る。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。概ねⅣ層を掘り込み底面としているが、一部Ⅲ～Ⅳ層にかけての漸移層を底面としているところもある。標高は67.9～68.0mを測る。

遺物

出土しなかった。

S K24土坑**遺構** (第52図、写真図版28)

＜位置・検出状況＞B区北、III C 9 a グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高68.0～68.1mのⅣ層上面である。重複する遺構はない。南東約2.5mにSK35、南西約5mにSK27が位置する。

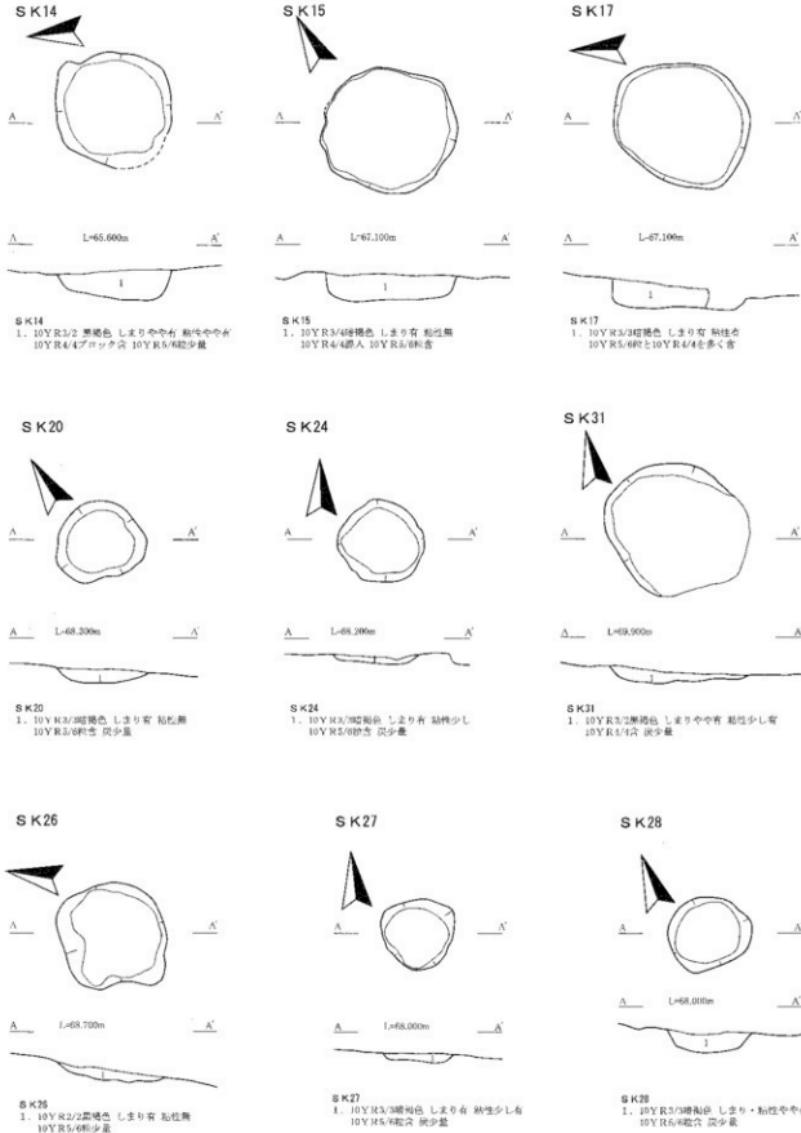
＜平面形・規模＞開口部径68×64cmの円形状を呈する。深さ6cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径は55×49cmを測る。

＜埋土＞暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞おおむね平坦である。概ねⅣ層を掘りこんで底面としている。標高は68.0mを測る。

遺物

出土しなかった。



S K26土坑

遺構 (第52図、写真図版29)

<位置・検出状況> B区中央、III C 9 c・10 c グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.7～67.9mのIII～IV層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてIV層に移行する。重複する遺構はない。北東約0.8mにS D44、南西約1.8mにS I 04・S K36 B、西約0.8mにS D43が位置する。

<平面形・規模> 開口部径90×89cmの橢円形状を呈する。深さ10cmを測る。断面形は半円状を呈する。底部径78×75cmを測る。

<埋土> 黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面> 少多少凹凸がある。IV層を掘り込み底面としている。標高は67.7～67.8mを測る。

遺物

出土しなかった。

S K27土坑

遺構 (第52図、写真図版29)

<位置・検出状況> B区北、III B 10 j グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.8m前後のIV層上面である。重複する遺構はない。北東約5mにS K24、南約5.2mにS N01、西約1.9mにS K28が位置する。

<平面形・規模> 開口部径59×54cmの円形形状を呈する。深さ8cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径49×43cmを測る。

<埋土> 暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面> 概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は67.7mを測る。

遺物

出土しなかった。

S K28土坑

遺構 (第52図、写真図版29)

<位置・検出状況> B区北、III B 10 i～10 j グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.8m前後のIII～IV層にかけての漸移層である。重複する遺構はない。東約1.9mにS K27、南東約5.5mにS N01、南南西約6mにS K86が位置する。

<平面形・規模> 開口部径68×59cmの橢円形状を呈する。深さ15cmを測る。断面形は半円状を呈する。底部径54×47cmを測る。

<埋土> 暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面> 概ね平坦である。III～IV層の漸移層を掘り込み底面としている。標高は67.6m前後を測る。

遺物

出土しなかった。

S K31土坑

遺構 (第52図、写真図版29)

<位置・検出状況> B区北、III C 9 d グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高68.1～68.3mのIV層上面である。重複する遺構はない。北東約4.3mにSK I 04、東約3.5mにSK 32、南約0.4mにSD 44が位置する。斜面の崩落や烟造成時の削平によって、南側壁が消失している。

<平面形・規模>上記の理由で南壁を消失しているため、平面形・規模ははっきりしない。開口部は長軸1.18m残存、短軸1.04m遺存していることから、径1.2×1.0mの楕円形状を呈すると思われる。深さ10cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部は長軸約1.13m残存、短軸0.93m遺存している。

<埋土>黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>若干凹凸がある。IV層を掘り込み底面としている。標高は68.1～68.2mを測る。

遺物

出土しなかった。

SK 32土坑

遺構 (第53図、写真図版30)

<位置・検出状況> B区北、III C 8 e グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈し、斜面下はより傾斜が急になる。検出面は標高68.2～68.4mのIII～IV層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてIV層に移行する。重複する遺構はない。北約3.5mにSK I 04、北約4.2mにSK 33、南約0.4mにSD 44、西約3.5mにSK 31が位置する。

<平面形・規模>開口部径1.07×1.02mの楕円形状を呈する。深さ18cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径0.92×0.85mを測る。

<埋土>黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>概ね平坦である。自然縫が露出したIV層を掘り込み底面としている。標高68.2～68.3mを測る。

遺物

出土しなかった。

SK 33土坑

遺構 (第53図、写真図版30)

<位置・検出状況> B区北、III C 7 d・7 e グリッドに位置する。検出面は標高68.9～69.1mのIV層上面である。南約4.2mにSK 32が位置する。

<重複関係>位置関係からSK I 04と重複関係にあると思われるが、烟造成時の削平で埋土が消失し、新旧関係を判断することはできなかった。しかし、埋土の状況からSK I 04より新しい可能性はあると思われる。

<平面形・規模>開口部径1.32×1.12mの楕円形状を呈する。深さ44cmを測る。壁は底面からほぼ鉛直に立ち上がる。底部径1.00×0.92mを測る。

<埋土>暗褐色土を主体とした単層の人為堆積を呈する。

<底面>概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は68.7～68.9mを測る。

遺物

出土しなかった。

S K35土坑**遺構** (第53図、写真図版30)

<位置・検出状況> B区北、III C 10 a・10 b グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.8~67.9mのIV層上面である。重複する遺構はない。南東約3.9mにS 104、北西約2.5mにSK24が位置する。擾乱によって南半部を消失している。

<平面形・規模> 南半部を消失しているため平面形・規模ははっきりしない。開口部は長軸65cm遺存、短軸52cm残存していることから、径1×0.6m前後の橢円形状を呈すると思われる。深さ6cmを測る。壁は底面から外傾している。底部は長軸方向57cm遺存、短軸方向47cm残存している。

<埋土> 暗褐色土を主体とした自然堆積を呈する。

<底面> 若干凸凹がある。IV層を掘り込み底面としている。

遺物

出土しなかった。

S K36A土坑**遺構** (第53図、写真図版30)

<位置・検出状況> B区中央、III C 10 c グリッドに位置する。本遺構の周辺は北北西から南南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.2m前後のIV層上面である。東約0.8mにSK29が位置する。

<重複関係> S 104・SK36Bを切っている。

<平面形・規模> 開口部は長軸1.36m、短軸1.03mの隅丸方形を呈する。深さ78cmを測る。壁は底面から鉛直に立ち上がる。底部は長軸1.05m、短軸0.83mを測る。

<埋土> 8層に細分した。1~3層は黒褐色土を主体とした自然堆積、4~8層は黒色土と褐色土が互層をなし、人為堆積を呈する。本遺構の堆積状況は墓壙の堆積状況に類似している。六道鏡・副葬品等の遺物が出土していないものの、鉄釘が出土していることから墓壙の可能性もあると思われる。

<底面> 概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は66.5m前後を測る。

遺物

埋土から上部器17g、鉄釘5gが出土した。流れ込みの遺物と思われる。

S K36B土坑**遺構** (第53図、写真図版30)

<位置・検出状況> B区中央、III C 10 c グリッドに位置する。本遺構の周辺は北北西から南南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.3~67.4mのIV層上面である。東約0.8mにSK29が位置する。本遺構はSK36Aによって西半部を消失している。

<重複関係> S 104を切り、SK36Aに切られている。

<平面形・規模> 上記の理由で西半部を消失しているため平面形・規模ははっきりしない。開口部は長軸約79cm遺存、短軸36cm残存していることから、径80cm前後の円形ないし橢円形状を呈すると思われる。深さ28cmを測る。壁は底面から鉛直に立ち上がる。底部は長軸64cm遺存、短軸34cm残存している。

<埋土> 暗褐色土を主体とした自然堆積を呈している。

<底面> 概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は67.0~67.1mを測る。

遺物

出土しなかった。

S K46土坑

遺構（第53図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞B区東、IVC 5 j グリッドに位置する。本遺構の周辺は北北西から南南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高61.5～61.7mのⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅢ層からⅣ層の漸移層に移行する。重複する遺構はない。

＜平面形・規模＞開口部は長軸方向96cm、短軸方向69cmの梢円形状を呈する。深さ16cmを測る。壁は外傾している。底部は東西方向73cm、南北方向56cmを測る。

＜埋土＞上位は黒色土、下位は黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、2層に細分した。

＜底面＞凹凸状を呈し、起伏に富んでいる。Ⅲ～Ⅳ層にかけての漸移層を掘り込み床面としている。標高は61.5m前後を測る。

遺物

埋土から土師器8gが出土した。

S K53土坑

遺構（第53図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞B区西、IVC 6 a グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面であるが、ここより南東側斜面下はより傾斜が急になる。検出面は標高64.3～64.5mのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。東約11.8mにSK54、南約6.2mにSD42、西約3.3mにSK12が位置する。斜面の崩落や畑造成時の削平に加え植栽痕によって東側壁の上半部が消失している。

＜平面形・規模＞上記の理由で南壁を消失しているため、平面形・規模ははつきりしない。開口部は長軸約78cm、短軸74cm残存していることから、径80cm前後の円形ないし梢円形状を呈すると思われる。深さ32cmを測る。断面形は半円状を呈する。底部は長軸56cm、短軸48cmを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は64.2m前後を測る。

遺物

出土しなかった。

S K54土坑

遺構（第53図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞B区南、IVC 6 a グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面であるが、ここより南東側斜面下はより傾斜が急になる。検出面は標高63.2～63.4mのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。南約5.7mにSD42、西約11.8mにSK53が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.18×1.08mの梢円形状を呈する。深さ8cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径0.99×0.85mを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。Ⅳ層面を掘り込み底面としている。標高は63.2～63.3mを測る。

遺 物

出土しなかった。

S K56土坑

遺 構 (第53図、写真図版31)

<位置・検出状況> A区北、III B 3 i グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高71.4~71.6mのⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。北約2.5mにS D 48が位置する。重複する遺構はない。斜面の崩落や焼造時の削平によって、西側壁が消失している。

<平面形・規模>上記の理由で西壁を消失しているため、平面形・規模ははつきりしない。開口部は長軸約1.10m残存、短軸0.92m遺存していることから、径1.2×1m前後の梢円形状を呈するものと思われる。深さ21cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部は長軸方向0.96m残存、短軸方向0.76m残存している。

<埋土>黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>起伏に富む。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は71.2~71.4mを測る。

遺 物

出土しなかった。

S K61土坑

遺 構 (第54図、写真図版31)

<位置・検出状況> A区北、III B 4 e グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈し、ここより斜面下はより傾斜が急になる。検出面は標高70.2m前後のⅣ層上面である。重複する遺構はない。北約0.5mにS I 06A・B、南東約6.8mにS K 70、西約3.3mにS K 69が位置する。

<平面形・規模>開口部は長軸方向1.71m、短軸方向0.64mの隅丸長方形を呈する。深さ17cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部は長軸方向1.67m、短軸方向0.56mを測る。

<埋土>暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>概ね平坦である。Ⅳ層面を掘り込み底面としている。標高は70.1m前後を測る。

遺 物

埋土からガラス3.50gが出土した。流れ込みの遺物と思われる。

S K63土坑

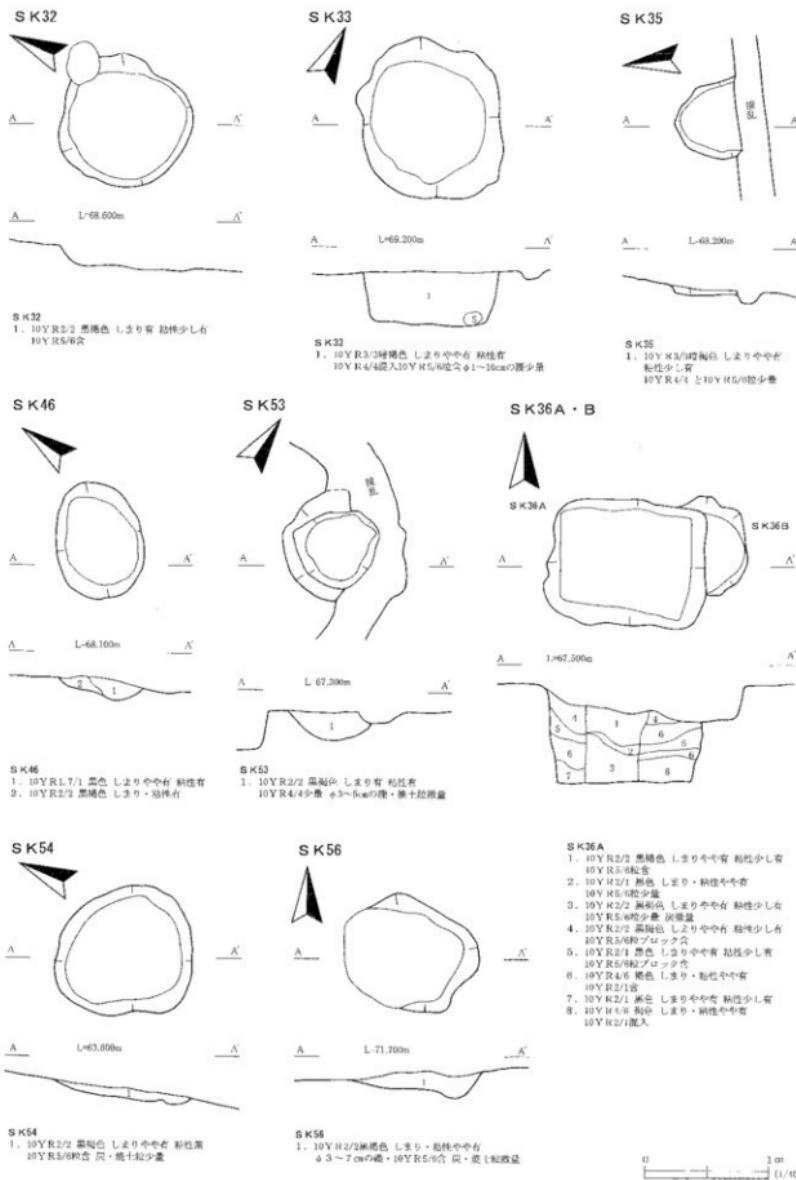
遺 構 (第54図、写真図版32)

<位置・検出状況> A区南、III B 9 c グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.4~67.5mのⅢ層上面である。底面に向かうにつれてⅢ~Ⅳ層にかけての漸移層に移行する。重複する遺構はない。南南西約1.7mにS K 111が位置する。

<平面形・規模>開口部径1.02×0.98mの円形を呈する。深さ13cmを測る。壁は外傾して立ち上がる。底部径0.82×0.82mを測る。

<埋土>直径10~15cmの礫を含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>多少凹凸がある。Ⅲ~Ⅳ層にかけての漸移層を掘り込み底面としている。標高は67.3m前後を測る。



第53図 SK 32・33・35・36A・36B・46・53・54・56土坑

遺 物

埋上から縄文土器11gが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

S K69土坑

遺 構 (第54図、写真図版32)

＜位置・検出状況＞A区北、III B 4 d グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る斜面を呈する。検出面は標高70.1~70.2mのIII~IV層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてIV層に移行する。重複する遺構はない。北東約4.3mにS I 06A・B、東約3.3mにSK 61、西約0.9mにSD 48が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.10×0.84mの楕円形状を呈する。深さ22cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。底部径0.80×0.61mを測る。

＜埋土＞IV層起源の褐色ブロックを含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞多少凹凸がある。IV層を掘り込み底面としている。標高は69.9~70.0mを測る。

遺 物

埋上から陶磁器片1gが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

S K70土坑

遺 構 (第54図、写真図版32)

＜位置・検出状況＞A区北、III B 5 f グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高70.2m前後のIII~IV層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてIV層に移行する。重複する遺構はない。北西約7mにSK 61、北西約7.1mにS I 06 A・Bが位置する。＜平面形・規模＞開口部径1.43×1.34mの楕円形状を呈する。深さ27cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。底部径1.14×1.07mを測る。

＜埋土＞上位はIV層起源の褐色ブロックを含む黒褐色土、下位は直径1~3cmの礫を含む黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、2層に細分した。

＜底面＞若干凹凸があるが概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高69.9~70.0mを測る。

遺 物

埋上から縄文土器10gが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

S K72土坑

遺 構 (第54図、写真図版32)

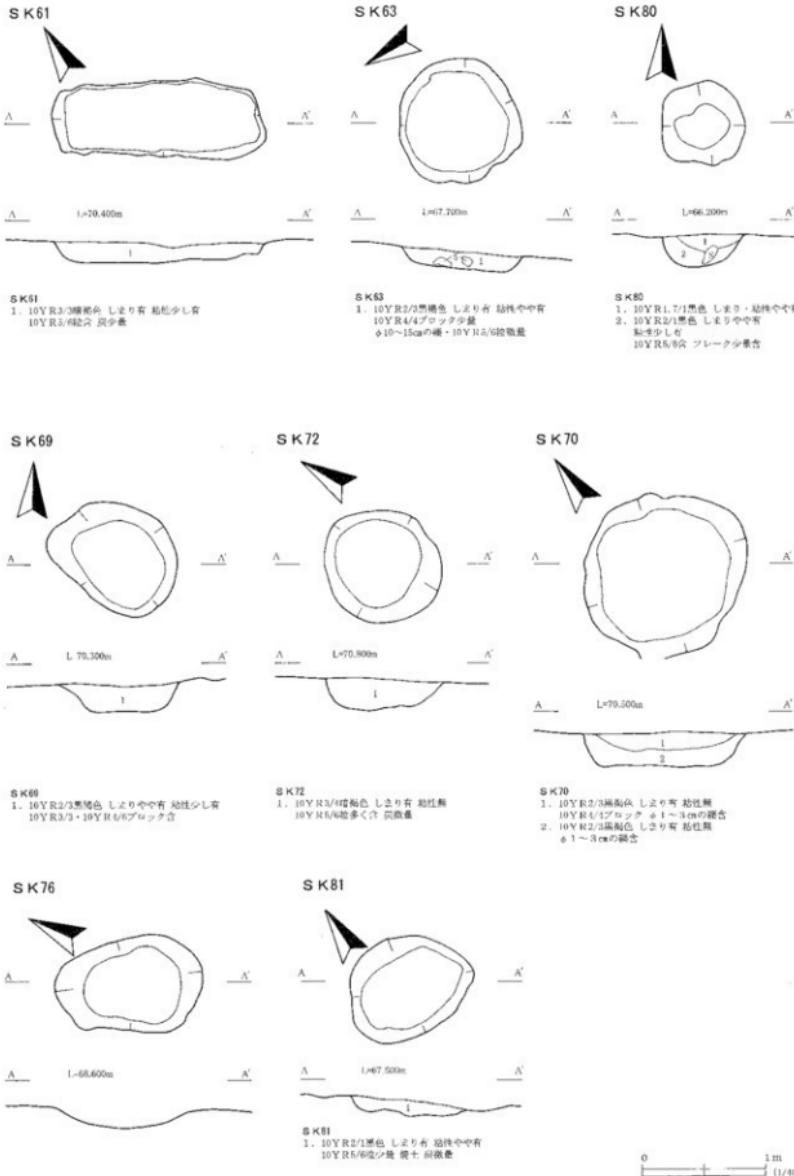
＜位置・検出状況＞A区北、III B 3 e グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈し、ここより斜面下はより傾斜が急になる。検出面は標高70.6~70.7mのIV層上面である。重複する遺構はない。南東約0.5mにS I 06A・B、西約1.2mにSD 48が位置する。

＜平面形・規模＞開口部径1.02×0.93mの円形状を呈する。深さ26cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径0.70×0.70mを測る。

＜埋土＞IV層起源の黄褐色土を多く含む暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞凸凹である。IV層を掘り込み底面としている。標高は70.4m前後を測る。

4 その他の遺構



第54図 SK61・63・69・70・72・76・80・81土坑

遺 物

出土しなかった。

S K76土坑

遺 構 (第54図)

<位置・検出状況> A区北、III B 8 f グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.8～66.0mのIII～IV層にかけての漸移層である。重複する遺構はない。北西約9.3mにS D49が位置する。

<平面形・規模> 開口部径1.20×0.82mの橢円形状を呈する。深さ18cmを測る。断面形は半円状を呈する。底部径0.80×0.62mを測る。

<埋上>暗褐色土主体の自然堆積を呈する。

<底面>若干凸凹がある。III～IV層の漸移層を掘り込み底面としている。標高65.8m前後を測る。

遺 物

出土しなかった。

S K80土坑

遺 構 (第54図、写真図版32)

<位置・検出状況> A区南、IV B 3 d グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66.0～66.1mのIII層上面である。底面に向かうにつれてIII～IV層の漸移層に移行する。重複する遺構はない。南南東約1.3mにS I 10、南南西約2mにS K82、北西約6.7mにS K81が位置する。

<平面形・規模> 開口部径68×68cmの円形状を呈する。深さ26cmを測る。断面形は半円状を呈する。底部径44×33cmを測る。

<埋土>黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、2層に細分した。

<底面>若干凸凹がある。III～IV層の漸移層を掘り込み底面としている。標高65.8m前後を測る。

遺 物 (第55図、写真図版48)

埋上から土師器284gが出土した。このうち271の土師器壺Cを掲載した。

S K81土坑

遺 構 (第54図、写真図版32)

<位置・検出状況> A区南、IV B 2 c グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66.2m前後のIII～IV層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてIV層に移行する。重複する遺構はない。北北東約6.1mにS I 07、南東約6.7mにS K80が位置する。

<平面形・規模> 開口部径1.20×0.82mの橢円形状を呈する。深さ13cmを測る。壁は底面から外傾して立ち上がる。底部径0.80×0.62mを測る。

<埋上>黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>起伏に富む。IV層を掘り込み底面としている。標高は66.1m前後を測る。

遺 物

出土しなかった。

S K82土坑

遺構 (第55図、写真図版32)

<位置・検出状況> A区南、IVB 3 d グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.7~65.9mのⅢ~Ⅳ層にかけての漸移層である。底面に向かうにつれてⅣ層に移行する。重複する遺構はない。北北東約2mにSK80、東北東約1.4mにSI10が位置する。

<平面形・規模> 開口部径1.22×1.20mの円形を呈する。深さ18cmを測る。断面形は半円状を呈する。底部径は1.11×1.09mを測る。

<埋土> 焼土を微量含む黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面> 概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は65.6~65.9mを測る。

遺物

埋土から上師器が11g出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

S K83土坑

遺構 (第55図、写真図版33)

<位置・検出状況> A区北、IVA 6 j・IVB 6 a グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る斜面を呈する。検出面は標高67.6~67.8mのⅣ層上面である。重複する遺構はない。東約5.9mにSD50、南東約5.2mにSK84が位置する。

<平面形・規模> 開口部径1.22×0.99mの橢円形状を呈する。深さ9cmを測る。壁は外傾している。底部径1.10×0.88mを測る。

<埋土> 黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面> 若干凸凹がある。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は67.5~67.7mを測る。

遺物

出土しなかった。

S K84土坑

遺構 (第55図、写真図版33)

<位置・検出状況> A区北、IVB 7 a グリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る斜面を呈する。検出面は標高66.6~66.9mのⅣ層上面である。重複する遺構はない。東約0.2mにSD50、北西約5.2mにSK83が位置する。

<平面形・規模> 開口部径1.50×1.20mの橢円形状を呈する。深さ27cmを測る。断面形は半円状を呈する。底部径1.19×0.97mを測る。

<埋土> 黒褐色土を主体としたⅣ層の自然堆積を呈する。

<底面> 概ね平坦である。Ⅳ層を掘り込み底面としている。標高は66.5~66.7mを測る。

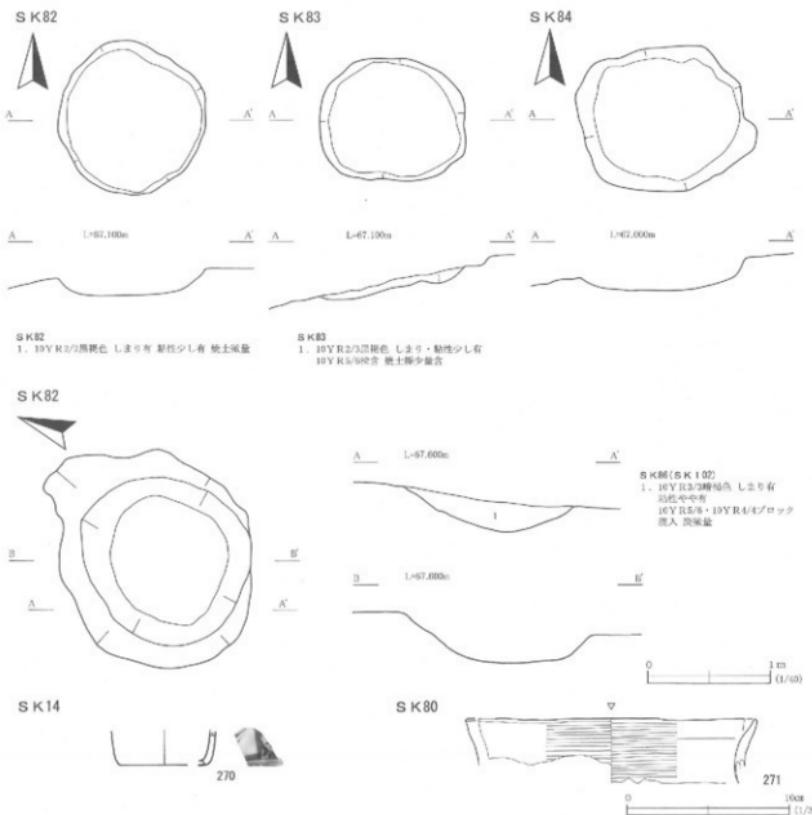
遺物

埋土から十師器3gが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

S K86土坑(SK102)

遺構 (第55図、写真図版33)

<位置・検出状況> B区中央、IVB 1 i グリッドに位置する。本遺構の周辺は北北西から南南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.2~67.4mのⅣ層上面である。重複する遺構はない。北約5.8mにSA02、北北東約6mにSK28、東約4.2mにSN01、南約3.1mにSI04、南西約2.7mにSW01



第55図 SK82~86・88土坑、出土遺物

が位置する。撹乱によって南壁上部が消失している。

<平面形・規模>開口部径2.00×1.60mの楕円形状を呈する。深さ44cmを測る。断面形は半円状を呈する。底部径は1.04×0.94mを測る。

<埋土>黄褐色・褐色ブロックが混入した暗褐色土を主体とした単層の人为堆積を呈する。

<底面>概ね平坦を呈する。IV層を掘り込み底面としている。標高は66.7m前後を測る。

遺 物

出土しなかった。

(5) 溝 跡

S D07溝跡

遺 構 (第65・69図、写真図版33)

<位置・検出状況> B区西、IVB 5 f グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.4～65.5mのIV層上面である。重複する遺構はない。北約6.8mにS D15、北東約6.5mにS A01、東約3.8mにS D08、南約2.8mにS I03、南西約3.5mにS K01が位置する。

<規模・形状> 縦長2.72m、幅0.17～0.23mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さ2～5cmを測る。

<方向>西北西～東南東方向 (E-13° - S) である。

<埋土>黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は65.36～65.42m、高低差は6cmを測り、西に向かうにつれて低くなっていく。

遺 物

出土しなかった。

S D08溝跡

遺 構 (第65・69図、写真図版33)

<位置・検出状況> B区西、IVB 5 g グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.5m前後のIV層上面である。北約4.7mにS A01、南約1mにS K06、西約3.8mにS D07が位置する。

<重複関係> S K10に切られている。

<規模・形状> S K10に切られているため、はっきりしない。確認した部分では縦長3.83m、幅0.23～0.30mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは1～5cmを測る。

<方向>西北西～東南東方向 (E-12° - S) である。

<埋土>暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>概ね平坦である。IV層を掘り込み底面としている。標高は65.4～65.5m、高低差14cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺 物

出土しなかった。

S D13溝跡

遺 構 (第65・69図、写真図版34)

<位置・検出状況> B区西、IVB 5 i グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。検出面は標高65.3～65.5mのIV層上面である。南西約4.3mにS K10、北西約2.9mにS A01が位置する。

<重複関係> S K14に切られている。

<規模・形状> 東側をS K14に切られているため、はっきりしない。確認した部分では縦長3.73m、幅0.20～0.29mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは6～9cmを測る。

<方向>西北西～東南東方向 (E-10° - S) である。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞多少凹凸がある。IV層を掘り込み底面としている。標高は65.2～65.4m、高低差は21cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺 物

出土しなかった。

S D15溝跡

遺 構 (第65・69図、写真図版34)

＜位置・検出状況＞B区中央、IVB 3 f・4 f グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66.0～66.3mのIV層上面である。北北東約5.7mにSK15、東北東約5.3m、東約4.8mにSD18、南約6.8mにSD07が位置する。

＜規模・形状＞幅0.24～0.51mの溝が、長軸2.46m、短軸2.30mの馬蹄形状に巡っている。横断面形は逆台形状を呈し、深さは4～40cmを測る。

＜方向＞西北西～東南東方向 (E-12° - S) である。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞起伏に富んでいる。IV層を掘り込み底面としている。標高は67.4～67.7m、高低差は32cmを測り、南に向かうにつれて低くなっていく。

遺 物

出土しなかった。

S D18溝跡

遺 構 (第65・69図、写真図版34)

＜位置・検出状況＞B区中央、IVB 3 g・3 h・4 h・4 i グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.5～67.8mのIV層上面である。重複する遺構はない。北約0.6mにSD19、東約3.5mにSK101、南約3.2mにSA01が位置する。

＜規模・形状＞総長7.81m、幅0.13～0.35mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さ7～9cmを測る。

＜方向＞西北西～東南東方向 (E-12° - S) である。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞起伏に富む。IV層を掘り込み底面としている。標高は67.4～67.7m、高低差は32cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺 物

出土しなかった。

S D19溝跡

遺 構 (第65・69図、写真図版34)

＜位置・検出状況＞B区中央、IVB 3 g・3 h グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南西に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.7～67.9mのIV層上面である。重複する遺構はない。北約3.6mにSD23、南約0.6mにSD18が位置する。

＜規模・形状＞総長5.37m、幅0.23～0.33mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは13～17cmを測る。

<方向>西北西—東南東方向（E-12°-S）である。

<埋土>IV層起源の褐色土を含む暗褐色土主体を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>多少凹凸がある。IV層を掘り込み底面としている。標高は67.5~67.8m、高低差は28cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺 物

出土しなかった。

S D 23溝跡

遺 構（第65・69図、写真図版35）

<位置・検出状況>B区中央、IVB 2 g・2 h・3 h・3 i グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.9~68.3mのIV層上面である。北約2.3mにS I 02、南南東約4.7mにSK I 01、南約3.6mにSD 19、西北西約1.6mにSK 15が位置する。

<重複関係>SK 17に切られている。

<規模・形状>総長10.8m、幅0.06~0.48mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは5~20cmを測る。

<方向>西南西—東南東方向（E-13°-S）である。

<埋土>IV層起源の褐色土を含む暗褐色土主体を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>径19~26cm、深さ11~33cmの円形を呈するピット14個と長軸0.78~1.23m、短軸0.28~0.48mの橢円形状を呈する深さ16~24cmのピット2個を検出。溝の底面とピットはIV層を掘り込み底面としている。溝の底面はピットがあるために起伏に富んでいるが、ピットの底面は概ね平坦である。標高は67.7~68.3m、高低差は55.7cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺 物

出土しなかった。

S D 36溝跡

遺 構（第62・69図、写真図版35）

<位置・検出状況>B区北、III B 8 i・9 i グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高68.2~68.6mのIV層上面である。南東約3.8mにSK 28、南南西約2.6mにSA 02、南西約4.6mにSK 20が位置する。

<重複関係>重複する遺構はないが、南側を植栽痕によって切られている。

<規模・形状>総長4.80m、幅0.32~0.48mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは5~20cmを測る。

<方向>南南西—北北東方向（N-25°-E）である。

<埋土>IV層起源の褐色ブロックを含んだ暗褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面>起伏に富む。IV層を掘り込み底面としている。標高は68.2~68.6m、高低差は42cmを測り、南に向かうにつれて低くなっていく。

遺 物

出土しなかった。

S D42溝跡**遺構** (第67・69図、写真図版35)

<位置・検出状況> B区南、IVC 7 a ~ 7 d グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る斜面を呈する。本遺構より斜面下は傾斜が急になる。検出面は標高62.3~64mのIII~IV層面で、斜面上位から下位に向かうにつれてIII~IV層へと移行する。重複する遺構はない。北約6.2mにSK53、北約5.7mにSK54が位置する。

<規模・形状> 東側が調査区外にのびているため、全容ははっきりしない。確認された部分では総長20.08m、幅0.41~1.13mを測る。横断面形は逆台形状を呈し、深さは4~26cmを測る。

<方向> 東西南北方向 (W~5° ~ S) である。

<埋土> 黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面> 凹凸である。検出面から底部に、斜面上位から下位に向かうにつれてIII~IV層に移行するため、III~IV層を掘り込み底面としている。標高は62.3~63.95m、高低差は1.64mを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺物

埋土から土師器6gが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないと思われる。

S D43溝跡**遺構** (第64・69・70図、写真図版36)

<位置・検出状況> B区北、III C 9 c グリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高67.7~67.8mのIII~IV層にかけての漸移層である。重複する遺構はない。東約0.8mにSK26、南約1.2mにSI01が位置する。

<規模・形状> 総長2.36m、幅0.20~0.33mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは1~11cmを測る。

<方向> 西北西~東南東方向 (W~26° ~ N) である。

<埋土> 黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

<底面> 若干凹凸はあるが概ね平坦である。III~IV層の漸移層もしくはIV層を掘り込み底面としている。標高は67.6~67.8m、高低差は22cmを測り、東に向かうにつれて低くなる。

遺物 (第43図)

埋土から石器1点(2g)、陶磁器碗1点(2g)が出土した。このうち272の陶磁器碗を掲載した。産地は不明だが、在地の可能性がある。所属時期は18世紀代の可能性が想定される。

S D44溝跡**遺構** (第64・69図、写真図版36・37)

<位置・検出状況> B区北、III C 9 d・9 e・8 e・8 f グリッドに位置する。本遺構の周辺は北西から南東に下る緩斜面を呈する。本遺構の斜面下は近世墓が検出された部分以外は焼成時の削平を受けており、崖状となっている。検出面は標高67.7~68.2mのIII~IV層にかけての漸移層である。重複する遺構はない。北約0.4mにSK31・32、北約5mにSK I 04、南約1~2mに近世墓群、南西約0.8mにSK26、南西約6.2mにSD45が位置する。

<規模・形状> 総長13.52m、幅0.58~1.50mを測る。横断面形は逆台形状を呈し、深さは9~56cmを測る。

<方向>西南西－東北東方向（W-26° - S）である。

<埋土>2層に細分した。上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体とした自然堆積を呈する。

<底面>若干凹凸はあるが概ね平坦である。Ⅲ～Ⅳ層の漸移層もしくはⅣ層を掘り込み底面としている。標高は67.6～67.9m、高低差は32.3cmを測り、東に向かうにつれて低くなる。

遺 物

埋土から上部器154gが出土した。

S D45溝跡

遺 構（第64・69図、写真図版37）

<位置・検出状況>B区東、Ⅲ C 9 g・9 hグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高66.4～66.6mのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。重複する遺構はない。北東約6.2mにS D44が位置する。

<規模・形状>総長3.26m、幅0.27～0.45mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは2～10cmを測る。

<方向>東西方向（W-6° - N）である。

<埋土>黒色土を主体とした單層の自然堆積を呈する。

<底面>多少凹凸がある。標高は66.3～66.6m、高低差は29cmを測り、東に向かうにつれて低くなる。

遺 物

出土しなかった。

S D48溝跡

遺 構（第57・58図、写真図版38・39）

<位置・検出状況>A区、Ⅲ B 2 f～2 i・3 i・3 j・3 d・4 d・4 c・5 c・6 b・6 c・7 b・8 a・8 bに位置する。畑造成時の削平によって、本来一連のものが二つに分かれている。便宜的に北側と南側と呼ぶ。北側は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高71.2～72.0mのⅣ層上面である。南側は北東から南西に下る緩斜面を呈する。本遺構より斜面下は傾斜がより急峻となる。検出面は標高68.1～70.5mのⅢ～Ⅳ層にかけての漸移層である。重複する遺構はない。東約0.9mにSK69、東約1.2mにSI 06A・B・SK72、東約6.2mにSD49、南約2.5mにSK56、東約1.2mにSI 06A・B、西約1.2mにSD50が位置する。

<規模・形状>北側は総長22.20m、幅0.30～0.83mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは3～12cmを測る。底面標高71.1～72.0m、高低差は87cmを測り、西に向かうにつれて低くなっていく。南側は総長33m、幅0.39～1.31mを測る。横断面形は半円ないし逆台形状を呈し、深さは5～20cmを測る。

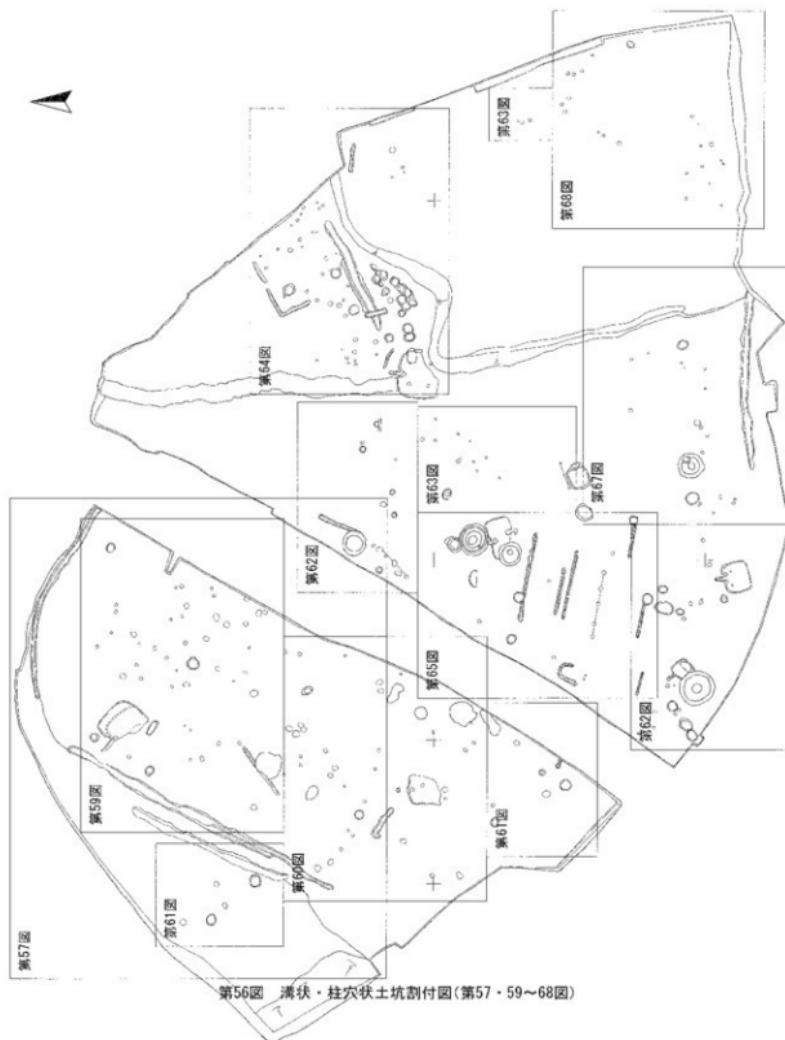
<方向>北側は西北西－東南東方向（W-30° - N）、南側は南南西－北北東方向（W-36° - S）である。

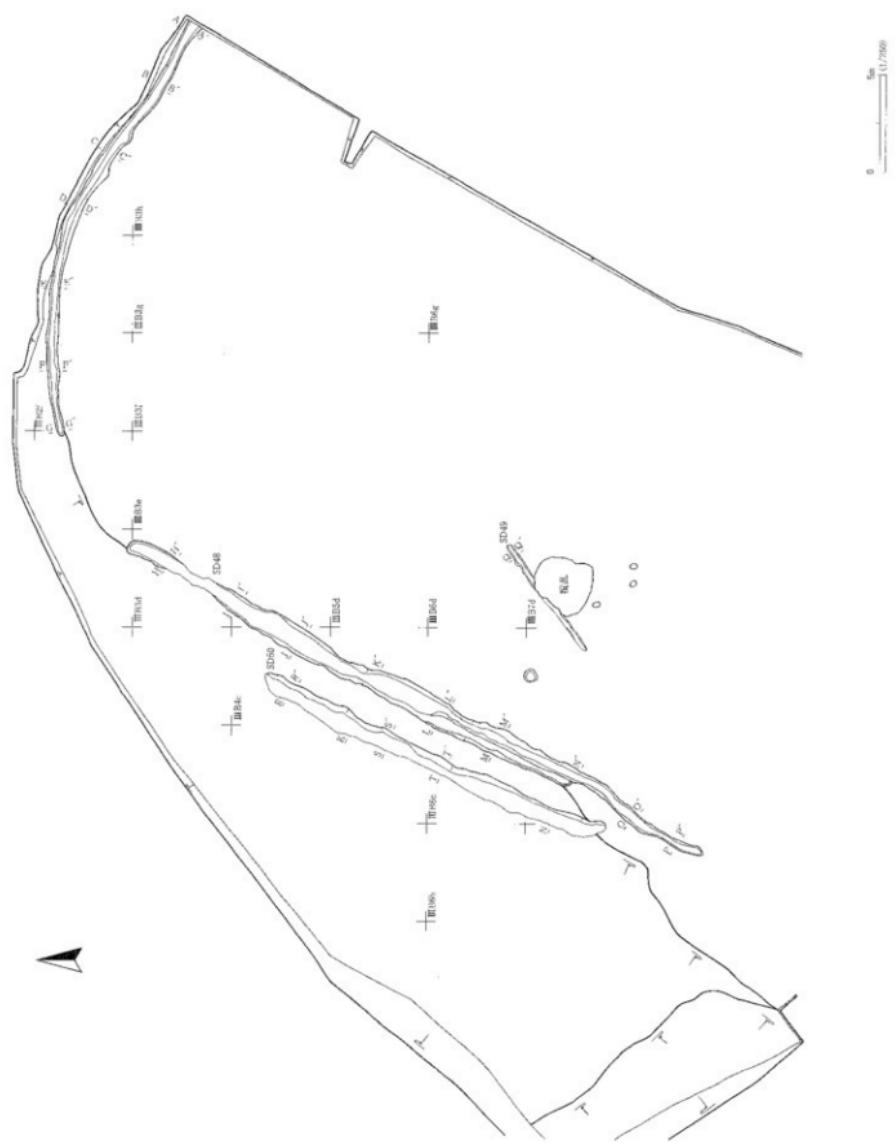
<埋土>北側と南側の北半は暗褐色土、南側の南半は黒褐色土を主体とした單層の自然堆積を呈する。

<底面>凹凸に富む。標高は68～70.4m、高低差は242cmを測り、南に向かうにつれて低くなる。

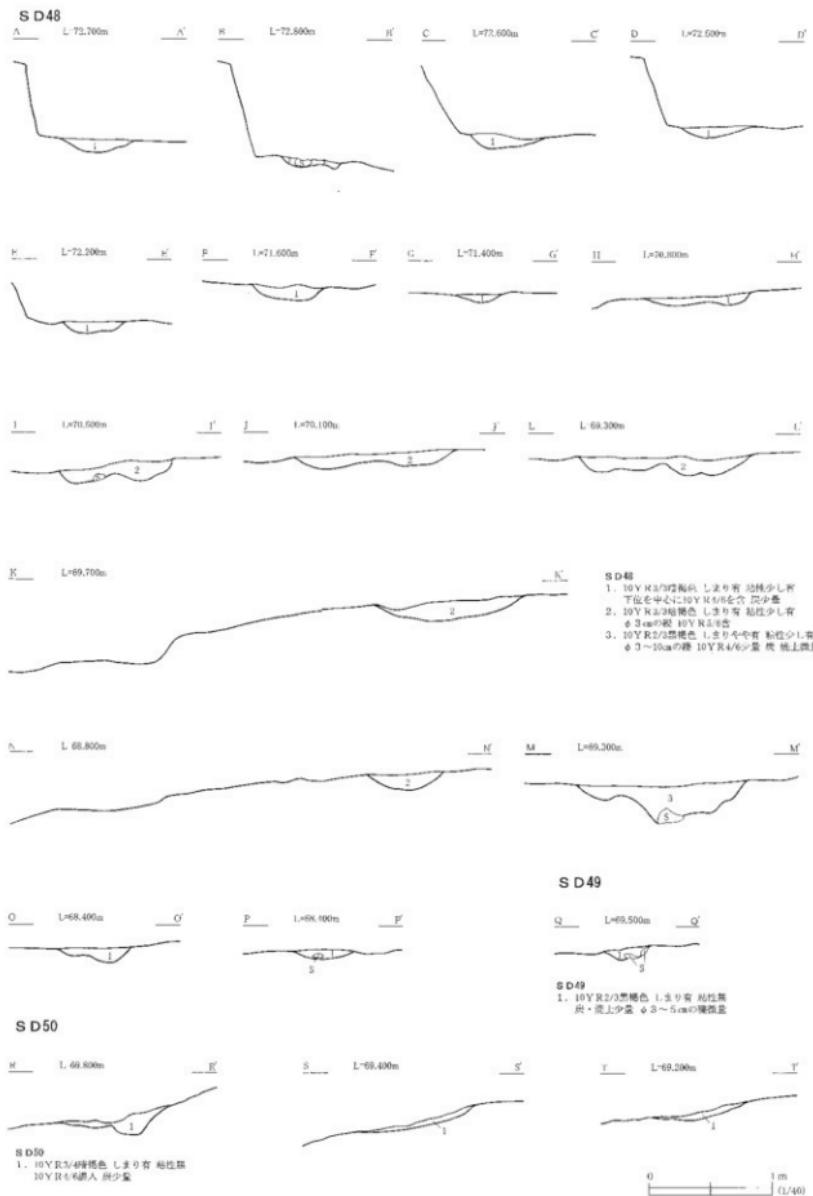
遺 物

埋土から縄文土器16g、陶磁器2gが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないとと思われる。





第57図 SD 48~50溝跡(1)



第58図 S D48~50溝跡(2)

S D 49溝跡

遺構 (第57・58図、写真図版37)

＜位置・検出状況＞A区北、III B 6 d・7 c・7 dグリッドに位置する。本遺構の周辺は北から南に下る緩斜面を呈する。検出面は標高69.2～69.4mのIV層上面である。重複する遺構はないが、中央付近を擾乱によって切られている。南東約9.3mにSK76、西約6.2mにSD48が位置する。

＜規模・形状＞総長6.75m、幅0.20～0.37mを測る。横断面形は逆台形状を呈し、深さは4～9cmを測る。

＜方向＞西南西～東北東方向 (W-36° - S) である。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞凹凸である。標高は69.1～69.3m、高低差22.5cmを測り、南に向かうにつれて低くなっている。

遺物

出土しなかった。

S D 50溝跡

遺構 (第57・58図、写真図版39)

＜位置・検出状況＞A区北、III B 4 c・5 b・5 c・6 b・7 a・7 bグリッドに位置する。本遺構の周辺は北東から南西に下る斜面を呈する。本遺構の斜面下はより傾斜が急になる。検出面は標高68.3～68.4mのIV層上面である。東約1.2mにSD48、西約0.2mにSK84、西約5.9mにSK83が位置する。

＜規模・形状＞総長19.02m、幅0.65～1.35mを測る。横断面形は半円ないし逆台形状を呈し、深さは7～23cmを測る。

＜方向＞南南西～北北東方向 (N-26° - E) である。

＜埋土＞褐色土混入した暗褐色土を主体とする単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞起伏に富む。標高は68.4～69.2m、高低差は78.9cmを測り、南に向かうにつれて低くなっている。

遺物

埋土から縄文土器15gが出土した。流れ込みの遺物で、遺構に伴わないものと思われる。

柱穴状土坑

遺構 (第59～68図、第1表)

調査区で検出された柱穴は206基を数え、削平が著しいB区北と中央南を除く調査区各地から検出された。平面形は円形・楕円形・方形・隅丸方形・不整形などがあり、規模は20～94cm、深さは3～56cmを測る。掘り方をもった柱穴や、独立柱建物跡を構成する柱穴は確認されていないが、一部柱穴列を構成する柱穴は検出された。埋土は黒褐色土～暗褐色土主体の自然堆積を呈している。

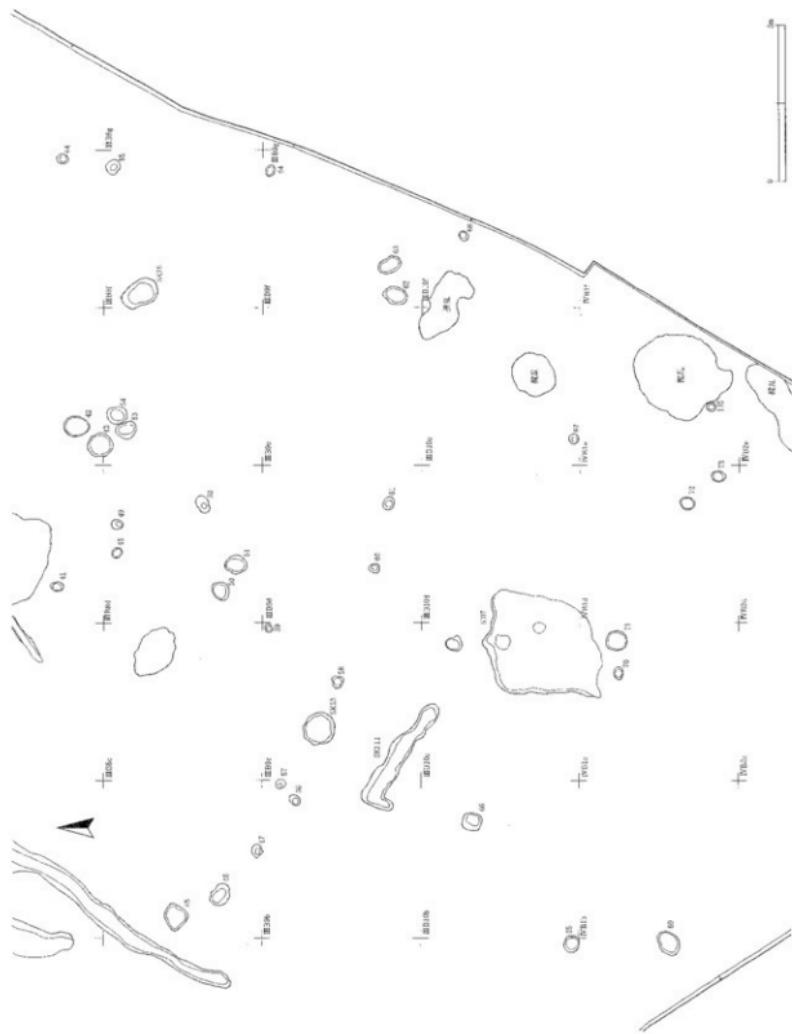
これらの柱穴からは確実に遺構に伴うと思われる遺物は出土しなかった。そのため、所属時期は不明である。(150・151は欠番)

遺物

P 20 埋土から土師器3.37gが出土した。



第59図 柱穴状土坑(1)



第60図 柱穴状土坑(2)



第61図 柱穴状土坑(3)

5 遺構外出土遺物

試掘・掘出時に調査区各地から縄文土器8,962 g、土師器1,272 g、陶磁器26 g、石器425 g、金属製品46 g、ガラスが4 g出土した。(A区からは縄文土器5,782 g・土師器183 g・陶磁器57 g・石器73 g・金属製品9 g出土。B区からは縄文土器3,180 g・土師器1,050 g・陶磁器51 g・石器356 g・金属製品36 g・ガラス4 g出土。)

縄文土器は烟造成時の削平を比較的免れた調査区斜面下に位置するA区南・B区東から大半が出土している。これらは斜面上位からの流れ込みの遺物であると考えられる。土師器はA区北・B区西・中央から比較的多く出土しており、竪穴住居跡の分布状況と対応している状況がうかがえる。陶磁器・金属製品・ガラスはA区南・B区中央から出土している傾向が認められる。B区中央は近世墓域があることから、墓域の位置と対応している状況がうかがえる。しかし、A区南では擾乱から出土しているものがほとんどである。斜面上位の流れ込みの遺物が烟造成時に消滅した遺構の遺物である可能性が想定される。

なお、遺構外に出た金属製品の中には鉄滓もあるが、近現代の遺物の可能性もあるのでここでは取り扱わない。

縄文土器（第70・71図、写真図版49）

<斜縄文（L R）>273・276・287・288・292はが施文されている。275・288・292は口縁部がやや湾曲（外反）して立ち上がる。胎土に織維含。

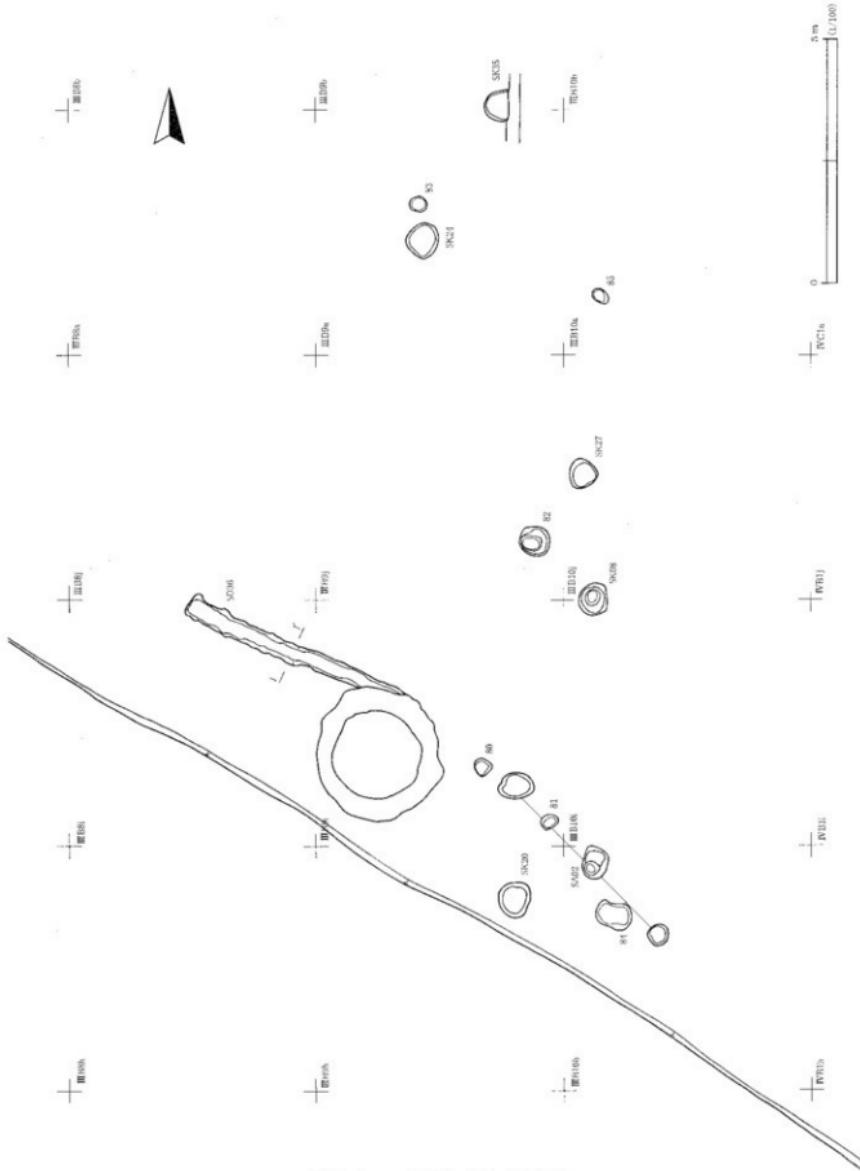
<斜縄文（R L）>277・279・282・283・285・293～295・299～305・307・309・314は斜縄文（R L）が施文されている。283・300・301は口縁部直線的に立ち上がる。277は磨り消しが施されている。胎土に織維含。

<羽状縄文>284・286・287・289・290・291・292・315は羽状縄文である。287・290・291・287はR L + R L、非結節、菱形文である。284・286・292・315はL R + R L、非結節、菱形文である。289はR L + R L、結節、菱形文である。

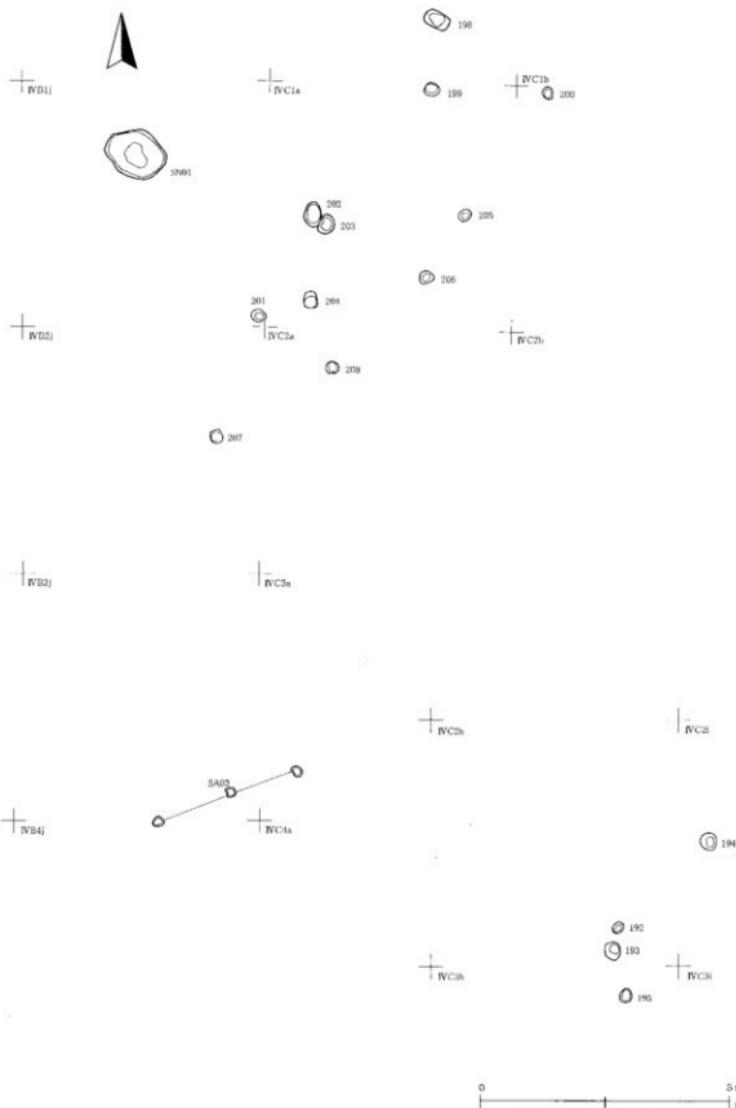
<ループ状縄文>274・296・298・311・312・313ループ状縄文である。C字と逆C字のいずれも認められる。

<S字状連鎖文>275はS字状連鎖文である。

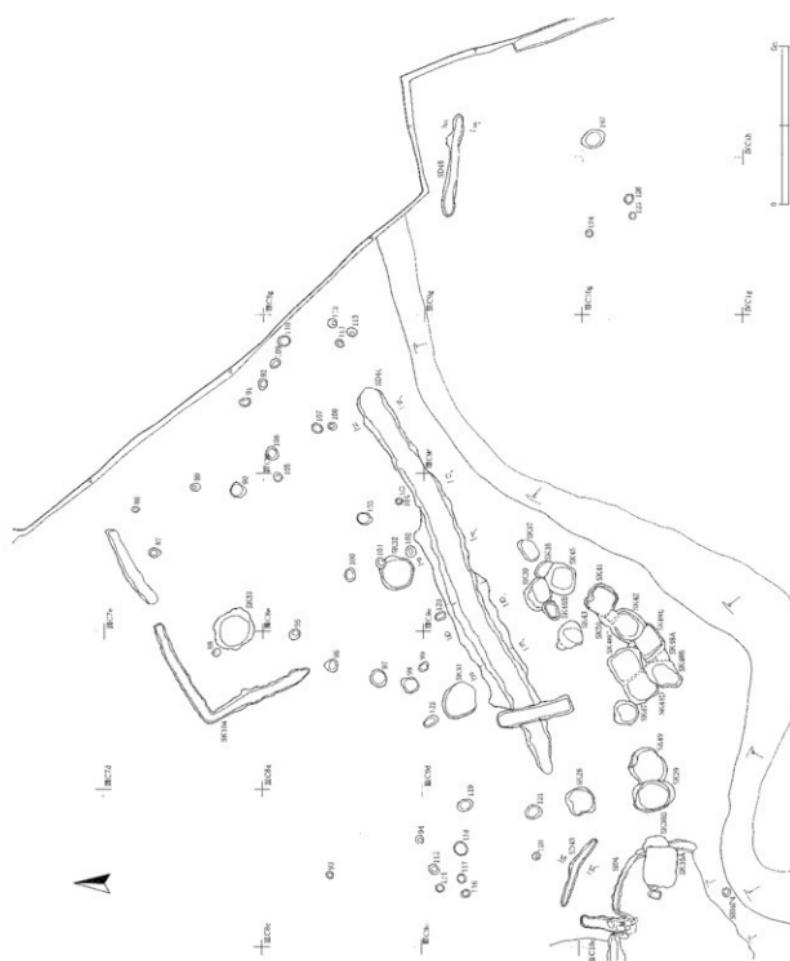
<単軸絡条体>278・310は単軸絡条体である。撓り方は残存状況不良のため不明。



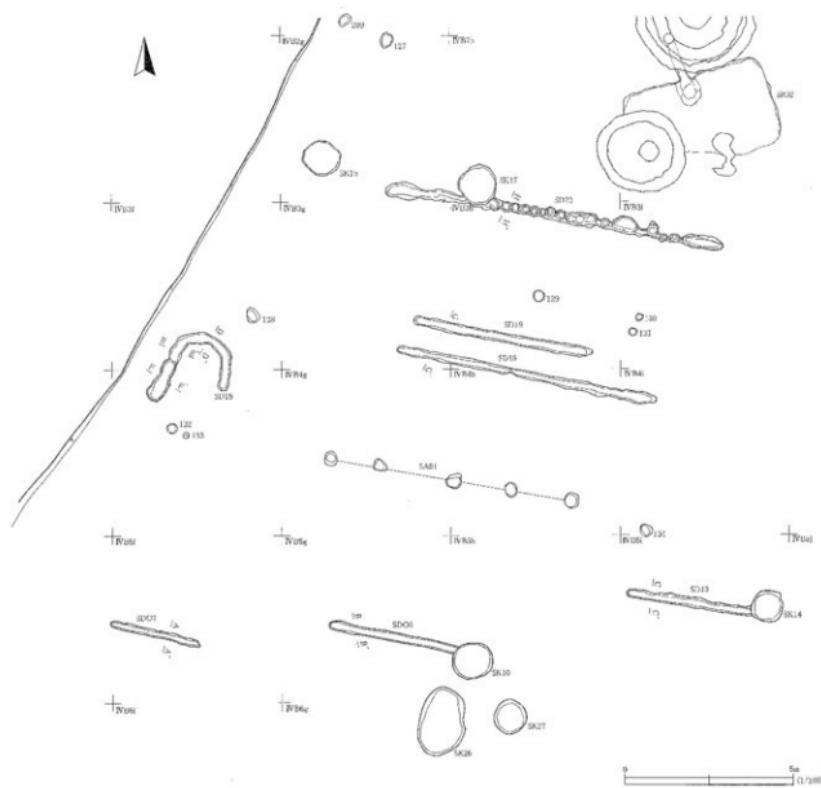
第62図 SD 36溝跡・柱穴状土坑(4)



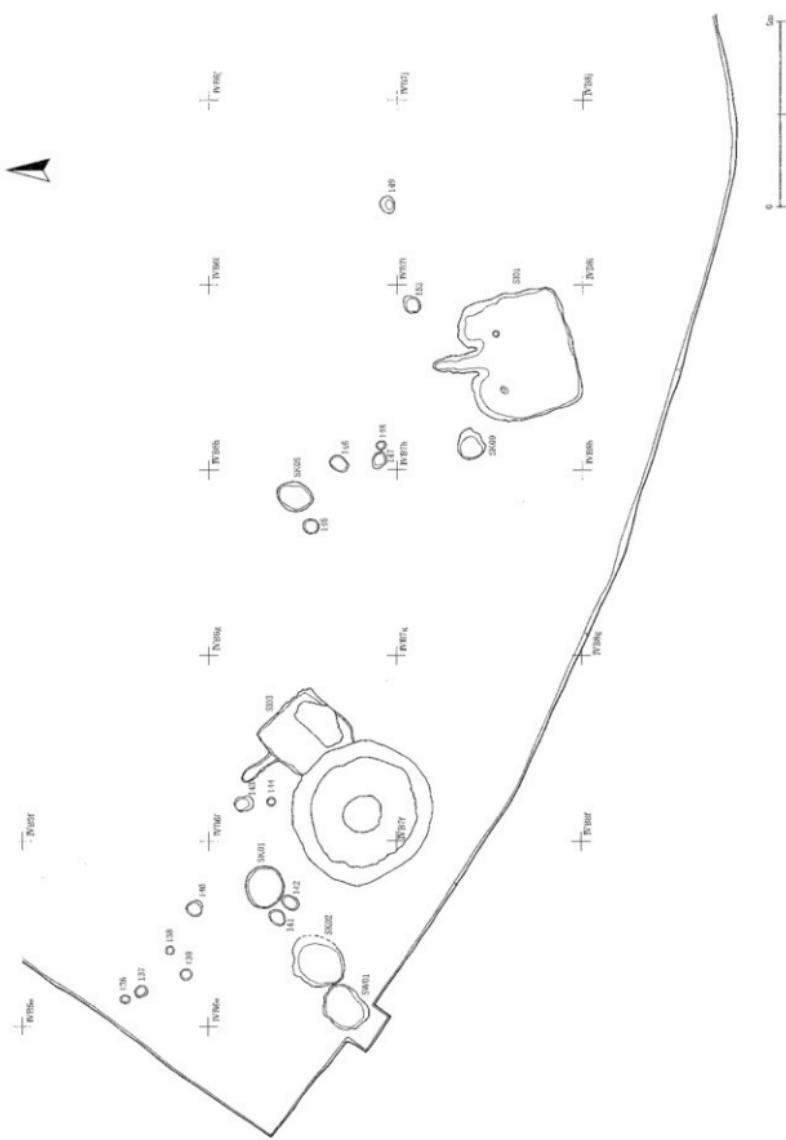
第63図 柱穴状土坑(5)



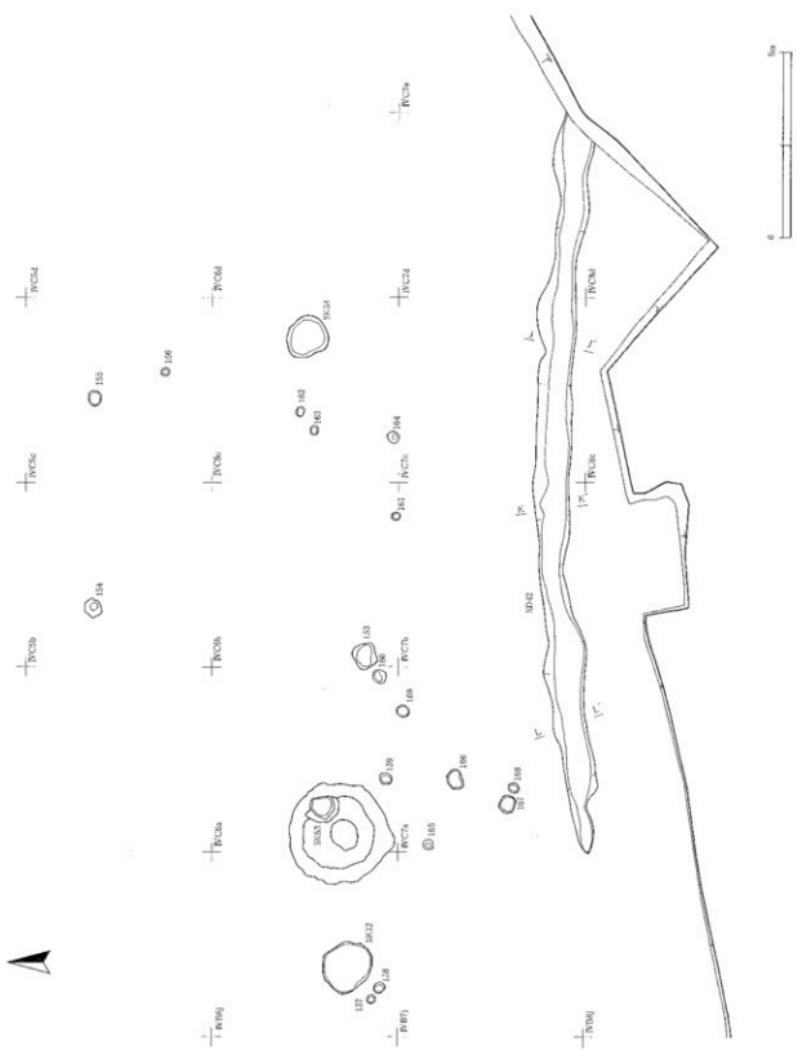
第64図 S D 43~45溝跡・柱穴土坑(6)



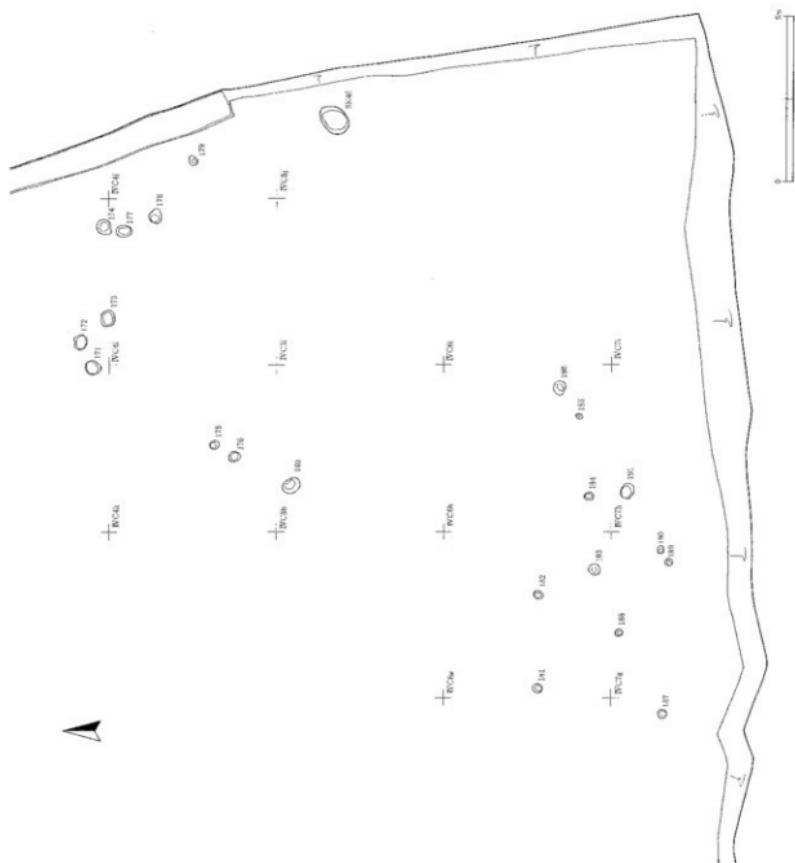
第65図 SD 07・08・13・15・18・19・23溝跡・柱穴状土坑(7)



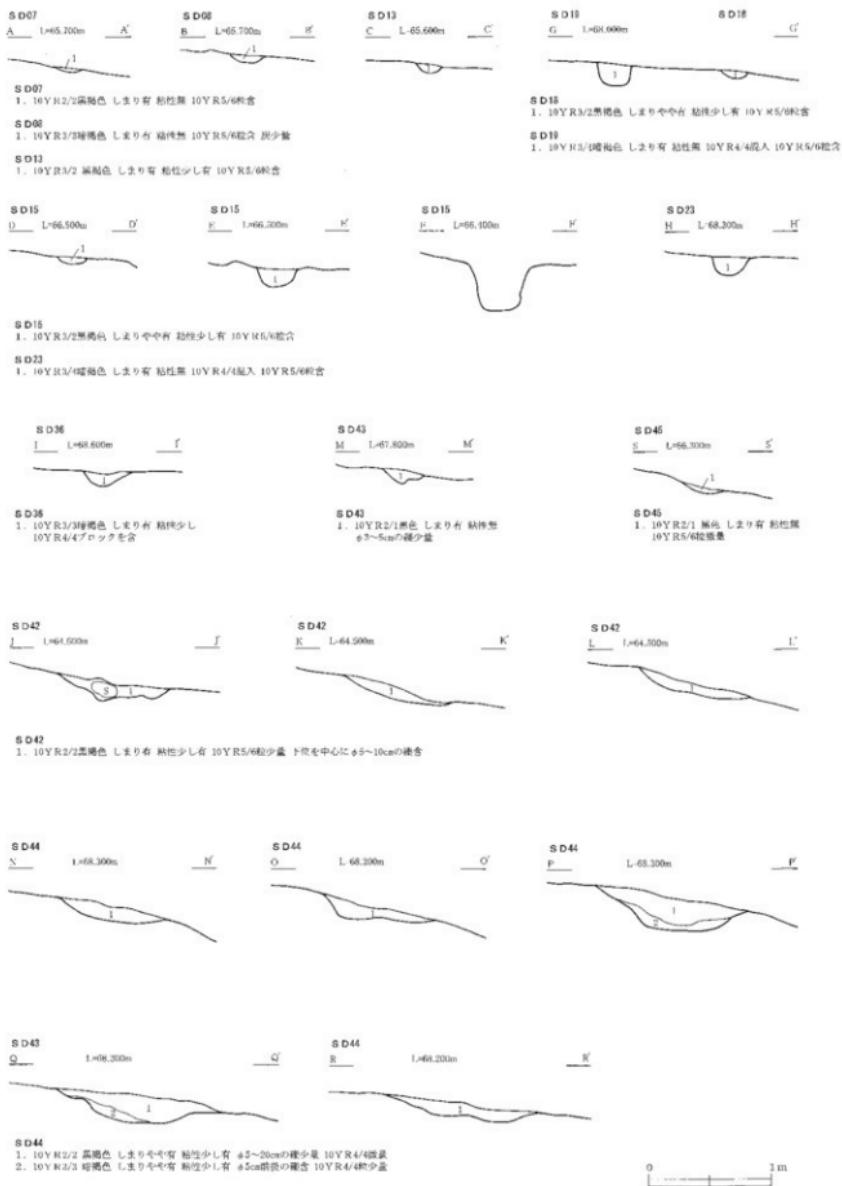
第66図 柱穴状土坑(8)



第67図 SD 48溝跡・柱穴状土坑(9)



第68図 柱穴状土坑(10)

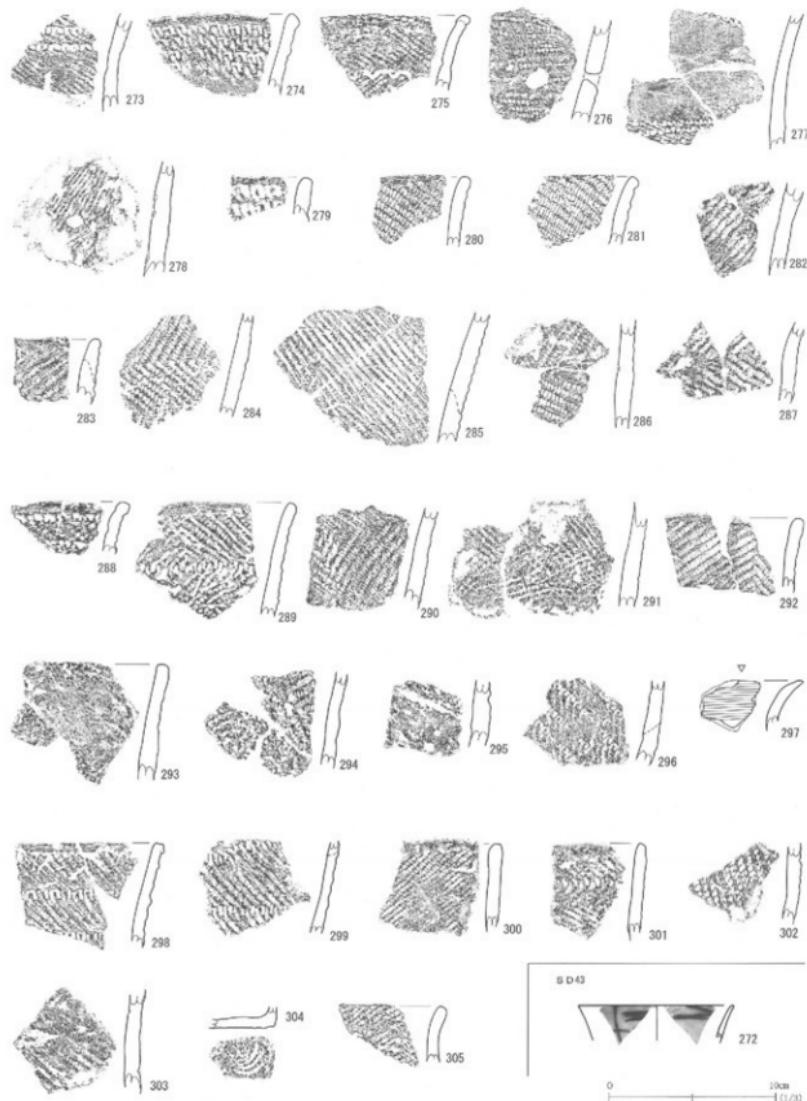


第69図 SD 07・08・13・18・19・23・36・43~45溝跡

第1表 柱穴状土坑観察表

| No. | グリッド名 | 径(cm) | 深さ(cm) | 検出面標高(m) | 底面標高(m) | 備考 | No. | グリッド名 | 径(cm) | 深さ(cm) | 検出面標高(m) | 底面標高(m) | 備考 |
|-----|------------|-------|--------|----------|---------|--------|-----|------------|-------|--------|----------|---------|------|
| 1 | III B 3 g | 42×35 | 14.9 | 71.09 | 71.07 | | 70 | IV B 1 c | 30×28 | 5.5 | 66.65 | 66.59 | |
| 2 | III B 3 g | 35×31 | 10.3 | 71.09 | 71.03 | | 71 | IV B 1 c | 66×61 | 19.1 | 66.82 | 66.63 | |
| 3 | III B 3 g | 44×34 | 16.8 | 71.09 | 71.03 | | 72 | IV B 1 d | 43×36 | 8.1 | 66.96 | 66.88 | |
| 4 | III B 3 h | 38×30 | 13.8 | 71.09 | 71.09 | | 73 | IV B 1 d | 50×35 | 23.4 | 66.95 | 66.71 | |
| 5 | III B 4 d | 43×38 | 11.8 | 71.60 | 70.26 | | 74 | IV B 2 c | 38×38 | 11.9 | 66.34 | 66.22 | |
| 6 | III B 4 f | 71×69 | 20.2 | 71.09 | 70.62 | | 75 | IV B 2 d | 60×52 | 8.5 | 66.52 | 66.13 | |
| 7 | III B 4 f | 45×38 | 19.9 | 71.09 | 70.50 | | 76 | IV B 3 c | 90×71 | 17.0 | 65.97 | 65.80 | |
| 8 | III B 4 f | 46×40 | 20.3 | 71.10 | 70.42 | | 77 | IV A 5 j | 70×65 | 28.8 | 68.19 | 68.20 | |
| 9 | III B 4 g | 67×62 | 22.6 | 71.09 | 70.70 | | 78 | III B 6 a | 67×55 | 24.8 | 67.97 | 67.72 | |
| 10 | III B 4 g | 26×26 | 8.5 | 71.09 | 70.71 | | 79 | IV B 6 a | 58×43 | 18.7 | 67.51 | 67.33 | |
| 11 | III B 4 g | 50×60 | 25.4 | 71.10 | 70.38 | | 80 | III B 9 i | 36×31 | 14.1 | 68.09 | 67.95 | |
| 12 | III B 5 d | 40×35 | 10.9 | 71.60 | 69.62 | | 81 | III B 9 i | 35×29 | 11.0 | 68.09 | 67.89 | |
| 13 | III B 5 d | 58×42 | 18.3 | 71.60 | 69.52 | | 82 | III B 9 j | 63×59 | 18.0 | 67.98 | 67.80 | |
| 14 | III B 5 e | 28×24 | 10.7 | 70.50 | 69.94 | | 83 | III B 9 a | 31×31 | 5.3 | 68.10 | 68.00 | |
| 15 | III B 5 e | 20×20 | 11.0 | 70.50 | 69.85 | | 84 | III B 10 i | 71×65 | 17.7 | 67.91 | 67.73 | |
| 16 | III B 5 f | 39×30 | 13.9 | 70.50 | 70.17 | | 85 | III C 10 a | 40×27 | 12.4 | 67.78 | 67.69 | |
| 17 | III B 5 f | 75×52 | 14.0 | 70.50 | 70.03 | | 86 | III C 7 d | 25×22 | 13.3 | 69.08 | 68.91 | |
| 18 | III B 5 f | 24×21 | 9.5 | 70.50 | 70.23 | | 87 | III C 7 e | 36×31 | 16.9 | 69.18 | 69.01 | |
| 19 | III D 5 f | 43×29 | 10.8 | 70.50 | 70.35 | | 88 | III C 7 e | 25×18 | 25.1 | 69.17 | 68.92 | |
| 20 | III D 5 g | 49×38 | 9.5 | 70.50 | 70.36 | 土師器片出土 | 89 | III C 7 e | 29×26 | 11.5 | 68.86 | 68.75 | |
| 21 | III B 5 g | 66×46 | 17.5 | 69.11 | 69.20 | | 90 | III C 7 e | 50×44 | 15.7 | 68.75 | 68.60 | |
| 22 | III B 5 g | 34×31 | 7.0 | 70.00 | 69.66 | | 91 | III C 7 f | 35×26 | 21.1 | 68.33 | 68.12 | |
| 23 | III B 5 g | 42×29 | 7.9 | 70.00 | 69.58 | | 92 | III C 7 f | 35×29 | 31.5 | 68.25 | 68.94 | |
| 24 | III B 5 g | 60×53 | 20.4 | 70.00 | 69.52 | | 93 | III C 8 c | 22×19 | 9.4 | 68.64 | 68.51 | |
| 25 | III B 5 h | 35×27 | 14.0 | 70.00 | 69.76 | | 94 | III C 8 c | 26×25 | 13.6 | 68.79 | 68.25 | |
| 26 | III B 5 h | 46×40 | 13.9 | 70.00 | 69.71 | | 95 | III C 8 d | 39×32 | 12.8 | 68.78 | 68.65 | |
| 27 | III B 5 d | 47×35 | 11.7 | 71.61 | 69.47 | | 96 | III C 8 d | 42×42 | 13.9 | 68.71 | 68.58 | |
| 28 | III B 5 d | 45×34 | 6.8 | 68.72 | 68.36 | | 97 | III C 8 d | 59×47 | 14.8 | 68.58 | 68.43 | |
| 29 | III B 6 f | 63×42 | 19.6 | 70.50 | 69.85 | | 98 | III C 8 d | 58×52 | 16.4 | 68.42 | 68.26 | |
| 30 | III B 6 f | 25×23 | 17.8 | 69.11 | 68.66 | | 99 | III C 8 d | 33×23 | 12.0 | 68.37 | 68.25 | |
| 31 | III B 6 f | 40×33 | 12.0 | 69.11 | 68.70 | | 100 | III C 8 e | 10×30 | 31.8 | 68.54 | 68.23 | |
| 32 | III B 7 f | 94×69 | 18.5 | 69.12 | 68.43 | | 101 | III C 8 e | 35×27 | 14.2 | 68.37 | 68.23 | |
| 33 | III B 6 g | 30×20 | 10.8 | 69.11 | 68.79 | | 102 | III C 8 e | 34×31 | 39.1 | 68.24 | 67.85 | |
| 34 | III B 6 g | 84×64 | 14.5 | 69.11 | 69.25 | | 103 | III C 8 e | 47×39 | 17.6 | 68.35 | 68.17 | |
| 35 | III B 6 g | 50×48 | 20.8 | 69.11 | 68.84 | | 104 | III C 8 e | 22×22 | 17.8 | 68.10 | 67.92 | |
| 36 | III B 6 h | 47×42 | 17.0 | 69.11 | 69.44 | | 105 | III C 8 e | 27×23 | 23.3 | 68.53 | 68.30 | |
| 37 | III B 6 h | 35×32 | 13.7 | 69.11 | 69.44 | | 106 | III C 8 f | 41×37 | 21.4 | 68.44 | 68.23 | |
| 38 | III B 6 h | 53×46 | 18.7 | 69.11 | 69.08 | | 107 | III C 8 f | 35×27 | 10.7 | 68.18 | 68.05 | |
| 39 | III B 7 g | 69×65 | 19.3 | 69.11 | 68.88 | | 108 | III C 8 f | 27×23 | 18.8 | 68.13 | 67.94 | |
| 40 | III B 7 g | 45×42 | 16.1 | 69.11 | 68.83 | | 109 | III C 8 f | 34×27 | 11.3 | 68.16 | 68.05 | |
| 41 | III B 7 d | 42×30 | 15.5 | 68.72 | 68.09 | | 110 | III C 8 f | 39×36 | 15.0 | 68.03 | 67.88 | |
| 42 | III B 7 e | 81×64 | 19.6 | 69.02 | 68.21 | | 111 | III C 8 f | 29×21 | 15.8 | 67.74 | 67.58 | |
| 43 | III B 7 e | 76×72 | 21.8 | 69.02 | 68.13 | | 112 | III C 8 f | 28×28 | 31.8 | 67.66 | 67.34 | |
| 44 | III B 7 f | 34×32 | 9.9 | 69.01 | 68.67 | | 113 | III C 8 f | 32×30 | 21.7 | 67.62 | 67.40 | |
| 45 | III B 8 b | 91×72 | 11.3 | 67.63 | 67.14 | | 114 | III C 9 c | 26×24 | 10.9 | 68.29 | 68.18 | |
| 46 | III B 8 b | 72×55 | 23.3 | 67.63 | 67.01 | | 115 | III C 9 c | 35×29 | 8.9 | 68.32 | 68.23 | |
| 47 | III B 8 b | 43×35 | 14.7 | 67.63 | 67.13 | | 116 | III C 9 c | 32×25 | 12.4 | 68.19 | 68.07 | |
| 48 | III B 8 d | 35×29 | 3.8 | 68.72 | 68.11 | | 117 | III C 9 c | 29×28 | 16.3 | 68.21 | 68.03 | |
| 49 | III B 8 d | 35×31 | 8.5 | 68.72 | 68.08 | | 118 | III C 9 c | 44×43 | 6.3 | 68.24 | 68.18 | |
| 50 | III B 8 d | 59×51 | 7.1 | 67.62 | 67.81 | | 119 | III C 9 c | 53×38 | 8.6 | 68.18 | 68.10 | |
| 51 | III B 8 d | 71×60 | 15.2 | 67.62 | 67.74 | | 120 | III C 9 c | 24×23 | 13.6 | 67.97 | 67.83 | |
| 52 | III B 8 d | 58×39 | 21.8 | 67.62 | 67.82 | | 121 | III C 9 c | 50×49 | 12.8 | 67.99 | 67.87 | |
| 53 | III B 8 e | 66×53 | 15.9 | 69.02 | 68.18 | | 122 | III C 9 d | 47×29 | 15.6 | 68.35 | 68.19 | |
| 54 | III B 8 e | 60×53 | 17.4 | 69.02 | 68.18 | | 123 | III C 9 c | 35×25 | 7.9 | 68.21 | 68.14 | |
| 55 | III B 8 f | 44×42 | 19.8 | 69.02 | 68.45 | | 124 | III C 10 g | 21×24 | 8.4 | 66.02 | 66.94 | |
| 56 | III B 9 b | 39×29 | 10.1 | 67.63 | 67.22 | | 125 | III C 10 g | 22×20 | 6.9 | 65.80 | 65.74 | |
| 57 | III B 9 b | 34×31 | 37.0 | 67.63 | 67.02 | | 126 | III C 10 g | 32×27 | 9.8 | 65.78 | 65.68 | |
| 58 | III B 9 c | 40×34 | 10.4 | 67.63 | 67.36 | | 127 | III B 2 g | 48×38 | 10.9 | 67.25 | 67.14 | |
| 59 | III B 9 c | 27×23 | 13.6 | 67.62 | 67.60 | | 128 | IV B 3 f | 47×37 | 16.9 | 66.45 | 66.28 | |
| 60 | III B 9 d | 33×31 | 13.2 | 67.63 | 67.48 | | 129 | IV B 3 h | 32×29 | 8.0 | 66.43 | 66.35 | |
| 61 | III B 9 d | 43×32 | 10.4 | 67.62 | 67.53 | | 130 | IV B 3 i | 23×19 | 3.4 | 66.26 | 66.22 | |
| 62 | III B 9 f | 74×57 | 13.6 | 68.12 | 67.79 | | 131 | IV B 3 i | 24×22 | 6.8 | 66.26 | 66.19 | |
| 63 | III B 9 f | 74×45 | 11.7 | 68.12 | 67.82 | | 132 | IV B 4 f | 30×36 | 7.2 | 66.00 | 65.92 | P 16 |
| 64 | III B 9 f | 30×29 | 19.0 | 68.12 | 67.60 | | 133 | IV B 4 f | 29×19 | 9.2 | 65.98 | 65.89 | P 17 |
| 65 | III B 10 a | 56×46 | 19.0 | 67.34 | 66.28 | | 134 | IV B 4 i | 37×36 | 13.0 | 65.69 | 65.56 | |
| 66 | III B 10 b | 59×57 | 31.7 | 68.42 | 66.61 | | 135 | IV B 1 o | 28×26 | 16.0 | 67.09 | 66.93 | |
| 67 | III B 10 c | 31×30 | 14.6 | 68.13 | 67.26 | | 136 | IV B 5 e | 25×24 | 25.7 | 65.32 | 65.06 | P 1 |
| 68 | III B 10 l | 32×31 | 19.0 | 68.12 | 67.69 | | 137 | IV B 5 e | 35×27 | 22.1 | 65.30 | 65.08 | P 2 |
| 69 | IV B 1 a | 96×66 | 18.4 | 67.34 | 66.01 | | 138 | IV B 5 e | 23×22 | 19.6 | 65.24 | 65.04 | P 3 |

| No. | グリッド名 | 深さ(cm) | 淀山面標高(m) | 底面標高(m) | 他考 | No. | グリッド名 | 深さ(cm) | 淀山面標高(m) | 底面標高(m) | 備考 |
|-----|---------|--------|----------|---------|------------|-----|------------|--------|----------|---------|-------|
| 139 | IVB 5 e | 33×29 | 18.7 | 65.23 | 65.04 P 4 | 176 | IVC 4 h | 33×31 | 11.4 | 62.63 | 62.51 |
| 140 | IVB 5 e | 43×42 | 11.2 | 65.19 | 65.19 P 7 | 177 | IVC 4 i | 46×34 | 14.8 | 62.55 | 62.40 |
| 141 | IVB 6 e | 44×37 | 16.5 | 65.09 | 64.92 P 6 | 178 | IVC 4 i | 46×35 | 14.5 | 62.49 | 62.26 |
| 142 | IVB 6 e | 46×35 | 15.3 | 65.07 | 64.91 | 179 | IVC 4 j | 32×25 | 13.9 | 62.15 | 62.01 |
| 143 | IVB 6 f | 51×39 | 23.1 | 65.18 | 64.95 | 180 | IVC 5 h | 53×43 | 22.4 | 62.59 | 62.28 |
| 144 | IVB 6 f | 22×21 | 10.0 | 65.16 | 65.06 P 10 | 181 | IVC 6 g | 31×27 | 16.4 | 61.92 | 61.76 |
| 145 | IVB 6 g | 42×41 | 9.1 | 65.19 | 65.10 P 12 | 182 | IVC 6 g | 27×25 | 21.5 | 61.71 | 61.50 |
| 146 | IVB 6 h | 51×37 | 13.3 | 65.12 | 64.98 P 13 | 183 | IVC 6 h | 33×32 | 36.5 | 61.38 | 61.02 |
| 147 | IVB 6 h | 50×59 | 18.8 | 64.96 | 64.78 P 14 | 184 | IVC 6 h | 27×23 | 26.8 | 61.30 | 61.04 |
| 148 | IVB 6 h | 25×25 | 6.8 | 64.95 | 64.88 P 15 | 185 | IVC 6 h | 27×21 | 11.5 | 61.25 | 61.14 |
| 149 | IVB 6 i | 47×38 | 14.8 | 64.73 | 64.58 | 186 | IVC 6 h | 45×35 | 10.7 | 61.30 | 61.19 |
| 150 | IVB 7 h | 41×10 | 18.7 | 64.79 | 64.61 | 187 | IVC 7 f | 26×26 | 11.6 | 61.34 | 61.22 |
| 151 | IVC 6 b | 70×60 | 20.7 | 64.08 | 63.87 | 188 | IVC 7 f | 22×22 | 14.0 | 61.34 | 61.20 |
| 154 | IVC 5 b | 53×47 | 18.9 | 64.49 | 64.31 | 189 | IVC 7 g | 23×22 | 21.0 | 60.99 | 60.75 |
| 155 | IVC 5 c | 41×34 | 19.4 | 65.03 | 64.83 | 190 | IVC 7 g | 23×18 | 10.7 | 61.02 | 60.91 |
| 156 | IVC 5 c | 22×22 | 6.0 | 64.80 | 64.58 | 191 | IVC 7 h | 42×37 | 29.9 | 61.11 | 60.81 |
| 157 | IVB 6 j | 25×23 | 11.1 | 64.61 | 64.50 | 192 | IVC 2 h | 25×21 | 8.2 | 63.78 | 63.69 |
| 158 | IVB 6 j | 30×28 | 18.0 | 64.66 | 64.38 | 193 | IVC 2 h | 38×32 | 12.0 | 63.73 | 63.61 |
| 159 | IVC 6 a | 35×31 | 11.9 | 64.26 | 64.14 | 194 | IVC 2 i | 36×29 | 12.0 | 63.82 | 63.70 |
| 160 | IVC 6 a | 37×37 | 16.1 | 64.08 | 63.92 | 195 | IVC 3 h | 29×22 | 8.1 | 63.58 | 63.50 |
| 161 | IVC 6 b | 23×21 | 14.2 | 63.66 | 63.51 | 196 | III B 6 g | 65×55 | 11.4 | 69.24 | 69.12 |
| 162 | IVC 6 c | 28×22 | 10.1 | 64.50 | 64.40 | 197 | III C 10 h | 75×59 | 20.5 | 65.86 | 65.66 |
| 163 | IVC 6 c | 28×22 | 8.1 | 64.55 | 64.47 | 198 | III C 10 h | 52×31 | 16.6 | 67.46 | 67.29 |
| 164 | IVC 6 c | 32×31 | 17.7 | 64.39 | 64.21 | 199 | IVC 1 a | 32×26 | 16.2 | 67.27 | 67.11 |
| 165 | IVC 7 a | 28×26 | 18.0 | 64.25 | 64.07 | 200 | IVC 1 b | 23×20 | 10.5 | 67.20 | 67.09 |
| 166 | IVC 7 a | 52×40 | 9.1 | 64.04 | 63.95 | 201 | IVB 1 j | 30×25 | 55.9 | 66.74 | 66.18 |
| 167 | IVC 7 a | 46×38 | 10.2 | 63.92 | 63.82 | 202 | IVC 1 a | 50×35 | 15.9 | 67.00 | 66.84 |
| 168 | IVC 7 a | 30×28 | 10.5 | 63.84 | 63.74 | 203 | IVC 1 a | 42×28 | 22.1 | 66.95 | 66.73 |
| 169 | IVC 7 a | 34×33 | 9.6 | 64.08 | 63.99 | 204 | IVC 1 a | 32×29 | 34.8 | 66.69 | 66.35 |
| 171 | IVC 3 i | 48×42 | 11.7 | 62.96 | 62.84 | 205 | IVC 1 a | 26×22 | 10.3 | 66.82 | 66.72 |
| 172 | IVC 3 i | 47×38 | 9.6 | 62.92 | 62.82 | 206 | IVC 1 a | 29×25 | 47.4 | 66.72 | 66.24 |
| 173 | IVC 3 i | 47×41 | 16.7 | 62.76 | 62.59 | 207 | IVB 2 j | 28×24 | 33.3 | 66.58 | 66.25 |
| 174 | IVC 3 i | 46×40 | 14.0 | 62.57 | 62.43 | 208 | IVC 2 n | 28×28 | 11.2 | 66.82 | 66.40 |
| 175 | IVC 4 h | 28×27 | 13.0 | 62.69 | 62.56 | 209 | IVB 1 g | 41×30 | 8.8 | 67.28 | 67.20 |



第70図 S D 43溝跡・遺構外出土遺物(1)



第71図 遺構外出土遺物(2)

石器（第71図、写真図版49・50）

320は所謂凹基鐵、321は所謂平基鐵である。317～319・322～329は不定形石器である。

土師器（第71図、写真図版49）

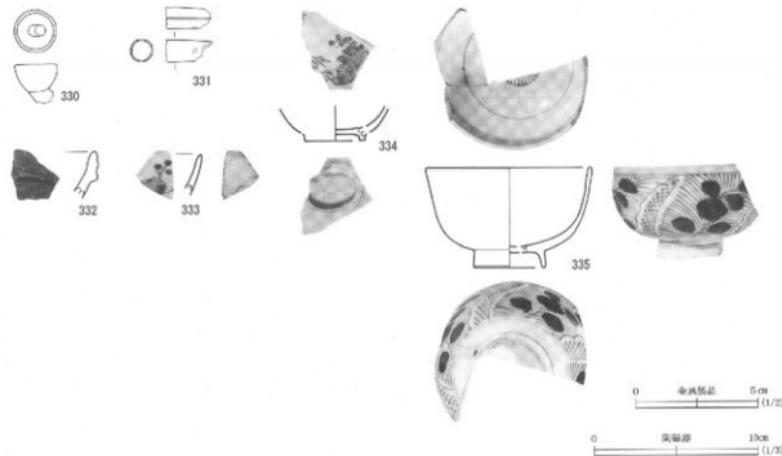
B区東端より出土した316の1点を図示した。非クロコ成形の丸底の坏もしくは浅鉢状のものである。底部から若干丸みをもって口縁部まで立ち上がり、内面黒色処理・ヘラミガキ、外面下半はヘラケズリ、上半はヘラミガキ調整が施されている。

金属製品（第71図、写真図版50）

330は煙管の雁首。331は煙管の吸口である。336～339は釘である。

陶器・陶磁器（第71図、写真図版50）

332は近世の擂鉢の口縁部破片である。産地は不明であるが、在地ではないかと思われる。333は肥前産の碗である。時期は19世紀前半である。335は小皿、356は碗である。



第71図 遺構外出土遺物(3)

第2表 十器觀察表

()：添走、「」：移存組

第3表 金属製品観察表

| 図番 | 基番 | 区域名 | 遺構名 | 出土位置・層位 | 器種 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 備考 | | 図版 | 写真 |
|-----|-----|-----|----------|-----------|-------|--------|-------|--------|-------|-----------------------------|----|----|----|
| | | | | | | | | | | 形 | 寸法 | | |
| 59 | 402 | B区 | S.K37 | R.M2 | 鉄 | 14.4 | 2.1 | — | 66.78 | 長さ9cm、幅0.3cm、L字状に折り曲がっている | — | 44 | |
| 65 | 403 | 自区 | S.K38 | 埋L. | 鉄 | 4.7 | 1.3 | 0.5 | 10.09 | 長さ9.2cm、幅0.4cm、L字状に折り曲がっている | — | 44 | |
| 66 | 404 | B区 | S.K38 | 埋土 | 鉄 | 5.9 | 4.2 | 0.4 | 10.30 | 長さ4cm、幅0.3cm | — | 44 | |
| 52 | 505 | B区 | S.K39 | 鉄 | 4.0 | — | 0.3 | — | 2.56 | — | — | 44 | |
| 83 | 401 | B区 | S.K40A・B | R.M5 | 鉄 | 15.0 | 2.4 | — | 30.67 | — | — | 44 | |
| 81 | 409 | B区 | S.K40A・B | R.M4 | 半抜 | 8.2 | 7.5 | 1.25 | 11.99 | — | — | 44 | |
| 88 | 408 | 自区 | S.K40A・B | R.M1-3 | 鉄 | 5.0 | — | 0.4 | 3.50 | 長さ5cm、幅0.4cm | — | 44 | |
| 89 | 509 | B区 | S.K40A・B | R.M3 | 鉄 | 4.9 | — | 0.4 | 3.45 | 長さ9cm、幅0.4cm | — | 44 | |
| 90 | 406 | B区 | S.K40A・B | 博士 | 鉄 | 5.8 | — | 0.4 | 3.48 | 長さ4.8cm、幅0.4cm | — | 44 | |
| 91 | 407 | B区 | S.K40A・B | 博士 | 鉄 | 4.9 | — | 0.4 | 3.38 | 長さ4.9cm、幅0.4cm | — | 44 | |
| 92 | 419 | B区 | S.K41 | R.M8 | 運賃腰袋 | [4.18] | — | — | 6.09 | 火薬袋15cm、身幅0.9~1.1cm | 33 | 45 | |
| 163 | 411 | B区 | S.K41 | R.M10 | 鉄 | 3.7 | — | 0.5 | 2.80 | 長さ7cm、幅0.5cm、本質部付 | — | 46 | |
| 164 | 412 | B区 | S.K41 | R.M18 | 鉄 | 4.1 | 0.8 | 0.4 | 2.90 | 長さ4.3cm、幅0.4cm、木質部付 | — | 46 | |
| 165 | 410 | B区 | S.K41 | 埋L. | 鉄 | 3.2 | 2.1 | 0.6 | 2.48 | 長さ3.2cm、幅0.6cm、木質部付 | — | 46 | |
| 166 | 421 | B区 | S.K42 | R.M1 | 運賃腰袋 | [5.00] | — | — | 3.05 | 火薬袋1.1cm、身幅9.8~10.9cm | 35 | 46 | |
| 169 | 422 | B区 | S.K42 | R.M2 | 運賃腰袋 | [4.4] | — | — | 4.93 | 身幅約5.5~1.25cm | 35 | 46 | |
| 180 | 414 | B区 | S.K43 | R.M1 | 鉄 | 7.3 | — | 0.6 | 13.28 | 長さ7.3cm、幅0.5cm | — | 47 | |
| 181 | 415 | B区 | S.K43 | R.M1 | 鉄 | 7.2 | — | 0.5 | 8.30 | 長さ7.2cm、幅0.5cm | — | 47 | |
| 203 | 424 | B区 | S.K47 | 運賃腰袋 | [6.5] | — | — | — | 4.18 | 身幅約5.5~1.1cm | 38 | 47 | |
| 204 | 423 | B区 | S.K47 | 博士 | 運賃腰袋 | [3.3] | — | — | 2.47 | 身幅1cm | — | 38 | 47 |
| 229 | 426 | B区 | S.K48 | 埋L. | 運賃腰袋 | [2.5] | — | — | 2.71 | 火薬袋1.1cm、身幅9.8~1.0cm | 43 | 48 | |
| 240 | 425 | B区 | S.K48 | 博士 | 運賃吸口 | [6.5] | — | — | 4.38 | 身幅4.4~0.95cm | 43 | 48 | |
| 245 | 416 | B区 | S.K48 | R.M16 | 鉄 | 4.7 | — | 0.4 | 3.37 | 長さ4.7cm、幅0.4cm | — | 48 | |
| 248 | 526 | B区 | S.K50 | 1~3層 | 運賃腰袋 | [4.00] | — | — | 4.20 | 火薬袋1.2cm、身幅0.85~1.25cm | 44 | 48 | |
| 260 | 413 | B区 | S.K50 | 1~3層 | 鉄 | 4.0 | — | 0.3 | 2.10 | 長さ4cm、幅0.3cm | — | 48 | |
| 330 | 418 | A区 | 遺構外 | 埋B10b 1層 | 運賃腰袋 | [1.75] | — | — | 2.72 | 火薬袋1.7cm、身幅0.7~0.8cm | 72 | 50 | |
| 331 | 417 | A区 | 遺構外 | 埋B10b 1層 | 運賃腰袋 | [1.95] | 0.9 | — | 0.89 | 身幅9cm | — | 50 | |
| 332 | 588 | A区 | 遺構外 | 埋B10b 1層 | 鉄 | 3.6 | — | 0.4 | 3.52 | 長さ3.6cm、幅0.4cm | — | 50 | |
| 337 | 589 | A区 | 遺構外 | 埋B10b 1層 | 鉄 | 4.2 | — | 0.4 | 2.07 | 長さ4.2cm、幅0.4cm | — | 50 | |
| 338 | 591 | B区 | 遺構外 | II層 | 鉄 | 5.9 | — | 0.6 | 7.70 | 長さ5.9cm、幅0.6cm | — | 50 | |
| 339 | 590 | B区 | 遺構外 | IV层5gグリッド | 鉄 | 6.2 | — | 0.6 | 5.60 | 長さ6.2cm、幅0.6cm | — | 50 | |

第4表 銭貨観察表

| 図番 | 券種 | 券構名 | 出土位置・層位 | 器種 | 外径(cm) | 内径(cm) | 重量(g) | 会場の種類 | 初鋳年代 | 備考 | | 図版 | 写真 |
|----|-----|----------|---------|------|--------|--------|-------|-------|------|--|----|----|----|
| | | | | | | | | | | 形 | 寸法 | | |
| 55 | 427 | S.K29 | R.M1-1 | 貯水池費 | 2.45 | 0.7 | 3.59 | 銅 | 1636 | 古銭水 | — | 44 | |
| 54 | 430 | S.K29 | R.M1-4 | 貯水池費 | 2.4 | 0.6 | 2.67 | 銅 | 1636 | 古銭水 | — | 44 | |
| 55 | 432 | S.K29 | R.M1-6 | 貯水池費 | 2.4 | 0.6 | 4.04 | 銅 | 1636 | 古銭水 | — | 44 | |
| 56 | 428 | S.K29 | R.M1-2 | 貯水池費 | 2.5 | 0.6 | 3.24 | 銅 | 1668 | 新銭水(又銭) | — | 44 | |
| 57 | 429 | S.K29 | R.M1-3 | 貯水池費 | 2.4 | 0.6 | 3.61 | 銅 | 1668 | 新銭水(又銭) | — | 44 | |
| 58 | 431 | S.K29 | R.M1-5 | 貯水池費 | 2.3 | 0.7 | 2.19 | 銅 | 1697 | 新銭水、元後一萬永江戸鑄 | — | 44 | |
| 60 | 437 | S.K37 | R.M1-5 | 貯水池費 | 2.45 | 0.6 | 8.45 | 銅 | 1636 | 所により古銭寶3枚が密着して倒れない。蓋は以例は一巻トの裏古銭池の銀筋筋。一巻上は古銭水 | 28 | 44 | |
| 61 | 433 | S.K37 | R.M1-1 | 貯水池費 | 2.5 | 0.6 | 3.78 | 銅 | 1636 | 古銭水 | — | 44 | |
| 62 | 435 | S.K37 | R.M1-3 | 貯水池費 | — | — | 2.38 | 銅 | 1697 | 火を受けたかたけただれておりはつきりしない。新銭水と思われる | — | 44 | |
| 63 | 434 | S.K37 | R.M1-2 | 貯水池費 | — | — | 5.31 | 銅 | — | 火を受けたかたけただけただれている。詳細は不明 | — | 44 | |
| 64 | 436 | S.K37 | R.M1-4 | 貯水池費 | — | — | 1.48 | 銅 | — | 火を受けたかたけただけただれている。詳細は不明 | — | 44 | |
| 67 | 439 | S.K39 | R.M1-2 | 貯水池費 | 2.2 | 0.7 | 2.25 | 銅 | 1636 | 古銭水 | — | 44 | |
| 68 | 444 | S.K39 | R.M1-7 | 貯水池費 | 2.2 | 0.8 | 2.75 | 銅 | 1697 | 新銭水、元後一萬永江戸魚戸 | — | 44 | |
| 69 | 452 | S.K39 | R.M3 | 貯水池費 | 2.2 | 0.65 | 2.01 | 銅 | 1697 | 新銭水、正徳江戸魚戸所銘 | — | 44 | |
| 70 | 458 | S.K39 | R.M1-1 | 貯水池費 | 2.3 | 0.6 | 3.88 | 銅 | 1697 | 新銭水、明治五年江戸魚戸所銘 | — | 44 | |
| 71 | 453 | S.K39 | R.M1-6 | 貯水池費 | 2.4 | 0.6 | 3.39 | 銅 | 1697 | 新銭水、明治五年江戸魚戸所銘 | — | 44 | |
| 72 | 451 | S.K39 | R.M2-5 | 貯水池費 | 2.4 | 0.7 | 2.92 | 銅 | 1697 | 新銭水、明治五年江戸魚戸所銘 | — | 44 | |
| 73 | 449 | S.K39 | R.M1-3 | 貯水池費 | 2.15 | 0.7 | 2.42 | 銅 | 1697 | 新銭水、熱によって變形が進行しており、分離はできなかった | — | 44 | |
| 74 | 441 | S.K39 | R.M1-4 | 貯水池費 | 2.4 | 0.7 | 2.45 | 銅 | 1697 | 新銭水、熱によって變形が進行しており、分離はできなかった | — | 44 | |
| 75 | 442 | S.K39 | R.M1-5 | 貯水池費 | 2.4 | 0.7 | 2.34 | 銅 | 1697 | 新銭水、熱によって變形が進行しており、分離はできなかった | — | 44 | |
| 76 | 449 | S.K39 | R.M2-3 | 貯水池費 | 2.4 | 0.7 | 2.19 | 銅 | — | 新銭若しく詳細は不明 | — | 44 | |
| 77 | 450 | S.K39 | R.M2-4 | 貯水池費 | 2.4 | 0.7 | 3.07 | 銅 | — | 新銭若しく詳細は不明。底座を帯びている | — | 44 | |
| 78 | 447 | S.K39 | R.M2-1 | 貯水池費 | 2.4 | 0.7 | 2.88 | 銅 | 1697 | 新銭水、底座を帯びている | — | 44 | |
| 79 | 448 | S.K39 | R.M2-2 | 貯水池費 | 2.3 | 0.7 | 3.25 | 銅 | 1697 | 新銭水、底座を帯びている | — | 44 | |
| 80 | 445 | S.K39 | R.M1-8 | 貯水池費 | — | — | 1.09 | 銅 | — | 火を受けたかたけただれている。詳細は不明 | — | 44 | |
| 81 | 446 | S.K39 | R.M1-9 | 貯水池費 | — | — | 1.51 | 銅 | — | 火を受けたかたけただれている。詳細は不明 | — | 44 | |
| 85 | 454 | S.K40A・B | R.M1-1 | 貯水池費 | 2.2 | 0.7 | 2.55 | 銅 | 1697 | 新銭水、三重江戸魚戸所銘 | — | 44 | |

| 回数 | 作番 | 堆積名 | 出土位置・層 | 器種 | 外径 (cm) | 内径 (cm) | 高さ (cm) | 金属性 種類 | 初期 年代 | 備 考 | 箇 名 | 年 代 |
|-----|-----|----------|--------|-------|------------|------------|------------|-----------|----------|-----------------------------------|--------|--------|
| 86 | 455 | S K40A・B | RM1-2 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.7 | 1.57 | 銅 | 1697 | 新窓永。芯体を寄せている。 | 31 | 41 |
| 87 | 453 | S K40A・B | 埋土 | 瓦水道管? | | | 1.02 | 銅 | — | 火を受けたの焼けただれしている。詳細は不明 | — | 41 |
| 93 | 521 | S K41 | RM15-1 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.6 | 2.03 | 銅 | 1696 | 古窓永 | 33 | 45 |
| 94 | 476 | S K41 | RM3-2 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.6 | 2.55 | 銅 | 1695 | 古窓永 | 33 | 45 |
| 95 | 499 | S K41 | RM3-25 | 瓦水道管 | 2.4 | 0.7 | 2.87 | 銅 | 1695 | 古窓永 | 33 | 45 |
| 96 | 569 | S K41 | RM7-2 | 瓦水道管 | 2.4 | 0.6 | 3.67 | 銅 | 1695 | 古窓永 | 33 | 45 |
| 97 | 456 | S K41 | 埋土-1 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.6 | 2.22 | 銅 | 1695 | 古窓永 | 33 | 45 |
| 98 | 470 | S K41 | 埋土-15 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.6 | 2.94 | 銅 | 1695 | 古窓永 | 33 | 45 |
| 99 | 522 | S K41 | RM15-2 | 瓦水道管 | 2.4 | 0.65 | 3.03 | 銅 | 1696 | 新窓永(文鏡) | 33 | 45 |
| 100 | 506 | S K41 | RM4-3 | 瓦水道管 | 2.4 | 0.6 | 3.39 | 銅 | 1696 | 新窓永(文鏡) | 33 | 45 |
| 101 | 791 | S K41 | RM3-20 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.65 | 3.65 | 銅 | 1697 | 新窓永。文支戸小名木所持鉄 | 33 | 45 |
| 102 | 560 | S K41 | RM3-26 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.7 | 3.26 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸小名木所持鉄 | 33 | 45 |
| 103 | 482 | S K41 | RM3-27 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.65 | 3.30 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸小名木所持鉄 | 33 | 45 |
| 104 | 475 | S K41 | RM3-1 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.7 | 2.53 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸櫻川草野新所持鉄 | 33 | 45 |
| 105 | 490 | S K41 | RM3-16 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.65 | 2.24 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸櫻川草野新所持鉄 | 33 | 45 |
| 106 | 508 | S K41 | RM7-1 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.65 | 2.07 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸深川の野新山所持鉄 | 33 | 45 |
| 107 | 487 | S K41 | RM3-13 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.7 | 2.63 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸柳島所持鉄 | 33 | 45 |
| 108 | 489 | S K41 | RM3-15 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.8 | 3.46 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸柳島所持鉄 | 33 | 45 |
| 109 | 491 | S K41 | RM3-19 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.7 | 2.51 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸柳島所持鉄 | 33 | 45 |
| 110 | 496 | S K41 | KM3-21 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.7 | 3.37 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸柳島所持鉄 | 33 | 45 |
| 111 | 563 | S K41 | RM3-29 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.7 | 2.47 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸柳島所持鉄 | 33 | 45 |
| 112 | 479 | S K41 | RM3-5 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.65 | 2.97 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸柳島所持鉄 | 33 | 45 |
| 113 | 561 | S K41 | RM4-1 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.7 | 2.43 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸柳島所持鉄 | 33 | 45 |
| 114 | 561 | S K41 | RM3-27 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.6 | 2.70 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸羽林田所持鉄 | 33 | 45 |
| 115 | 488 | S K41 | RM3-15 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.7 | 3.00 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸柳島大原所持鉄 | 33 | 45 |
| 116 | 480 | S K41 | RM3-6 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.7 | 3.07 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸瓦窓山所持鉄 | 33 | 45 |
| 117 | 497 | S K41 | RM3-23 | 瓦水道管 | 2.25 | 0.65 | 2.88 | 銅 | 1697 | 新窓永。元支戸瓦窓山所持鉄 | 33 | 45 |
| 118 | 477 | S K41 | RM3-3 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.7 | 2.45 | 銅 | 1697 | 新窓永。止徳江戸龜戸所持鉄 | 33 | 45 |
| 119 | 507 | S K41 | RM4-4 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.65 | 2.66 | 銅 | 1697 | 新窓永。止徳江戸龜戸所持鉄 | 33 | 45 |
| 120 | 511 | S K41 | RM7-4 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.65 | 2.60 | 銅 | 1697 | 新窓永。正徳江戸龜戸所持鉄 | 33 | 45 |
| 121 | 465 | S K41 | 埋土-10 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.6 | 3.12 | 銅 | 1697 | 新窓永。(同上)~庄永常能太郎所持鉄 | 33 | 45 |
| 122 | 486 | S K41 | KM3-12 | 瓦水道管 | 2.15 | 0.65 | 3.10 | 銅 | 1697 | 新窓永。明和5年江戸龜戸所持鉄 | 33 | 45 |
| 123 | 498 | S K41 | RM3-24 | 瓦水道管 | 2.25 | 0.65 | 3.81 | 銅 | 1697 | 新窓永。明和5年江戸龜戸所持鉄 | 33 | 45 |
| 124 | 581 | S K41 | RM3-7 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.7 | 2.82 | 銅 | 1697 | 新窓永。明和5年江戸龜戸所持鉄 | 33 | 45 |
| 125 | 510 | S K41 | RM7-3 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.6 | 3.45 | 銅 | 1697 | 新窓永。朝和5年江戸龜戸所持鉄 | 33 | 45 |
| 126 | 467 | S K41 | 埋土-12 | 瓦水道管 | 2.4 | 0.6 | 3.2 | 銅 | 1697 | 新窓永。明和6年江戸龜戸所持鉄 | 33 | 45 |
| 127 | 484 | S K41 | RM3-10 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.55 | 2.11 | 銅 | 1697 | 新窓永。摩訶の影響でそれ以上の分類はできなかった | 33 | 45 |
| 128 | 491 | S K41 | RM3-17 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.65 | 2.82 | 銅 | 1697 | 新窓永。同上 | 33 | 45 |
| 129 | 492 | S K41 | RM3-18 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.65 | 3.10 | 銅 | 1697 | 新窓永。同上 | 33 | 45 |
| 130 | 502 | S K41 | RM3-28 | 瓦水道管 | 2.4 | 0.6 | 3.09 | 銅 | 1697 | 新窓永。同上 | 33 | 45 |
| 131 | 483 | S K41 | RM3-9 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.7 | 3.06 | 銅 | 1697 | 新窓永。同上 | 33 | 45 |
| 132 | 463 | S K41 | 埋土-8 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.7 | 2.54 | 銅 | 1697 | 新窓永。同上 | 33 | 45 |
| 133 | 496 | S K41 | RM3-22 | 瓦水道管 | 2.1 | 0.7 | 2.20 | 銅 | 1697 | 新窓永。同上 | 33 | 45 |
| 134 | 466 | S K41 | 埋土-11 | 瓦水道管 | 2.3 | 0.6 | 1.57 | 銅 | 1697 | 新窓永。同上 | 33 | 45 |
| 135 | 503 | S K41 | RM4-2 | 瓦水道管 | 2.1 | 0.6 | 1.88 | 銅 | 1697 | 新窓永。同上 | 33 | 45 |
| 136 | 478 | S K41 | RM3-4 | 瓦水道管 | 2.15 | 0.65 | 2.71 | 銅 | 1697 | 新窓永。同上 | 33 | 45 |
| 137 | 519 | S K41 | RM12-8 | 瓦水道管 | 2.2 | 0.7 | 1.87 | 銅 | 1697 | 新窓永。同上 | 33 | 45 |
| 138 | 457 | S K41 | 埋土-2 | 瓦水道管 | 2.7 | 0.6 | 4.87 | 銅 | 1768 | 京瓦窓西四重鏡(21枚)、明和江戸十萬年鉄鏡 | 34 | 45 |
| 139 | 461 | S K41 | 埋土-6 | 瓦水道管 | 2.7 | 0.7 | 4.79 | 銅 | 1768 | 京瓦窓西四重鏡(21枚)、明和江戸十萬年鉄鏡 | 34 | 45 |
| 140 | 562 | S K41 | 埋土-7 | 瓦水道管 | 2.7 | 0.6 | 5.13 | 銅 | 1768 | 京瓦窓西四重鏡(21枚)、明和江戸十萬年鉄鏡 | 34 | 45 |
| 141 | 469 | S K41 | 埋土-14 | 瓦水道管 | 2.7 | 0.7 | 7.21 | 銅 | 1821 | 京瓦窓西四重鏡(21枚)。赤体を寄せていている。文政江戸十萬年鉄鏡 | 34 | 45 |
| 142 | 458 | S K41 | 埋土-3 | 瓦水道管 | 2.7 | 2.4 | 5.31 | 銅 | 1821 | 京瓦窓西四重鏡(21枚)。赤体を寄せていている。文政江戸十萬年鉄鏡 | 34 | 45 |

| 回 数 | 造構名 | 出土位置・層位 | 器種 | 外径 (cm) | 内径 (cm) | 容 量 (ml) | 金屬の 種類 | 初 神 代 紀 | 備 考 | | |
|---------|--------|---------|------|------------|------------|----------------|-----------|------------------|---|----|----|
| | | | | | | | | | 銅 | 鉄 | |
| 143 485 | S K41 | RM3-11 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 2.85 | 銅 | 1697 | 新寛永、摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかつた | 34 | 46 |
| 144 460 | S K41 | 埋上-5 | 寛永通寶 | 2.8 | 0.6 | 4.39 | 銅 | 1821 | 寛永通寶四文銭 (11後)。赤味を帯びている。文政江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 145 812 | S K41 | RM12-1 | 寛永通寶 | 2.8 | 0.7 | 5.05 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 146 961 | S K41 | 埋上-9 | 寛永通寶 | 2.7 | 0.7 | 4.40 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 147 513 | S K41 | RM12-2 | 寛永通寶 | 2.7 | 0.65 | 4.84 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 148 514 | S K41 | RM12-3 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 4.65 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 149 515 | S K41 | RM12-4 | 寛永通寶 | 2.8 | 0.7 | 4.58 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 150 516 | S K41 | RM12-5 | 寛永通寶 | 2.75 | 0.7 | 5.26 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 151 471 | S K41 | 埋上-19 | 寛永通寶 | 2.7 | 0.7 | 5.20 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 152 517 | S K41 | RM12-6 | 寛永通寶 | 2.8 | 0.6 | 5.57 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 153 518 | S K41 | RM12-7 | 寛永通寶 | 2.7 | 0.7 | 4.31 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 154 529 | S K41 | RM12-9 | 寛永通寶 | 2.7 | 0.7 | 4.73 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 155 471 | S K41 | 埋土-16 | 寛永通寶 | 2.7 | 0.7 | 5.01 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 156 459 | S K41 | 埋土-4 | 寛永通寶 | 2.7 | 0.7 | 5.09 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 157 472 | S K41 | 埋土-17 | 寛永通寶 | 2.8 | 0.7 | 4.91 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 158 473 | S K41 | 埋土-18 | 寛永通寶 | 2.8 | 0.7 | 5.37 | 銅 | 1769 | 寛永通寶四文銭 (11後)。明和江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 159 468 | S K41 | 埋土-13 | 寛永通寶 | 2.7 | 0.7 | 4.68 | 銅 | 1821 | 寛永通寶四文銭 (11後)。赤味を帶びている。文政江戸十萬坪鑄造 | 34 | 46 |
| 160 594 | S K41 | RM16 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 53.49 | 銅 | 1739~ | 14枚なる | — | 46 |
| 161 592 | S K41 | 埋土- | 寛永通寶 | 2.3 | 0.5 | 13.23 | 銅 | 1739~ | 4枚なる | — | 46 |
| 162 593 | S K41 | RM14 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.7 | 28.06 | 銅 | 1739~ | 9枚なる | — | 46 |
| 170 531 | S K42 | 埋土- | 寛永通寶 | 2.4 | 0.6 | 3.11 | 銅 | 1636 | 古寛永 | 35 | 46 |
| 171 536 | S K42 | 埋土- | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 2.15 | 銅 | 1697 | 新寛永。元文江戸深川半野新田所銅錢 | 35 | 46 |
| 172 532 | S K42 | 埋土- | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 2.20 | 銅 | 1697 | 新寛永。正徳江戸鬼戸所銅錢 | 35 | 46 |
| 173 585 | S K42 | 埋土- | 寛永通寶 | 2.7 | — | 8.13 | 銅 | 1739~ | 2枚なる | — | 46 |
| 174 600 | S K42 | 埋土- | 寛永通寶 | 2.7 | 0.7 | 7.79 | 銅 | 1739~ | 2枚なる | — | 46 |
| 175 597 | S K42 | RM3 | 寛永通寶 | 2.6 | 0.7 | 20.93 | 銅 | 1739~ | 5枚なる | — | 46 |
| 176 598 | S K42 | 埋土- | 寛永通寶 | — | — | 4.17 | 銅 | 1739~ | 鉄板裏片 | — | — |
| 177 598 | S K42 | RM4 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 56.71 | 銅 | 1739~ | 鉄板裏と底として最低12枚なる。鈎がひどくはつきりしないが銅板裏低4枚重なる | 46 | 46 |
| 178 599 | S K42 | RM5 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 51.39 | 銅 | 1739~ | 鉄板がひどくはつきりしないが銅板裏低4枚重なる | 46 | 46 |
| 182 530 | S K45 | RM3 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.7 | 2.34 | 銅 | 1636 | 古寛永 | 37 | 46 |
| 183 532 | S K45 | RM1-1 | 寛永通寶 | 2.35 | 0.6 | 3.45 | 銅 | 1636 | 古寛永。熱による損耗有 | 37 | 46 |
| 184 534 | S K45 | RM1-2 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.6 | 2.84 | 銅 | 1636 | 古寛永。熱による損耗有 | 37 | 46 |
| 185 551 | S K45 | RM11 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.7 | 1.37 | 銅 | 1697 | 新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかつた | 37 | 46 |
| 186 542 | S K45 | RM7-1 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 2.19 | 銅 | 1697 | 新寛永。元文江戸深川半野新田所銅錢 | 37 | 46 |
| 187 537 | S K45 | RM4 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 2.38 | 銅 | 1697 | 新寛永。元文江戸鬼戸所銅錢 | 37 | 46 |
| 188 545 | S K45 | RM7-4 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.65 | 2.06 | 銅 | 1697 | 新寛永。元文江戸小木所銅錢 | 37 | 46 |
| 189 538 | S K45 | RM6-1 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 2.25 | 銅 | 1697 | 新寛永。元文江戸深川平野新田所銅錢 | 37 | 46 |
| 190 541 | S K45 | RM6 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 1.93 | 銅 | 1697 | 新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかつた | 37 | 47 |
| 191 543 | S K45 | RM7-2 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.6 | 2.33 | 銅 | 1697 | 新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかつた | 37 | 47 |
| 192 536 | S K45 | RM1-3 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.7 | 1.68 | 銅 | 1697 | 新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかつた | 37 | 47 |
| 193 544 | S K45 | RM7-3 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.6 | 1.77 | 銅 | 1697 | 新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかつた | 37 | 47 |
| 194 647 | S K45 | RM7-6 | 寛永通寶 | 2.35 | 0.8 | 0.93 | 銅 | 1739 | 鉄板裏の銅片 | 37 | 47 |
| 195 539 | S K45 | RM5-2 | 寛永通寶 | 2.1 | 0.8 | 1.16 | 銅 | — | 磨耗著しい | 37 | 47 |
| 196 550 | S K45 | RM9 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.5 | 2.89 | 銅 | — | 磨耗著しい | 37 | 47 |
| 197 601 | S K45 | KM10 | 寛永通寶 | — | — | 2.32 | 銅 | 1739~ | — | — | 47 |
| 198 548 | S K45 | KM7-7 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.6 | 2.71 | 銅 | 1697 | 火を受けたため焼けただれ、発泡している。詳細は不明 | — | 47 |
| 199 549 | S K45 | RMB | 寛永通寶 | — | — | 1.86 | 銅 | — | 火を受けたため焼けただれ、発泡している。詳細は不明だが、背面に鉛板があるようにみえる。鉄元文銭 | — | 47 |
| 200 540 | S K45 | RM5-3 | 寛永通寶 | — | — | 0.67 | 銅 | 1739 | 鉄板裏著しい | — | 47 |
| 201 546 | S K45 | RM7-8 | 寛永通寶 | — | — | 1.37 | 銅 | 1697 | 新寛永。摩耗の影響でそれ以上の分類はできなかつた | 39 | 47 |
| 206 560 | S K48A | 理士 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.6 | 1.60 | 銅 | 1636 | 古寛永 | 46 | 47 |
| 207 572 | S K48B | KM3-12 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 2.89 | 銅 | 1636 | 古寛永 | 46 | 47 |

| 番号 | 登録番号 | 出土位置・層位 | 器種 | 外径 (cm) | 内径 (cm) | 重 盤 (g) | 金屬の 種類 | 初期 時代 | 備考 | 国宝 | 厚版 | |
|-----|------|---------|--------|------------|------------|------------|-----------|----------|-------|--|----|----|
| 208 | 569 | S K48B | RM3-9 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.6 | 3.39 | 銅 | 1636 | 古窓水 | 40 | 47 |
| 209 | 577 | S K48B | RM3-17 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.7 | 4.16 | 銅 | 1636 | 古窓水 | 40 | 47 |
| 210 | 562 | S K48B | RM3-2 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 3.14 | 銅 | 1636 | 古窓水 | 40 | 47 |
| 211 | 565 | S K48B | RM3-5 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 3.21 | 銅 | 1636 | 古窓水 | 40 | 47 |
| 212 | 565 | S K48B | RM1-2 | 寛永通寶 | 2.5 | 0.6 | 3.43 | 銅 | 1668 | 新窓水(文政) | 40 | 47 |
| 213 | 566 | S K48B | RM1-3 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.6 | 3.42 | 銅 | 1668 | 新窓水(文政) | 40 | 47 |
| 214 | 567 | S K48B | RM1-4 | 寛永通寶 | 2.5 | 0.6 | 3.66 | 銅 | 1668 | 新窓水(文政) | 40 | 47 |
| 215 | 568 | S K48B | RM1-5 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.6 | 3.28 | 銅 | 1668 | 新窓水(文政) | 40 | 47 |
| 216 | 569 | S K48B | RM1-6 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.6 | 3.85 | 銅 | 1668 | 新窓水(文政) | 40 | 47 |
| 217 | 570 | S K48B | RM3-10 | 寛永通寶 | 2.25 | 0.7 | 2.63 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文江戸深川平野新山所鈴銭 | 40 | 47 |
| 218 | 580 | S K48B | RM3-20 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.6 | 2.69 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文江戸深川平野新山所鈴銭 | 40 | 47 |
| 219 | 581 | S K48B | RM1-1 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 2.07 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文江戸深川平野新山所鈴銭 | 40 | 47 |
| 220 | 582 | S K48B | RM4-2 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.65 | 2.78 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文江戸深川平野新山所鈴銭 | 40 | 47 |
| 221 | 578 | S K48B | RM3-18 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.7 | 2.81 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文相模藤澤・吉田山所鈴銭 | 40 | 47 |
| 222 | 567 | S K48B | RM3-3 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.6 | 2.85 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文相模藤澤・吉田山所鈴銭 | 40 | 47 |
| 223 | 574 | S K48B | RM3-14 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 2.72 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文相模加須山所鈴銭 | 40 | 47 |
| 224 | 579 | S K48B | RM3-19 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 2.59 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文相模加須山所鈴銭 | 40 | 47 |
| 225 | 568 | S K48B | RM3-8 | 寛永通寶 | 2.1 | 0.6 | 3.52 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文山城侯大路所鈴銭 | 40 | 47 |
| 226 | 563 | S K48B | RM3-3 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 2.5 | 銅 | 1697 | 新窓水、元藤江戸鬼門所鈴銭 | 40 | 47 |
| 227 | 566 | S K48B | RM3-6 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.7 | 2.3 | 銅 | 1697 | 新窓水、元藤江戸鬼門所鈴銭 | 40 | 47 |
| 228 | 571 | S K48B | RM3-11 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.7 | 2.47 | 銅 | 1697 | 新窓水、明和・応永忠昌太山所鈴銭 | 40 | 47 |
| 229 | 564 | S K48B | RM3-4 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.6 | 3.27 | 銅 | 1697 | 新窓水、明和・応永忠昌太山所鈴銭 | 40 | 47 |
| 230 | 563 | S K48B | 埋土 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 1.91 | 銅 | 1697 | 新窓水、明和・応永忠昌太山所鈴銭 | 40 | 47 |
| 231 | 573 | S K48B | RM3-13 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 2.57 | 銅 | 1697 | 新窓水、明和2年江戸鬼門所鈴銭 | 40 | 47 |
| 232 | 564 | S K48B | RM1-1 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.6 | 3.06 | 銅 | 1697 | 新窓水、明和5年江戸鬼門所鈴銭 | 40 | 47 |
| 233 | 561 | S K48B | RM3-1 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.65 | 3.57 | 銅 | 1697 | 新窓水、明和5年江戸鬼門所鈴銭 | 40 | 47 |
| 234 | 575 | S K48B | RM3-16 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 2.94 | 銅 | 1697 | 新窓水、明和5年江戸鬼門所鈴銭 | 40 | 47 |
| 235 | 576 | S K48B | RM3-15 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 3.36 | 銅 | 1697 | 新窓水、明和6年江戸鬼門所鈴銭 | 40 | 47 |
| 236 | 583 | S K48C | 埋土 | 寛永通寶 | 2.7 | 0.6 | 3.68 | 銅 | 1697 | 新窓水、摩利の影響でそれ以上の分類はできなかった | 41 | 48 |
| 237 | 606 | S K48D | RM1 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.7 | 72.29 | 銅・鉄 | 1739~ | 摩利を上級として最高21枚量なる。諸がひどくはっきりしないが鉄数が混在している | — | 48 |
| 241 | 602 | S K48E | 埋土 | 寛永通寶 | 2.7 | 0.7 | 613.11 | 鉄 | 1739~ | 諸がひどくはっきりしないが鉄数は10枚量なる | — | 48 |
| 242 | 604 | S K48E | RM18 | 寛永通寶 | 2.7 | 0.7 | 53.92 | 鉄 | 1739~ | 諸がひどくはっきりしないが鉄数は10枚量なる | — | 48 |
| 243 | 605 | S K48E | RM3 | 寛永通寶 | 2.8 | 0.6 | 360.14 | 鉄 | 1739~ | 諸がひどくはっきりしないが鉄数は10枚量なる。一部背面に複数のある系数が含まれる | — | 48 |
| 244 | 603 | S K48E | RM16 | 寛永通寶 | 2.8 | 0.5 | 3.77 | 鉄 | 1739~ | 諸がひどくはっきりしないが鉄数は10枚量なる。 | — | 48 |
| 249 | 586 | S K50 | 埋土 | 寛永通寶 | 2.15 | 0.7 | 2.22 | 銅 | 1697 | 新窓水、摩利の影響でそれ以上の分類はできなかった | 41 | 48 |
| 250 | 524 | S K50 | 1~3層-2 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.65 | 2.61 | 銅 | 1697 | 新窓水、明和・応永忠昌太山所鈴銭 | 44 | 48 |
| 251 | 523 | S K50 | 1~3層-1 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.6 | 3.07 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文山城侯人源所鈴銭 | 44 | 48 |
| 252 | 587 | S K50 | 埋土 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 2.64 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文江戸深川平野新山所鈴銭 | 41 | 48 |
| 253 | 526 | S K50 | 1~3層-4 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.7 | 2.28 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文江戸深川平野新山所鈴銭 | 44 | 48 |
| 254 | 527 | S K50 | 1~3層-5 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 2.38 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文江戸深川平野新山所鈴銭 | 44 | 48 |
| 255 | 528 | S K50 | 1~3層-6 | 寛永通寶 | 2.25 | 0.65 | 2.53 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文江戸深川平野新山所鈴銭 | 44 | 48 |
| 256 | 525 | S K50 | 1~3層-3 | 寛永通寶 | 2.3 | 0.6 | 2.89 | 銅 | 1697 | 新窓水、元文江戸深川平野新山所鈴銭 | 44 | 48 |
| 257 | 585 | S K50 | 埋土 | 寛永通寶 | 2.4 | 0.6 | 2.32 | 銅 | 1636 | 古窓水 | 44 | 48 |
| 258 | 529 | S K50 | 1~3層-7 | 寛永通寶 | 2.7 | 0.65 | 5.06 | 銅 | 1768 | 寛永通寶文底(21段)、明和江戸十萬所鈴銭 | 44 | 48 |
| 259 | 584 | S K50 | 埋土 | 寛永通寶 | 2.2 | 0.6 | 1.52 | 銅 | 1697 | 新窓水、熱により彫曲している。摩利の影響でそれ以上の分類はできなかった | — | 48 |

第5表 陶磁器觀察表

| 回番 | 登録 | 区域 | 遺構名 | 出土位置・層位 | 器種 | 產地 | 時代 | 社 異 | 胎 土 | 法 異 (cm) | | | 出 取 | 固版 | 写版 | | |
|-----|-----|----|--------|---------|----|-----|--------|-----|-----|----------|-------|-------|-------|-------|----|----|---|
| | | | | | | | | | | 口徑 | 器高 | 底径 | | | | | |
| 270 | 182 | B区 | SK14 | 壁上 | 碗 | 在地? | 19世紀? | | | — | [2.2] | 5.6 | 3.84 | 65 | — | — | |
| 272 | 159 | B区 | S D 13 | 埋土 | 碗 | 在地 | 19世紀? | | | 9.4 | [2.2] | — | 2.32 | 70 | — | — | |
| 332 | 153 | B区 | 造構外 | 壁上 | 碗 | 在地? | | | | | | | [2.3] | 6.88 | 72 | 50 | |
| 333 | 151 | A区 | 造構外 | 埋土 | 碗 | 胎前 | 19世紀前半 | | | — | 2.6 | — | 3.73 | 72 | — | — | |
| 334 | 155 | B区 | 中央 | IV層 棚上面 | 小瓶 | 在地? | | | | | — | [1.9] | 3.7 | 13.91 | 72 | — | — |
| 335 | 154 | B区 | 平地 | I層 | 碗 | 在地? | | | | | 10.2 | 6.1 | 4.4 | 72.92 | 72 | — | — |

第6表 石器觀察表

| 回番 | 登録 | 区域 | 新舊編名 | 出土位置・層位 | 器種 | 時代 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重錠(g) | 石 質 | 固版 | 写版 |
|-----|-----|----|---------|----------------------|-----|-----|--------|-------|--------|--------|--------------|----|----|
| 4 | 216 | B区 | S 101 | 埋土 | 磨石 | | 8.85 | 7.8 | 6.3 | 601.99 | ひん岩 北上山地 中生代 | 10 | 41 |
| 5 | 215 | B区 | S 101 | 壁上 | 磨石 | 全面磨 | 10.1 | 8.5 | 3.35 | 454.76 | 刷狀物 北上山地 中生代 | 10 | 41 |
| 6 | 217 | B区 | S 101 | 壁上 | 磨石 | 全面磨 | 11.4 | 10.2 | 3.2 | 652.89 | ハシレイ岩 北上山地 中 | 10 | 41 |
| 15 | 209 | B区 | S 103 | 埋土 | 不定形 | | 7.5 | 4.2 | 1.8 | 59.97 | 頁岩 北上山地 古生代 | 14 | 41 |
| 267 | 210 | B区 | S K 104 | 南 壁面 | 不定形 | | 4.25 | 2.75 | 0.95 | 6.95 | 頁岩 北上山地 古生代 | 47 | 48 |
| 317 | 213 | B区 | 造構外 | II層 | 不定形 | | 4.6 | 4.2 | 1.3 | 24.57 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 49 |
| 318 | 212 | B区 | 造構外 | II層 | 不定形 | | 2.1 | 4.7 | 9.0 | 8.68 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 49 |
| 319 | 208 | B区 | 造構外 | IV C 3 1 グリッド I層 | 不定形 | | 3.55 | 2.2 | 8.0 | 3.55 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 50 |
| 320 | 211 | B区 | 造構外 | IV C 4 c グリッド I層 | 石劍 | 直面削 | 2.15 | 1.55 | 0.3 | 1.15 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 50 |
| 321 | 214 | B区 | 造構外 | IV C 6 d グリッド IV層削出面 | 石劍 | 直面削 | 5.4 | 1.8 | 1.0 | 8.64 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 50 |
| 322 | 207 | B区 | 造構外 | IV C 3 i グリッド I層 | 不定形 | | 5.95 | 3.7 | 1.3 | 28.64 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 50 |
| 323 | 202 | B区 | 造構外 | IV C 3 i グリッド I層 | 不定形 | | 2.7 | 4.05 | 0.8 | 7.26 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 50 |
| 324 | 205 | B区 | 造構外 | IV C 3 i グリッド I層 | 不定形 | | 3.15 | 3.6 | 1.0 | 8.89 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 50 |
| 325 | 201 | B区 | 造構外 | IV C 3 i グリッド I層 | 不定形 | | 3.4 | 1.95 | 0.6 | 2.95 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 50 |
| 326 | 203 | B区 | 造構外 | IV C 3 i グリッド I層 | 不定形 | | 3.25 | 4.9 | 1.25 | 14.03 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 50 |
| 327 | 209 | B区 | 造構外 | IV C 3 i グリッド I層 | 不定形 | | 3.3 | 3.1 | 1.9 | 15.40 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 50 |
| 328 | 204 | B区 | 造構外 | IV C 3 i グリッド I層 | 不定形 | | 4.75 | 2.9 | 1.1 | 11.44 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 50 |
| 329 | 206 | B区 | 造構外 | IV C 3 i グリッド I層 | 不定形 | | 5.2 | 2.4 | 1.9 | 12.85 | 頁岩 北上山地 古生代 | 71 | 50 |

第7表 土製品觀察表

| 回番 | 登録 | 区域 | 遺構名 | 出土位置・層位 | 器種 | 特 徴 | 長さ(m) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 色 調 | 施 彩 | 胎 土 | 固版 | 写版 |
|----|-----|----|-------|---------|-------|------------------------------|--------|-------|--------|---------|------------------|-----|-------------|----|----|
| 30 | 111 | B区 | S 101 | カマド S 2 | 板状土製品 | 全体にナガが施されている。肩部はナガで面取りをしている。 | [45.6] | 7.6 | 4.8 | 2338.40 | 53VS/4 に赤い赤褐色 | 良 | 砂粒・金 雲母含 | 18 | 42 |

第8表 木製品觀察表

| 回番 | 登録 | 区域名 | 遺構名 | 出土位置・層位 | 器種 | 計 測 (cm) | 蓋さ 高さ | 幅 幅 | 厚さ 厚さ | 材質 | 備 考 | 考 | 固版 | 写版 |
|-----|-----|-----|-------|---------|----|----------|----------|--------|----------|----|---------|---|----|----|
| 166 | 301 | B区 | SK41 | RW3 | 棺材 | 7.54 | 6.00 | 0.65 | 14.51 | 木骨 | | | — | 46 |
| 167 | 303 | B区 | SK41 | RW4 | 棺材 | 7.56 | 4.81 | 0.16 | 18.05 | 木 | | | — | 46 |
| 179 | 305 | B区 | SK42 | 埋土 | 棺材 | 2.56 | 6.20 | 1.63 | — | | | | — | 46 |
| 202 | 306 | B区 | SK45 | RW1 | 棺材 | 9.93 | 4.53 | 0.94 | 29.93 | 木 | | | — | 47 |
| 238 | 309 | B区 | SK48D | RW1 | 棺材 | 4.95 | 4.55 | 0.39 | 1.01 | 木骨 | 田 R O 7 | | | 48 |
| 246 | 308 | B区 | SK48E | RW1 | 棺材 | 7.15 | 1.58 | 1.04 | 5.08 | # | 田 R O 1 | | — | 48 |
| 247 | 307 | B区 | SK48F | 埋土下位 | 棺材 | 7.21 | 4.98 | 0.68 | 14.71 | # | | | — | 48 |

VI 自然科学分析

1 松山前遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

(1) はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

(2) 試 料

試料は、奈良時代の堅穴住居跡 (SI06A) より出土した炭化材 2 点である。

(3) 方 法

試料を割折して、炭化材の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって 50~1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 結 果

結果を表 1 に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

ハンノキ属 *Alnus* カバノキ科 図版 1

横断面：小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は 10~30 本ぐらいである。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で単列である。

以上の形質よりハンノキ属に同定される。なお、本試料は小片であり広範囲の観察が出来なかつたため、属以下の同定は困難であった。ハンノキ属は北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木または低木である。

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版 2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1 ~ 数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晚材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ 15m、径 60cm に達する。材は強靭で弾力に富

み、器具、農具などに用いられる。

(5) 所見

松山前遺跡で検出された堅穴住居跡 (SI06A) より出土した 2 点の炭化材は、ハンノキ属とコナラ属クヌギ節であった。ハンノキ属は温帯域に広く分布し、ハンノキなどの低湿地に成育するものとヤシャブシなど山地に生育するものがある。コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあるが、これらは温帯域に広く分布し、山地や乾燥した台地および丘陵地に生育する。このように松山前遺跡の炭化材は、いずれも遺跡周辺からもたらすことのできる樹種であったと考えられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p. 20-48.

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p. 49-100.

島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p. 296

山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第 1 号、植生史研究会、p. 242

2 松山前遺跡における種実同定

株式会社古環境研究所

(1) はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

(2) 試料

試料は、松山前遺跡で検出された奈良時代の堅穴住居跡のうち、SI04 のカマド、SI06A 床面、SI07 カマドより出土した種実類で、いずれも水洗選別済みのものである。

(3) 方 法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

(4) 結 果

1) 分類群

樹木 2、樹木・草本を含むもの 1、草本 10 の計 13 分類群が同定された。学名、和名および粒数を表 1 に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

ヤマグワ *Morus australis* Poir. 種子 クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

ヤツツバキ *Camellia japonica* L. 幼果・種子片 ツバキ科

幼果は黒色で球形を呈す。表面はやや粗い。

種子は黒色で三角状楕円形を呈し、一端に点状のへそがある。

〔樹木・草本〕

ウコギ科 Araliaceae 種子

淡褐色ないし茶褐色で、半月状を呈する。断面は扁平、向軸側はほぼ直線状になり、肺軸側には浅い溝が2~3本走る。表面はざらつく。

〔草本〕

イヌビエ属 *Echinochloa* 穂 イネ科

茶褐色で梢円形を呈す。表面には微細な縱方向の模様がある。

イネ科 Gramineae 穂

穂は灰褐色~茶褐色で梢円形を呈す。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。

アザガ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

ザクロソウ *Mollugo pentaphylla* L. 種子 ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み、白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。

ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子

黒色で円形を呈し、側面にヘソがある。表面全体に突起がある。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科

茶褐色で梢円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6~8本の隆起が走る。

セリ科 Umbelliferae 果実

淡褐色~黄褐色で梢円形を呈す。果皮はコルク質で厚く弾力があり、片面に3本の肥厚した隆起が見られる。断面は半円形である。

シソ属 *Perilla* 果実 シソ科

茶褐色で円形を呈し、下端にヘソがある。表面には大きい網目模様がある。

キク科 Compositae 果実 キク科

茶褐色で梢円形を呈し、両端は切形となる。表面には縱方向に8本程度の筋が走る。

2) 種実群集の特徴

1) SI04カマド

ヤマグワ2、ヤブツバキ17、カヤツリグサ科5、アカザ属1、ナデシコ科1、カタバミ属1、キク科1が同定された。

2) SI06A床面

ヤマグワ1、イネ科130、カヤツリグサ科8、カタバミ属1、セリ科27が同定された。

3) SI07カマド

ウコギ科1、イヌビエ属1、イネ科47、カヤツリグサ科26、アカザ属2、ザクロソウ1、ナデシコ科6、カタバミ属3、セリ科82、シソ属4が同定された。

(5) 考 察

SI04カマド出土の種実は、ヤブツバキとヤマグワの樹木とカヤツリグサ科、アカザ属、ナデシコ科、

カタバミ属、キク科の草本である。ヤブツバキとヤマグワは食用ないし有用な種実である。草本類は人里に普通に生育する雑草である。

SI06A床面ではヤマグワの樹木を除けば、イネ科、カヤツリグサ科、カタバミ属、セリ科は人里に普通に生育する雑草である。しかし、イネ科とセリ科の多くは食用にならず、その果実または果実序のついた植物体の利用が想定される。

SI07カマドより出土したウコギ科、イヌビエ属、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ属、ザクロソウ、ナデシコ科、カタバミ属、セリ科、シソ属は、いずれも人里に普通に生育する雑草である。イネ科、カヤツリグサ科、セリ科がやや多くいが、これらのほとんどは食用にならず、その果実または果実序のついた植物体が利用された可能性がある。

(6) まとめ

松山前遺跡で検出された奈良時代の堅穴住居跡より出土した種実は、人里に普通に生育する雑草類がほとんどであった。SI04カマドではヤブツバキとヤマグワ、SI06A床面ではヤマグワの食用ないし有用な種実が認められた。SI06A床面とSI07カマドではイネ科とセリ科が多く、後者ではこれに加えてカヤツリグサ科が多かった。これらのほとんどは食用にはならない草本であり、その果実または果実序のついた植物体の利用の可能性が示唆された。

参考文献

- 笠原安夫（1985）日本雑草図説、養賢堂、494p.
- 笠原安夫（1988）作物および山畠雑草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣 出版、p.131-139.
- 南木睦彦（1993）葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276-283.

3 松山前遺跡における種実・樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

松山前遺跡は、岩手県陸前高田市小友町に所在し、広田湾を望む箱根山南側山麓の丘陵上に立地する。本遺跡の発掘調査の結果、奈良時代の堅穴住居跡や江戸時代の墓壙、住居状遺構、掘立柱建物跡、土坑等の遺構や、網文土器や奈良時代の土師器、石器等の遺物が確認されている。

本報告では、奈良時代の堅穴住居跡内のカマドや焼土等から検出された種実遺体の同定を行い、当時の植物資源利用を検討する。また、江戸時代の墓壙内から出土した棺材の一部と考えられる木材の樹種同定を行い、用材の検証を行う。

I 種実遺体同定

1 試 料

試料は、6棟の堅穴住居跡（SI01-04, 06, 07）のカマドや埋土（燃焼部焼土）から、水洗選別等によって抽出された種実遺体等6試料である。各試料はビニール袋詰めされ、種実遺体や微細な炭化材等が複数も含まれる。各試料の詳細は、結果と共に表1に示す。

2 分析方法

試料を4, 2, 1, 0.5mm目の篩に通し、粒径別にシャーレに移した後、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や2mm角以上の炭化材などを抽出する。種実の形態的特徴を、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川, 1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか, 2000)等と比較し、種類を同定し個数を求める。2mm角以上の炭化材は、重量を表示した。分析後の種実遺体は、種類毎にピンに入れ、種実以外の分析残試料は袋に戻して保管する。

3 結 果

結果を表1に示す。6試料からは、裸子植物1分類群2個、被子植物25分類群1452個、計1454個の種実が同定された。この他に、炭化材、土器片などが認められる。種実遺体は、表面に泥が付着しており遺存状態の確認が困難な個体も多いが、栽培植物のイネ、コムギと、イネ科の胚乳が炭化している。他の分類群では炭化は認められず、表面に毛が残存するなど極めて遺存状態の良好な個体や、帰化植物が認められる。以下に各試料の検出状況を示す。

- ・ No.1 : S101カマド
草本2分類群(イネ、カタバミ属)13個、イネの炭化胚乳3個が検出された。
- ・ No.2 : S102カマド
木本のキイチゴ属1個、草本9分類群(イネ、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、ナデシコ科、エノキグサ、コミカンソウ属、セリ科、イヌコウジュ属)217個、イネの炭化胚乳1個が検出された。
- ・ No.3 : S103カマド
木本2分類群(スギ、タラノキ)2個、草本10分類群(イネ、コムギ、イネ科、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、エノキグサ、イヌコウジュ属、キランソウ属、アカネ科)250個、イネの穎1個とコムギの炭化胚乳1個が検出された。

4 : S104カマド

木本2分類群(タラノキ、ムラサキシキブ属)2個、草本9分類群(イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、エノキグサ、コミカンソウ属、キランソウ属、アメリカセンダングサ)37個、帰化植物のアメリカセンダングサが1個検出された。

- ・ No.5 : S106カマド
木本5分類群(スギ、ケヤキ、ヤマグワ、キイチゴ属、タラノキ)14個、草本15分類群(イネ、イネ科、カヤツリグサ科、ギシギシ属、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ、コミカンソウ属、ヤブジラミ、セリ科、ナス科、アカネ科)824個、イネの穎の破片が166個検出された。

5 : S107埋土

木本2分類群(キイチゴ属、タラノキ)2個、草本6分類群(イネ科、ツユクサ、ナデシコ科、エノキグサ、セリ科、アカネ科)92個、イネ科の炭化胚乳1個が検出された。

以下に、本分析で同定された種実遺体の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。

<木本>

- ・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D.) スギ科スギ属
種子が検出された。茶褐色、線状長楕円形でやや偏平。長さ4.5mm、幅2.5mm、厚さ1mm程度。頂部はやや尖る。正中線上にやや湾曲した鈍稜がある。種皮表面はやや平滑で、両縁には質の薄い翼がある。
- ・ケヤキ(*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属
果実が検出された。灰褐色、歪んだ心臓形で背面方向に湾曲する。径4mm程度。花柱が嘴状突起状に

表1. 種実同定結果

| 分類群 | 学名 | 部位 | 状態 | No.1 SI01 | No.2 SI02 | No.3 SI03 | No.4 SI04 | No.5 SI05 | No.6 SI07 |
|-----|-------------|---------------------------------|-------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| | | | | カマド | カマド | カマド | カマド | カマド | 堆土 |
| 木本 | スギ | Cryptomeria japonica (L.f.) D. | 種子 | — | — | 1 | — | 1 | — |
| | ケヤキ | Zelkova serrata (Thunb.) Makino | 果実 | — | — | — | — | 5 | — |
| | ヤマグワ | Morus australis Poiret | 種子 | — | — | — | — | 3 | — |
| | キイチゴ属 | Rubus | 核 | — | 1 | — | — | 3 | 1 |
| | タラノキ | Aralia elata (Miq.) Seemann | 核 | — | — | 1 | 1 | 2 | 1 |
| | ムラサキシキブ属 | Callicarpa | 核 | — | — | — | 1 | — | — |
| | イネ | Oryza sativa L. | 胚乳 塗化 | 3 | 1 | — | — | — | — |
| 草本 | コムギ | Triticum aestivum L. | 胚乳 塗化 | — | — | 1 | — | 166 | — |
| | イネ科 | Gramineae | 胚乳 塗化 | — | — | — | — | — | 1 |
| | カヤツリグサ科 | Cyperaceae | 果実 | — | 156 | 97 | 4 | 490 | — |
| | ツユクサ属 | Commelinaceae | 種子 | — | 4 | — | 1 | 12 | — |
| | ギンギシ属 | Rumex | 果実 | — | — | — | — | — | 1 |
| | タデ属 | Polygonum | 果実 | — | — | 44 | 4 | 25 | — |
| | アザガ科 | Chenopodiaceae | 種子 | — | 24 | 12 | 3 | 11 | — |
| 木本 | ナデシコ科 | Caryophyllaceae | 種子 | — | 2 | 1 | 2 | 15 | 1 |
| | キジムシロ属 | Potentilla-Duchesnea-Fragaria | 核 | — | — | — | — | 7 | — |
| | カタバミ属 | Oxalis | 種子 | — | — | — | — | 2 | — |
| | エノキガサ | Acalypha australis L. | 種子 | 10 | 23 | 68 | 20 | 17 | 27 |
| | コミカンソウ属 | Phyllanthus | 種子 | — | 1 | — | 1 | 2 | — |
| | ヤブジラミ | Terilia japonica (Houtt.) DC. | 果実 | — | — | — | — | 16 | — |
| | セリ科 | Umbelliferae | 果実 | — | 1 | — | — | 50 | 60 |
| 草本 | イヌコウジュ属 | Mosla | 果実 | — | 5 | 23 | — | — | — |
| | キランソウ属 | Alcea | 果実 | — | — | 1 | 1 | — | — |
| | ナス科 | Solanaceae | 種子 | — | — | — | — | 1 | — |
| | アカネ科 | Rubiaceae | 核 | — | — | 2 | — | 1 | 2 |
| | アメリカセンダングサ | Bitter frondosa L. | 果実 | — | — | — | 1 | — | — |
| | 炭化材 (> 2 m) | | 炭化 | 7.6g | 1.6g | 0.7g | 4.3g | 1.4g | 0.9g |
| | 土器 | | — | — | — | — | — | — | — |

残る。基部に円形の臍があり、褐色の繊維が放射状に発達する。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

種子が検出された。黄褐色、三角状広倒卵形。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄い。長さ2mm、径1.5mm程度。一边が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・キイチゴ属 (*Rubus*) バラ科

核(内果皮)が検出された。淡黄褐色、半円形～三日月形でやや偏平。長さ2mm、幅1.5mm程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

・タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属

核(内果皮)が検出された。淡褐色、半円形でやや偏平。長さ2.2mm、幅1.3mm程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。

・ムラサキシキブ属 (*Callicarpa*) クマツヅラ科

核(内果皮)が検出された。灰黄褐色、倒卵形でやや偏平。長さ2.5mm、幅1.5mm程度。背面上に凹みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部の内果皮が極めて薄く柔らかいため、破損してドーナツ状を呈す。縁はやや厚く、弾力がある。

<草本>

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と多量の穎(果)の破片が検出された。長楕円形でやや偏平。長さ4～5mm、幅2.5mm、厚さ1.5mm程度。胚乳は炭化しており黒色を呈す。基部の一端に胚が脱落した凹部がある。表面はやや平滑で、2

～3本の縦溝がみられる。穎は淡～暗灰褐色、基部に円柱状の特徴的な果実序柄がある。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が規則的に縦列する。

・コムギ(*Triticum aestivum L.*) イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色を呈す。梢円体。長さ3.8mm、径2mm程度。腹面の正中線上には1本のやや太く深い縦溝がある。背面基部の正中線上には胚の痕跡があり、丸く壅む。表面はやや平滑。

・イネ科(Graminaceae)

胚乳と多量の果実が検出された。胚乳は炭化しており黒色を呈す。狭卵形でやや偏平。長さ5mm、径2mm程度。腹面の正中線上には1本のやや太く深い縦溝がある。背面基部の正中線上には胚の痕跡があり、丸く壅む。表面はやや平滑。上述のコムギや、オオムギ属オオムギ(*Hordeum vulgare L.*)などのムギ類に似るが、同定根拠が認められないため区別した。果実は形態上差異のある複数の種を一括した。淡～灰褐色、線状梢円体～半卵形でやや偏平。長さ2～3.5mm、径1.5mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が縦列し、毛が密生する個体もみられる。

・カヤツリグサ科(Cyperaceae)

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。淡～黒褐色。狭倒卵形状のやや明瞭～不明瞭な三稜形で先端部は尖り、基部は切形。長さ1.2mm、径0.8mm程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。カヤツリグサ属(*Cyperus*)と思われる個体を含む。

・ツユクサ(*Commelinaceae* L.) ツユクサ科ツユクサ属

種子が検出された。灰褐色、亜半横長梢円体。径3.2mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、背面と側面の表面は、大きなすり鉢状の孔が散在する。他の面は円形の小孔が多数存在する。

・ギシギシ属(*Rumex*) タデ科

果実が検出された。灰褐色、広楕円状三稜形。長さ2.5mm、径1.5mm程度。三稜は鋭く明瞭で、両端は急に尖る。果実を取り巻く内花被片が発達しており、花被は心円形、径4mm程度で網目模様をなす。縁には歯牙があり、中肋は瘤状に膨れる。

・タデ属(*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。黒色、丸みのある二稜状卵形で長さ2.5mm、径1.5mm程度、表面はやや平滑で光沢が強い、ハナタデ(*Polygonum caespitosum Blume* subsp. *yokusanianum* (Makino) Danser)またはイヌタデ(*Polygonum longisetum De Bruyn*)と思われる個体などがみられる。

・アカザ科(Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1.3mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

・ナデシコ科(Caryophyllaceae)

種子が検出された。灰褐色、腎状円形でやや偏平。径1.2mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・キジムシロ属～ヘビイチゴ属～オランダイチゴ属(*Potentilla*～*Duchesnea*～*Fragaria*) バラ科
核(内果皮)が検出された。灰褐色、腎形でやや偏平。径1～1.2mm程度。内果皮は厚く硬く、表面は粗面。

・カタバミ属(*Oxalis*) カタバミ科

種子が検出された。黒褐色、卵形で偏平。長さ1.3mm、幅0.9mm程度。先端は尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には4~7列の肋骨状横隕条が並び、わらじ状を呈す。

・エノキグサ (*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、倒卵形で長さ1.8mm、径1.3mm程度。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面は細かな粒状の瘤みが配列しがらつく。

・コミカンソウ属 (*Phyllanthus*) トウダイグサ科

種子が検出された。淡灰褐色、半倒広卵形。径1.1mm程度。背面は丸みを帯び、腹面の正中線は稜状。正中線の一端に臍がある。種皮表面は微細な粒状突起が散在し、網目模様を呈す。

・ヤブジラミ (*Torilis japonica* (Houtt.) DC.) セリ科ヤブジラミ属

果実が検出された。淡黄褐色、狭卵形でやや偏平。長さ6mm、径2mm程度。両端はやや尖る。背面に3個の隆条が配列し、隆条の間に油管が配列する。表面には0.5mm程度の鉤状の剛毛が密生する。

・セリ科 (Umbelliferae)

果実が検出された。淡褐色、長楕円形でやや偏平。長さ1.5mm、幅1mm、厚さ0.5mm程度。果実表面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で淡黄褐色の油管が配列する。

・イヌコウジュ属 (*Mosla*) シソ科

果実が検出された。淡褐色、倒広卵形。径1.3mm程度。下端は舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面には大きく不規則な網目模様がある。

・キランソウ属 (*Ajuga*) シソ科

果実が検出された。淡褐色、狭楕円形。長さ1.5mm、径1mm。基部付近に果実の長さの2/3に達する大きな楕円形の着点痕の孔がある。果皮表面は深い凹みによる網目模様が分布する。

・ナス科 (Solanaceae)

種子が検出された。淡灰褐色、亜腎臓形で偏平。径1.7mm程度。側面のくびれた部分に臍がある。種皮は薄く柔らかく、表面には星型状の網目模様が臍を中心に同心円状に発達する。

・アカネ科 (Rubiaceae)

核が検出された。灰黒褐色、偏球形。径1.5mm程度。腹面中央に深い楕円形の孔がある。表面には微細な網目模様が発達し、粗面。

・アメリカセンダングサ (*Bidens frondosa* L.) キク科センダングサ属

果実が検出された。灰褐色、倒皮針形で偏平。長さ6mm、幅2.5mm程度。頂部の両肩に1個ずつ芒があり、下向きの逆刺が散生する。芒の長さは1~1.5mm程度。正中線上には細い縦隕条がある。果皮表面には伏毛が密布する。

4 考 察

堅穴住居跡 (SI01-03) のカマドからは、イネやコムギの炭化胚乳が確認された。イネやコムギは、古くから栽培のために持ち込まれた渡来種であり、胚乳が食用とされる。一方、炭化胚乳とともに検出された未炭化の種実遺体分類群は、木本6分類群(針葉樹のスギ、落葉広葉樹のケヤキ、ヤマガラ、キイチゴ属、タラノキ、ムラサキシキブ属)21個、草本19分類群(イネ、イネ科、カヤツリグサ科、ツユクサ、ギシギシ属、タデ属、アカザ科、ナデシコ科、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ、コミカンソウ属、ヤブジラミ、セリ科、イヌコウジュ属、キランソウ属、ナス科、アカネ科、アメリカセンダングサ)1427個の計1448個からなる。木本類は、伐採地や崩壊地などに先駆的に侵入する種類を含むことから、遺跡周辺の森林の林縁部などに生育していたも

のに由来すると考えられる。草本類は、SI03・06カマドからはイネの穎の破片が確認され、SI06からは多量に検出された。この他の草本類の多くは、人里近くに開けた草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種類であることから付近の明るく開けた場所に生育していたものに由来すると考えられる。これらの種実遺体は、カマド内やカマドに伴う燃焼部焼上から検出された状況から、栽培植物に由来する炭化種実は当該期に利用された植物質食糧の可能性がある。ただし、未炭化の種実も含まれることから、これらを含む遺構周囲の土壤が混在している、或は、試料採取時に混入した可能性がある。炭化種実の検出が少量であることや、炭化していない種実中に遺存状態が極めて良好なものや北米原産の帰化植物であるアメリカセンダングサが含まれることからも、同様の可能性が示唆される。

ところで、遺跡から出土する種実のうち、低湿地以外から出土した未炭化の種実は後代に混入した可能性があり、炭化物と同様に扱うには課題がある(吉崎, 1992など)とされ、遺物包含層の年代観と当土層から出土した種実遺体の年代測定結果が異なる事例(例えば、木下, 2003; 高宮, 2003など)もある。本分析結果では、上述したように未炭化の種実は多量に検出されたことや、帰化植物の種実が含まれることから、試料採取を行った土壤の観察所見や採取時及び採取後の履歴、検出された種実の年代等の検証を行い、慎重に評価することが望まれる。

II 樹種同定

1 試 料

試料は、江戸時代の墓塚(SK45)から出土した棺材とされる木片1点(No. 7 : SK45RW1)である。

2 分析方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3 結 果

木材は、針葉樹のスギに同定された。以下に、解剖学的特徴等を記す。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晚材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野隙孔はスギ型で、孔口の長軸方向が水平になるものが多い。1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

4 考 察

棺材とされる木片は、針葉樹のスギであった。スギは木理が直通で割裂性が高く、板材の加工に適しており、明治時代に編纂された「木材ノ工藝的利用」(農商務省山林局編, 1912)によれば、木棺の樹種としてヒノキが高級品で、普通はモミやスギが多いとされている。棺材の分析事例では、近世の江戸を中心とする樹種同定が行われており、スギやヒノキ、サワラが多く認められている(橋本・辻木, 1990; 能城, 1995; 鈴木・能城, 2004等)。本遺跡周辺では、当該期の棺材の調査事例がなく不明であるが、前述した事例と比較すると調和的な傾向と言える。

ところで、八丁堀三丁目遺跡（東京都）の調査事例では、方形木棺にスギが多く認められ、円形木棺ではサワラが多く認められといった各形態で異なる木材（樹種）を利用する傾向が認められている。本分析結果では判断することはできないが、今後、資料の蓄積を待って、この点も改めて検討したい。

引用文献

- 石川 茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 木下 尚子, 2003, 遺物包含層における現代イネ混入の検討, 考古学研究室報告 第38集, 熊本大学文学部考古学研究室, 55-62.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大学出版会, 642p.
- 高宮 広士, 2003, ナガラ原東貝塚出土の植物遺体(2002年度), 考古学研究室報告 第38集, 熊本大学文学部考古学研究室, 49-54.
- 吉崎 昌一, 1992, 古代雜穀の検出, 月刊考古学ジャーナル, No. 355, 2-14.
- 橋本 真紀夫・辻木 崇夫, 1990, テフラ分析・木製品の樹種・焼物の胎内分析, 「東叡山寛永寺護国院1」, 都立学
校遺跡調査会, 349-368.
- 能城 修一, 1995, 法光寺跡から出土した木製品の樹種, 「法光寺跡」, 日本電信電話株式会社・新宿区
法光寺跡調査団, 25-26.
- 農商務省山林局（編）, 1912, 木材ノ工藝的利用, 大日本山林會, 1312p.
- 鈴木 伸哉・能城 修一, 2004, 東京都中央区八丁堀三丁目遺跡より出土した江戸時代の木棺の形態と
樹種・植生史研究, 12(2), 75-86.

編者註

今回の調査では食性・生業復元のための基礎資料蓄積を目的として、カマドの燃焼部焼土の直上5cmと、焼失住居であったS 106Aの床面直上約5cmの土壌を全量採取した。採取した上は乾燥後、水を入れたバケツに入れてかき混ぜ、浮いてきた炭化物・種実を茶こしフルイと1・3・5mmメッシュを使用して採取した。この採取した炭化物・種実の樹種同定を委託した。結果、コムギ・イネ科の胚乳が検出された遺構もあるが、報告にも記述がある通り、比較的残存状況の不良な遺構のため上位層からの混入の可能性を否定できない。残存状況の良好なS 104カマドから遺跡周辺に生育する雑草類しか確認されていないことも、これを追認することになる。このような資料を分析委託してしまった責任は筆者にあり、ここで分析された方々に深くお詫び申し上げる次第である。

VII まとめ

ここでは、1で奈良時代の遺構、2で近世の遺構、3でその他の遺構、4で縄文時代の遺物、5で奈良時代の土器、6で奈良時代の遺物、7で近世の遺物についてのまとめと若干の検討を行う。

今回の調査で検出した遺構、出土遺物は以下の通りである。

<遺構>奈良時代の堅穴住居跡(以下住居と省略)8棟、近世の墓壙18基、時期不明の堅穴状遺構5棟・柱穴列3列・土坑39基・炭窯2基・時期不明の溝跡15条・柱穴状土坑206個を検出した。

<遺物>縄文土器大コンテナ1箱(10.28kg)、奈良時代の土器大コンテナ1箱(11.85kg)、陶磁器9号袋1/2袋(134g)、石器・石製品小コンテナ1箱(1.97kg)、金属製品小コンテナ1箱(2.88kg)、ガラス小袋1袋分(27g)出土した。

1 奈良時代の遺構

(1) 堅穴住居跡

今回の調査ではA区から4棟、B区から4棟の計8棟検出した。所属時期は奈良時代と思われる。畑造成時による削平が激しく得られた情報は多くない。そのため詳細な検討は行えないが、これまでに分かったことを簡単にまとめる。

<規模>2m弱(1棟)、3~4m(5棟)、5m以上(1棟)に分けられ、3~4mの規模が主体である。

<周溝>規模が4m以上の住居で検出され、カマド以外の住居壁際を全周する傾向がある。幅は20~30cm台である。深さは削平が多く参考にならないが7~20cm程である。

なお、S I 04ではカマド下にも造っている。燃焼部は板状の花崗閃緑岩で蓋をして暗渠を構築し、袖付近はトンネルを掘り(写真図版8)、両脇の周溝に直結している。周溝の底面レベルは標高67.1~67.3mで、カマド付近が最も標高が高く、斜面下方に向かうにつれて低くなっていく。比高差は25cmを測る。また、煙道部が上り勾配で雨水の流入を止める施設がない。以上の状況から、S I 04の周溝は排水溝の性格をもつ可能性が考えられる。

<柱穴>2棟(S I 01・04)で検出された。一番規模の大きいS I 04では主柱穴が4本確認された。規模の小さい住居ではS I 01以外では認められない。

<カマド>斜面上位にカマドを設置し、方向は南北方向(4棟)、北西~南東方向(3棟)に分けられる。周辺の地形が北西方向から南東方向に下っているため、その影響が大きいと思われる。燃焼部は残存状況が不良のカマドが多く、様相は判然としない。比較的の燃焼部が残存している3基をみる。袖は地山削り出し(S I 01左袖)、暗褐色粘土を用いて作り出し(S I 02)、地山削り出しと暗褐色粘土作り出し(S I 01右袖・S I 04)とバラバラで傾向は認められない。芯材は土器、礫いずれも認められる。S I 04では例外的に板状土製品が天井の芯材に用いられている。これは6の(1)で後述する。支脚は3基で認められ、亜角礫と土器を転用したものが認められる。1個置いたものと、2個置いたものがある。煙道は残存状況が不良で傾向はみいだせないが、長さ1m前後、幅20~30cm程のものが多い。

(2) 炉跡

B区中央から1基検出した。径1.24×1.00mの楕円形状を呈する。黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。底面中央付近に径56×45cmの楕円形状を呈する赤褐色焼上があり、厚さは6cmを測

る。埋土に鉄滓・鍛造薄片が含まれず、還元炎焼土・炉壁も確認されていないことから、鍛冶関連の炉跡の可能性は低いと思われる。出土遺物から所属時期は奈良時代であると思われる。

2 近世の遺構

B区中央、III C 9 d・10 c・10 dグリッドを中心に18基検出した。この区域は地目が墓地だった。元土地所有者の山田氏に伺ったところ、江戸時代から明治初期頃の山田家の墓地で、今回の調査に先立ち、墓標等で場所を認識できた墓に関しては移転を行ったという。また、場所が分からず移転できなかつた墓もあるとのことだった。残存状況は不良で、得られた情報は多くないが、これまでに分かつたことを簡単にまとめる。

<平面形>隅丸方形(4基)、長方形(1基)、円形(2基)、楕円形(11基)がある。

<規模>①0.6~0.8m(8基)、②1m前後(6基)、③1.2~1.4m(4基)に分けられる。隅丸方形・長方形・円形は②、楕円形は①③になる傾向がある。深さは①は10~20cmと浅く、②が0.5~1.0m、③は30~50cmを呈する。

<埋葬姿勢>①の埋土には多量の灰と被熱した骨片が含まれている。火葬ないし再葬の可能性が想定される。②のうち、平面形が円形のものは躰葬、方形・長方形のものは座葬の可能性がある。③は骨の残存状況が不良で、はっきりしない。

<副葬品>六道錢のみ副葬された墓壙が大半を占める。SK37で鉄、SK40Bで鉄・毛抜、SK41・42・47・48E・50で煙管が副葬されてはいるが、錢貨以外の副葬品の種類・点数は少ない。

<六道錢>①は古寛永+新寛永+(文錢)、②は古寛永+新寛永+鉄錢+(21波・11波)の組み合わせが多い傾向が認められる。③は遺物が出土しなかった墓壙もあり傾向は見いだせなかった。

<重複関係からみた新旧関係>②が①の墓壙を切り、③が②を切る墓壙が多い傾向がある。よって①→②→③という新旧関係が想定される。この新旧関係は六道錢の組み合わせから見た新旧関係と大きく矛盾しない。

<墓壙と礎の位置関係>墓壙を検出した際に多量の礎が出土した。この礎は墓壙付近に集中する傾向が認められる(第26図)。理由は不明だが、墓壙の位置を示すために埋葬時に置いたものだろうか?

3 その他の遺構

<堅穴状遺構>A区より1棟、B区より4棟検出した。ここでは一辺2~7m前後の隅丸方形もしくは楕円形状を呈しているが、カマド・炉が検出されず、遺物が全く出土しない遺構を堅穴状遺構として扱った。遺物は埋土から縄文土器が出土しているが、流れ込みの遺物で遺構に伴うものではないと思われる。所属時期は不明である。

<柱穴列>B区より3列検出した。出土遺物が少ないため、所属時期は不明である。

<炭窯>B区より2基検出した。出土遺物が少ないため、所属時期は不明である。

<土坑>A区より12基、B区より27基検出した。平面形は円形・楕円形・方形など様々で、規模は0.54~2.06mを測る。出土遺物が少ないため、用途や時期は不明である。

<溝跡>A区から3条、B区から12条検出した。溝の幅や長さは様々で、規則性は認められない。出土遺物がないため時期不明の溝が大半である。分布は調査区各地に点在しており、規則性はない。方向は西北西-東南東、南南西-北北東、東西方向が主体を占める。これらの溝は等高線に対して平行

で、出土遺物がないものが大半を占める。それ以外の方向を示す溝は若干あるが、前述の溝とは様相が異なる。**S D15**は断面形は他の溝と同じであるが、平面形が馬蹄形状を示す点が異なる。出土遺物がないため所属時期は不明である。**S D44**は近世墓群の北側に位置する。断面形と規模が他の溝より大きく、土師器片が多く出土している。埋土は遺物が出土しない周辺の溝と異なる。所属時期は奈良時代の可能性がある。**S D48・50**はA区の比較的平坦な部分から斜面に変わる傾斜変換線付近に位置している。出土遺物は縄文上器・土師器の細片であるため、流れ込みの遺物であると思われる。よって時期は不明である。おそらくは地境等を示す区画溝であった可能性がある。

なお、**S D23**の底面には径19~48cmの円形・橢円形を呈するピットが検出されている。検出状況が堀に類似しているが、出土遺物が無く、埋土の堆積状況が单層かつ周辺の時期不明の溝跡に類似していることから、本報告では底面にピットのある時期不明の溝跡とした。

4 縄文時代の遺物

(1) 縄文土器

大コンテナ1箱分、重量にして約10kg出土した。遺構外出土のものが大半を占める。遺構内出土のものも直接遺構に伴うものではなく、周囲から流れ込んだものがほとんどである。遺構外出土のものはA区南とB区南・東からの出土が多い。

<貝殻条痕文>265は貝殻条痕文が施文されている。<斜縄文L R>273・276・287・288・292は斜縄文(L R)である。275・288・292は口縁部がやや湾曲(外反)して立ち上がる。胎土に纖維含。<斜縄文R L>261~266・277・279・282・283・285・293~295・299~305・307・309・314は斜縄文(R L)が施文されている。283・301・300は口縁部直線的に立ち上がり、261~263は胴部は直線的に立ち上がる。277は磨消が施されている。胎土に纖維含。<附加条縄文>268は附加条縄文が施文されている。前期(大木2a?)<羽状縄文(R L + R L。非結節)。菱形文>290・291・287。<羽状縄文(L R + R L。非結節)。菱形文>284・286・292・315。<羽状縄文(R L + R L。結節)。菱形文>289。<ループ状縄文>274・298・311・312・313・296。C字と逆C字のいずれも認められる。<S字状連鎖文>275。<単輪絆条体>278・310。撚り方は残存状況不良のため不明。

羽状縄文は大木2a式、ループ状・S字状連鎖文は大木2b式、単輪絆条体は大木3式ではないかと思われる。斜縄文が施文された縄文土器は纖維が含まれているので、前述の土器と同時期に位置づけられるものと考えた。今回の調査で出土した縄文土器は概ね大木1~2式を中心とした前期前葉に位置づけられると思われる。ただし、276は胎土に纖維が含まれないこともあり、前期の土器でない可能性がある。

(2) 石器

<石鎌>320は所謂凹基鎌、(321)は所謂平基鎌である。

<不定形石器>317~319・322~329は不定形石器として括した。

5 奈良時代の遺物

土師器、板状土製品、磨石が出土した。土師器は総量で大コンテナ1箱分、重量にして約12kg出土した。器種は壺・甕・球胴甕・瓶が認められるが、壺が全体で7点しか出土せず、量が極めて少ない。

板状土製品はS 104カマドから1点、磨石はS 101から3点出土した。

(1) 土 器

土器の分類

壺

壺A：丸底で、内外面に段をもち、口縁部が外反している。内面黒色処理(以下内黒と省略)・ヘラミガキ、外面底部ヘラケズリ、体部ヘラナデ調整が施されている(44)。

壺B：丸底で、体部中位で屈曲し、口縁部が外反している(31)。調整技法は壺Aと同じ。

壺C：丸底で、外面に段を持ち、口縁部が内湾している。内黒・ヘラミガキ、外面ヘラナデ調整(49)。

壺D：丸底で、体部に段はなく直線的に立ち上がり、口縁部が若干内湾している。内黒・ヘラミガキ、外面ヘラナデ調整が施されている(316)。

壺E：平底で、体部に段はなく、直線的に立ち上がり口縁部が若干外反する(33)。調整は壺Aと同じ。

壺F：平底で、体部に段はなく、内湾して立ち上がる。法量が大きいもの(48)と小さいもの(32)とに細分できる。前者は壺Aと同じ調整、後者は壺Cと同じ調整が施される。

甕

甕A：頸部に段もしくはその名残があり、口縁部は外反し、受け皿状となっている。最大径は口縁部にある。調整は摩滅が著しく、不明なものが多い(16・17・19・21・47)。

甕B：頸部に段もしくはその名残があり、すぼまっている。口縁部は面取り(2段ナデ)が施され、外反している。内面ヘラナデ、外面はハケメもしくはヘラケズリ調整(38・39)。

甕C：頸部に段はなく、頸部が屈曲し口縁部が直線的に開く。最大径は体部にある。口縁部は3cm前後。調整は内面ヘラナデ、外面はハケメとヘラミガキ調整が半々である。ハケメの単位は細かい(9・12・13・18・20・22・46・271)。

甕D：頸部に段を持ち、口縁部が若干外反し、2段ナデ。外面ヘラケズリ・内面ハケメ調整(10)。

甕E：頸部に段はなく、体部は内湾して立ち上がり口縁部が外反している。最大径は口縁部にある。外面ヘラナデ調整(40)。

甕F：頸部に段かその名残がありすぼまっている。口縁部は外反し、2段ナデ(11)と1段ナデ(35・45)がある。前者は外面ハケメ、内面ヘラナデ調整、後者は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整。

甕G：頸部に段があり、口径に対して器高が低い短胴形のもの。最大径は口縁部。体部は内湾して立ち上がり口縁部が外傾する。3は底部が張り出す。外面ヘラミガキ調整が主体(1～3)。

甕H：頸部に段はなく、口径に対して器高が低い短胴形のもの。最大径は口縁部。体部は内湾して立ち上がり口縁部が外反する。底部は若干張り出す。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整(34)。

甕I：胴部が球胴を呈する。所謂球胴甕。口縁部が外傾し、受け皿状を呈す。数が少ないので一括した。調整は内面はヘラナデだが、外面はハケメ・ヘラミガキ・ヘラケズリと様々である。胎土が他の甕より密で、金雲母が含まれる傾向が認められる(7・8・23・24・26・41)。

甕J：単孔式で胴部から口縁部にかけて外傾するもの(36)。内外面ヘラナデ調整が施されている。

その他：残存状況が不良で上記の分類にあてがうことができなかつた土師器はその他の甕として一括した。一括した土師器甕の底部破片を見てみると、底部が張り出しているものと(14・27～29・37・51・52)、そうでないもの(42)が認められ、比較的張り出しているものが多い。

各分類の出土状況と共伴関係

土器の分類をもとに遺構毎の出土遺物の共伴関係をみていく。なお、今回の調査で検出された住居

は土器の出土量が少なく、形状が分かるものは概ね掲載したので、掲載遺物のみで検討したことをお断りしておく。

ところで、今回の調査で検出された住居数、遺物の山上量は極めて少ないが、重複関係にある住居（S I 06 A、B）がある。最初にこの2棟の山上遺物の様相を確認する。S I 06 Bからは壺A・甕C・中型甕Fが出土している。これに対してS I 06 Aからは壺B・E・甕B・E・中型甕F・H・球胸甕II・瓶Jが山上している。S I 06 Aと06 Bからは同じ器種が出土していないという状況が読み取れる。また、他の住居出土遺物をみるとこの二つの住居の土器組成と同じパターンを示すものがほとんどであった。よって、本遺跡出土資料は大きく二時期の変遷がたどると考え、S I 06 A・Bの新旧関係を縦軸に、両住居出土土器の組成を横軸にして、今回出土した土器のグルーピング化を試みる。

共伴関係を見ていくと、大きく2つのグループに分けられる。

- ①は甕Cを主体として、甕A・中型甕F・球胸甕Iを伴う。一部で壺Aを伴う（S I 02・04・06 B）。
- ②甕B・E・瓶Jが主体とするもの。一部で壺B・Eを伴う。①で共伴していた甕F・Iが伴う住居もあるが、壺A・甕Cは含まれない（S I 06 A）。

なお、①と②の前後関係はS I 06 A・Bの切り合いから、①→②と考える。

土器の年代的位置づけ

本遺跡が所在する沿岸南部地域は、資料数の問題から、古代の上器についての検討がほとんど行われていない。また、内陸地方（北上盆地・人崎平野）とは土器の様相が異なるので、年代観を参考にすることもできない。そこで、距離は離れているが、若干土器の様相が近い松島湾岸の中で一番資料のまとまっている赤井遺跡（矢木町教育委員会2001）の資料を参考にして検討を行う。

①は壺AのII縁部の外反具合と法量・形状からみて、仙台市付近の7世紀後半代の上器に類似している。赤井遺跡のI-3期（7世紀後半～末葉）の壺Bに類似しているような気もする。共伴している甕Aは赤井遺跡II-1期の甕A・甕IIは同じくII-1期の甕Hに類似し、II-1の年代観は7世紀末～8世紀前葉とされている。本地域の土器様相がはつきりせず、壺Aが後続時期まで使用されていた可能性もあるため、①の年代は赤井遺跡のI-3～II-1期、7世紀後葉～8世紀前葉としておく。

②は壺類が赤井遺跡のII-2～II-3期の壺E類に比較的類似している。また、共伴する甕Hは赤井のII-2期甕Eに、甕Iは赤井のII-3期の甕Cに（そのものではないが）比較的類似している。よって、②の年代は赤井遺跡のII-2～3期、8世紀前葉～中葉としておく。

また、S N01出土壺は形状から赤井遺跡のII-4期甕Eに類似していることから、②に後続する8世紀後半段階に位置づけられる可能性があると思われる。

なお、この年代観は資料数が少ないまま設定している。資料が増加した段階で再検討する必要がある。

（2）土製品・石製品

<板状土製品>30はカマド燃焼部に架構されていたものである。全体的に被燃による摩耗が著しく、調整技法は不明だがヘラナデ・指オサエの痕跡が確認できた。断面形状は角の取れた方形形状を呈し、粘土が巻かれている状態が看取される。板状の粘土を巻いて棒状に加工したものと推察される。角はナデで面取りされている。この板状土製品に類似した土製品は八戸市酒美平遺跡S I 8堅穴住居跡で出土している（八戸市教育委員会2001）。同遺跡出土例は長さ約28cm、幅約5cm、厚さ約2cmと本遺跡出土例より一回り小さいが、ナデ→ミガキ調整が施され、カマド袖の芯材として使用している。また、阿武隈川流域の福島県本宮町高木遺跡1号住居跡からは3本の粘土紐を束にして板状に形成した板状

七製品が出土している。この土製品は埋上から出土したもの、他の住居の状況から、カマド構築材に使用した可能性が指摘されている（福島県教育委員会2002）。類例は少ないが、本遺跡出土板状土製品は当初からカマド芯材（構築部材）にするために製作した可能性が想定される。なお、この板状土製品は7～8世紀の新潟県においても分布が認められ、カマド構築材に用いられた可能性が指摘されている（春日2003）。

＜磨石＞4～6は磨石である。ほぼ全面に磨りの痕跡が認められる。石質は4はひん岩、5は凝灰岩、6はハンレイ岩と様々である。

6 近世の遺物

（1）陶器・陶磁器

陶器・陶磁器類は9号袋1/2袋分、重量にして約134g出土した。在地産陶器・陶磁器や肥前産陶磁器等が出土している。このうち、形状・染付が明らかなものを選択し、合計3点を掲載した。

＜鉢部＞332は近世の擂鉢の口縁部破片である。産地不明。在地の可能性有。

＜碗＞333は肥前産の碗である。時期は19世紀前半である。355は小皿、356は碗である。

（2）金属製品

銭貨以外の金属製品は9号袋1袋分、重量にして約486g出土した。墓壙から出土したものが大半を占め、遺構外出土も墓壙の周辺から出土したもののがほとんどである。器種は毛抜、鉄、煙管雁首、煙管吸口、釘が認められる。出土状況から毛抜、鉄、煙管は副葬品として埋葬され、釘は棺桶に使用されたものと思われる。毛抜、鉄、煙管に関しては全点掲載した。釘は形状が明らかなものを中心に18点写真掲載した。

＜毛抜＞1点(84)出土した。84は長さ8.2cm、幅7.5cm、厚さ1.25mm、重さ11.99gを測る。

＜鉄＞2点(59・83)出土した。59は長さ14.4cm、幅2.1cm、厚さ最大3mm、重さ65.78gを測る。83は長さ15.0cm、幅2.4cm、厚さ2mm、重さ30.57gを測る。83は刃部に「盛町」と刻まれている。「盛町」は、現在の大船渡市盛町のことか？

＜煙管雁首＞5点(92・168・239・248・330)掲載した。火皿が①径2.1cm前後と、②1.1～1.2cm前後の大小2種類に分けられるが、基本的に油返しの湾曲が緩やかな点が共通している。92は火皿が大きいもの、168・239・248は火皿が小さいものである。また、168は羅字との接続部が太くなっている。248は羅字が残存している。所属時期は①は18世紀後半代、②は19世紀前半代ではないかと思われる。

＜煙管吸口＞5点(169・203・204・240・331)出土した。残存状況が不良なものが多く、判然としない。比較的残存している169・240は口付が玉状に膨らんでいる。203は表面の剥落が著しい。169・204・240は羅字が残存している。所属時期は比較的残存している169・240から19世紀前半代と思われる。

＜釘＞各墓壙から出土した釘のうち代表的なものを18点選び写真掲載した。長さと重量に規則性は見られなかつたが、断面が一辺0.4～0.6cm前後の方形もしくは長方形を呈しているものがほとんどである。65・66はL字状に折れ曲がっている。使用（打ち込み・成形）時に曲がった（曲げた）のだろうか？。163～165は鍔や棺材の一部と思われる木質が付着している。

（3）銭貨

墓壙から約420枚、重量にして約2.4kg出土した。全て寛永通寶である。出土状況から六道銭として

副葬されたと思われる。金属の種類としては銅錢と鉄錢がある。銅錢は古寛永、文鏡、新寛永、21波、11波が出土している。鉄錢には差し状のものが多く認められ、最も多いもので約100枚を数えるものが出土した(241)。遺構別の出土状況は大きく①古寛永+新寛永+(文鏡)と②古寛永+新寛永+鉄錢+(21波・11波)の組み合わせに分けられる。

(4) 木製品

近世墓から棺材の一部と思われる木製品が重量にして約100g出土した。そのうち残存状態が比較的良好なものを選び、7点写真掲載した(166・167・179・202・238・246・247)。

大半が墓壙中央の底面直上から出土していることから、棺桶の底板であると思われる。また、202を樹種同定に出したところ、スギとの鑑定結果を得た。他の棺材と思われる木製品も202と同じ形状を呈していることから、スギの可能性が高いと思われる。

7 まとめ

今回の調査では奈良時代の集落跡、近世の墓壙が検出され、遺構外から縄文時代前期の上器が出土した。これらを中心に簡単なまとめを行う。

(1) 縄文時代前期の上器

遺構外から出土したもので、大半がB区東・南端から出土している。B区調査区外の斜面上位に概期の集落がある可能性が想定されよう。

(2) 奈良時代の集落跡

<7世紀後半～8世紀前半>A区から1棟、B区から2棟確認した(S I 02・04・06B)。規模は3～4m前後と5m前後を測る。斜面上にカマドを設置する傾向がある。S I 07は壘Aの形状から、この時期と判断した。この時期に確認した4棟の住居は調査区内で点在しており、分布に規則性はない。なお、7世紀後半～8世紀前葉と幅を持たせているが、S I 06Bは若干古く(7世紀後葉より)、S I 02・04・07は若干新しい(7世紀末～8世紀前葉より)方に位置づけられそうな感じがする。

<8世紀前葉～中葉>A区から1棟確認した(S I 06A)。規模は一辺1.1m前後を測る。斜面上にカマドを設置しているが残りが悪く、詳細は不明である。なお、S I 01は壘Gの形状から、この時期と判断した。よってこの時期の住居は2棟となるが数が少なく、傾向は見いだせなかった。

<8世紀後半>住居は無く、炉跡1基のみ検出した。

(3) 近世の墓壙

<平面形と副葬品の関係>VII-2で分類した、①②③を準拠して記述する。①からは六道錢と鉄・毛抜、②からは六道錢と煙管、③からは寛永通寶が出土する傾向がある。また、①の六道錢は熱を受けたものが多く、③の六道錢は鉄錢が比較的多く認められる。

<重複関係の整理>a) SK49→SK29、b) SK39→SK38→SK45、c) SK39→SK40B→SK40A、d) SK41・42→SK50、e) SK42→SK48D・E→SK48C→SK48B→SK48Aという重複関係である。a・b・cが①のみ、dが②のみ、eが②・③同士の重複関係にある。

<遺物からみた年代>①が18世紀代、②が18世紀後半～19世紀前半、③が19世紀代と思われる。

<墓壙の変遷>18世紀代に入ると、墓域の北側から埋葬し始める。形状は0.6～0.8mの楕円形状が主体である。18世紀後半以降になると南北方向にずれた地点(墓域の中央付近)に埋葬するようになる。形状は一辺1m前後の隅丸方形・円形が主体である。19世紀以降も同じ場所に埋葬され続けるが、部

分的な重複のみである。墓標の影響であろうが、以前に埋葬された地点を避けて埋葬しているのは確かである。19世紀後半(明治期)以降になると新たに埋葬されなくなる。なお、移転した墓石の年号は元文5年(1740)、宝暦10年(1760)、宝暦14年(1764)、安永3年(1774)、文化8年(1811)、文化11年(1814)、慶応元年(1865)、明治11年(1878)等があり、墓壙・遺物の年代観と大きく矛盾しない(移転した墓石の元位置は不明。墓石は地権者山田氏のご教示による。この場を借りて御礼申し上げます。)。

まとめ

①土師器は仙台湾、板状土製品は八戸・阿武隈川流域に類例があり、寛永通寶には江戸・常陸・浜津で鋳造されたものが含まれている。これらは海に面した本遺跡に陸上だけでなく海上交通からもたらされたといえよう。

②S I 04から出土した板状土製品の類例は、現時点では八戸・阿武隈川流域に認められている。出土例が少なく、現時点での位置付けは困難であるが、その分布には①で述べた海上交通との関連があることが予想される。今後、集成・検討を行うことで本遺跡の位置付け・性格に迫れる可能性がある。別稿で検討したい。

③西側約800mに位置する岩井沢II遺跡から蕨手刀が出土している。今回の調査では一辺が7mを超える大型住居や、蕨手刀などの有力者が所持するような稀少な遺物は出土していない。奈良時代の本遺跡は蕨手刀をもつ有力者を支えるムラの一つであったのではないだろうか?

いずれにせよ、今まで沿岸南部で調査例がほとんど無かった、奈良時代の集落を検出・調査できたことが、本調査の最大の成果である。また、沿岸南部における近世墓壙の資料を得られたことも成果と言える。奈良時代の集落は、住居の数が少なく、詳細な分析を行うことは出来なかった。資料の提示に留まった観は否めないが、周辺の資料が増加した段階に比較検討が行われることに期待したい。

今回の調査では大船渡地方振興局土木部、陸前高田市教育委員会、野外調査・室内整理に従事された作業員・期限付職員の方々に多大なるご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。



遺構変遷図(奈良時代)

写 真 図 版



南から



東から

写真図版 1 航空写真



調査区全景 (N→)



B区調査前風景 (NW→)



A区調査前風景 (N→)



調査区遠景 (SE→)

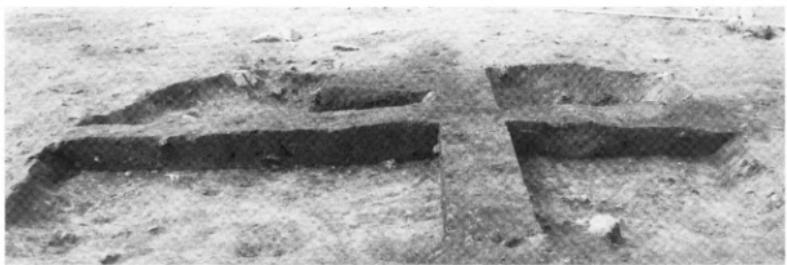


A区調査前風景 (NW→)

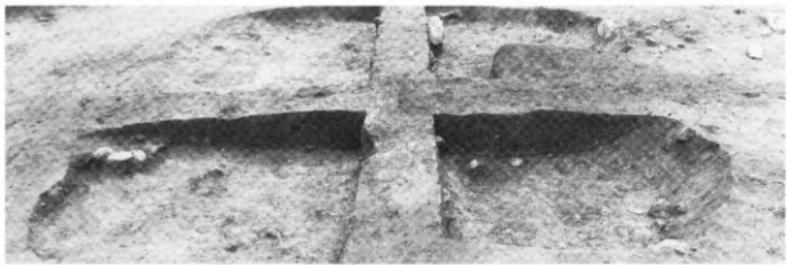
写真図版2 調査区全景・遠景、調査前風景



完掘 (S→)



A-A'断面 (S→)



B-B'断面 (E→)

写真図版3 S I 01竪穴住居跡(1)



カマド完掘 (S→)



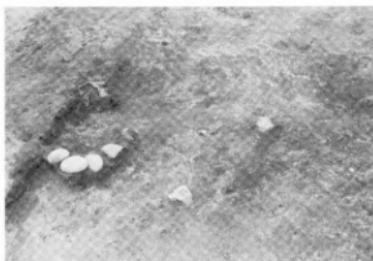
カマドA-A'断面 (E→)



カマドB-B'断面 (S→)



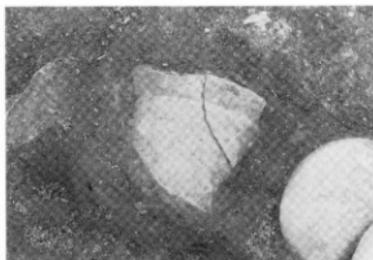
一次完掘 (S→)



遺物出土状況 (E→)



遺物出土状況 (S→)



遺物出土状況 (S→)

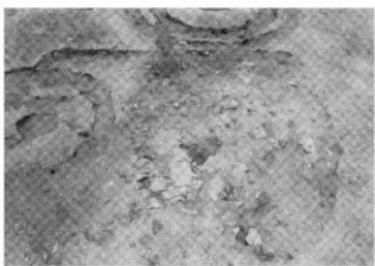
写真図版4 S 101竪穴住居跡(2)



完掘 (S→)



カマド完掘 (S→)



一次完掘 (S→)



遺物出土状況 (S→)

写真図版 5 S 102 穴住居跡(1)



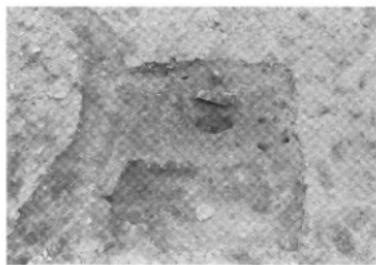
S 102 遺物出土状況 (S ->)



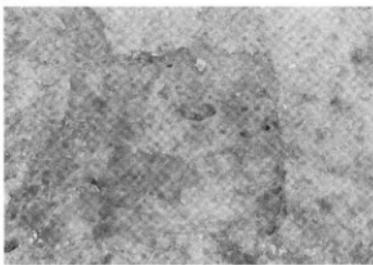
S 102 遺物出土状況 (S ->)



S 103 最終完掘 (S E->)

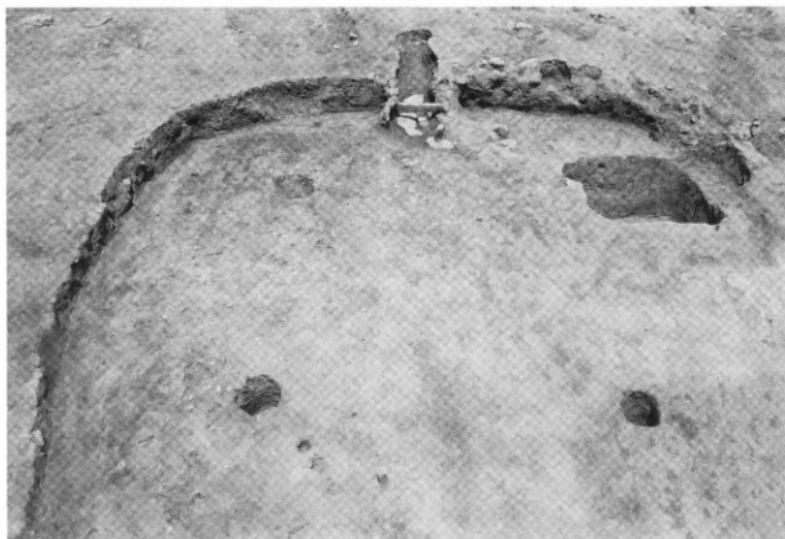


S 103 カマド検出状況 (S E->)



S 103 完掘 (S E->)

写真図版6 S 102(2)・03竪穴住居跡



完掘 (S→)

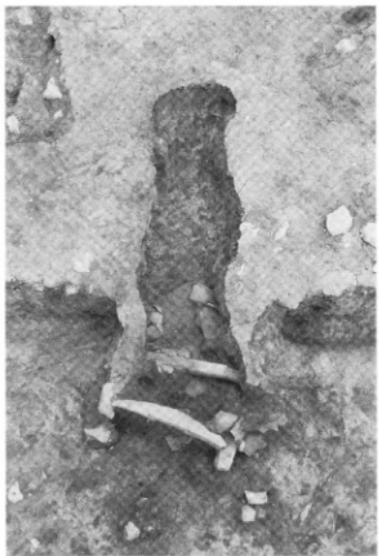


A-A'断面 (S→)

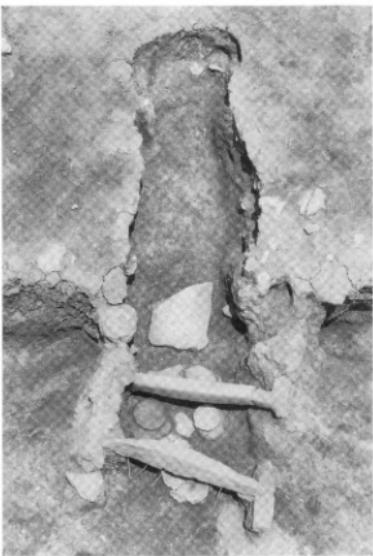


B-B'断面 (W→)

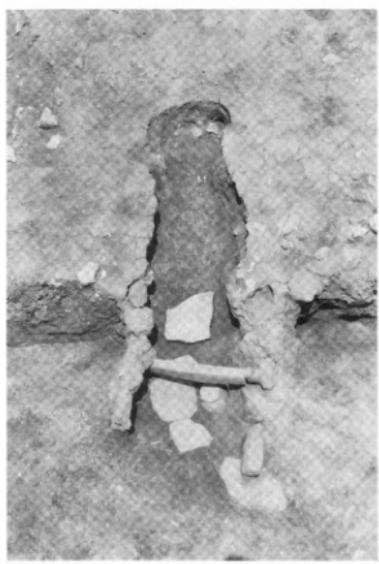
写真図版 7 S 104竪穴住居跡(1)



カマド遺物出土状況① (S→)



カマド遺物出土状況② (S→)



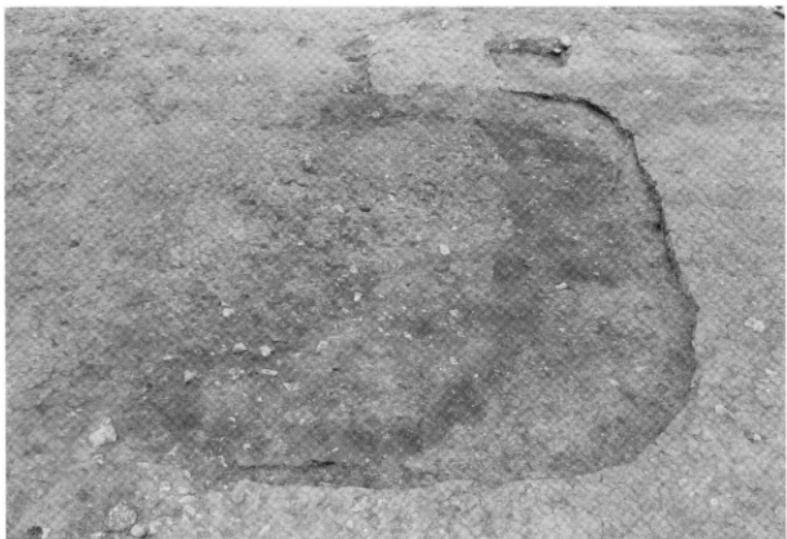
カマド完掘 (S→)



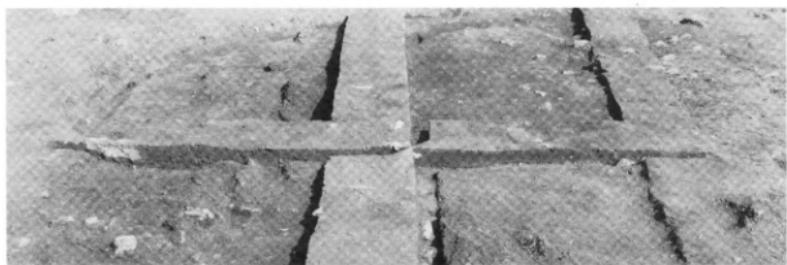
カマド遺物出土状況③ (S→)



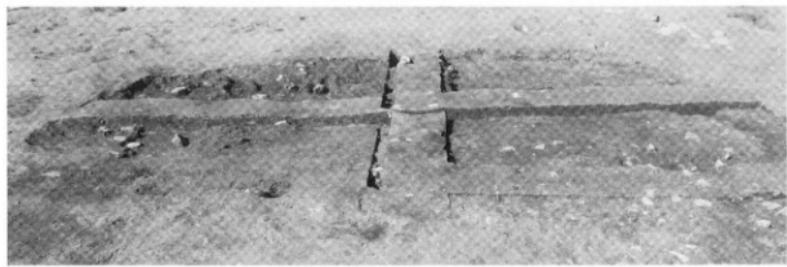
袖たちわり断面 (S E→)



完掘 (S E→)

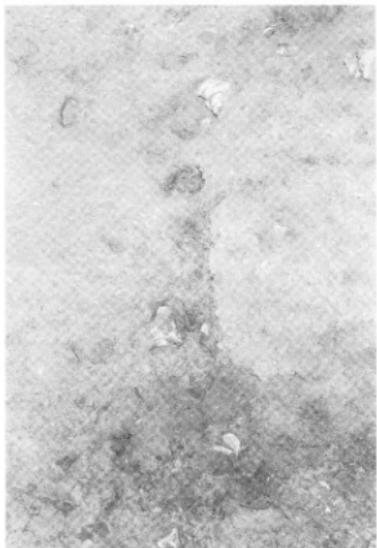


A-A' 断面 (NW→)

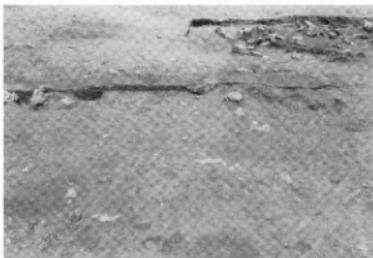


B-B' 断面 (S E→)

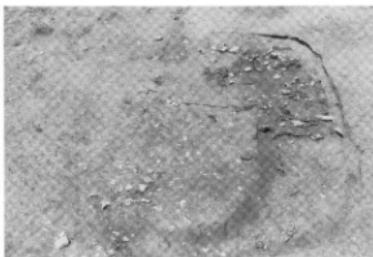
写真図版9 S 106 A竪穴住居跡(1)



カマド完掘 (SE→)



カマド断面 (SW→)



炭化材検出状況 (SE→)



炭化材検出状況 (北東壁中央付近)



炭化材検出状況 (北コーナー付近)



炭化材検出状況 (北東壁中央付近)

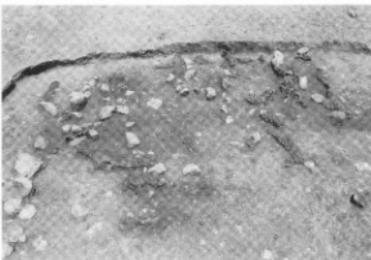


炭化材検出状況 (北コーナー付近)

写真図版10 S I 06 A 竪穴住居跡(2)



炭化材検出状況（北東壁中央付近）



炭化材検出状況（S→）



炭化材検出状況（S→）



炭化材検出状況（S→）



遺物出土状況



遺物出土状況



作業風景



S 106B掘り方完掘（S E→）

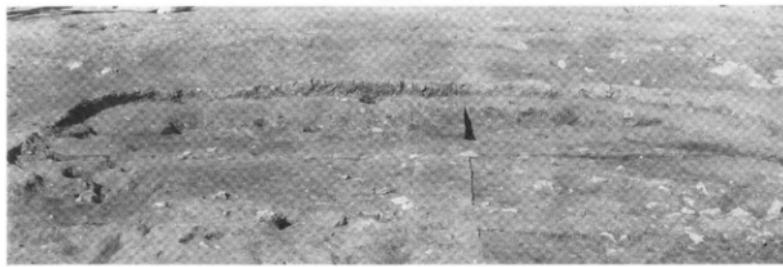
写真図版II S 106A 竪穴住居跡(3)



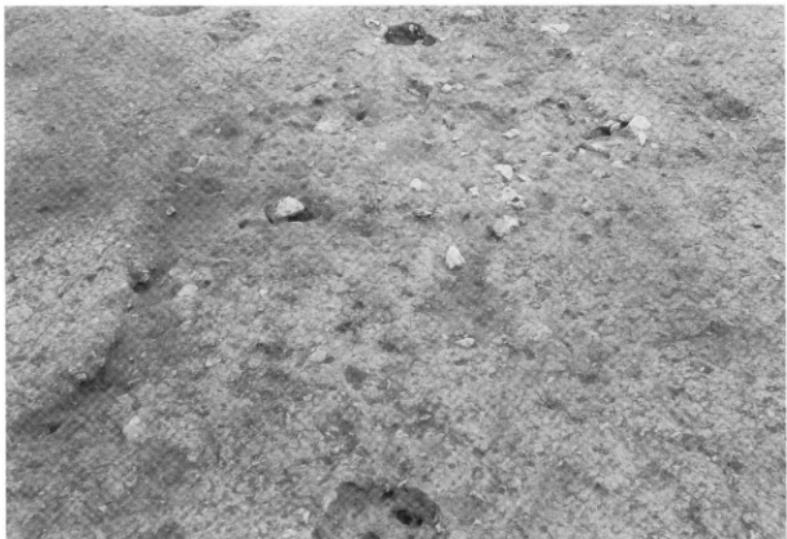
壳掘 (SE→)



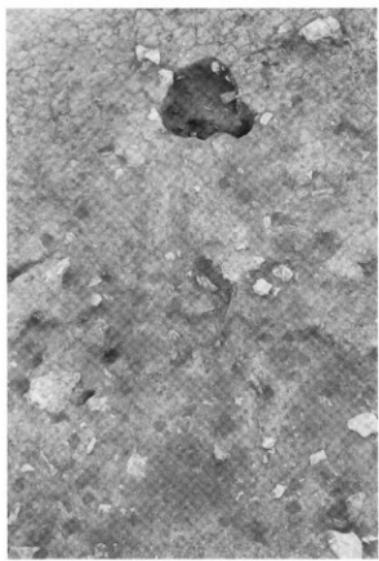
A-A'断面 (NW→)



B-B'断面 (SW→)



S I 07 完掘 (S→)



S I 07 カマド完掘 (S→)



S I 10 完掘 (SE→)

写真図版13 S I 07・10竪穴住居跡



S N01 完體 (S→)



S N01 断面 (S→)



墓壙検出状況（全体）



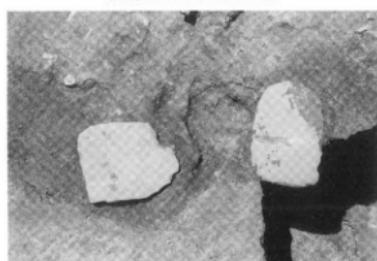
墓壙検出状況（SK37付近）



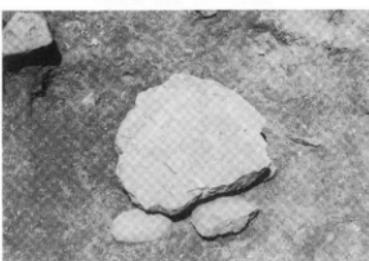
墓壙検出状況（SK43付近）



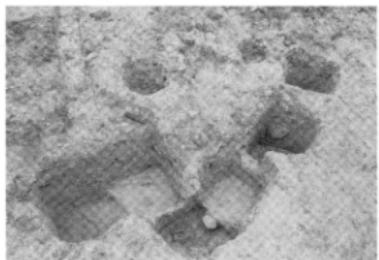
墓壙検出状況（SK40付近）



墓壙検出状況（SK42付近）



墓壙検出状況（SK45付近）



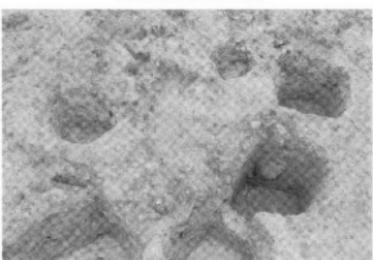
完掘状況 (S→)



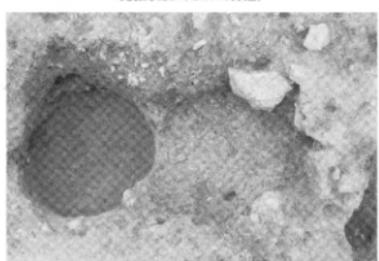
完掘状況 (SK40付近)



完掘状況 (SK48付近)



完掘状況 (SK41・45付近)



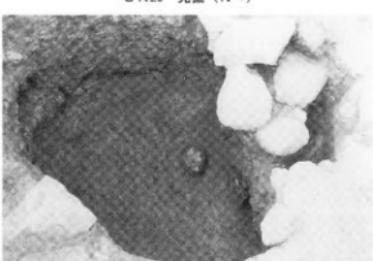
SK29(左)・SK49(右) 完掘



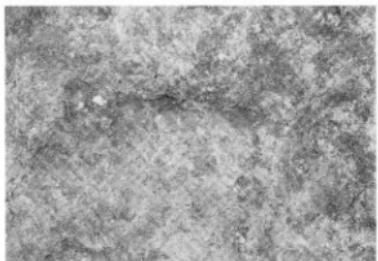
SK29 完掘 (N→)



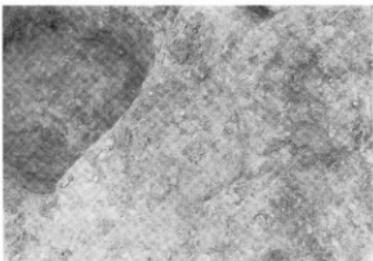
SK49 完掘 (S→)



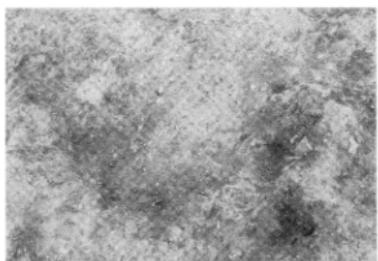
SK29 遺物出土状況 (S→)



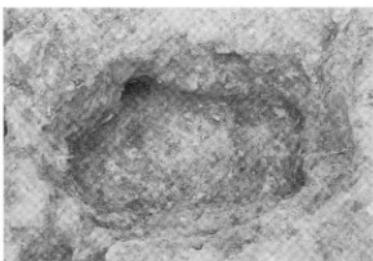
SK37 完掘 (S→)



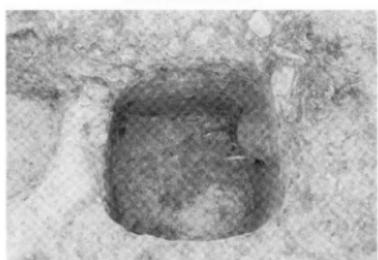
SK38 完掘 (S→)



SK39 完掘 (S→)



SK40 完掘 (S→)



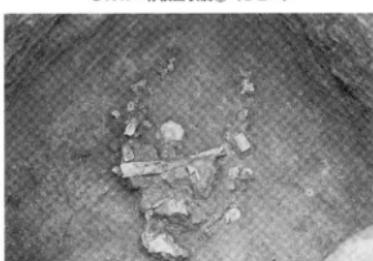
SK41 完掘 (S E→)



SK41 骨検出状況① (S E→)

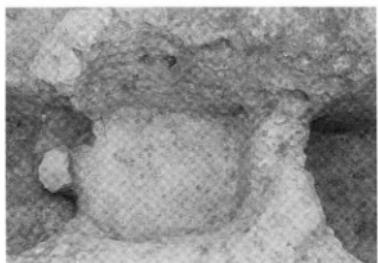


SK41 骨検出状況② (S E→)



SK41 骨検出状況③ (S E→)

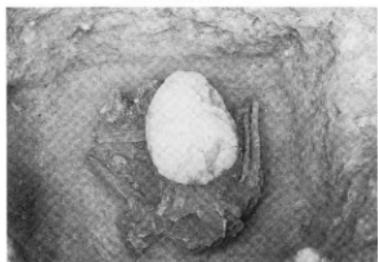
写真図版16 墓壙(3)



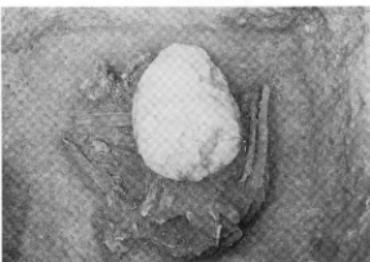
S K42 完掘 (S→)



S K42 断面 (S→)



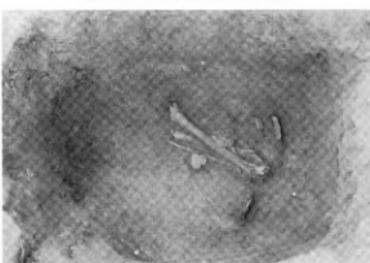
S K42 骨検出状況① (S E→)



S K42 骨検出状況② (S E→)



S K42 骨検出状況③ (S E→)



S K42 骨検出状況④ (S E→)



作業風景 (S E→)



S K43 骨検出状況① (S E→)

写真図版17 墓壙(4)



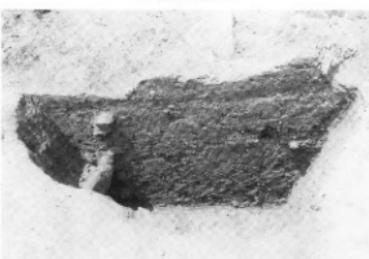
SK 43 骨検出状況



現地説明会風景



SK 45 完掘 (S→)



SK 45 断面 (W→)



SK 45 骨検出状況① (S→)



SK 45 骨検出状況② (S→)



SK 45 骨検出状況③ (S→)



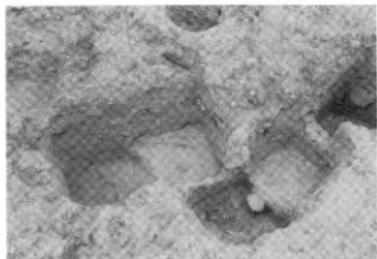
SK 45 棺桶底部検出状況 (S→)



SK47 完掘 (S→)



SK47 骨検出状況 (S→)



SK48A~E (S→)



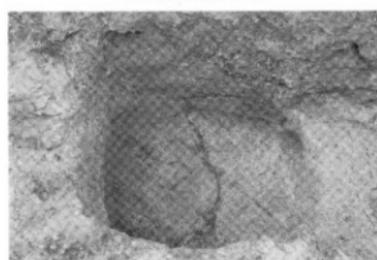
SK48A+B 完掘 (W→)



SK48C 完掘 (S→)



SK48C 断面 (S→)

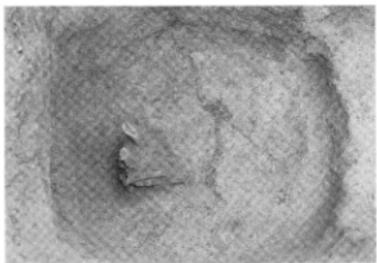


SK48D 完掘 (S E→)

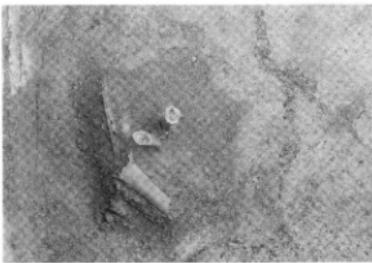


SK48D 断面 (S E→)

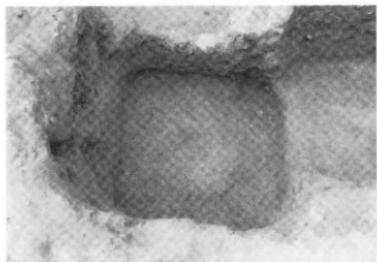
写真図版19 墓壙(6)



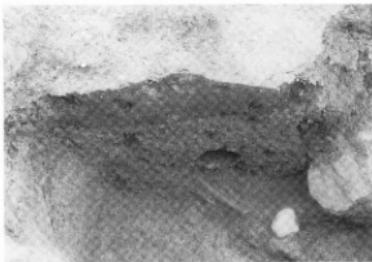
SK 48D 骨検出状況 (S-E→)



SK 48D 骨検出状況 (S-N→)



SK 48E 完掘 (S-E→)



SK 48E 断面 (S-E→)



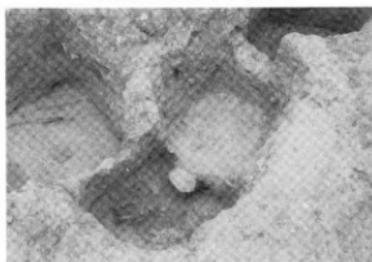
SK 48E 骨検出状況① (S-E→)



SK 48E 骨検出状況② (S-E→)

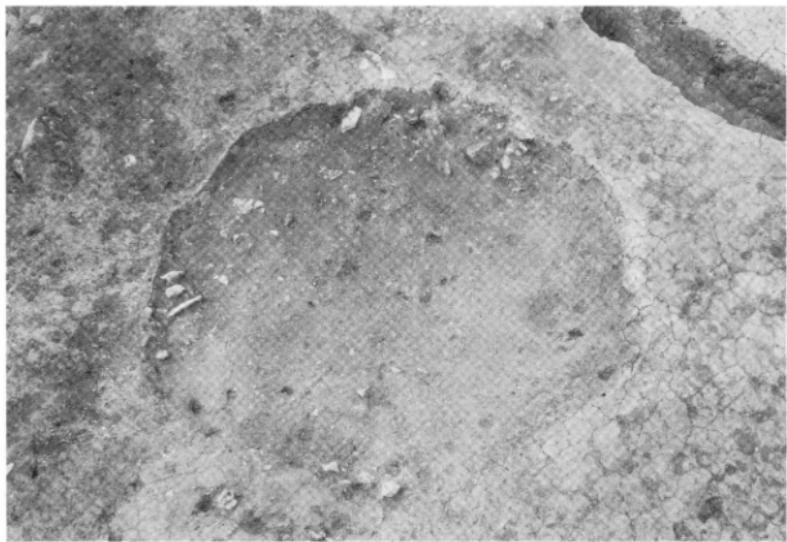


SK 48E 骨検出状況③ (S-E→)

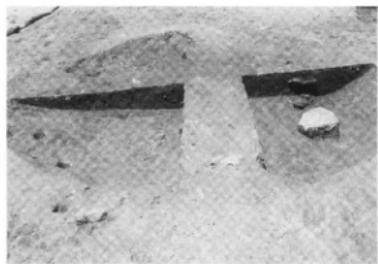


SK 42 + 48 E (S-N→)

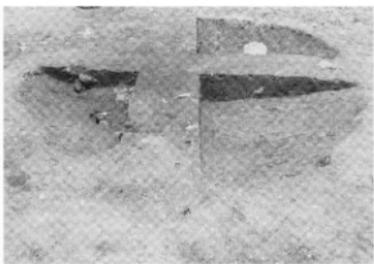
写真図版20 墓壙(7)



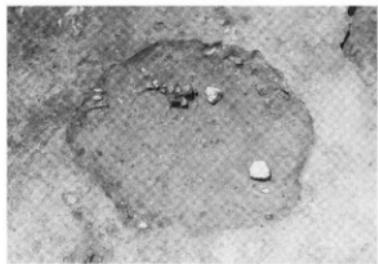
完掘 (S E →)



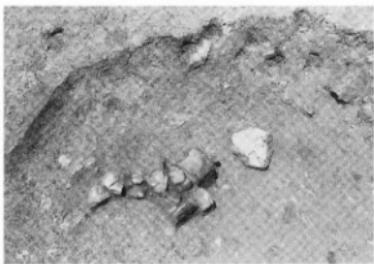
A-A'断面 (S E →)



B-B'断面 (S W →)

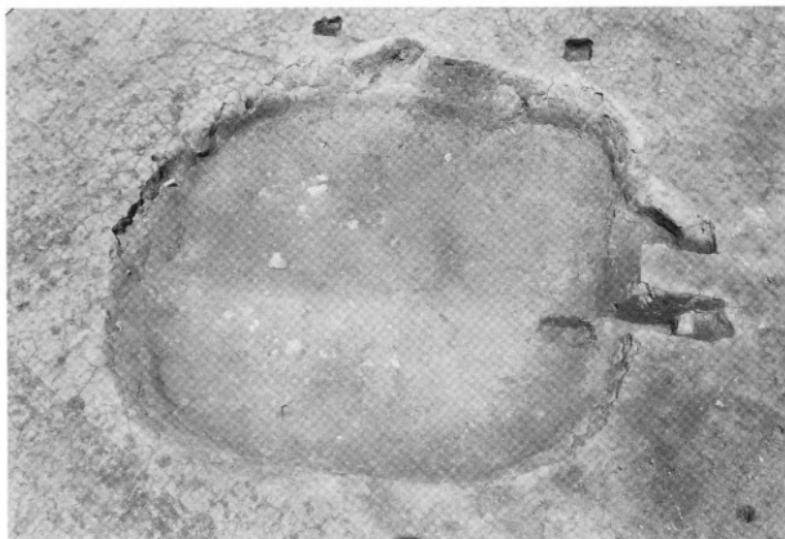


遺物出土状況 (S E →)



遺物出土状況 (S E →)

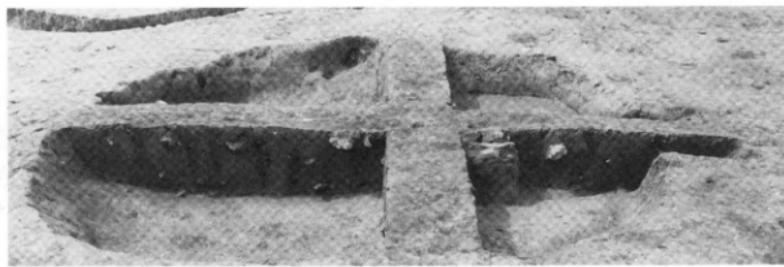
写真図版21 SK I 01竪穴状遺構



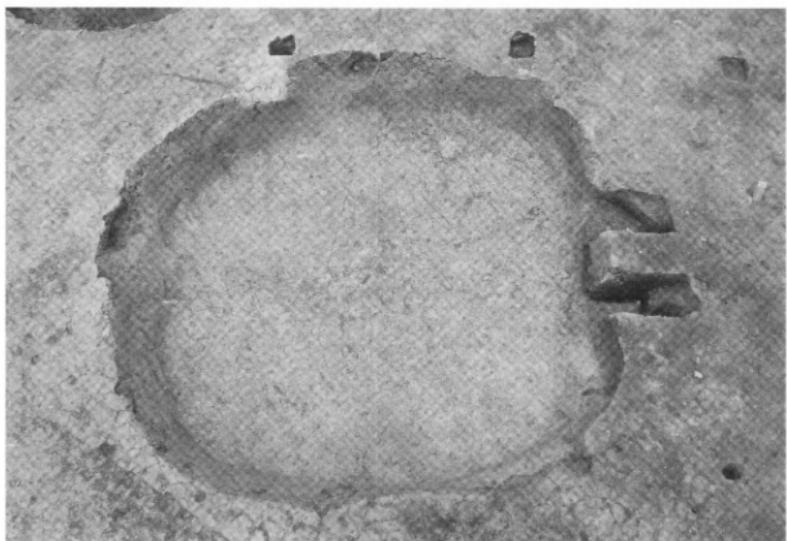
完掘 (S→)



A-A'断面



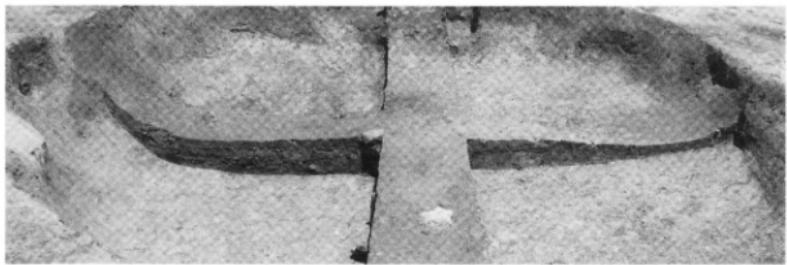
B-B'断面



完掘 (S→)



A-A'断面 (S→)

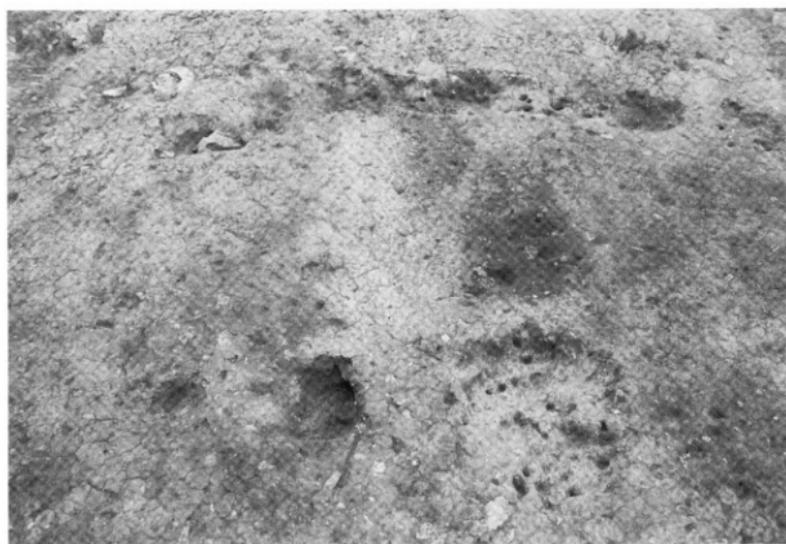


B-B'断面 (W→)

写真図版23 SK I 03B 竪穴状遺構

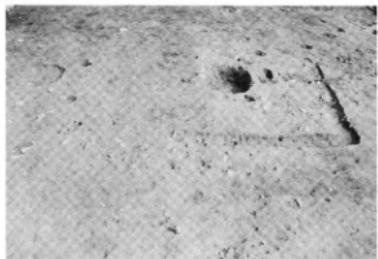


SK I 04 完整 (NW→)



SK I 11 完整 (SW→)

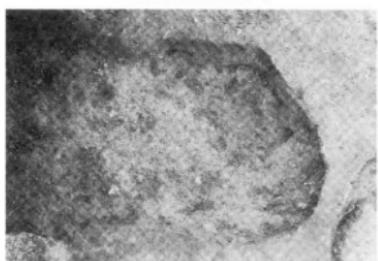
写真図版24 SK I 04・11竪穴状遺構



S K I04 完掘 (NW→)



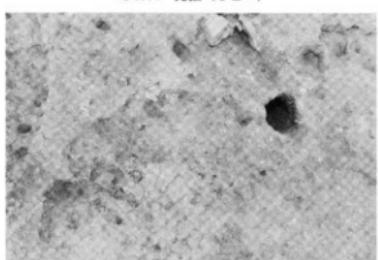
作業風景



S W01 完掘 (SE→)



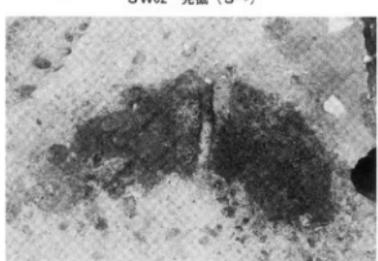
S W01 断面 (S→)



S W02 完掘 (S→)



S W02 断面 (W→)



S W02 炭稼出状況 (S→)



作業風景

写真図版25 炭窯



SK01 完掘 (W→)



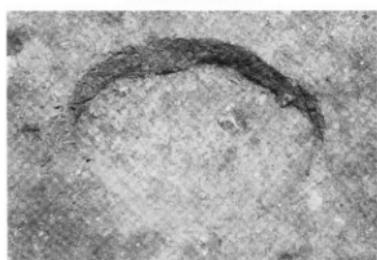
SK01 断面 (S→)



SK02 完掘 (W→)



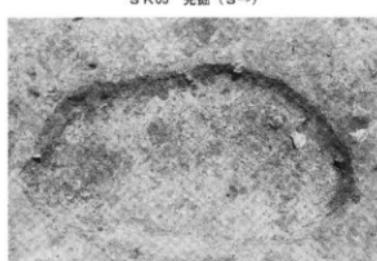
SK02 断面 (S→)



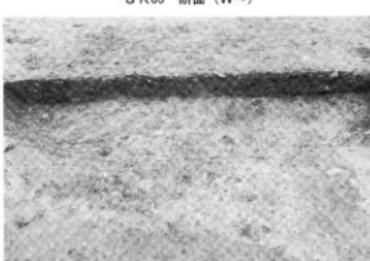
SK05 完掘 (S→)



SK05 断面 (W→)



SK06 完掘 (W→)



SK06 断面 (W→)

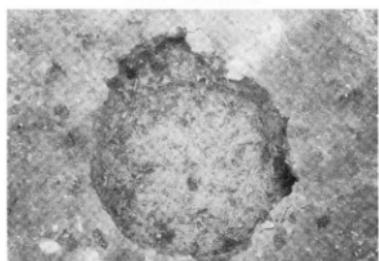
写真図版26 土坑(1)



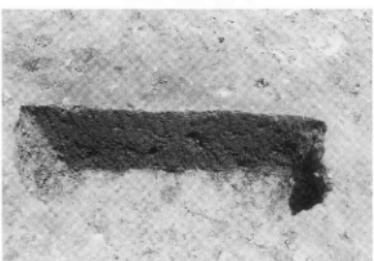
SK07 完掘 (N→)



SK10 完掘 (E→)



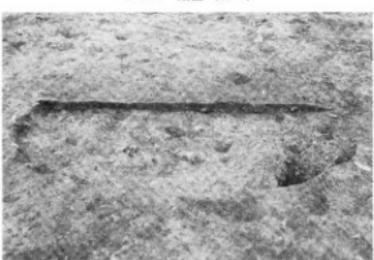
SK09 完掘 (W→)



SK09 断面 (W→)



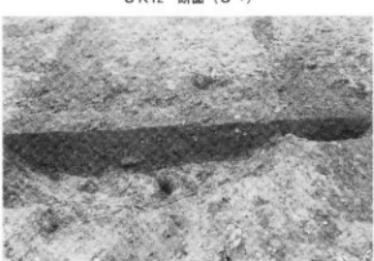
SK12 完掘 (S→)



SK12 断面 (S→)

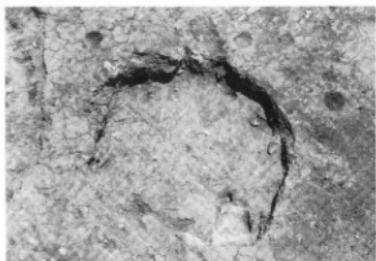


SK14 完掘 (E→)



SK14 断面 (E→)

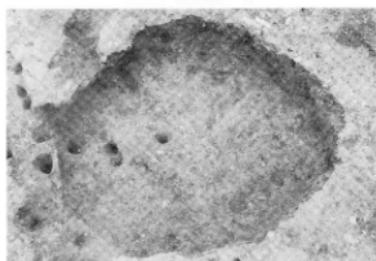
写真図版27 土坑(2)



SK15 完掘 (N→)



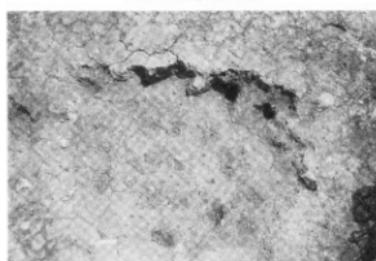
SK15 断面 (S→)



SK17 完掘 (E→)



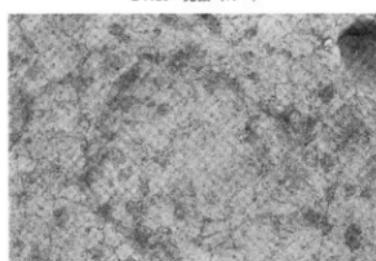
SK17 断面 (W→)



SK20 完掘 (N→)



SK20 断面 (S→)

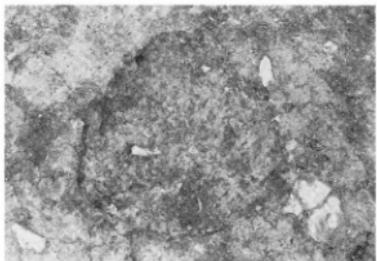


SK24 完掘 (S→)



SK24 断面 (S→)

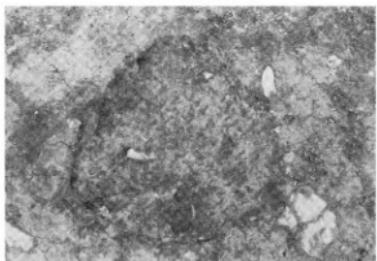
写真図版28 土坑(3)



SK26 完標 (S→)



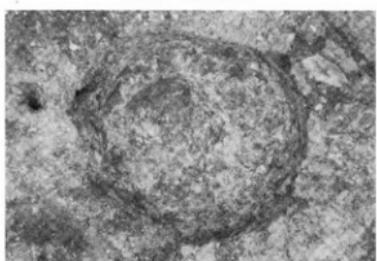
SK26 断面 (W→)



SK27 完標 (S→)



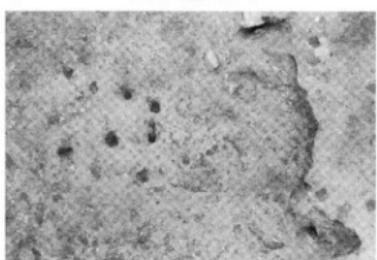
SK27 断面 (S→)



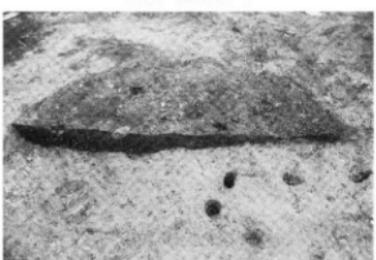
SK28 完標 (S→)



SK28 断面 (S→)

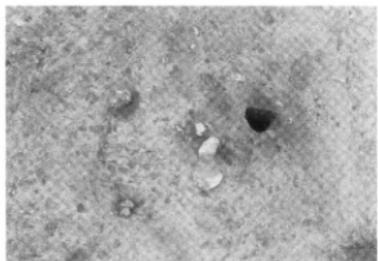


SK31 完標 (E→)



SK31 断面 (S→)

写真図版29 土坑(4)



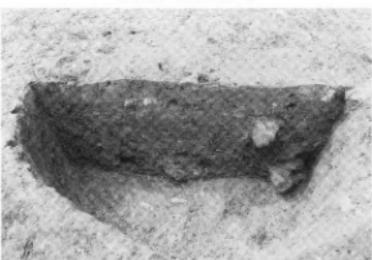
SK32 完掘



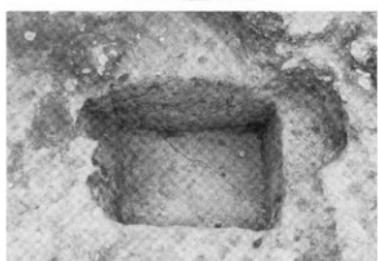
SK32 断面 (S→)



SK33 完掘 (W→)



SK33 断面 (S→)



SK36A + B 完掘 (S→)



SK36B 完掘 (S→)



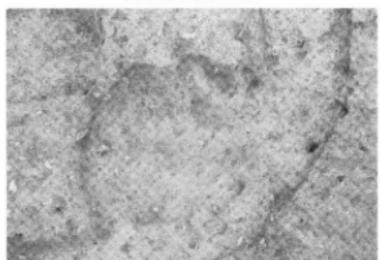
SK36A 断面 (S→)



S K46 完掘 (N→)



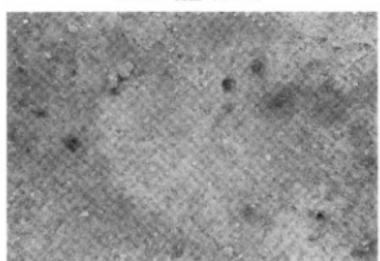
S K46 断面 (W→)



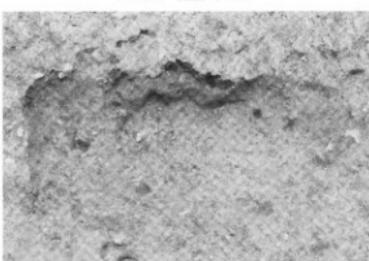
S K53 完掘 (S E→)



S K53 断面 (S→)



S K54 完掘 (S W→)



S K56 完掘 (S→)

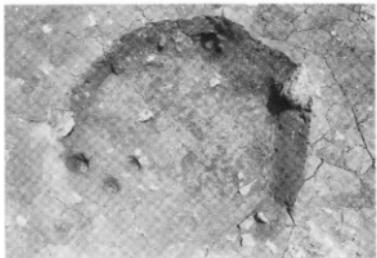


S K61 完掘 (S→)

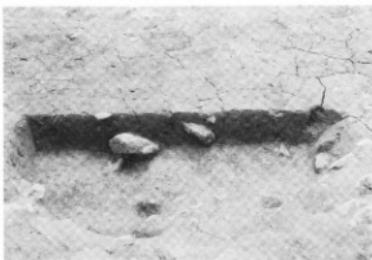


S K61 断面 (S→)

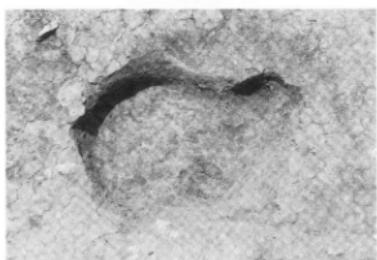
写真図版31 土坑(6)



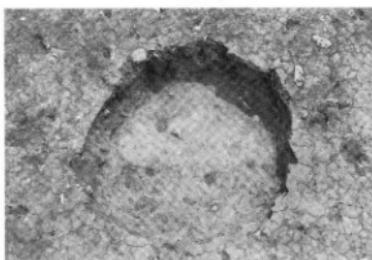
SK63 完掘 (S→)



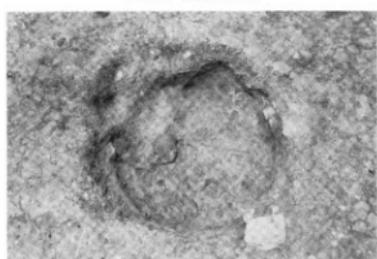
SK63 断面 (W→)



SK69 完掘 (N→)



SK70 完掘 (N→)



SK72 完掘 (S→)



SK80 完掘 (N→)

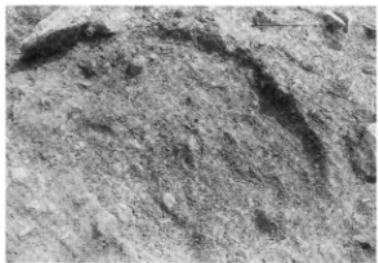


SK81 完掘 (N→)



SK82 完掘 (N→)

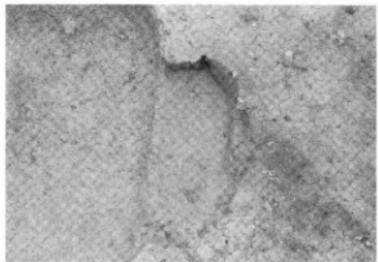
写真図版32 土坑(7)



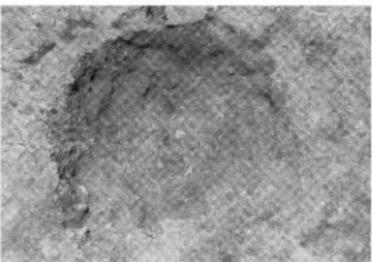
S K83 完掘 (E→)



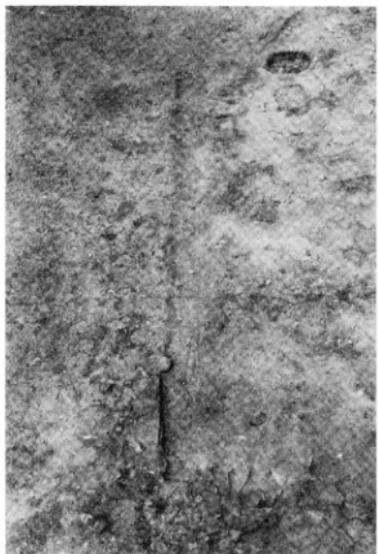
S K84 完掘 (S→)



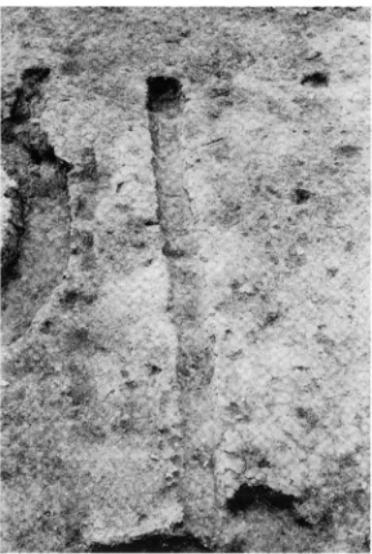
S K85 完掘 (S E→)



S K86 完掘 (S→)

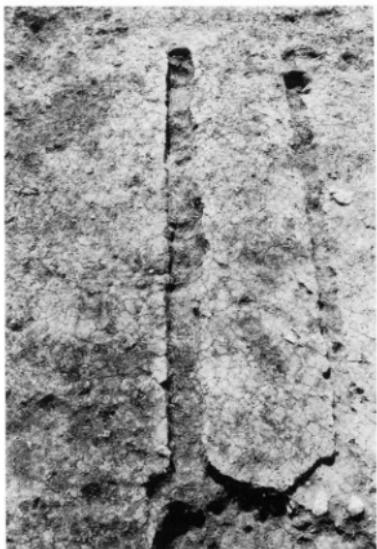


S D07 完掘 (E→)

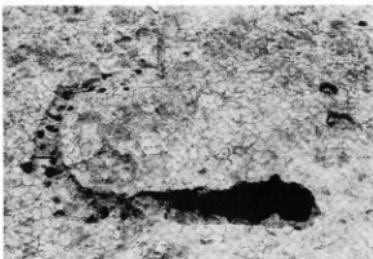


S D08 完掘 (E→)

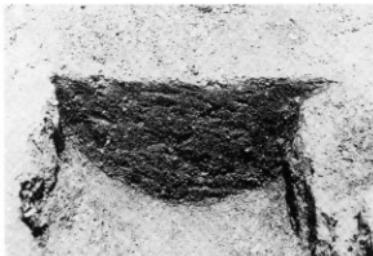
写真図版33 土坑(8)・溝跡(1)



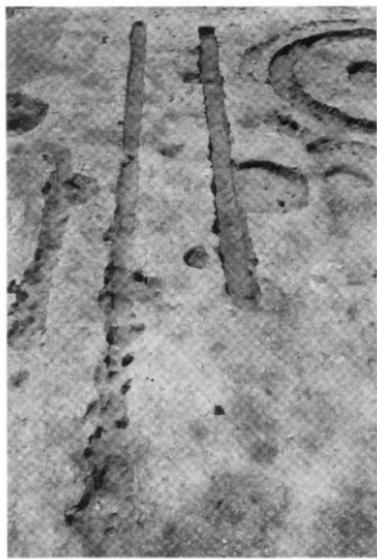
SD13 完掘 (E→)



SD15 完掘 (W→)



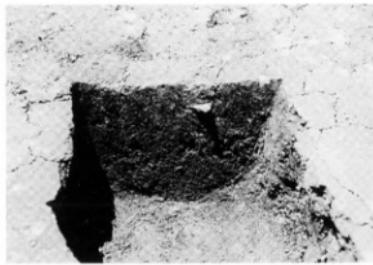
SD13 断面 (E→)



SD18(左)・19(右) 完掘 (E→)



SD18(左)・19(右) 断面 (E→)

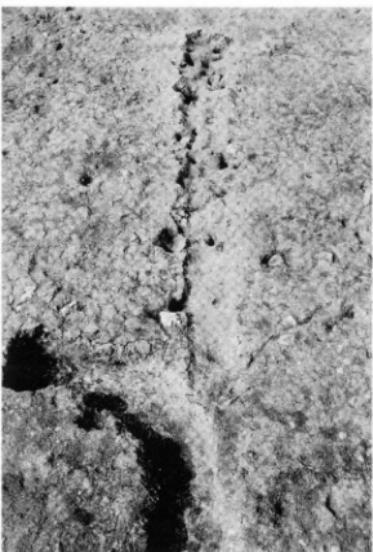


SD19 断面 (E→)

写真図版34 溝跡(2)



SD23 完掘 (E→)



SD36 完掘 (S→)



SD42 完掘 (E→)

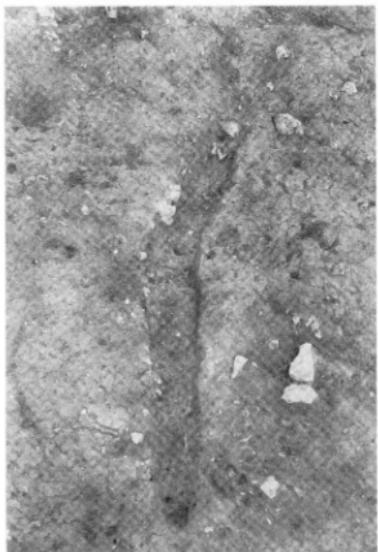


SD42 J—J'断面 (E→)



SD42 K—K'断面 (E→)

写真図版35 溝跡(3)



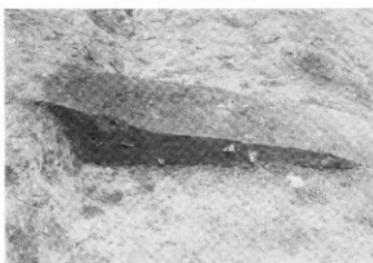
S D43 完掘 (W→)



S D44 完掘 (W→)



S D44 N-N'断面 (W→)



S D44 O-O'断面



S D44 P-P'断面 (W→)



S D44 断面 (W→)

写真図版36 溝跡(4)



S D44 Q-Q' 断面 (W→)



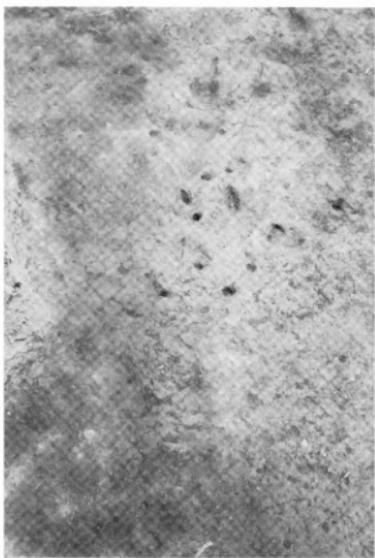
S D44 R-R' 断面 (W→)



S D45 断面 (W→)



S A02 完整 (SW→)



S D45 完整



S D49 完整 (S→)

写真図版37 溝跡(5)・柱穴列



S D50(左)・48南(右) 完掘 (S→)



S D48 北 完掘 (E→)



S D48 南 断面① (S→)

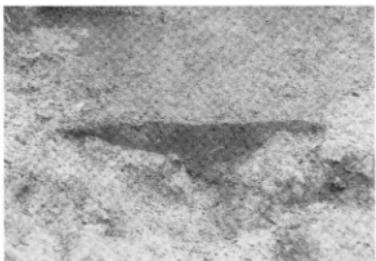


S D48 北 断面① (W→)



S D48 北 断面② (SW→)

写真図版38 溝跡(6)



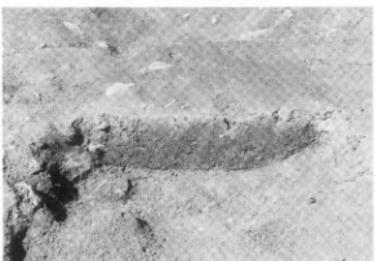
S D48 A-A' 断面 (W→)



S D48 K-K' 断面 (S→)



S D48 L-L' 断面 (S→)



S D48 N-N' 断面 (S→)



S D48 M-M' 断面 (S→)



S D48 南 断面② (S→)



S D50 P-P' 断面 (S→)



S D50 T-T' 断面 (S→)

写真図版39 溝跡(7)



現地説明会①



現地説明会②



現地説明会③



A区西端 検出状況



作業風景①



作業風景②

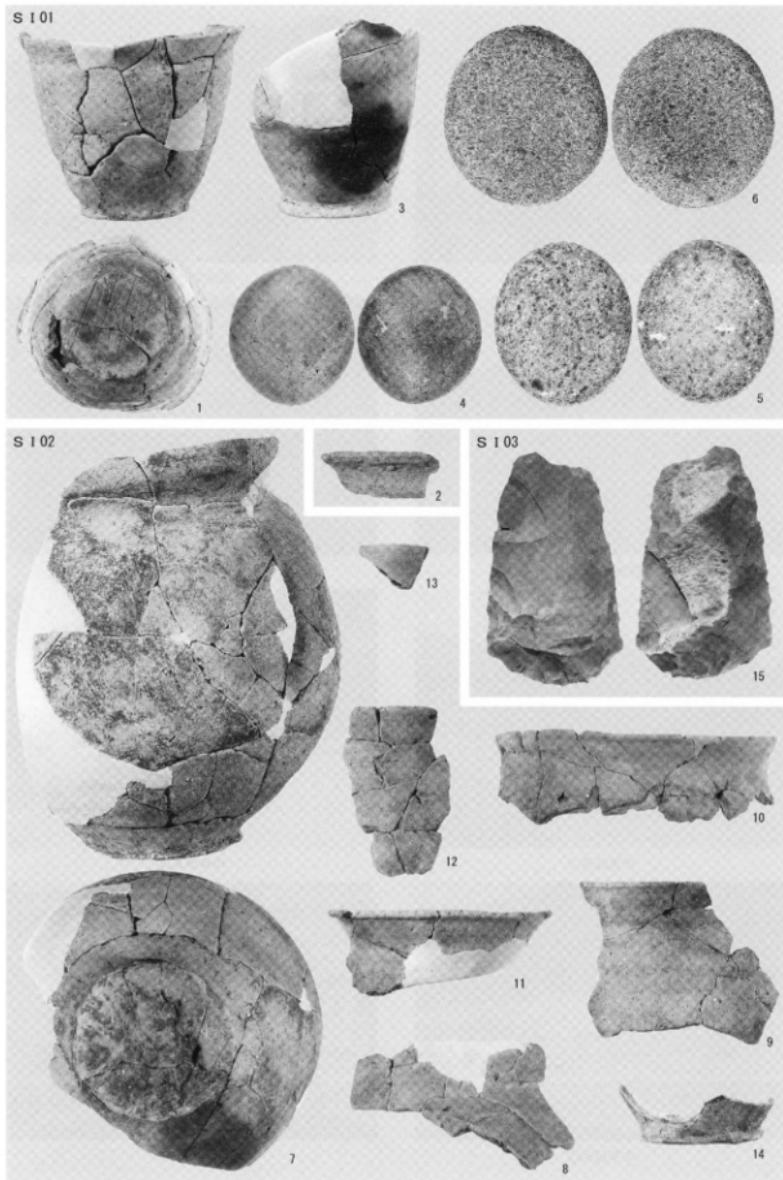


作業風景③

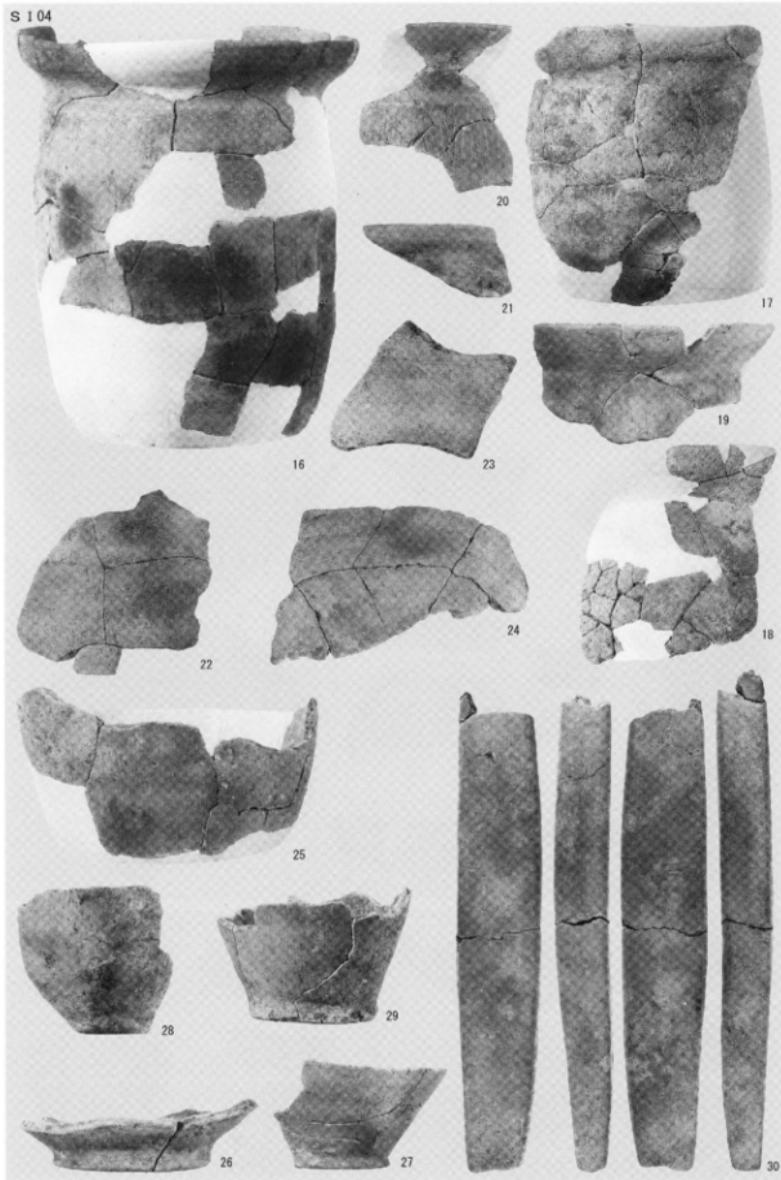


調査参加者

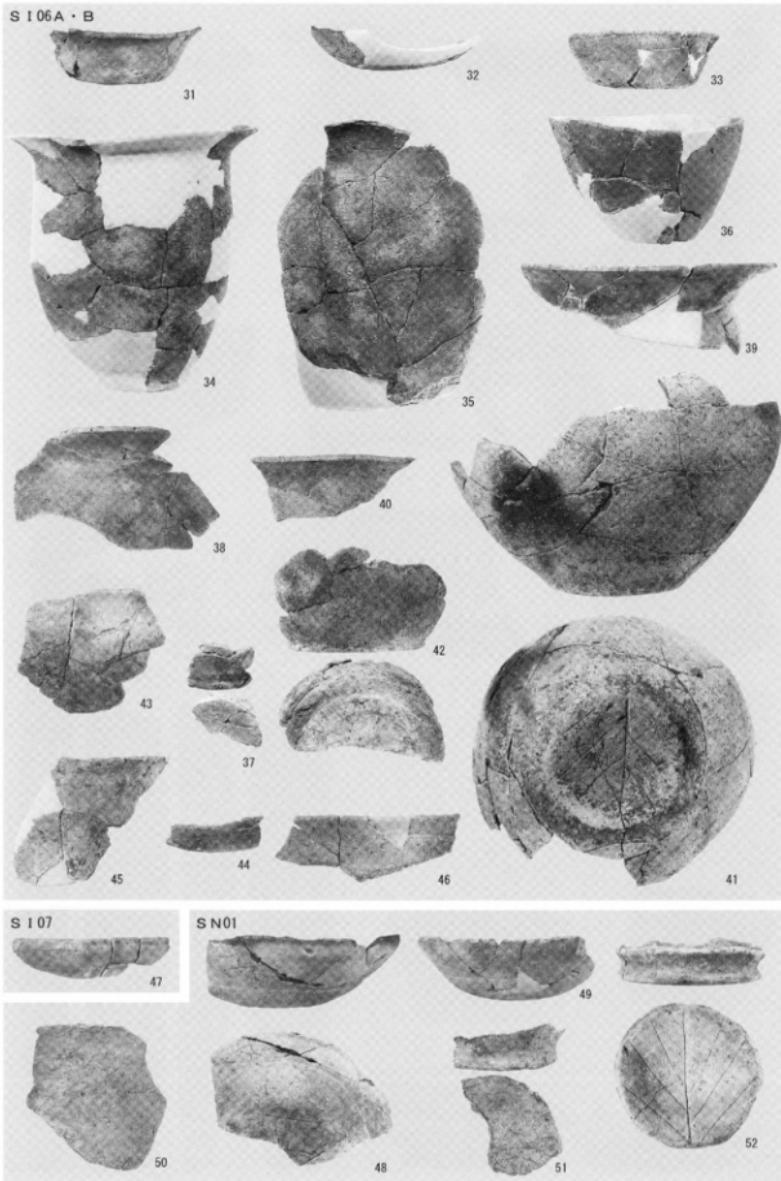
写真図版40 現地説明会・作業風景



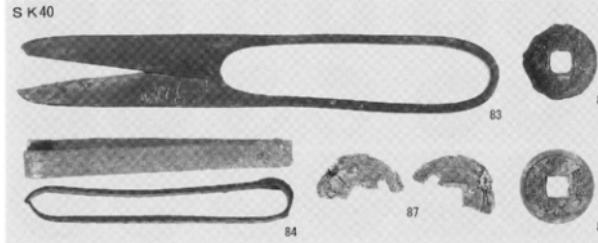
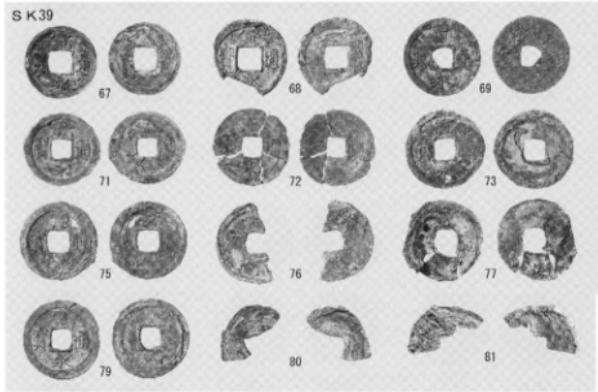
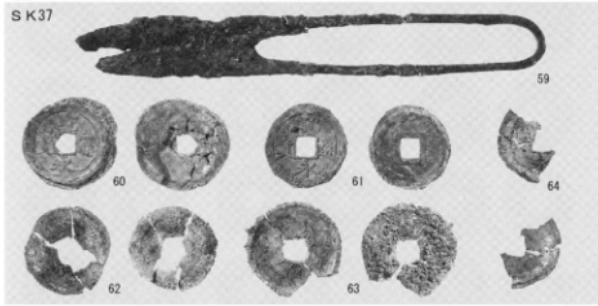
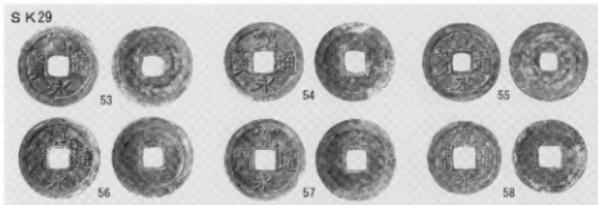
写真図版41 S 101~03竪穴住居跡出土遺物



写真図版42 S 104堅穴住居跡出土遺物

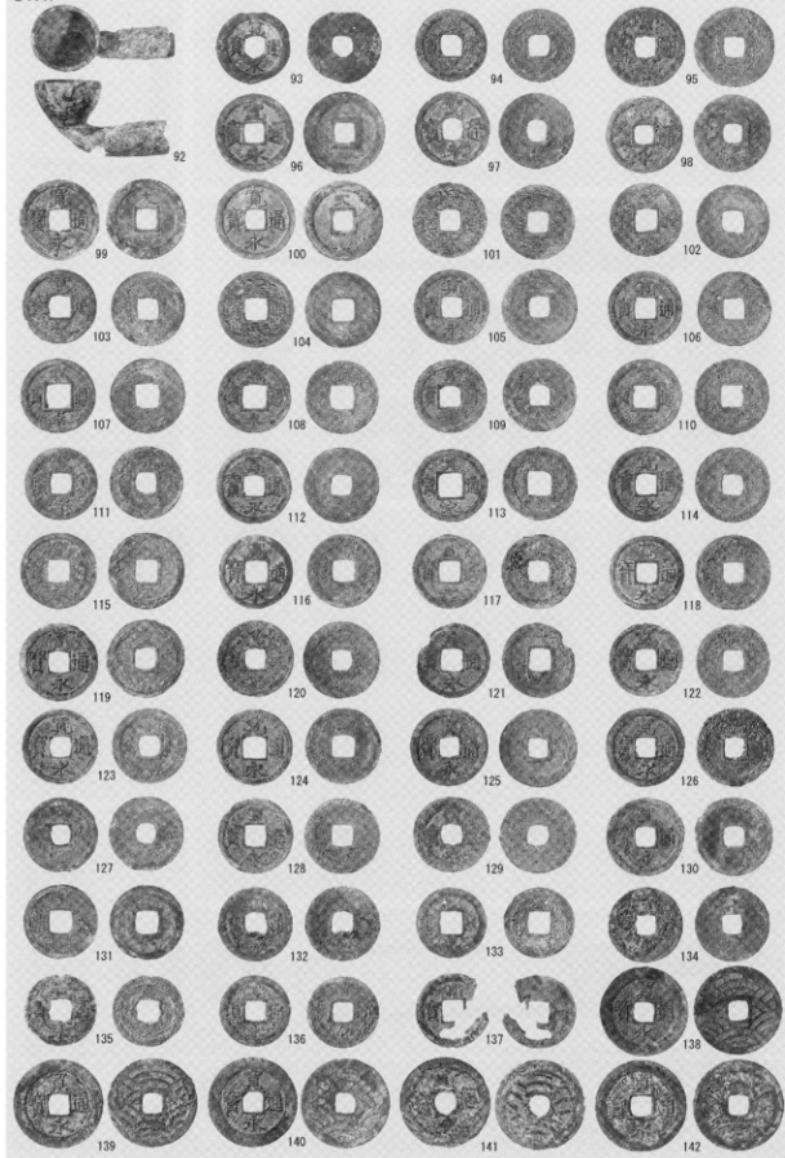


写真図版43 S I 06A · B · 07竪穴住居跡 · S N01炉跡出土遺物

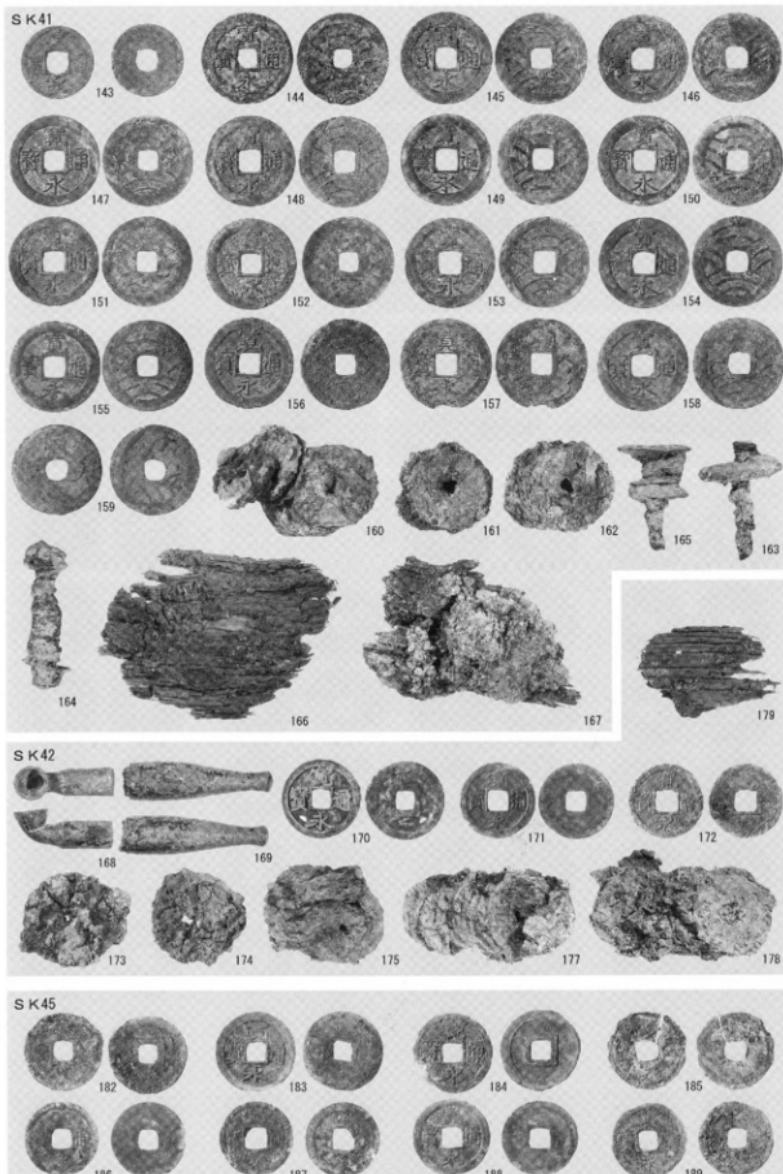


写真図版44 S K29・37~40墓塚出土遺物

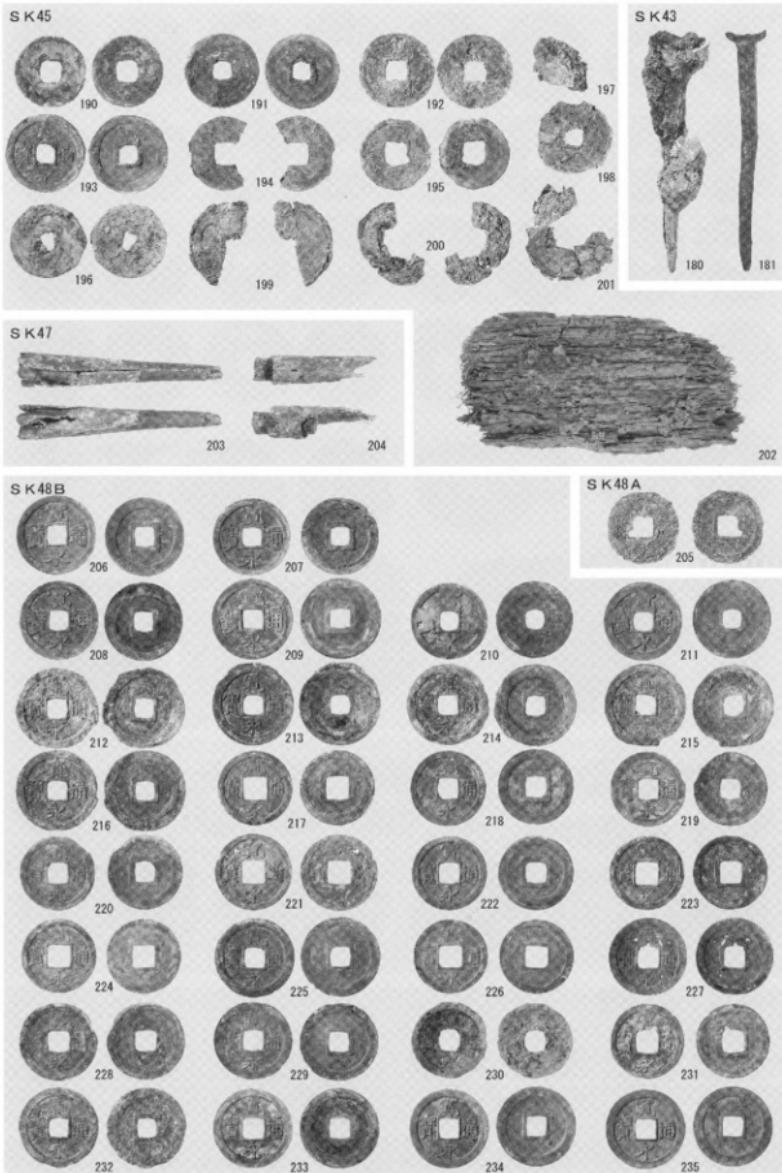
S K41



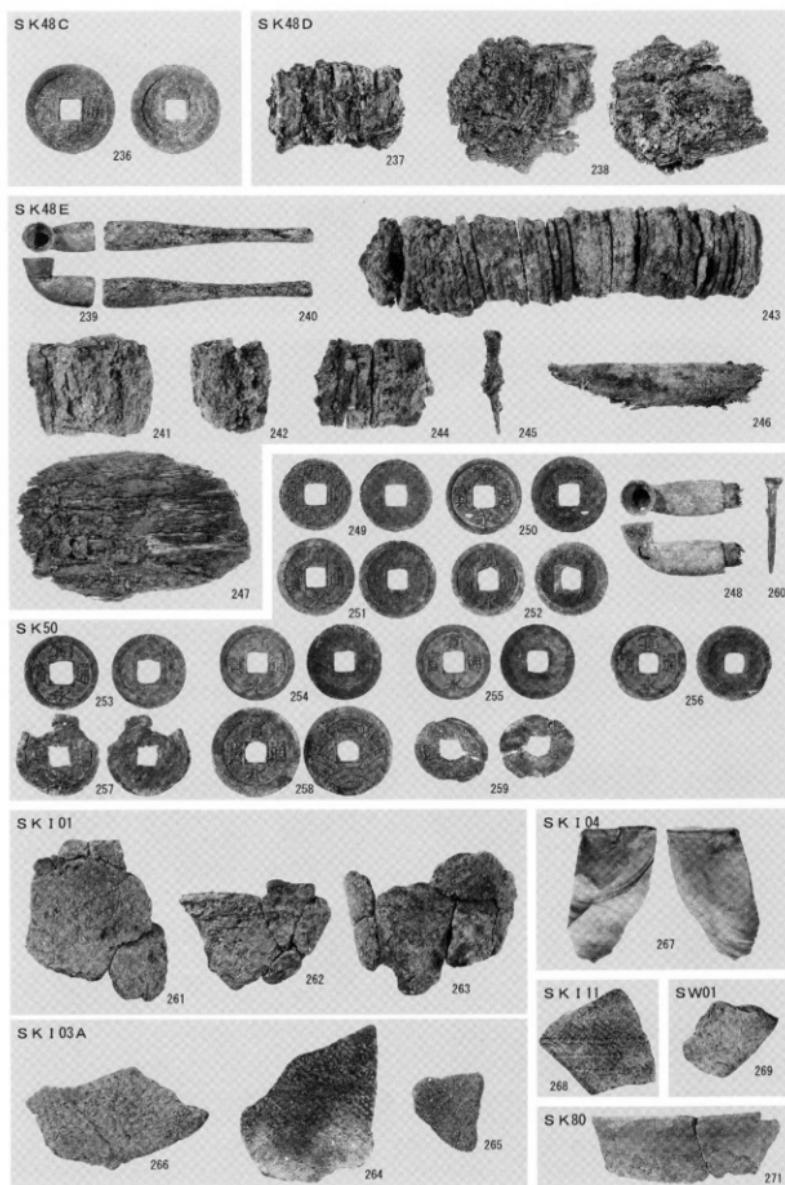
写真図版45 S K41墓塙(1)出土遺物



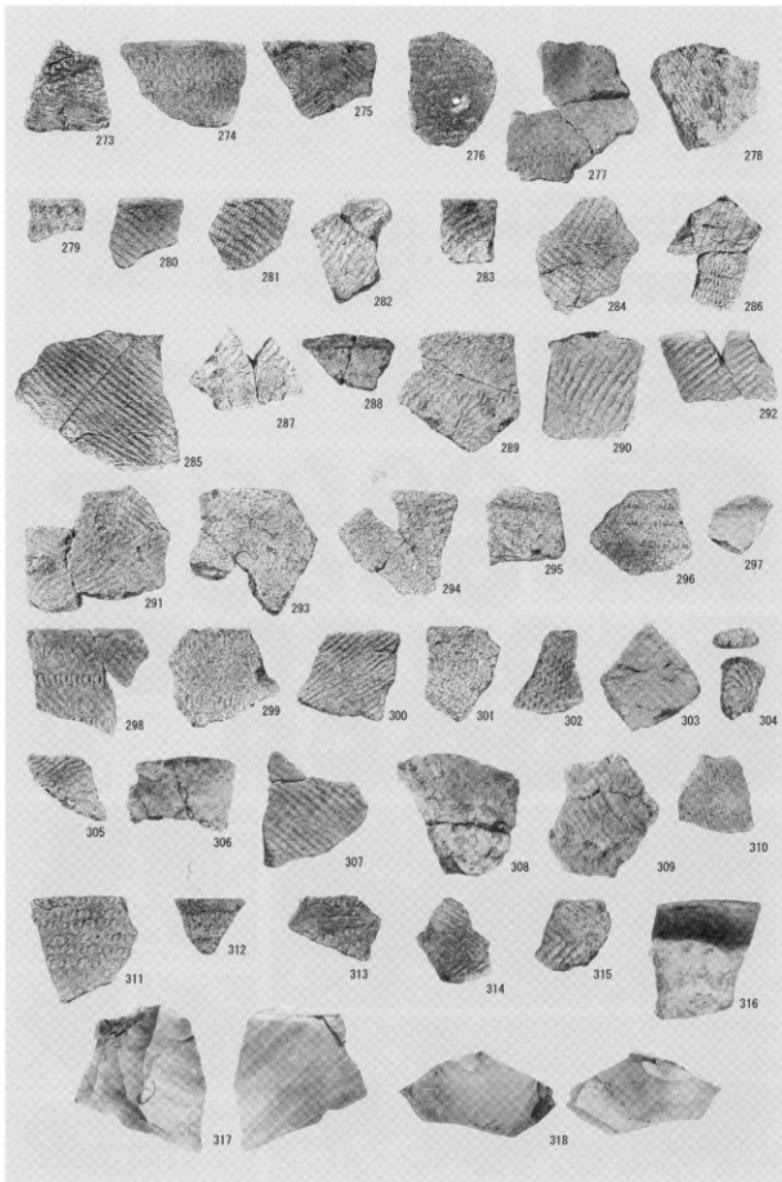
写真図版46 S K41(1)・42・45(1)墓壙出土遺物



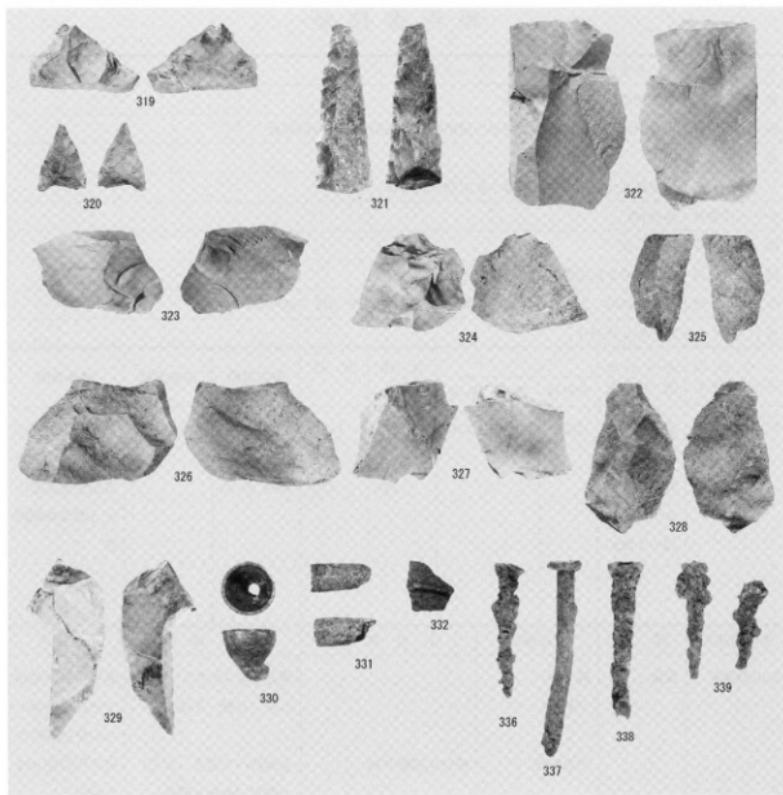
写真図版47 S K43・45(2)・47・48A・48B墓壙出土遺物



写真図版48 S K 48 C・48 D・48 E・50墓壙、竪穴状造構、土坑出土遺物



写真図版49 遺構外出土遺物(1)



写真図版50 遺構外出土遺物(2)

報告書抄録

| ふりがな | まつやままえいせきはくつちょうさほうこくしょ | | | | | | | | | | | |
|---------------|---|--------------------|-------------------|-------------------|----------------------------|---------------------------------|---|---------------------------------------|--|------------|--|--|
| 書名 | 松山前遺跡発掘調査報告書 | | | | | | | | | | | |
| 副書名 | 大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査 | | | | | | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第484集 | | | | | | | | | | | |
| 編著者名 | 島原弘征 | | | | | | | | | | | |
| 編集機関 | 鶴巣手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | | | | | | | | | | | |
| 所在地 | 〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田第11地割185番地 TEL (019)638-9001 | | | | | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2006年2月28日 | | | | | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 遺跡番号 | 北緯 度 分 秒 | 東經 度 分 秒 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 | | | | | |
| 松山前遺跡 | 岩手県陸前高田市小友町若荷128-2～西ノ坊12-1ほか | 03210 | N F 68-2270 | 39度 00分 2秒 | 141度 41分 23秒 | 2004.04.13 ～ 2004.09.03 | 6,640m ² | 大船渡広田陸前高田線緊急地方道路整備事業に伴う緊急発掘調査 | | | | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 | | | | | | |
| 松山前遺跡 | 集落 | 縄文時代 (前期) | | | 縄文土器(木工2～3式) 石器(石鏃・不定形) | 岩手県沿岸南部では調査例の少ない奈良時代の堅穴住居跡8棟を検出 | | | | | | |
| | | 奈良時代 | 堅穴住居跡8棟 | | | 土師器・石製品(磨石) 土製品(板状土製品) | 板状土製品の出土(S 104カマ下芯材に使用) | | | | | |
| | | | | 近世 | 墓墳18基 | | | 金属製品 (鍔・毛抜・鍾筒・釘) 錢貨(寛永通寶) 棺桶 | | | | |
| | | | | | | 不明 | 堅穴状遺構5棟 柱穴列3列 炭窯2基 土坑39基 溝跡15状 柱穴状土坑206個 | | | 陶磁器 ガラス | | |
| | | | | | | | | | | | | |

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第184集

松山前遺跡発掘調査報告書

大船渡広田隣前高田線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成18年2月20日

発行 平成18年2月28日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185

電話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 (有)小松茂印刷所

〒020-0025 岩手県盛岡市大沢川原二丁目5-37

電話 (019) 623-6073

